
魔と生きる製作者

示右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔と生きる製作者

【Nコード】

N6336U

【作者名】

示右

【あらすじ】

時折他世界から来る人、『堕天者』。彼らは勇者や賢者として名を馳せる。そこに紛れ込んでしまった30過ぎ現代人ダイスケ。いくら魔力が多くても、戦の能力も、強大な魔法も駆使することできない彼は、ほとんど唯一の魔法、物質の解析、精製、製造の魔法を用いてこの世界を生きる。鍛冶職人と言えば聞こえはいいが、反則的な能力はこの世界の多種族技術を破壊するのか、架け橋となるのか……。全49話。完結しました。現在文を直し中です。

00 結末（前書き）

前作をお読みになっていただいております方には申し訳ございません。
気分転換にと書いたものが完結してしまったので投稿させていただきます。

00 結末

00 結末

遠くで鐘の音が聞こえる。

確かあれは前に何かの拍子で手に入れた金属で作った鐘だったな。一般名称でレインボーベルとか言われていたっけ。

ふと手を見れば、小ささまざまな傷だらけだ。じつと手を見る。でも生きていて、多少なりとも生活を楽しむための稼ぎはある。

今日は人生の、第2章と言うべき出発の日だ。

これからどうなっていくか分からない。

けれど幸せだって言い切ることが出来るほど幸せだ。

見渡せば王もいる、魔王と称された者も。

魔王は赤子を抱いており、とても魔王だとは思えなかったが。

そしてなぜかこの世界の普通の結婚式と違い、とても大きなイベントになってしまった。

「うむ、良かったなあ。想いが実って！」

「これからは妻になるんだから少しは落ち着かないとなりませんぞ！」

「若い娘に負けないようにするのよ！逃がしちゃだめよ？」

「ダイスケも年貢の納め時か。お前の困った顔なんていつ以来だ？」
「ほつといて」
「英雄はつらいですなあ！」
「……お前の時は覚悟してね……」
「おーこわ」

『花嫁』とは最初に誰が言い出したんだろう。事実それ以外の表現方法が浮かばない。元鍛冶科の友人たちから贈られた渾身の作のドレス。鍛冶科らしく色々な宝石、鉱石を使った、ちよつと重そうではあったが。ヴェールをかぶり静々と歩く姿はいつもの彼女を思わず、初めて会う人と結婚するような感じを受け、苦笑しそうになってやめておく。

ミネラ神殿の偉い人が所謂牧師役だ。
「これより夫婦となり末永く、死が別つまでより幸せになる努力をすることをこの場にいる者たちに誓いなさい」
「強制ですか……、いえ、誓います」

「……」
「……」
「……」

結婚式も無事終わる。休息を兼ねた旅行へ行く予定だった。
「お疲れ！どこかへ旅行に行くのか？」
「2、3日湖のあたりでゆっくりするつもりだよ」
「何度も行っただろ、そこ。何でまた？」

「いやあ、世話になつてるノーム族にも紹介したいし、つい昨日マリンストーンから魚が寄つてくる効果のある釣り針が出来ちゃってね。試してみたいんだよ」

「やっぱりお前は戦向きの道具よりそういったものを作っている方が似合うな」

「誰かが傷ついたり死んだりしない道具の方が作っていて楽しいよ？」

「そうか。ま、楽しんで来い」

「ありがとう」

夜には。

「今日は初夜ね！」

「どこからそんな知識を……？」

「いつまであたしを子ども扱いするのかな……？」

「ははは、ごめん……。と言つても実際結構歳が離れているからねえ」

「そんなの気にするのはダイスケだけなのにね」

「そう、か……。そうだね。これからもよろしく頼むね」

「言われなくても！」

「じゃ、こっちへおいで」

「う、うん……。末永くかわいがってね……」

「もちろん」

こちらに来なければこんな幸せは無かったに違いない。時には苦しいこともあったが、ここはひどくやさしく、広く、幸せな世界だった。隣にある暖かさがより幸せな気持ちにさせてくれる。

「俺は今、幸せだ」

う
う
く
.....
?

E
N
D

00 結末（後書き）

誤字脱字報告、感想をお待ちしております。

01 現在

01 現在

平行世界？パラレルワールド？言い方は何でもいい。
遠く離れているようで実際は双子の兄弟のごとく近い。

それがほんの少し何かの拍子に重なってしまうとたまたま魂の波長を同じくした人は平行世界へ堕ちていく。

それが神隠しであつたりするのだ。

そしてそのおぼろな平行世界からたまに帰還するものもいる。
君たちがファンタジーといわれて連想するものは何であろう。

中世のイメージと剣と架空のものである魔法。魔王や竜。エルフ
やドワーフと言った多民族。そして魔物。

そういったイメージをもたらした者が実は平行世界からの帰還者
なのだ。

機械の代わりに魔法を。そうやって繁栄してきた世界がある。

そしてそこに堕ちていった者は大抵何かしらの能力を得、既存の
知識も加え、その世界に大きな影響を与える。

ここガイゲルド国と、連合国であるミサネラ国ではそういった『
墮天者』の保護を最優先にしている。

『墮天者』は例外なく膨大な魔力を持ち、この世界の常識を持た
ないため見つけやすいのだ。

なぜ保護を最優先にしているかと言われれば、それは数百年前、
エズワルド国が墮天者の扱いを誤り、魔王が発現したためだ。

資料によれば、エズワールド国の国王がかなり高圧的に接したためその墮天者の気分を害し、魔力の爆発ともいえる大規模な災害を起こした。

結果的にエズワールド国の王家や城、王に近いものは全滅し、国の者たちは離散。その後はガイゲルド国、ミサネラ国を含む犯罪者や盗賊なども受け入れ他国、他人を襲い犯すことを奨励している有様だ。

そういう事情もあり、お互い仲はよくなかったとはいえガイゲルド国とミサネラ国は手を取りあい民を守ってきた。

そして魔王率いる魔国エズワールド国とガイゲルド国、ミサネラ国連合の短くない戦争が続いていたのだ。

「ダイスケ！これどうすんの？」

「隅において！それが何なのか分かる人が見たら分かるから！」
「りょーかい！」

ここはラクス武具店。

店主が怪我を負い、武具製作が思い通りにいかなくなったのはだいぶ昔のことだ。

嫁や娘が懸命に働いていたようだが生きていくだけで精一杯。

そんな折、どこからかふらっと現れた青年を引き入れたこの店はガイゲルド国の、ひいては連合の最先端の武器屋になってしまった。

にこにことした女性が店の中で立っている。

手の中にある帳面にはどの武器や防具がどんな性能を持っているかが書き記されている。

そしてその武器の性能を看破できないものには販売しない。身の丈に合った物を売るためだ。

防具に関してはそれはない。命を守るものだからだ。ただし、防具の性能を理解できているかは確認する。高価な、もしくは高性能な防具は最悪仲間からも狙われるためだ。

「店主、これをいただきたい」

「この店のルールとしてその武器の性能を理解しているかが問われますが」

「なあ、ケイトさん。おりゃあだいぶここに通っているはずだが…

…」

「存じております。ですがどんなに見知った人にもきちんとしてと工房責任者が言っております……」

「……。この剣、スターストーンのありきたりな魔法剣に見えるが、ファイアストーンだろう。炎の系統の魔法に特化していると見える。確かにこれ一本では不安だが、雪の山に行くのには予備としてもちようどいいと思ってな」

「……。ありがとうございます。金1000になります」

「じゃあ1000で」

「確かに。ではこちらで魔力の色づけをお願いしますね」

「分かった。……………よし。ではまたな」

「はい。またのご来店をお待ちしております」

「ふう、今日で頼まれたものは終わったかな。どうだい、そっちは」

「あたしもほとんど終わり」

「万屋から素材は？」

「鉄が結構入ったよ。スターストーンも」

「うん。新しく鎧を作ろうか。樹脂は？」

「うーん、人を囲うとして4着分くらいあるよ」
「わかった。明日は鎧を作ろう」

風呂上り、冷えたビールで一杯やりながら明日のことを考える、
もうもとの世界のことを考えるのはやめて久しい。

帰る方法も無い世界のことを考えるのは意味が無いからだ。

一応帰る方法があるのだが、この世界に実体化してしまうともう
戻れない。実体化するための自身というものをきちんと持たない人、
幼子などが帰ることが出来たらしい。

それにしがない一般人だった自分がこの世界ではある意味特殊な
能力を持てたのだ。そしてその技を駆使しての日々生きていける程
度の仕事と食べていける程度のお金。

確かにゲームやパソコンが無くなったのは多少痛い魔法の本を
見るのは楽しい。

食事にしても元の世界のように複雑な調理器具が必要な料理も魔
法のおかげで比較的簡単に出来てしまう。

日々の充実感がある今は、結構幸せなのかもしれない。

翌日、ダイスケの墮天者としての唯一と言っていい特殊魔法を用
いて鉄鉱石から鉄をより分ける。

鉄は鉄分子だけのものは純鉄などと呼ばれ武具には向かない。

適度な炭素、少量のレアメタルが必要だ。

そして面白いことに地球には存在しない石や鉱物がある。ファイ
アストーン、アイスストーン、スターストーンなどと呼ばれている
もの。

今までは大きく加工が出来る者があまりいなかったため、金属で
はあるのだが、ストーンと言われている。

早速、鉄は魔法で適度に炭素を絡ませ店の職人でもあるライラス

さんへ。

職人であるという誇りが強いのか店主は妻のケイトさんが務めている。

ケイトさん自身もかなりの実力を持つ特殊アクセサリ職人である。リリアというのは娘。

生粋の鍛冶師であるライラスさんは毎日鉄を打ち剣を作る。怪我により、片足がなくなってしまったため、体のバランスという観点でなかなか昔のようには行かないらしいが、それでもファンがいるようだったものだと思う。

俺はといえば防具に重点をおいている。どんな時でも命あつてのものだねだと思っからだ。

後は供給の少ない魔法剣や特殊武器の類を少々。

今日は特殊な木材から出るゴムのような樹脂の中に鎖を埋め込み関節部に施した鎧を作る。鉄部分は限りなく薄くする。

そして形になった鎧にスターストーンの板を内側から貼り付ける。この技術はここラクス武具店の売り物だ。スターストーンは魔力に反応し、魔法障壁を展開できる金属だ。スターストーンのみで鎧を作ることも出来るが、スターストーンはもろすぎるのだ。

よって外側には鉄を施す。そしていくら金属鎧で刃を防げても、外側から炎であぶられれば鎧の金属も加熱しやけどを負ってしまう。それを守る手段だ。

行く場所や、戦う相手によつて、無意識でも反応するが特化型のファイアストーンやアイスストーンに変更する場合もある。

そして鉄で外側を覆っているとはいえ、魔力の通っていない状態ではこの鎧は内側にヒビが入りやすい。いくら安価にした所でメンテナンスがかかるのだ。防具の大切さをわかってくれる人はそれを惜しまないし、わからないものは命を落とす。

ここに来ただけの頃は葛藤ばかりの毎日だったが、気の置けない友人やライラスさんやリリアの助言のおかげでそれなりに立ち直ることが出来た。

今日もいい仕事だ。自画自賛だが。今日のビールもうまそうだ。そこへ1人の男が来た。ワードという。いい年して押し込まれた学校の鍛冶学科からの友人だ。王族、さらには王位継承1位である。本人は王になどならんと言いつ張っているが。

「ダイスケ！これみる！」

「お帰り。無事で何より。……ってこれ、ミスリルじゃないか！どこで？」

「戦利品さ」

「何とかなったのかい？」

「そこは知恵さ。いいたいが、老衰だ。竜とて寄る歳には勝てないということだろう」

「死ぬ間際に暴れたってことなのかな？」

「ああ。で、ここからが俺の話だ。ドラゴンの鱗。所謂ミスリルだが、なんと2枚ある」

「それはすごい。で？」

「オレの作るものと勝負してほしい」

「……どうしてまた？」

このワードという男、王に贈られたという剣を、幼少の頃にとっても興味を持った。

王も親友から贈られたものをおいそれと、いくら親子とは言え与えたりはしなかった。

普通ならそれを持てるだけの实力を得、鍛冶師に頼むところだろうに、ワードは自分で作る側に行ってしまった。

3人の王子の中で一番の戦闘の才能を持っていたにも関わらずだ。いまだに王は悩んでいるようだが、本人は飄々としている。

無理やり入れられた鍛冶学科に行った初日からつかかれ、自分なりに対応して以来ずっと友人だと思っっているし、今ではパーティだ。

そしてミスリル。この世界では上位竜種の鱗の成分であり、生きているのと同じ状態、すなわち魔力を流すと元の形に戻りたがる性質がある。

竜を傷つけても瞬時に修復するのはこれが理由になっている。

そして魔力、魔法との親和性も高い。上位竜は魔法を相殺できるが、これは竜本人が相殺の魔法を行使しようとした瞬間、その魔法を鱗表面に展開できるからだと言われている。

これを武具や装飾品に加工できるのはかなりの高いレベルの鍛冶技が必要になる。

「……どうしてまた？」

「傭兵連中にも話を聞き、武器の構想を練った。オレたちのパーティの欠点をあえて探すとすれば間接攻撃の武器に金がかかることと、その攻撃力だ」

「たしかに。それに傭兵にも話を聞いたんだ。人の話を聞けるのはいいことだね」

「オレより強いやつばかりだったからな」

「分かったよ。俺も渾身のものを作るよ」

「ああ」

ワードはそう言うとミスリルを一枚置いていった。今日のノルマは終えたし、しばし長考に入る。

ワードが周りの人の声に耳を傾けられるようになったのはすばらしいことだ。直情的であるから。

これは期待できるのかもしれない。

そうだ、ちょうどよくハイエルフの女性がいる。刻印魔法を施してもらおう。

手を貸してもらうことにする。

今日の仕入れの品を万屋に取りに行くついでに会いに行く。

「やあ。元気？」

「お前から私の部屋に来るとは、明日は雪か？」

「年中温暖なこの国は雪は降らないよ」

「からかっただけだ」

「わかってたよ」

「ちえつ。で、用事はなんだ。わたしに愛をささやきに来てくれたのか？」

「ああ、君の笑顔は俺だけに向けられるものだよ。詳しくは食事をして、いい宿で2人きりになってからね」

「……ぷっ！やめろっ。くすぐりたい！」

「なんだよ、乗ってあげたのに。相変わらずそういう雰囲気にはならないな」

「自分でも分かってる。で？」

「ミスリルが手に入った。やっと君の専用武器を作ることが出来る」

「！……すごいな……わたしに？いいのか？」

「ワードが勝負を挑んできた。それに君にあった武器も作りたかったし。ここの所、魔力の制御もかなり良くなったし冷静に戦闘できるようになった。たぶん君になら扱えるだろうね」

「そうか、わたしも成長できたということか……。分かった、世話になる」

「それにここの所、パーティの足を引っ張っていると感じていない

かい？」

「よくわかったな。間接武器、弓や投げナイフは回収が難しいからな。金もかかる。いい矢をたくさん持つことも難しいんだ」

「だから余計に受け取って欲しい所だね。ま、俺だけじゃ作れないんだよ。刻印魔法を刻んで欲しい」

「わたしがか？まだあまり得意じゃないんだが……」

「分かってる。でも最高の刻印魔法が必要だ。エルフの長老に頼んでほしい。刻印魔法は君への武器のキモになる。持ち主はマスターエルフ。なんとか許可いただきたいんだよ」

「聞いてみよう。しかし1つ訂正しておく、あたしはマスターエルフになんかならないよ」

「そうなの？まあ勝負はともかく、どうせ作るならいいもの作りた
いから、頼むよ」

「しかしダイスケは30過ぎには見えないな。歳をごまかしてない
か？」

「うるさいよ。どうせ童顔ですよ」

「褒めているのに」

俺が武器の特注品を作るとはめったに無いのでそのエルフは上
機嫌で手を貸してくれると約束してくれた。

その武器の細部をつめながら俺は鍛冶学科に押し込められた、そ
してこの地に来た直後のことを思い出していた。

つづく

01 現在（後書き）

誤字脱字報告、感想をお待ちしております。

02 墮天

02 墮天

何が起こったかわからない。気がつくともない街道にポツリと立っていた。裸で。ただ自分が裸だと感じている余裕は無く、そのときは体ごとシェイクされて内臓をかき回されたような感覚を受けていたのだった。

そして倒れた……

見渡す限り、大自然。

高層ビルも無ければ、舗装道路すらない。

それだけならばどこかの田舎だと思いかもしれないが、車はおろか自転車すら走っていない。

何とか道と言えるところを1台の馬車が走っていた。

「父ちゃんがついていかなくてもあたしはきちんと鉱石を見分けられます！鍛冶学科Aクラスの実力をとくとみよ！」

「まだ1年生なのに何を言っているのだ？弱い犬ほどよく吠えると云うぞ？」

「目に物見せてやる……」

そんなある意味ほえましい親子の会話をしながら馬車を駆っているのは町でラクス武具店を営む一家。

今日はノーム族の集落へ鉱石の買い付けに来たのだ。

万屋という人々からの苦情や陳情を処理する店に頼んでもいいのだが、ラクス武具店の一家の家長であるが店主ではないライラスという人物は、自分で見たものしか信用しないという根っからの職人だった。

集落の買い付けへは結構行くのだが、半年前ライラスは魔物に襲われ片足をなくしてしまった。

剣を打つものにとって慣れ親しんだ体のバランスのずれは大きいらしく、やっと久しぶりに買い付けに行けるようになったのだ。

剣は無くともそれなりの魔法も撃てるライラス、妻のケイトはアクセサリ職人だがかなりの魔法使いだ。

最近学校の鍛冶学科に入った娘のリリアも授業の一環としてそれなりの剣と魔法が使える。さらに今日はたまたま町から集落へ帰るノーム族の戦士も一緒だ。何も危険を感じない旅のはずだった。

「だれか倒れてる！」

「この魔力……『墮天者』か?!」

「その可能性が高いですね……」

「まずは保護でしょう。墮天者は来た直後はかなり暴れたりするそうです。私がどこまで通用するか分かりませんが、私が抑えます！」

意識が無い状態であっても、あふれ出そうなほどの魔力は隠しきれないようだった。

リリアがダイスケを発見、ライラスはその魔力の大きさから『墮天者』と判断、妻のケイトも同意する。ノームの戦士の若者は最悪の場合を考え、抑えの役を申しでる。

自分たちの命を守る魔法障壁を張りつつ、ノームの男性は水を飲ませる。やがて薄く目を開けたダイスケは特に暴れたりせず、あたりを見回した。

「……どこだここ？……あんたたちは……？」

「ここはガイゲルドという国。おぬしはこの者だ？」

ダイスケにとってはノームは特に日本人には見えなかったのだから、「日本人だ」と答えた。

「うむ、『墮天者』だ」

「ですね」

「……だてんしゃ？」

「この世界ではない、どこから来る者だ。勇者や賢者となり……」

「……なんだって!？」

「勇者や賢者とな」

「そこじゃない!その前!」

「この世界ではない、どこから来る者」

「……それは、ここは、あんたらは!……俺のいた世界ではないとでも言うのか!?地球は!日本は!なんだ!ふざけるな!明日からどうなる!俺は……俺は!……どうすれば!……」

最後は何を言っているかすら分からないほど混乱しているようだ。徐々にその男のまわりに魔力が集まりだす。無意識だろう。

しかし、いくらただの魔力があまり広範囲に影響を及ぼしにくいとはいえ、集まり凝縮されたものは最後には爆発する。

限界まで凝縮され、爆発する前に手を打たなければ、こちらも危うい。

「落ち着け！」

「はっ……あ……」

ライラスの平手をもらい、少しだけ落ち着く。意識が、頭脳が冴える、冷える、落ちる。

「……どうなってるんだよ……俺は……おやじ、おふくろ……兄貴……ああ……俺がなにをしたって言うんだ……なぜ……どうしよう……」

「水を飲め、そしてもう少し落ち着け」

うつろな目を向けるダイスケに水を差し出すライラス。それを半ば放心状態、魂が抜け出たような状態で受け取り、飲み込む。

何かの果物ももらい、食べようとするが、強烈な嘔吐感を感じてもどしてしまう。近くの川で口をすすぎ、それでも果実を口にする。半分以上本能的な行動だ。まるで魂はすでにもとの世界には戻れないことが分かっているかのように。この世界の物を咀嚼し吸収し、この世界の者となれと言っているかのように。

「落ち着いたようだな、名は？」

「イツキ、ダイスケです」

「ダイスケが家名か？」

「いえ、イツキの方です」

「そうか、この国では貴族くらいしか家名を持っておらん。あまり回りから色々言われたくないのであれば、名だけを名乗っておくんだな」

「はぁ……」

少しだけ落ち着いた頭をフル回転させながら、色々と質問する。

「今までもこの世界に帰ることができた大人は……？」

……

……

さらに質問する。

「どうして俺が……？」

……

……

本当はこんな道の真ん中で話すことではなかったのかもしれないが、4人の説明はこの世界の歴史にまで及んでいた。

「とすると、俺はその魔王に順ずる系統の人間で、そういう扱いを受けるということですか？」

ライラスの服を借り、なおかつ国の成り立ち、地球とは違うという説明を受けダイスケはそう問う。

「いや、そういうことがあったので『墮天者』は厚い待遇を受けるのだ。命をとったりせぬから安心して欲しい」

助けてもらった恩は返さなくてはならないと思った。

素直に従っておいた方がいいと考えたのだった。

「そついうことなら……」

「で、ライラス殿、町へ戻りますか？」

「いや、折角ここまで来たのだ、買付けを済ませてからでもよろう」

「墮天者ならノーム族もむげにはしないでしょうしいんではないでしょうか？ 戦闘能力が高いわけでもないようすし」

実際今まで喧嘩なぞしたことなく現代を生きてきた。争いなんかまっぴらごめんだと思いつつ、ダイスケは事の成り行きを見守る。リリアは初めて見た男性の裸に真つ赤になってそっぽを向いたままだった。

この世界のことを少しだけ聞いた。正直明晰夢でも見ているかのようだ。

現実味が全く無い。

しかし、ノームの村に着いたときには考えががらりと変わってしまった。

「ノーム！ 他種族とかびつくりだ！ エルフとか竜とかもいるのかな？ …… あ、すみません」

「かまわん。『墮天者』がこの世界の常識についてくるまでは時間がかかる」

一緒に旅したノームの男性は多少混血であるらしく、そんなに違和感を感じなかったのだろう。ノーム族長に会わせてもらったダイスケはつい大声を上げていた。

そしてその直後にえもいわれぬ感じがこみ上げてくる。

なぜ自分はこんなに簡単にこの世界になじんでいるのだろう。
元の世界に帰れない事、これからは全く知らない大地で暮らさなくてはならない事。

自身でも驚くほど冷静であることが不思議でしようがない。というよりおかしいと自分でも思う。

今までここに来た『墮天者』も同じだったのだろうか。

何か自分とこの世界には共通点と言うか、心や魂が共感するものがあつたのだろうか。

今は何も分からない。

いずれ分かるかもしれないし、死ぬまで分からないかもしれない。心の中には、それでもいいと思う自分もいた。

本当に自分自身が不思議だった。

さて、特にすること、出来ることも無くライラス一家についてまわるダイスケ。

ライラスさんが仕入れのために寄った鉱石集積所でその墮天者としての能力がわかるようになる。

「この鉄は1パーセントの炭素を含むのか？そんなに無いとワシは思うが？」

「いえ、確実に1パーセントありますよ」

多少慣れたダイスケは『パーセント』『炭素』などという言葉にとってもファンタジー世界として違和感を覚えたが、気にしても仕方ないということにした。そしてふとその鉄を見てみた。するとなぜかその組成が分かる。

普通の人間にS45CとS50Cの区別など、目で見て分かるわけが無い。

S45Cは鉄の中に平均0.45パーセント、S50Cは平均0.5パーセントの炭素を含む鉄のことだ。

グラインダをあてて飛ぶ火花の様子から炭素が少ないSS材と、S45C、1パーセント以上の炭素を含むSK材が何とか区別できる程度だ。

目で見て組成がわかると言うのがどれだけ異常かと言うのも分かるだろう。

どうしてだろうか？と同じ鉄からであろう製品のライラスの腰にある剣も見てみる。やはり組成が分かる。ちなみにとっても大事にしていることもなぜか理解できた。

「それ、平均0.78パーセントですよ。表面は1パーセントみただけですけど、中身の所々に少ない部分があります」

つい横から口を挟んでしまった。

「分かるのか……？」

「なぜか」

「それがきつとダイスケ殿の『墮天者』としての能力だろう。ふむ。平均で1パーセント無いとちょっと困るな」

「すみません。中までは確認できず」

「いやいや仕方ないことだろう。ダイスケ殿の能力が便利なだけさ。しかしそれはそれで使い道があるし、炭素量の高い所だけ削り出せば済むことだろう。いただく」

「ありがとうございます」

お昼をおごってもらい、帰ることになった。どこへ帰るかも知らない身としては、お任せするしかないのだが。

ちなみにそのお昼を食べた所を見ても、金属製の蝶番や、釘が使っているところを見ると、それなりの生活レベルがあることが伺えた。

電気はなさそうだったから、フライス盤や旋盤は存在しないのだろう。どうやって加工しているのだろうか。

ひよっとして叩いたりして1つずつ手作業で作っているのだろうか。

少しだけ興味が沸いた。

ここをノームの村と言っていた。ならば帰るという町には何があるのだろうか。

ほんの数時間前には半狂乱で泣きそうになっていたことも忘れ、胸の高まりを感じているダイスケだった。

帰り道。少々、いやかなり重くなった馬車を引っ張る馬もとても大変そうだ。

人はできるだけ歩き、休みを多くとって帰るらしい。その道中で

「うむ、いい買い物が出来た。これもひとえにダイスケ殿のおかげ」

「お役に立ててよかったです。が、その殿ってのはやめていただけませんか？」

「いいのか？」

「ええ、まだまだ若輩者ですし」

「ワシも少し肩がこっておったところだった。むしろありがたい」
がははと笑いながら助かったといった表情のライラスさん。

「いくらその『墮天者』とはいえ、この世界で生きていかななくてはならないようですから、あまり肩肘張っているのも疲れます、お互い」

こっちもあまり自身の努力の成果でもない、もらったと言っている力のためにかしこまられても正直居心地が悪い。

「そうか。とにかく一度城に行かなくてはならんだ。その結果によつては雲の上の存在になるかもしれない」

「どうでしょうか、聞いただけです、武術も知識もそれほど無い自分にはあまり価値がないようにも思えますが……？」

「そうでもないと思う。鍛冶師のワシらからすれば喉から手が出る能力を持つておるようだしな。まあ、城の偉い連中が考えるだろうさ」

偉い人にあまりいい感情が出ないのは庶民だからだろうか、それとも元の世界のせいなのだろうか。

「めんどくさいのはいやなんです」

「それも含めて楽しむしかないだろうな」

「……そうですね」

自分に楽しむほどの余裕があることを期待するしかないのかな……。

馬車はゆつくりと町へ向かう道を進んでいった……。

つづく

02 墮天（後書き）

誤字脱字報告、感想をお待ちしております。

03 今後

03 今後

「町へはもうしばらく歩けば着くぞ」というライラスさんの言葉が聞こえたときには目の前に広がる大きな畑と、遠くに見える2重の城壁に心奪われていた。

豊かに広がる農地、そして城壁に城。中世の絵にありそうなその景観は趣があり、気持ちのよいものだった。

いかに電柱やビルが景観を損ねていたか理解できる。

城壁から目を離せば、そこは自分が幼少の頃に覚えている自然豊かな田畑そのものであり、U字溝がいかに味気ないものであったかも分かった。川を覗いてみればメダカも見えるだろうか。

徐々に城壁が近くなる。

城壁は人2人分、3〜4メートル程度か。特に見張り兵というものはおらず、聞けば城壁の上にて遠くから魔物の襲来に備えている程度らしい。

つい見上げてしまう。

「ここが城ですか？」

なにを言っているんだ？といった表情でライラスさんが答える。

「ガイゲルド国城下町、ガイの町の入り口だ。王城はもっと先だ。ワシらの店もこの町にある」

「これからどこへ？」

「いきなり城に行くんですか？」

自分の感覚ではいきなり皇居に行くとされているようなものだ。聞き返すのも当然ともいえる。

再びライラスさんが変な顔をしたが、「そうか『墮天者』だったな……」などと1人納得し、言った。

「うむ、最優先ということになっておる。なのでダイスケにはノーム族の集落からの帰り道で出会ったことにしてもらう」

「……わかりました」

何かまずいこともあるのだろうか、いや「最優先」と言っていたからノームの村に寄ったのがいけないのだろう。

城の城壁の前に着いた。町並みや露天には正直興味深々だったが、「後でな」と有無を言わせぬライラスさんのおかげで不完全燃焼になっってしまった。

「ケイト、リリア、このまま店に戻ってくれ。ワシはあとから乗り合い馬車で帰る」

「分かりました」

「分かったわ」

いきなり最初が裸だったせいか、リリアという娘さんは結局最後までなついてくれなかった。年頃の女の子のようだし仕方ないと思いつつ、一抹のさみしさも感じた。

しかしこの国に住むなら仲を回復させる機会もきつとあるだろう、きつと。

さすがに城の城壁前には兵士と見られる人がおり、ライラスさんが墮天者だと言ったとたん、飛ぶような速さで兵士の人が連絡を取りに行った。

その兵士さんはちょっとだけ自分よりも年上に見える、見た感じ

から兵士さんよりも上等な鎧をまとっている人を伴って戻ってきた。その上等な兵士さんは、

「ふむ、この魔力……、確かに『墮天者』で間違いはないでしょうね。では私についてきてください」

と先導してくれた。

途中、ライラスさんとそれなりに親しく話しているところを見ると、実際はそれほど地位の高い人ではないのだろうかと勝手に想像する。

したがってあまりいい言葉遣いではないのだが聞いてしまった。

「王様ってどう接すればいいんです？」

「『墮天者』は自分の常識としての普通でいいでしょう」

いきなり平伏しろとかでなくて正直よかった。

「ここでお待ちになっていただきます。扉が開きましたら入ってきていただきたい」

「分かりました」

それだけ言つとその上級兵士さんはどこかへ行つた。

城の感想は、感想を言えるほど回っていないから分からないとしか言えなかった。

入り口の扉をくぐった後、迂回しながらいくつか部屋ではなく、廊下の扉をくぐっただけだったから。

帰りがけに、「攻められた時の対処のためだ」と聞かされて納得したが。

目の前にあるひとときわ大きい扉がゆっくりと開く。言われたとおり中に進み、ライラスさんが立ち止まったのにあわせてそこで止ま

る。

すると、

「陛下のおなりです！」

背筋に1本筋が通るような声を出した人がいた。

「あれ？あの人……？」

先ほどまで先導してくれた上級兵士の人だった。

その人はこの広い部屋で唯一の椅子、豪華な、たぶん玉座、その傍らに立っていた。

「近衛団長だ」

ライラスさんの声に一瞬固まる。

言葉遣い間違ったかも……。

声の後、入ってきたのは一見どこぞのオヤジだった。

服装と王冠以外は。

ただ玉座に座りこちらを見た瞬間、何か突き刺さる感覚を受けた。つい、体がこわばってしまう。

「よく来た、『墮天者』よ。名を聞いてもいいか？」

「ダイスケと申します」

俺もいい大人だ、と思っっている。多少相手が高圧的であろうがスルーすることは出来る。それにこれからのことを考えても心証を良くしておくことは大切だ。

「ゲインを残して皆下がれ。ああ、ライラスは残ってくれ」

「ハッ」

周りの兵士が一糸乱れぬ動きで謁見の間から下がる。何が起きるかといやひやしたが、それはいい意味で裏切られた。

とたん王が格好を崩したのだ。

「ダイスケ殿、ガイゲルド国王としてあなたを歓迎する」

「王様がそのようなことを言っているんですか？」

つい口から出てしまった。

「そのために兵士を下げたのだ。ワシにも立場があるからなし聞いただろう、墮天者にはそれ以上の力を持つものが多い。国を、民を守るためにならワシは何だってするだろう」

格好を崩して話を始めた王は本当にそらのオヤジに見えた。俺の言葉に苦笑を浮かべた時も。

ただ最後の一言は王としか表現できないものだった。
自然に言葉が出る。

「すばらしいですね」

「ありがとう。ところでダイスケ殿、あなたの能力を少しだけ伺った。詳しく聞いてもいいだろうか？」

「はい、ただ、その前にその言葉使いをできたら変えていただきたいのですが……。こちらが申し訳なくなってしまう」

「感謝する。『墮天者』と国、もしくは国王。ともに手を取り合う仲間として今までできた。そのようでいいか？」

どうも王も俺をどう扱っていいかわからない上での言葉だったようだ。

雰囲気も口調も少しだけ砕けたものになった。

ありがたい。

「こちらこそありがとうございます。そうですね、ある意味鍛冶職に特化しているんじゃないでしょうか、想像ですが」

「鍛冶に……」

「ええ、王様の腰の剣、一級品でしょう。何人かすれ違った兵士と

比べようもありません」

「！……。ふふ、ライラスの父親の剣だ。もともとは双剣だったのだがな」

抜いてもいない剣についてのことで興味が出てきたらしい。

「道理で。相方の剣はあれですか？」

と玉座の近くに飾られている剣を指差す。

「よくわかったな」

「はい、同じ性質を持っていると感じます。そしてお互いが惹きあっている。それからなにか特別な力がこめて作られています。そして……折れています」

折れていると言った時、王は少しだけ、複雑な表情を見せた。

「……あの剣のおかげで助かったことがあったのだ。あの剣が無ければ今頃ワシはここにはいない。その感謝もこめ、いつも見えるところにおいてあるのだ。そしてこの剣の製法は鍛冶の究極の技らしい。ライラスに伝授する前に亡くなられたようだ……」

後悔か安堵か喜びか悲しみか。その表情と声はとても、とても複雑に見えた。

さらに分かったことを伝える。

「何かが混ざっているように感じます。少し耳にはしましたが、この世界には私の世界には無い物が存在するようです。それが理解できれば、あるいは……、いや、構成だけ元に戻すなら……？」

話しながら、俺の中で整理がつくかのように、俺ができそうなことが浮かんでくる。

なぜだろう？ 普通なら出来もしないことなのに「出来そうだ」と思ってしまうんだろう？

言葉が止まってしまった。

「どうしたのだ？」

何かが出来そうだな。訳の分からない確信がある。

「あの剣、触らせて欲しいのです。あーいや、もちろん王様、もしくはこちらの方に剣の柄を握っていただいてもらってかまいません。不届きなことをしたら最悪切りつける方向で」

「ダイスケは武術の心得は？」

「全くありません」

「だろうな。何の心配も無かるう。ワシもゲインも剣聖の称号を得ておる」

剣聖の称号とは？と気になったが後でいい。今はより気になるこの剣だ。

王の腰の剣を参考にしつつ、折れた剣の構成を見ながら分子レベルで修復する。

するとどうだろう、双剣はよりいつそう輝きを増したようにダイスケには見えた。

「おお、剣が……」

王には分かったようだ。持ち主だからだろうか、それとも剣を打ったライラスさんの父の感情だろうか。

「陛下、王！どうしたんですか！」

放心したような王にゲインさんが声をかけていた。

うつむき、ぶるぶると震える王。本当に大丈夫かと声をかけようと悩んだ矢先だった。

王はその双剣を天に伸ばした。

そして喜色満面な顔で。

「ふっふっふ。双剣のエガイド、復活じゃあ！」
「なんですと!?!」

その後はワイワイガヤガヤと。俺は完全に蚊帳の外だ。漏れてくる話を聞く限り、この3人は友人なのだろうか。

「あのう……。みなさんは仲が良かったですか?」

「悪友だそうだな、周りに言わせると」

「だからワシやあ謁見なんて嫌だったんだ。いつもオヤジの剣と比べられる」

「仕方ないですね。エガイド王も私もライラスのオヤジさん、ラス爺の剣を使っているのだから」

「しかあし! ダイスケがいれば百人力! 職業も合うことだし、法に基づいてワシらの家で暮らしてもらう。今に見ておれよ!」

「うゝむ、それなんだがね、ライラス、彼には君の娘と同じ鍛冶学科に入ってもらうつもりだよ」

「なんだとお! しかし、エガイド王の裁定か。寮で無いなら許可だ!」

「偉そうだな、ライラス。町の鍛冶屋はおぬしだけではあるまいん?」

「申し訳ありませんっ!」

ただの会話が漫才になるこの人たちは面白いなと思いつつと見ていたが、ふと気がついた。

「もしかして、俺、学校へ行くんですか!?!」

「今そう話していたらう」

「30過ぎてまた学校とは……」

「この世界の鍛冶などを覚えるためだ、我慢して欲しい。それからもし出来るのならお主の特殊魔法について研究をさせて欲しい」

「特殊魔法？」

「その鉱物や武器を感じられる魔法だ。そんな使い手は聞いたことが無いのでな。たぶん研究者も特殊魔法と断ずるだろう」

「いいですよ」

「そんなに簡単に決めていいのか？」

「いや、俺だけだったら命とか狙われそうじゃないですか。この国にとって普通の技術になれば自分の命も安全になるかと思いついて、それに使える人が多い技術って、発展も早いと思いますし。まあ、出来ましたらその魔法が一般化するまでは護衛みたいなものが欲しいのが実情ですが」

「……すまん、ライラス、寮決定だ」

「……ちっ……。ダイスケ、休みにはわき目も振らず必ず帰ってこい」

「わかりま……って、いや、なんでそうなるんです？」

「『墮天者』は見つけたものが育てるか対価を貰うか決められるのだ。わしは育てるほうを選んだ。それだけだ」

「いえ、育ててもらうほどもう子供でもないのですが……」

「この世界の常識も知らないと後で困るぞ……？」

「……お世話になります」

「うむ、いい判断だ」

この歳になってまた学生か……。先が思いやられる。なるようにしかならないうが。

つづく

03 今後（後書き）

誤字脱字報告、感想をお待ちしております。

04 転入

04 転入

すーはーすーはー。転校なんて経験したことないし、ある意味高校や大学の入学に近いのか。しかし自分は『堕天者』。

ここで勉強する生徒たちとはいろんな意味で一線を画することになるだろう。年齢差もあるし、「俺」はまずいかな、ぼろが出ない程度に「私」かな、などとくだらんことまで考えてしまう。

ガイゲルドの国の城下町、ガイの町に来て数日。つい昨日寮に入った。服やらいろいろ必要なものがあつたためだ。必要なものはリアが教えてくれた。先日の謁見の後、何とか関係と言うか、機嫌をなおす機会に恵まれた。36にもなる自分からすると10代後半の女の子など異星人に近いがそこはそこ、マンガ、ゲーム、ネットなど無い世界の子供の遊びや興味を引くものなど知れている。自分の方が色々知っていたくらいだ。彼女が背伸びをしたい年頃だったのもあるだろう。一番は『堕天者』という肩書きだったのだろうが。

「ではダイスケ殿、一緒に入ってきてくださいな」
「はい」

ここの大半の教師は自分と同年代になってしまった。総学長と格

闘科、魔法科、鍛冶科の各学科長が年上なくらいだ。学生は10代。現代のジエネレーションギャップほどではないだろうが、それに類するものもきつと感じるだろう。正直困るが今後のためにも我慢するしかない。

あとは戦闘能力が皆無なので絡まれないのを祈るのみ。

この鍛冶1Aクラスの担任、シート工という女性の先生だ。担任が全教科を担当しているわけではないので女性だろうがかまわないらしい。ちなみにシート工先生は特別服が専門らしい。

入学前に少し学校の事を聞いた。各科2年間。

その前には幼年学校があり、基本的に命を守る術を習う。

傷を癒す系統やかわしたり防ぐ体術や敵からの逃げ方などだ。そしてそこでの希望や才能により、高等学校の科が決められる。

魔法科に格闘科。魔法科は回復系、補助系、攻撃系に神系。格闘は剣、斧など近接武器にメイス、槍、鎖鎌などの中距離系、弓、投擲武器などの遠距離系。系技などもあるらしい。

魔法科や格闘科は武器や魔法の種類により区別はあるが、それ一筋というわけではない。

戦闘中に常に得意武器が手元にあるとは限らないし、魔法は広く使えて損はない。

鍛冶科は剣などの各種武器系、防具も全身鎧や服、アクセサリ、盾など。全身鎧は特別で、兜部分、こて部分など、部分別に職人がいることが多い。面白いのは服屋も鍛冶クラスになることだろうか。と言っても普通の服ではなく、革の鎧や隠密用の装束や魔法付加の服といったものだ。鎧を着られない者たちへのものになる。シート工先生の特別服などはこれに当てはまる。

なるほどと頷きながら、自分はどうしたいのかを考えてみたが、今は答えは浮かばなかった。

シート工先生に続き教室に入る。みんな若い。
「おはよう、皆さん」

「おはようございます!」

「隣の人は今日の講師の先生ですかあ?」

やっぱそう見えるよなあ、教師と同年代となれば。

「いえ、転人生です」

「はあ?」

「初めまして、ダイスケと申します。こちらの言い方ですと『墮天者』というものらしいです」

とたん、生徒の顔色が変わる。困惑だろうか。

「『墮天者』だって……?」

「なんでまた鍛冶科に……?」

一応説明しておかなくてはいけないか。

「金属やそのほかの物質を感じ取り加工をする魔法らしいですよ、私の使えるのは」

さらにざわめきが増し、収集がつかなくなる直前にシート工先生が口を開く。いいタイミングだった。慣れているのだろう。もしかしたらそういう問題が多い生徒がいるのかもしれない。

「はいはい、そういうことで少し説明するから静かにね。ダイスケ殿は『墮天者』としての特殊魔法により鍛冶に特化した魔法と判断され鍛冶科Aクラスに編入となりました。正直私たち教師陣と同年代です所以对等な対応は最初は慣れないでしょうが徐々に慣れて欲しいですね。それから実技の時間は別行動になります。これは特殊魔法の解析及びあなた方鍛冶科の生徒への転用を陛下及び総学長以下教師陣が最優先とするためです。最後に一応常識ですが、『墮天者』は年齢による死以外で、特に武器や魔法で死亡した場合、最低半径10キロメートルほどの魔力爆発を起こします。墮天者と訓練以外で剣を交えるのは禁忌に値し、それなりの対応を取りますの

でそのつもりで」

とたんに教室が静まり返る。鍛冶科であろうが、生徒の全てが戦闘をできないわけでもないのだ。

幾人かの生徒の先走りを牽制する意味でも悪くない発言だったのではないだろうか。

それでも静まりすぎた空気は鋭すぎる。気を和らげる意味でも言うておく。

「正直30過ぎた自分が10代の皆さんと机を並べるのは緊張しますがよろしく。それからまだオジサンではないつもりですのでお願いしますね」

くすくすと教室から笑いが漏れる。ちよつと自爆かとも思ったが実際に30代にならなければ俺の言葉の意味は理解してもらえないだろう。10代の少年少女にとって30代などオジサンだろうから教師は理解してくれている表情をしていたが。

そしてここまでで大きな誇張がある。墮天者を害した所で魔力爆発など生じない。国の故事にあやかっているだけだ。損失が計り知れないために王国、連合ぐるみでそういう教育をしている。

今までは魔法や剣技などに特化した『墮天者』ばかりだったのだから学生に傷をつけられるような人物がいなかったのもあったのだが。

そして周りを見渡す。10代の少年少女の感情など詳しくは理解できようもないが、大方好意的に受け入れられたようだ。いや、ただ1人複雑そうな表情を見せていた者がいた。その生徒は手を上げると発言の許可を求めた。

「ダイスケさん、ちよつといいですかね？」

「歳のせいですぐに名前を覚えられるか分からないけど、名前を聞いても？」

またまた忍び笑いが漏れる中、その生徒、少年は自分は「ワード」と名乗った。隣にいたシート工先生がガイゲルド国の第1王子で武器の腕もとても高いのだと付け足してくれた。

「ふん、俺は王なんかにはならん。戦うことも嫌いじゃないが、俺はその戦闘能力を最大限に生かせる武器を作りたいだけだ」

自信家なのだろう、まわりを気にしない表情であつたし。

「目標があるのはいいことだと思いますよ。私は来たばかりでまだまだ目標すら見つかりませんから。で、聞きたいことはなんでしょう？」

「オヤジの、いや、王の双剣をあなたが直したと聞いたんだが」

なるほど、あれを見たのか。あれは確かにいい品だった。現時点では逆立ちしても作ることができない。だから言う。

「直したというより、無事だった片方の剣と同じ状態に戻しただけです。ここに来て数日、いくつかの金属を見る機会がありました。がそれを単に加工しただけではあれは作れないと思いましたね。そのリリアさんのおじいさん、ラクスさんの作だと聞いています。今日の授業の用意か、みなさんの机の上にあるものを見ると、このクラスではリリアさんとそのあなたとそちらのあなた。その3人程がその技術の入りに口にした程度でしょう。」

反応を知りたかったのだけしかけてみた。当然だが間違つたことは言っていないつもりだった。

「俺のはそれ以下だと？特にリリアより下だとは納得いかん！」

自分を、教師と『墮天者』という後ろ盾がないと人を煽ることも

出来ない小心者だと内心思った。

目を向ければリリアの他に呼んだ2人の様子はどこかうれしそうだった。リリアは内心はらはらしているんだろう。俺とワードの間を瞳が忙しく動いている。

「他の皆さんも含め、鍛冶の腕が悪いとは言っていないことをまずは理解してくださいな。そしてここ数日でほんの少しか理解できた自分の能力を噛み砕いて説明しましょう、あ、先生、時間いただいていいですか？」

「……、いいでしょう。他の教師をここへ呼んでいいなら

シート工先生は廊下に出てちゅうどそこを通った同僚の先生に伝言を頼んだようだ。

「ありがとうございます、ではここへ他の先生方が来るまで私の方の用意をしましょうか」

そう言うって持ってきたバツグの中にある純鉄と炭を取り出す。

「これ、炭素の入っていない、より詳しく言えば他の不純物も無い純粋な鉄です。逆にこの世界ではなじみが無いかもしれませんね」

自然界では存在しないといっても過言ではないだろう。それを感じたのか生徒たちの目も変わる。

「ちなみに純鉄は焼き入れが出来ません。熱で硬化しないのです。そしてこれは炭ですが、これから純粋な炭素結晶を取り出します」

とたんにシート工先生が割り込んできた。

「ちょ、ちょっと待ってください、ダイスケ殿、教師が来るまで休憩してください！」

基本に近いこの程度のことでもこの世界には知識が無いのだろうか。仕方ない。

「ああ、すみません。ではみなさんの机にある武器や防具を見せて

もらっていいですか？」

生徒の机の上に出ている武器などを見せてもらう。いまいち組成の分からないものを使ってある人がいた。

「知らない金属が使ってますね、これ、なんですか？」

「スターストーンです」

「これは？」

「ファイアストーンですわ」

「こちらはなんでしょう？」

「アイスストーンです」

「そうなんだ、ありがとう」

一度で覚えるかは別として、この世界には面白い金属と言つか物質があるようだった。

ふとある生徒が声をかけてくる。

「これも見てください！」

「うーん……」

「だめですか……？」

多少の問題がきつとある。素人目にしてみても。ただ、

「いやこれからそれを見ることが出来る魔法を教えるつもりですからね。自分で理解したほうがいいと思うんです」

「そうですか……」

そしてガヤガヤと総学長をはじめ教師が入ってくる。自分の武器の良し悪しが分かるならそれはへばい武具屋の駆逐にもなるのだろう、鍛冶科以外の教師も呼ぶようだ。

教師陣が揃う間、鍛冶Aクラスの担任に生徒はサンプルとしていくつかの鉄を持っているか問う。皆それなりのサンプルを持っているはずだと言っていた。

「では、えー、純鉄のサンプル持っている人……は、やっぱりないよね……、うーん、とりあえず0.5%の炭素を含んだ鉄はサンプルとして持つてる？そう、みんなあるんだ、それなら0.75%のものと1%のものがあるなら出してくれるかな？ではここからが奥義です」

生徒教師全員の喉がゴクリと鳴る。

「見るんです」

「はあ？」

みんな、気の抜ける音が聞こえそうなほど脱力する。

「ああ、簡潔すぎました。純粋な魔力を目に集めてください。出来るだけ純粋な」

純粋といわれてそれを理解できるのは総学長と各学科長くらいだ。魔法を発動する関係上、魔力に色というか特色をつける。炎とか氷とか。その特色付けの時間が短ければ短いほど魔法の発動が早い。そういつた感情や考えが出来るだけこもっていない純粋な魔力を集めるのは実際は意外と難しい。頭を空っぽにして何も考えないようにするのが大変難しいように。

ためしにやってみようことを提案する。

「うーん、その前段階のようですね。ではこれから30秒間何も考えないでください。スタート」

生徒も教師も面白い顔をしている。何も考えないことがいかに難しいか。

「何も考えないぞ、と思っっている時点ですでに何も考えていないことにはならないんです。それに次々にくだらない考えなどが浮かんできませんか？それを押し込めようとすることすら何も考えていな

いことにはならないという悪循環」

生徒皆一様に頷いている。教師陣もだ。

「そついう、所謂無の状態で魔力を瞳に集めるのです。そして魔力を瞳から光を当てるようにしてみたいものを見るのです。そして当てる魔力は無の状態で物に当てるのは光のようなイメージの魔力。ええ、矛盾しているかと感じるでしょうね。でも見るだけなら実際それだけなのですよ。それが出来れば今まである程度しか見えなかった金属の状態も一発です。そしてそれが見えた後のことなのですが、瞳に魔力を注いで金属や物質の根本を見ながら物質を動かしたり離したりくつつけたり。魔力でやっているのか他の技なのかは私自身でもまだ分かりませんが。理解できないけど使えるという状態でしょうか。しかし……、物質を見る力が赤子が立ち上がるための技術とすればそれは100メートルを10秒で走る程の技術程の差はあるでしょうね」

ざわざわと教室がゆれる。リリアをはじめとする計3人はなんとなく体が理解したようだ。実際は魔法のイメージがあまりつかめない、魔法の不得意な人の方が体得しやすい。そういう点でこれは諸刃の剣だ。

「それができるようになると、先ほども言いましたが、私はまだなぜできるかと説明できないので申し訳ないんですが、このように炭から炭素のみ取り出し、きれいに並べることでダイヤモンドが出来てしまうのです。で、この鉄を切り分けます。鉄の中の結合を切り分けています。そして炭素と結合。ちなみにこの能力により、あらゆる鉄は剣に使いやすい玉鋼ですが、最高級の剣の材料にすることが出来ます。今までの目利きを省けるのも魅力ですね。で、どうですか、何人かは見ることを理解できそうですか？ならばちよつとした問題を出しましょう。……よつと。今この3つの鉄に炭素を混ぜ

ました。鉄に対する炭素量は1%。鉄を打ち剣にするにはかなりの材料です。ですが、この3つ、平均炭素量が1%（・・・・・・）です。違いを説明できるようになれば、まず『見る』特殊魔法は成功ですね」

よりざわつきの大きくなる教室。そこへ総学長が話しかけてきた。

「このサンプル、もう少し作ってもらいたい。私にはその見る魔法だけは出来た。右から均等に1%、外側に多いもの、所々多いまだらの物の順のはずだ」

「正解です」

「よしよし、これで私もまた一線で活躍できる機会もあるかもしれないというものだな」

「まだまだ隠居するほどのお年には見えませんが……？」

「色々あるのさね」

年齢と経験を重ねることであるのであろう深い笑み。あまり聞きたくない方向の。

「……そうですか、聞かなかったことにしましょう。では今当てられた3個はまたいじりなおして。数字もつけておきましょう。1、2、3、の数字は全て中身が変わらないことを意味するように。では魔法科、格闘科の先生にもこれをお渡しします。で、総学長にはこれを」

「これは意地が悪くないか？」

今度の笑みはいたずらが成功した子供のようだった。

「言っちゃだめですよ。番号で統一してあるなら自然と情報が漏れていくでしょうから。最終問題を総学長に任せるためのものです」
「ふっふっふ。おもしろい」

普段しかめ面の総学長の笑いは、生徒にとって悪魔から最後通告を受けるほどのものだったようだ。後から聞いた話だが。

「色々見えるようになるだけで質の低い材料、まがい物などをつかまされにくいという利点があると思うんですよ。みんなのできるようになって、私の命のためにも頑張っていたきたいです」

みんな揃って首を傾げるので、高度な技術でも使える人が多くないと、その価値が下がり、自分が命を奪われる心配が減るのだと説明しておいた。

シンプルな机に真新しい教科書。それから一般的な石や金属のサンプル。年甲斐もなく浮き立つ心をなんとか平静に保ちながら。

学校生活が始まった。

与えられた寮の一室にて。石や金属のサンプルとその構成を何とか覚えようと、ノートを使ってみたりして悪戦苦闘する。休憩がてら、ふと考えがよぎる。

俺が「私」とか。自分でなんか気持ち悪くて仕方ない。笑いすらこみ上げてくる。が、さすがに20歳も下の子たちが親友になるとは到底信じられない。20歳差なぞ、親とも変わらない。先は長い。しかし現代にはほとんど得られなかった充足感を感じている。悪く

つづく

ない。

04 転入（後書き）

誤字脱字報告、感想をお待ちしております。

05 友人

05 友人

翌日。

それなりに大きな木を全力で打ち合わせたような衝撃音と共に。
「おはようございます!」

肩がびくりと跳ね上がる。音のした方向、ドアに振り返る。
そう、ドアを全力で開けたであろう音だった。

「なんだっ!?!……ワード君か」

つい声を荒げてしまう。

『失敗失敗。紳士で行く予定だったじゃないか』

ワードが興奮した顔でまくし立てる。

「ダイスケさん!朝っすよ!って、もう起きてたんですか?」

「当たり前じゃないか。私の知らない金属や鉱石がこの地にあるんだ。寝ている間など無いくらい充実しているよ」

「そうっすか。俺がその高みに達するまで待つていてもらえないっすかね?」

「バカ言わないでくれ。おれ、……私だって覚える事だらけでいっぱいっばいなんだから」

ふとワードが何かに気づいたようで、いたずらを思いついた子供のような表情になる。

「無理じゃなくていいんすよ?」

「なにがだい？」

「『俺』とか言葉遣いとか、無理してるでしょっ。」

「そんなことはないよ」

「またまた」

「ないよ」

「うそでしょ」

「ない」

「ほんとに？」

「くどい」

「マジで？」

「……」

確かに図星だが、それを指摘されれば腹も立とうというものだ。徐々にむかむかとしてきていた。

「楽になればあ？」

「………うるさい………」

「え？」

「やかましい！だまらんかい！」

「………すみません」

とたんにまじめな顔になるワード。彼自身もやりすぎたと思っていたのだろう。

「で？何しに俺のところに？」

「………たんだ………」

「は？」

先ほどの興奮した表情に戻り、さらに目から星が出そうなくらい輝いていた。

「できたんだよ、オレ！見る魔法が！」

怒鳴ったら猫かぶっていたのがどうでも良くなった。自分の呼び方も俺に変わってしまった。もうありのままでいいや。似たような

ことをワードも思っただろうと感じた。

「どうしてできるようになったかわかる？」

「わっかんね」

即答だった。興奮も少しだけ落ち着いたようだ。

ふむ、と考え込む。昔どこかで聞いたことがある。

いくら難解なクロスワードなどでも、世界に1人でも解けたなら、とたんに解ける人が増えると。人間の深層心理は世界を越えてつながっているとかいないとか。ま、出来るようになったならそれはそれに越したことは無い。

「でも出来たなら良かったね。で、自分の武器はどうだった？陛下の双剣やリリアとかと比べて」

見ることができるようになったなら分かるだろうと今度はダイスケがあまりよろしくない笑みを浮かべて聞く。

「いやあ、ダイスケさんの言うとおりだったよ。なまくらでは無いっぽいけど名剣にすら程遠い。ただ、その、双剣には強く、リリア達のはかすかにだけど、何か別に力がこもってるっぽい」

ダイスケが昨日言ったことが理解できたのだろう、頭をかきながら恥ずかしげにワードは言った。

さらに付け加える。

「それがただのいい剣と名剣の違いだと思ってるよ。王の双剣は折れてたのをつなげたただだからその力は正直きちんと色々理解して武器を打つようにならないと俺も理解できないと思う、その点だけならリリア達は俺より前を進んでいることになるね」

「うーん……」

理解できはしたがそれを実行できるかは別だ。ワードが悩むのも分かる。

ま、何ことも1歩ずつだ。話を変える。

「それより朝の挨拶からだんだんと言葉遣いが変わっているねえ」

「ああ！すみません」

とたんに表情を硬くしようとしたが、それに待ったをかける。

正直そういうのは無しでお願いしたいからだ。

「いいよ、むしろ普通でお願いしたいんだ。まだまだ俺のほうが教
わることが多いだろうし。さん付けもできればいいよ」

「いいのか？悪いな、オレ、弟たちと違って勉強は嫌いだし。体動
かしたり鍛冶してる方が好きなんだ。いろんな作法を覚えろってオ
ヤジやゲインからいつもいやみを言われてばかりさ」

「俺もそんな堅苦しい世界に入るのはいやだな」

「だろう？」

我意を得たり。

2人してケラケラと笑った。

早速ワードとともに朝食を取りに行く。寮生はそれほどいないの
かまばらだった。

聞いてみると学費は後に国への貢献という形での免除が認められ
ているが、寮の費用はそうはいかないらしい。

『墮天者』は免除だとは聞いていたが。

よって貧しい所の学生などは多少裕福な知り合いや師匠のところ
で小間使いのような労働を対価と一緒に暮らしているらしい。学校
に入ることの出来る子供はかなりの才能を持つことになるので受け
入れる方も家の将来などを考えるととてもプラスになるようで、物
語などにあるイジメの類は無いと言っていた。

ただし、受け入れた少年にその家の娘とくつつけるように画策す
る親はいるらしいが。ただこの国の将来をになう人材だ。特に心の
問題は多感な時期もあいまって、常に細心の注意が注がれているよ
うだ。

さすがに10代の食欲は見ているだけでも気持ちがいい。ダイスケも朝からそれなりに食べる方だが、ダイスケの量に倍近いものが凄く速さで胃に収まっていく。

食べている間は悪いと思い、食後のお茶を飲みながら話をする。

「ワードは寮生？」

「いや城から通っている。寮に入りたいと言ったんだが、入りたいなら自分で稼げと。いくら王家といっても無駄遣いはさせんと一蹴だった」

「そうか。そういえば君らの年代だとどうやって稼ぐの？俺にもできそうかな？」

「戦闘科や魔法科の連中は適当なダンジョンにこもったり、盗賊退治したり。万屋つてとこがあつてな、大小あるが問題を解決したり材料を採取したりで報酬がでるんだ」

「ほうほう」

とても重要な情報だ。率先して戦いたくは無いし、そんなスキルは無いのだが。

「鍛冶科ならば作ったものを売るのが一般的だ。いくらAクラスとは言え、1年では剣などは打つてもなまくらと言われるだろうよ。投げナイフやヤジリのような数が必要なもの、まあかいたたかれるだろうが。もしくはアクセサリか服だろうな」

「アクセサリに服か、そういうのを作る人がいるとは聞いたけど」

「魔法をこめたりすると防御力が上がったり、毒や眠気を妨害できるアクセサリや服もあるからな。シート工先生は確か服飾だ。だが、いいものは剣を作るのと遜色ないほど高度な技術がいる」

「へえ、おもしろそうだね」

「ああ、アクセサリは防御力なんぞ無くても外見さえ良ければそれなりに売れるからな、服だって一般に着るものなら同じだ。女生徒たちはこの方法だし、将来そっちの方向に進むんだろうよ。剣を打つ授業に女はほとんど来ないからな」

「選択制なの？」

「たくさんのことを極めるには人生は短すぎる。とは過去の賢者の言葉だ」

「たしかに。俺はどうしようかなあ？」

「ダイスケならあらゆる武器で結構なものを作りそうだな……」

「でもどうせ鍛冶に特化した技があるんだし、国宝級のものを作りたいなあ」

「国宝級かよ。すでに着眼点からおかしいな」

「そう？」

「ああ」

あきれたような顔をするワードに、「作るなら最高を目指さないと損だ。目指したものの以上のものが偶然できてしまうことは少ないから」と言つと、とても納得した顔をしていた。

「でもまずは小遣いが先だね。酒も飲めない」

「基本から勉強するんだな」

「それしかないかあ」

ワードは朝食分の料金を払い、俺はお茶を飲み干して一緒に教室に向かった。

教室へ入るなり、皆の視線を受ける。表情はさまざまだったが、嫌な感じは特に受けなかったので流すことにした。
が、流せなかった者が約1名。

「なんだ、お前ら？どうかしたのか？」

お前はどこの魔物と戦うんだと聞きたくなるほどの表情だ。ゆらりと怒気が上がる。

ワードは言いたいことを何でもはつきり言う性格のようだ。王家の者という側面もあるだろうが。そんな物言いじゃ言いたくても言えないよと、ワードの隣で苦笑する。

「どうかしたの？」

助け舟を出してみる。すると皆が顔を見合わせた後、代表するようリリアが口を開いた。

「皆が『見る』魔法を使えるようになりました。これで学生だとなめられてくず鉄をつかまされることもなくなりそうです。ありがとうございます！」

「すごいな。さすがAクラス」

子供にしか見えないが、やはり学校に通うという事はエリートである証なのだろう。

「ワードだけはまだ総学長のテストを受けていないようですけど…

…」

「オレだって出来るようになった！」

まだ怒っているようにも見えるが、すでに怒気は無く、単にすねているような感じだった。

「それから鍛冶Bクラスも半分ほどは成功しそうです。格闘科もAは全員、Bも半分以上。ただ、魔法科だけはAでも数人らしいです。2年生はさすがにABとも使えるようになったみたいですけど」

「魔法をどう使うか常に考えている人にとっては純粋な魔力とはかえって難しいものなのかな？」

「私たちも初級魔法しか使えませんし、ちょっと分からないですね。なまじ何かが出来るからこそ出来ないことが出てしまうのかもしれない。

問題もあるんだろうと思いつつ、今はこの自分のクラスが出来た事を喜んでおこう。

「そっか、でも良かったね、みんな」
「ハイっ！」

ワードには少しじろじろ見られたからと言って、喧嘩を売るようなまねをしない方がいいのではないかと言っておく。

「そうかな、いやしかし……」

などと悩んでいるワードをクラスの皆も不思議そうな顔をしている。聞けばあまりワードは人の話を聞かないそうだ。仕方のない王族だな。

さっぱりとした性格から嫌われてはいないようだし、まあ本人次第だろうと考えていると、シート工先生が入ってきた。

「はい、静かに。座って座って。はい、みんなおはよう」

「おはようございます！」

「今日もいつもの時間割通りです。が、最初の講義の時間は変更して、城の宝物殿に行きますよ」

周りから「おおっ」とか「わあ」とか聞こえる。

「遊びに行くんじゃないよ。ありませんよ。見る魔法を覚えたあなたたちが今の業物の品をどう感じられるか。これは君たちがさらに高みに上るには必要で重要なことなのですよ」

きらりとした美しい笑顔を見せるシート工先生に普通なら見ほれてしまう生徒も出たのだろうが、さすがに生徒たちはその重要性に気がついたようだ。真剣に何か考えている。

何かを思い出したようにシート工先生がワードを手招きする。

「そうそう、ワード君。その授業をするためにも、君はテストを受ける必要がありますね。こちらにいらっしやい」

俺も含め、周りの生徒が内心ニヤニヤとしながらワードがテスト

を受けるのを見守る。ワードは「余裕、余裕」などと言っていたが、見せられた5つの塊を見て硬直した。

鉄だ、解析の見る魔法がそう伝えている。この5つは全て同じだと。しかし、形は一緒だが、なぜか、色違いが3つ、重さが違うのが2つ。何らかの魔法をかけられている感じも無い。

最初の余裕はどこへやら、全く余裕のない表情で。

「どうだい、ワード君？」

「くそ、感じたものを信じるしかねえ！これはみんな同じものだ！」

どこぞのクイズ番組のようにじっとワードを見ているシート工先生。

まわりから見れば数秒だったが、ワード本人からしてみたら数時間の間にも感じられたのだろう、額から一すじの汗が流れる。

「……正解！」

「はあ？」

とたんに脱力するワード。本人も正直正解だと思わなかったのだろう。

「ダイスケ殿、他の者も聞きたいでしょうし、説明を。私たち教師陣もなぜなのかまではまだ分からないのです。総学長と各学科長は分かっていたようですが」

シート工先生もいまいち分かっていたいなかったようだ。

「いいですよ。まずこの3つ。触っても、普通に見ても分からない程度に表面の形というか模様が違います。それをいじるとこのように白く見えたり黒く見えたり。鏡のように反射したりするのです。そしてこの2つ。まだまだ皆さんは狭い範囲しか見えないのでしょうね。俺が見るとこの手のひらサイズの大きさの物でも1メートル位に大きく見え、解析がより詳しくなるのです。使用する魔力量を

変えると見方も変わりますよ。試してみてくださいな。そして全体を見てみると、1つはすかすか、もう1つはみっしりとした感じがわかるんです。中身の形状、それを塊は変更してあるんです。ちなみに重い方が鉄としての標準です。最初の3つはあえて少し軽くしてあるんです。ちなみにこんな感じですよ」

身振り手振りを混ぜ、説明する。最後の中身の説明は同じものを作って中を割って見せた。

細かい模様を施すことで光の反射から見える色が少し変化する。模様を一切なくせば鏡面仕上げになる。

それに外観を変えず、いわゆる密度を変える。実際に密度を変えることは出来ないから、中身にスチールウール状のものを詰めただけだ。立派に同じ鉄だろう。

ただ狭い範囲しか見えず、空気という存在に対しての認識が無い教師の一部と生徒は分からなかったただけだ。

引っかけに次ぐ引っかけ。それをわかったのは鍛冶Aクラスにも1人もいなかった。先生も説明されれば理解したようで、うんうんと頷いていた。

「そういうことで、いいですかね、シート工先生？」

「ええ、ええ。ありがとうございます、ダイスケ殿」

「敬語とか殿とかやめて欲しいんですが」

同年代だし余計に。とても自分が歳をとったように感じてしまうから。

「しかし、『墮天者』ですし、わたくしよりも年上ですし……」

「それは卒業したら考えましょう。今はシート工先生の生徒ですから」

シート工先生は人懐っこい笑顔を浮かべ。

「まあっ！年上の人が生徒になるのもなかなか興味深いものですね」

「あまりいじらないでいただきたいと思っはいますが」

「『墮天者』で年上で。いじられない方がおかしいと思いますよ」

「ですよ……」

がつくりと肩が落ちてしまう。やっぱり仕方ないのかな。

「まあ、ダイスケさんの言い分はわかりました。教師陣もそうにすることにしましょう。さてワード君も合格したようですし、宝物殿にいきましょうか。」

城に着く。農耕に向かない土地と、魔法訓練が存在するため城から少々遠い学校。20分程度歩いただろうか。

各々城の守備兵や衛兵に挨拶をしながら宝物殿に向かう。

これが格闘科や魔法科の生徒なら城の兵士はある意味一番の就職先であり、先輩たちだ。緊張するのだろう。

しかし鍛冶科の生徒は町に自らの店を構えるのが目標であり、城お抱えになる者は少ない。よってあまり兵士に意識が行かない。かえってワードがいるおかげで新米兵士の方に緊張が見えた。いくつかの扉をくぐり、階段を下りた。

厳重な警護は無かった。そこにダイスケはあることを感じた。戦争中では当然のことであつたが。

少しだけ豪華な扉の前に立つシート工先生。

「ようこそ、ここが宝物殿です」

「先生、それ前も聞きました」

鍛冶科の生徒はそのモチベーションを高めるため、さらにその中から一段感性の高い者を見つけるため、年に数回は宝物殿に来るのだ。

「コホン、ダイスケさんのためにそうだったのですよ」

「ありがとうございます？」

羞恥心か、それ以外の意味があるのか若干顔を赤くしたシートエはそういつてごまかす。

「どうして疑問形ですか？ダイスケ君？」

あつという間に「殿」から「さん」、しまいには「君」だ。シートエ先生の心を覗いてみたい。が、彼女とは彼方の女と書く。と言っていたどこかの世界の人のことを思い出す。うむうむ、本当に女性性は男性にとって彼方の存在だ。よくわからない。

元の世界にも俗に言う「不思議ちゃん」という存在がいたが彼女がそうなのだろうか。まあ今は宝物殿を堪能させてもらおう。まがい物しかないのは確定しているが。ちなみに先ほどの一段高い感性とは、贋作として見破れるかどうかだ。

どうぞという付き合いの衛兵に言われ中に入る。ゆっくりと見渡し、品を眺めていく。やはり偽物だ。

「なんじゃこりゃあ！」

ワードの怒鳴り声が響く、他の生徒もひそひそと話し合っている。リリアなどはしかめ面だ。

なんでワードは怒っているんだ？などと考えながら聞く。

「何をおどろいているんだい？みんな？」

「ダイスケ、これみんな宝物や業物どころじゃねえ。そこらの兵士の持つ物以下のただの置物だ！」

「そうですよ、ダイスケさん！」

いや、当然だと思わないのだろうか。いくつか質問しようか。

「ねえ、ワードにリリア、今は平和？」

「そんなわけねえ」

「まだまだ北の方には激戦区があると聞いてます」

「じゃあ本当の国宝級武具があったら？」

「それを戦に使いますね」

「そうするとここにあるものは」

ワードは呆然と、リリアはハツとした表情で黙ってしまう。

「……」

「……」

「分かったかい？ここに本当に国宝級のものが置いてあったら、陛下に上申するよ。ないということはいい武器や防具がきちんと使われているってことだね。飾り物になるために作者も作ったわけじゃない。君たちだって折角いいもの作っても武器として使われなかったらどう思う？武器は戦うことで、防具は命を守ることで。それは武具にとってはそれは存在意義だと思うよ。どうだい？」

「……それはそうだ」

「……そうですね」

「俺はそんなじゃないかなと思っていたけど、君らの最初の反応がどうだったか気になるねえ」

即座にシート工先生が言う。いい笑顔だ。

「『すすげえ、俺もこんなの作れるようになりてえ！』『あたしもとうちゃんを越えてこういうのを作るんだもん！』でしたっけ？」

膝をつくワードと顔が見えないほどうつむくリリア。たぶん顔は真っ赤だろう。耳まで赤い。

「せんせえ、ひでえ……」

「シート工先生……」

「あははは！」

彼らにはとても、とても申し訳ないが、笑いの衝動が収まらなかった。

「ダイスケ、笑うんじゃない！」

「そうですよ、ダイスケさん！」

先ほどは羞恥心で、今はさらに怒りをプラスして大声で文句を言う2人。

息が合っていた。

「くくく……、悪い悪い。しかし急に2人とも仲が良くなったよう
でなにより」

「よくなんかねえよ！」

「そうよ！」

少しだけ頑張つて真顔に見えるようにし、どこかで受け売りの偉
そうな言葉を言う。

当然ダイスケ自身が実行しているかはなんとも言えなかったが。

「でもねえ、一度きりの人生、嫌いなものがあるってことは単純に
損しているんだよね。そう思わない？」

「む……」

「……」

黙りこむ2人、なにか感じる所があつたんだろう。クラスの皆も
この言葉を聞いていたようで、何かを考える顔をしている。

「まあ、同じクラスなら仲良くしても良いと思うよ。逆にみんなの
結束で後々まで語り継がれるくらいのクラスになるといいね」

なにかの決意が感じられるクラスの生徒たち。どうも感受性の高
い年頃の子たちにはより心に響いたようだった。

少しだけふくれっ面を見せるシート工先生。

「はいはいっ！ダイスケ君、私の言うことが全くなっちゃった
じゃない。程々にするようにっ。……なんてね、私でもああも上手

く言いくるめられたかは分からないわ。ありがとうね」

「いえいえ。かえってすみません」

笑顔に戻る。が、何か含みがありそうだ。

「今度おごってもらいましょうか」

「生徒にたかるんですか？」

「教師の仕事を取った罰ね」

「……理不尽ですね……」

最後はいろんなわだかまりがなくなった笑い声が宝物殿に響いた。そしてこのときのやり取りは他の科や2年生の科でも再現されたようだ。主にダイスケとワード、リリアとのやり取りが。生徒たちはこれ以上の武器を使いこなせるように、見極められるように。もしくはここに並ばず、実際に使われるようなものを作るように。

この日から、生徒たちのやる気が見違えてよくなったのは言うまでもない。

つづく

06 和解 前

06 和解 前

学校に入学させられて1ヶ月。

学生生活も慣れ、ダイスケの特殊魔法、見る魔法は正式に解析魔法と命名された。

魔法はその難度により、レベルが指定されている。

一般的にそう定義しているだけだから、基本魔法は全く使えないのに奥義に近い魔法は息を吐くように使える人も当然存在する。

あくまで一般的に定義されているだけだ。

そして解析魔法、これには他にはない特殊なレベルがつけられている。基本、中、高、その中で魔法が同じなのだ。使用者の及ばす影響で結果的にレベルが決められる。

基本レベルとして物質の構成が分かること、中レベルとして広範囲を見えることと、魔法がかけられている場合はその効果が分かること。高レベルとしてその上にこめられたモノを感じとることができること。言い方は悪いが、アイテムへの呪いなどがきちんと見分けられるのがこれに当たる。

そして最高レベルとして、道具なしでの加工ができること。最高レベルはまだダイスケがなしていないが、高レベルに達したものは何人も出てきている。しかしよくよく見れば、基本レベルのこととはすでに魔法を使わずとも熟練の職人ならば皆できることなのであった。最高レベルについての情報が広まっていなかったことも含め、ガイゲルド国学校鍛冶科1Aクラス以外でのダイスケという『墮天者』の兵器としての評価は全く高くなかった。

鍛冶志望で珍しい一般人の『墮天者』。そんな評価だった。

「おはよう、みんな」

「おはよー!」

教室に入れば皆返事を返してくれる。歳の差を悩んだ1ヶ月前が嘘のようだ。

「おはよ、ダイスケっ!」

「おはよう」

リリアだ。いつも元気な笑顔がまぶしい。

週に1日、言いつけどおりラクス武具店に帰る。そのおかげでリリアとなんでもない会話ができるようになり、ワードへの確執も無くなった今ではいい友人だ。

リリアはそれとなく隣にいたり、ちょっとした買出しにや外への食事などについてきたりと悪い気がしなかったのだが、こんなオジサンを、と自分を納得させ、兄弟の思慕と思い込むことにする。

勝手に期待して勝手に自滅してもすぐに復活できる歳でもなくなってきたし。

そして、ライラスさんの鍛冶はとても勉強になる。ラクスお爺さんの技にも、もう並ぼうとしている。

というのは休みのとある1日に城へ行き、王の双剣をまた見せてもらったおり、やっと双剣にこめられたモノに気がついたのだ。

ある意味『呪い』、『祝福』とも言うが。

剣など武具を打ち作るときに感情をこめるのだ。王の双剣は『使用者を守る』といった武器には考えられない感情がこめられていた。ラクスお爺さんがいかにエグイド王を守りたかったか。防具を作れるならそれに越したことはないが、剣しか打てないラクスお爺さんは剣にそれをこめた。事実王は剣により命を守られている。通常ならば弾かれて隙ができるところを、折れることで衝撃を緩和、敵に

隙を与えなかったようだ。

それを伝え、解析魔法高レベルにより分かる感情をこめる鍛冶、それがラクスお爺さんの極意ではないかと伝えると、表情はうれしそうに、口調では悔しそうに、「オヤジを越えるのはいつになるか……」などと言っていた。

ちなみに武具を打つハンマーは一般的には鉄だが、『祝福』をかけた場合には多少異なる。心を通わせられる金属でのハンマーが最適なのだ。

一番はオリハルコン。竜種の中でも知識と威厳のある種にしかつけないという金属だ。

上位竜種の体内で生成されるその金属は、竜の力と知恵と感情を受けて生成されるという。竜に認められた者がその功績をたたえ、竜自ら与えられるそうだ。ただしその金属の性格上、武器自体にはあまり向かない。武器が意思を持ちえたところで、武器はそれを振り回す人によるからだ。

ラクスお爺さんのハンマーは今ほリリアに継がれているようで、ライラスさんはリリアにやるんじゃないかと笑いながら言っていた。でも普通のハンマーであそこまで感情をこめられるなら、オリハルコンを使ったらどうなるのだろう。

ライラスさんにそう提案したとき、ライラスさんは長く考え込み、やはりリリアの道具になったものは使えないとつぶやいた。これは機会があれば自分を保護してもらったお礼としても何とかしてみたいと思った。

リリアの笑顔を感じながら取りとめのないことを考えていると、後ろから肩を叩かれた。

「ダイスケ、今度の休みは市場へ行こうぜ！」

ワードだ。しかし……

「金がない」

そうなのだ、1月ほどではまだこの地で小遣いを稼ぐことすらで

きていなかった。

30 過ぎると物覚えが悪すぎる。鍛冶の一般知識、特に幅広い鋳物や加工法を覚えるだけで1ヶ月かかってしまったのだ。

ワードも寮の方に酒を差し入れてくれたりしたときに、基礎を覚えるのにいっぱいだった。ダイスケを見ていたのだらう、特に気にもしないで話を続けた。

「多少なら出してやるよ。ダイスケもこの町をちゃんと知らないといけないだらう?」

「確かに……」

そう言われれば確かにそうだ。今現在のダイスケのガイゲルド国の地理は、城とラクス武具店と学校と寮だけだったのだから。

リリアは次の休日にはラクス武具店には行かないと聞き、なんともいいがたい顔になっている。

ワードはリリアを見ると、

「そこで変な顔をしているリリア、お前も一緒に来い」

「いいの?」

とたんにまたリリアが笑顔になる。ワードはその表情の変化には何も言わず。

もしかしたら女心を理解していないだけかもしれないが。

「かまわねえ」

「じゃあ父ちゃんに言うておくね!」

「ああ、広場に9時集合だ」

話は決まった。なかなか楽しい休日になりそうだ。

と、いきなり隣から声がかかる。

「私は?」

いつの間に? ちょっとびっくりして肩が上がったのは仕方ないことだと思っ。

ワードがあたふたとして、

「シート工先生? いつからそこに?」

「もう授業時間ですからね。ワード君には鉱石資料の複写の宿題を

与えましょう！」

ワードだけと聞いて正直ホツとする。ワード、君の犠牲は忘れな
い。リリアも同じ考えなのだろう、視線を合わせてうなづく。

「ひでえ！なあ先生、先生も誘うから少し融通してくれよ」

さすがは場の空気が読めなさ過ぎるワードだという所か。

が、予想以上の効果があったようだ。

「……………だめです」

「ちょっと間があったな」

「あったね」

「何を考えたんだろうね」

突っ込むワードに、知らんぷりをして席に着こうとしていたダイ
スケとリリアも便乗してしまう。

で、噴火。

「……………だまらっしゃい！全員に宿題出しますよ！」

「……すみませんっ！」「……」

そして週末。学校もライラスさんの鍛冶講義も、ケイトさんとリ
リアによるこの世界の常識講座も無い初めての休日になる。

ちよつとわくわくする。

とりあえず町の中心部、大きな通りにある湧き水の池に集合する
ことにしていた。

ダイスケが一番乗りのようだ。池を一回りして誰も来ていないこ
とを確認し、空いているベンチに座る。

町の大抵の所から同距離に存在するこの場所は、ダイスケ達以外
にも多くの人が待ち合わせをしているようだ。

戦中であっても生きていくために頑張り、たまの休みを謳歌しよ

うと集まる人々は、とても充実して見えて、こっちまでつきつきと感_じてくる。

ふと見ると見知った顔が見えた。向こうもディスクと分かると小走りでこちらに来る。

「わりい、遅れたか？」

「いやそうでもないよ、リリアがまだだし」

「一緒に来なかったのか？」

「寮から来たからね。家から通ってるリリアのことはわかんないよ」

「それもそうか、じゃ、ちよつと待つか」

「そうだね」

2人してベンチに座り、たわいもないことを話す。

が、男同士の話題がそんなに続くわけでもなく。

だんだんと痺れを切らしたように「来てるかもしれないから、ちよつと池を回ってくる」とワードの落ち着きがなくなってきた。

しまいには。

「長げえ！まだかつ？！」

待ち合わせのほかの人たちが、ちらりとこちらを見るが、それが王族のワードだと知ると、君子危うきに近寄らずとばかりにあらぬ方向を向いてくれた。

「まだみたいだね」

「よくそんなに落ち着いていられるなっ？約束の時間15分も遅れてんだぞ？！」

正直まわりから見られているようで恥ずかしいから落ち着いて欲しいんだが。

「まだ15分だよ」

「もう15分だ！」

「女性は時間がかかるものだよ、気にしちゃあだめだ」

「経験則か？」

「元の世界のことだから黙秘しておくよ。帰れないのだし」

「……そうか」

ちよつとしんみりしかけたが、20分過ぎたところでワードは痺れを切らし、これだから女はなどと片っ端から悪口を並べ立てた。女性人権保護団体が聞いたら卒倒しそうな勢いだ。

まくし立てている言葉に辟易していると、ワードが顔を向けている方向とは逆の方向からリリアとなぜかシートエ先生が連れ立って近づいてきた。リリアが疲れ果てた表情をしていたのはどういこうとだろう。

「お疲れ、リリア」

つい見た感じからリリアに疲れるようなことがあったのだらうと感じ、そんな言葉を出してしまう。

……ちらり……

「……いつもあたしは元気だよ！」

ちらりちらりとシートエ先生の方を見ていたが、シートエ先生がワードの言葉を聞きとがめ、背後からすばらしい笑顔でワードの肩を叩き、嵐のような説教が始まると、小さな声で言ってきた。

「いきなり今朝早くに家に来てね。家庭訪問だとか言つて。んで、どうも母ちゃんの弟子だったらしいの。それからどうい話かついてくることになつちやつて……」

「大変だったね」

「うん……」

本当に疲れた顔をしていた。つい頭をなでしまったが、特に嫌がる様子もなく、ありがたかった。それにリリアの機嫌も多少よくなったようでうれしい。

「つれてくしかないのかな？」

「たぶん。フェアラ族は義理人情に厚いけど、さみしがりやだから聞いたことがあるから」

「フェアラ族？人に種族があるの？」

今まで学校で見てきた人も今見える範囲にいる人も、人間にしか見えなかった。

「あれ？言つてなかった？」

「聞いてない気がする。あ、でも最初にノームの村に行った時はノームだと聞いたね。ああやって別のところで集落を築いているのか」と

「そういえばホントの基本のことは言つてなかったかも。ごめんね」
リリアはかわいらしく舌を出しながら、しっぱいしっぱいとつぶやき。

「じゃあ、せんせー！ちよつといい？」

いまだにワードは嵐の真つ只中にいた。

「言つていいことと悪いことの区別をつけなさい！……なにかしら？」

大きなため息をついているワードを横目で見ながら。

「ディスクがフェアラ族の人見たことないって」

「いつも私と顔を合わせているじゃないですか」

「人にしか見えませんよ」

こんな根本的なことに何を言っているのかしら？とでも言いたげな表情のシートエ。

それでも何かを感じたのか、

「仕方ありませんねえ。そういえばこの1ヶ月は鉱石や金属のことを教えるので手一杯でしたね」

そういつつシートエは背中の小ぶりなマントをめくり上げる。
すると背中がしっかりと出た服の中ほど、肩甲骨の辺りに小さな翼が生えていた。パタパタと動いてかわいい。

「さわっても……？」

「！……ええ、いいわよ」

恐る恐る触ろうとすると、説教から復帰したワードとリリアが揃って大声を出す。

「ストップ！」

「ダイスケっ！」

びっくりして動きが止まる。

「え？どうしたの？」

大きなため息をつきながら、安堵だろうか、言う2人。

「フェアラ族の翼に触れることは婚姻を意味するんだ。知らなかったでは済まされないぞ」

「そうよ、いつも言ってるけど、何でもかんでも触ろうとしちゃあだめ」

まくし立てるようにだめだしを食らった。

ところで、解析の魔法の都合上、触って魔力の通りを良くした方が解析しやすい。

この1ヶ月でだいぶ手に傷が増えた。毒消しや回復の薬に世話になっているのは学校ではダイスケが一番多いらしい。

近くにいる機会の多いリリアやワードは俺専用の携帯薬を持たされてるようだ。当然ダイスケ自身も持っているけど気がつくと底をついているという体たらくだ。

しびれ効果のある植物の樹液を触って1人ぶっ倒れたのはいまだに笑い話になっている。

小さな子供でも知っていて触ったりしないからだ。

1ヶ月たったからもう1ヶ月半はまだまだ笑われてしまうだろう。

人のうわさも75日。

「あ、そうだったの？それはすみません。先生の彼氏に申し訳ないことする所でしたね」

悪気はなかったのだが、地雷だったらしい。

ワードとリリアがいつの間にか数歩引いている。

シートエの笑顔の中に見え隠れするある種の感情。

「どういう意味かしら？それは特定の相手のいない私に対するイジメかしら？」

何を怒っているかがダイスケには良く分かっていなかった。

「……？いえ？シートエ先生は俺の美的感覚からいっても美人ですから引く手あまたかと思ひまして」

元の世界を見てもあまりいないであろう美形はこの世界では案外普通だからだろうか。

「まあっ！」

シートエの本心からの笑顔は彼女の魅力を何段階も引き上げていた。

そしてそういう心に疎いワードと言えば。

「フェアラ族はなあ。男性は軽い所があるけど、女性は結構重いつていうから……」ぼそり

「ワード君……？」

ダッシュで逃げようとするワード。それをひらりと行く手を阻むように飛び越え、凄い笑顔をみせるシートエ先生。

第2次池のほとり、説教ストームが始まった……。

「ああ……」

「ワードって案外バカか？」

「どうかな？ 女心はかけらも分かってないみたいだけど」
今度はダイスケがため息をつく番だった。

ふと疑問がわいたので聞いてみる。シートエが特殊なのかフェアラ族が特殊なのか。

「……フェアラ族って好戦的？」

「エルフ、人、ノーム、オーガは比較的穏やかだと聞いてるよ。全員がでは無いけど。反対にダークエルフ、ドワーフ、フェアラは好戦的な人が多いみたいね」

「へえ。ノームの人は見たことあるから他の種族の人がいたら教えて」

「学校の先生で言えば魔法科長のオルフェール先生がエルフ。鍛冶科長のタダツカ先生がドワーフだよ」

「ふーん。あまり外見で変わることは無いのかな。多少背が低いとかは結局人だって個人差があるんだし」

「エルフ族は耳が少しとがっているみたいね。髪に隠れていたら当然分らないけど。ダークエルフは加えて少し色黒の人が多い感じかな。唯一この2種族が最近まではあまり仲が良くなかったみたい」
「そうなんだ」

「この町にも何人かはいるからそのつど教えてあげる」

「よろしく。……先生！ワード！もう行きましようよ」

もういいだろうとシートエに声をかける。

「……しかたないわね」

「……死ぬ……」

まあなんと言うか、ワードはすでに満身創痍だった。

食べ物や薬草類などは寮や学校にあるものと変わらない。武器は鍛冶科なのだから言わずもがな。結局それ以外の人や土地、雰囲気

を味わうためのお出かけとなった。

特に『墮天者』が他の人からどう見られているかをなれていかなくてはいけない。と言っても『墮天者』という名を冠するにいたった魔王、その本人以外は国や連合に対して協力的であったために危険視されていない。

結局平和に町をまわることができた。

ふと、とある男性が目につく。

「あのどう見ても2メートル以上ある男性と半分くらいしかない女性はどういう関係なんだろう？」

「あの人らはオーガ族だな。たしかあの2人は姉弟だったはずだ。オーガ族は力の強いものほど小柄に生まれてくるらしい。反対に魔法力が強いと大柄になる。あの大男は確か城の魔法部隊、姉の方は小隊長だと思った。今日は休日なのかもな」

「へえ……」

すると姉がこちらの視線に気づいたのかこちらを振り返る。隣のワードを見つけ、2人して足早にこちらに向かってくる。

男性の大きな存在感のある巨体の見せる、すばらしい礼の取り方はとても優雅に見え、かつこよかった。

女性も可憐さを見せ付けるすばらしい礼をする。

「やあ、ワード殿下。ご機嫌麗しゅう」

が、ワードは特に感銘を受けないようだ。慣れているのだろうか。「何を言っているんだ。いつもはそんな言葉遣いしないだろ？」

どうも慣れなどではなく、違和感が先に立っていたようだ。

「いいのかい？お友達の手前、きちんとしようかと思ったんだけど？」

「気にしないでくれ」

「そちらさんは最近来たって言う『墮天者』ね」

「ダイスケです。学校の鍛冶科に行ってます」

両手を合わせても片手に包まれてしまうほど大きな男性の手。それに、暖かい。

「じゃあその内自分たちの妹にも会うかもね。格闘科にいるよ。で、そちらはラクス武具店のお嬢さんかい？」

「はい」

「ケイトさんにはいつも世話になってるよ。よろしく言っというてほしい。オーガの城勤めの魔法使いがそういつていたと」

「分かりました」

「それからシートエさん。元気にしてたかい？」

「おかげさまで」

「あまり街中で大声で説教しないでくれよ。生徒もかわいそうだしね」

「それは悪さをする生徒に悪さをしないように言ってくださいな」

「それも一理ある」

大男とワードたちの世間話を聞き流しながらも、少女とっていいほどの女性の持つ大きな斧に惹かれ、じっと見つめてしまう。斧の大きさが女性の背丈があまりかわらないほどだ。持てるのだろうかなどと本人に失礼なことも考えてしまう。

「見てみたい？」

視線に気づいたのだろう、その女性が聞いてきたので頷いて答える。

軽そうにほいっと渡されたが、落とさず持ち上げるのが精一杯なほどの代物だった。悪くない鉄製。大きいため、刃部の焼入れがまいち均一ではなかった。使い方として、切るといふより叩き潰すという感じなんだろうか。

聞いてみるとハンマーでも何でもかまわならしい。膂力にあっ

た重さと剛性のある武器が必要なだけだと。特殊武器は作る人も少なく、高価なのでそれなりに大事にしているようだった。

それから最近の鍛冶業界の、至高の武器を作るといふ考えはどうかと言っていた。武器は道具であり、あまりに執着して怪我したり命を落としたのでは意味が無いし、強い武器が増えた所でそれだけの腕が無くては結局敵に取られて敵の戦力を上げるだけになる。

ダイスケの力ではほとんど持ち上げることすらできなかった斧を軽々と持ち上げ振り回し、宝ではなく使うための武器のことを教えてくれた。

たしかに、それは考えなくてはならないことだろう。単純に強ければいいというものではないということか。

実力以上のものは返って身を滅ぼすのだろうか。

武器屋も情勢や使用者のことも考えなくてはならなくなってきたいるのだろうか。

死と隣り合わせのこの国では一介の兵士や平民もそれなりの精神を持っているというか、そういう精神が磨かれるのだろうか。

何を言いたいか自分でもよくわからなかったがなんと言っかこの世界の人は皆それなりの場を生き抜いてきた人々なんだろう。

オーガ族の2人と別れ、ぶらつく。武器を見慣れているとは言え、やはり武器屋は気になる。ラクス武具店は人族だし、他種族の武器屋はどうなっているんだろう。

まずは鍛冶に一番の能力を持つというドワーフ族の武器屋に寄ってみた。

店主はじろりとこちらを見た。おじいさんドワーフだ。シートエ先生の顔を見ると孫を見るように顔をほころばせ、色々説明してくれた。

人族鍛冶の最終奥義とも言うべき感情をこめる術、ドワーフにそれは無いが、面白い技術と魔力のこめ方でかけた金属や折れたところを修復するというものがあつた。

スターストーンの形状とある特殊金属で回路のようなものを形成し、使用者の魔力の反応で自動修復するようだ。

もちろん他者では反応しない。これはこれで凄い。奪われても普通の剣としてしか使えないのだ。

そしてスターストーンの成形と特殊金属による回路はドワーフ族の門外不出の秘儀だそうだ。

俺ならできるかもとも思ったが、あえて争いの種をまくこともない。勉強になったとドワーフのおじいさんにお礼を言っておいた。ちなみにいままで何人も英雄と呼ばれた人の剣を打ってきたと自慢していた。確かに刃こぼれとか自動修復するなら、魔力を持ちつつ、肉体的にも優れた者なら一番使い勝手がいいだろう。

次はエルフ族の武器屋だ。ここでもシート工先生は歓迎されているようだ。エルフの秘儀は刻印魔法。道具や武器にある種の刻印を行い、魔力を通すことで刻印が発動する。魔力を周りから自然に吸収し自動的に発動するものもあるそうだ。

元から属性を持つファイアストーンやアイスストーンなどとは違いとても融通が利く。

こちらも最初に色づけした魔力以外には反応がだいぶ落ちるようで、個人の専門武装が主であるようだ。これもなかなか悪用されないようでいい感じだ。

では一番の弱点は人族の武器か。何か専門に特化させたシステムを組まないと下手に上等なものは悪用されてしまうかもしれない。感情をこめるまでになった武具はやはりその本人の魔力に大きく反応するから、奪われても少し上等な武器という位置づけにしかないだろうけど、それでも他者にとっても上等であることには変わ

りない。他人からしたらなまくらになるほどの特殊技術が必要かもしれない。

学校にいたるだけではわからないであろう、知識や技術を間近で見ることができ、今日はとても有意義だと感じることもできた。特に他種族の武器屋はシート工先生がいなくてはまともな対応すらしてもらえなかったかもしれない。

さて、この世界の酒が飲んでみたい。しかし金が無いからワードにおごってもらふ必要がある。しかし教師がいる。どうしたものかと思っていたが、ワードが俺に聞いてきた。

「ダイスケ、酒飲んでいくか？」

「お？いいの？」

「今日くらいはおごってやるよ」

「ワードは飲めるの？」

「16は過ぎたからな。というより幼年学校を過ぎれば特に問題はない」

「そうなんだ。幼年学校つてのは今俺たちが行っているところの下つていう学校？」

「そうだ。10歳くらいから入ることができる。そこで将来の特性なんかを見極められるな」

「へえ」

「オレの弟たちもまだそこにいる」

「そうなんだ。また会わせてよ」

「いいだろ。じゃあ行くか」

ワードと肩を並べ歩き出そうとした時。

「ちょっと待ちなさい」

しかめっ面のシート工が呼び止めた。

「なんすか、シート工先生？」

「今日は私おごりますから皆で行きましょう。リリアもさみしそうでしたし」

「あたしはそんな……」

酒が飲めることがうれしくてつい忘れる所だった。この中では一番の年長者なのに情けない。ワードを見てうなずく。

「……じゃあメシもデザートもそれなりで色街から離れたところだな。こつちだ」

ついていった先は酒場というよりは小綺麗なカフェテリアのような所だった。

ワードの性格からして、「ガハハ」などと笑いながら酒をかつくらっている、ガタイのいいおやじたちがいるようなところを想像してしまったのだが。口にも出してしまう。

「もっとむさくるしい連中のたまり場のようなところかと思った」

「そういう所もあるがな。ここは女性にも人気のある飲み屋だ」

「そうなんだ」

「酒は男だけのものではないからな」

それもそうか。色々娯楽は少ないだろうから、酒をたしなむ女性も多いのだろう。

「いらっしやいませ」

酒はすぐさまビールを頼んだ。

メニューを見ながらつまみをどうしようか悩んでいると、隣から声がかかった。

「シート工先生。それからワードか……」

なかなか美形の女性が1人座っていた。シート工を先生と呼ぶと言ふことは生徒なのだろう。

まあその美貌も表情が台無しにしていたのだが。

あえて言うならとても苦い薬を飲んだような表情だった。すぐにワードが突っかかる。

「なんだ？フィアナか……そんなしかめ面見せんな。酒がまずくなるだろうが」

瞬間湯沸かし器か？

「何だと?!」

この女性も似たようなものだったが。

が、今日ここにはさらに上の強者が存在していた。圧倒的な言葉の力にて。

「まあ待ちなさい」

「先生……」

「2人ともいきなりけんか腰で話さないで。即刻退場で出禁にするわよ」

つづく

07 和解 後

07 和解 後

「2人ともいきなりけんか腰で話さないで。即刻退場で出禁にするわよ」

シートエの言葉に2人とも表面上は納得したようだ。

「分かった……」

「はい」

シートエはその返事に1つうなづくと、

「ちょうど良かったわ。鍛冶科と格闘科ってあまり仲良くないのよね。いつも週末は私が仲裁に出ることが多くて。そのトップがあなたたち。喧嘩にならない程度に少し話をしましょう」

シートエ先生がこの付近でかわいがられているのは外見だけでなく、生徒たちをいさめていたりしているからか。いくら学生とはいえ、格闘科ならば回りに被害が起きるほどになることも想像に難くない。

「まずは……、あらフィアナさんは1人できたの？」

「いえ、今日はレインと一緒にです」

シートエの言葉に答えるフィアナと呼ばれた女性。

だがワードには何か感じるものがあつたようだ。

「あ？レインだと？あいつオレのこと友だとか言っときながら……」
「やっぱり沸点が低い。」

どうにかならないものかと考えているとその人が現れた。彼がレインと呼ばれた人なんだろう。

「いやあ、すまないねフィアナさん。って、あれ？ワードっ？……まずい……」

「……何がまずいんだ……レイン？」

ガタリ。ゆらりと怒気を現しながらイスから立ち上がるワード。

「だから待ちなさい！とりあえずワード君はそこに座りなさい」
無言で座るワード。

「レイン君、フィアナさん、少し話を聞いてもいいですか？」

なんとなくお互いの顔を見ていたレイン、フィアナと呼ばれた2人。レインと呼ばれた青年がため息混じりに話を始めた。

「僕たち魔法科でも、格闘科と鍛冶科の確執を黙っていられなくなつたんだ。特に君たち2人は上の学年にもその余波が行きそうなほど影響力が強いんだ。君たちの将来がある程度分かっていることも含め、どちらかに味方しようとかそういつたくだらんことを考える人も出てきているんだよ。今日はオルフェール魔法科長から相談を受けたんだよ」

ワードはともかく、このフィアナという女性もそれなりの実力、もしくは地位を持っていると推測される。シートエも納得したようだ。

「なるほど。ではまずは料理も来る頃ですし、自己紹介からにしましょうね」

各々自己紹介をする。

リリアのラクス武具店はライラスさんの剣はもちろん、ケイトさんのアクセサリもかなり有名らしく、レインもフィアナも毒よけの

指輪など、結構世話になっているとのことだった。

俺は解析魔法でも知れ渡っているようで、顔と名前くらいは2人とも知っていたようだ。

ちよつと2人のことを説明すると、レインは魔法科1年Aクラス。連合の隣国ミサネラ国の出らしい。ミサネラ国特有の神聖魔法を特に得意とし、魔法科でもかなりの実力者のようだ。ついでにメイスを使わせたら格闘科でもてこずるほどの技の持ち主らしい。

フィアナは格闘科1年Aクラス。エルフだ。それもハイエルフと呼ばれる純血種。しかし面白いもので、父はダークエルフ、母はエルフだ。両方のエルフ族に喧嘩を売るように駆け落ちした2人。生まれた子供は失われた純血のハイエルフだった。妹もハイエルフだということが分かると、エルフ族とダークエルフ族の確執は太陽にさらされた粉雪のように消えていったようだ。

あまりに両族からちやほやされすぎて反抗、そのせいで少々ガサツになってしまったことはエルフ系両族にはほほえましい笑い話だそう。

格闘科の中ではエルフの例に漏れず、弓や投げナイフ系の間接武器を使うらしい。まあハイエルフだけあって普通の剣などの接近戦もかなりのものらしいが。

「なるほど。そりゃ、王族と未来のマスターエルフ。エルフを束ねる長老議会、その頂点に立つものをマスターエルフと呼ぶのか。喧嘩もされたら周りが困るだろうね」

確かにそんな立場ならまわりがかき回されてしまうのも分かるというものだった。

するとワードが面白くなさそうな表情で、

「オレは王になんかならん」

「なに？ワードは王になるんじゃないのか？」

フィアナがとても驚いて聞き返している。

「なんねえよ。弟に任せるつもりだ。それよりフィアナはマスターになるんだろ？」

「わたしだってマスターエルフになんかならないよ。戦えないじゃないか。それより妹がやる気だしね」

ワードもはじめて聞いたような顔をしていた。

「そうなのか？『お前が将来王になれるのか？』と聞いてきた時にこいつとは合わないと思ったただけだ」

「ワードが先に『お前がマスターだって？』とか言ってきたらう？わたしだってマスターになんかなるつもりは無かったがカチンと来たことには変わらない」

ワードとフィアナ以外の者の肩ががっくりと落ちる。

「大体いつもワードが原因だよ……。尻拭いも大変なんだ」

「う……」

ぼそりと言うレインに反論できないワード。

「友とかいうならその喧嘩の大安売りをなんとかしてほしい。買うほうも買うほうだと思うけど」

「く……」

フィアナもレインに反論できないようだった。

まあとにかくこれで一応の決着だろう。提案する。

「どっちにしても勘違いが分かったんだから乾杯しようよ」

「しかたねえな」

「いいだろう」

「さあ、レイン、くんも」

ついワードたちの呼び方に感化されて呼び捨てにしようとしてしまう。

「レインでいいよ」

「わたしもフィアナでいい」

「それはありがとう。じゃあ乾杯は年長者という理由だけで、俺がさせていただきますよ」

「何に乾杯するのかしら」

「1年生の友好にでもいいんですがそれだとシート工先生が仲間はずれですね。……今日からの仲間に、乾杯！」

「……かんぱい！」「……」

ちなみに正直な話、ここのビールはなんとなくまいちだった。飲めないこともないのだが。事実、よほど好きでない人以外はあまり頼まないようだ。

フィアナが少しまじめな顔をして聞いてくる。

「ダイスケ、あの解析魔法だが……」

「フィアナ、解析魔法がどうかした？」

「うむ、刻印魔法の熟練者が高レベルを使えるようになった。と言っても刻印魔法についてただだが」

「へえ、どうなったの？」

「解析魔法により発動を待つまでも無く結果がわかるようになったようだな、少しでも暴発の危険がなくなったということ、より高度な刻印ができそうだということらしい。じいさんたちが礼を言うておいてくれと」

「そう、それはよかった」

「人族の鍛冶がエルフの鍛冶に駆逐されんようにがんばるんだな」「がんばるもん！」

リリアを挑発するようにいうフィアナ。少々口が悪かったの一言言おうかとも思ったが、ちょっと人見知りであり会話に入れなかったリリアがこの一言のおかげで普通に会話できるようになった

ので、言動はともかく人を思いやれるんだと、フィアナを少し上方修正した。

勘違いされる方が多いかもしれないが。シート工先生とレインはホッとしたような笑顔を浮かべつつ会話に参加した。

会話はやがて再来月に一般開放される古代のダンジョンへの話題にかわった。

少し前に見つかったダンジョンで、連合国の中間地点にある。魔国とは近くないので、特に鍛えるための兵士や学生に開放する予定らしい。

このダンジョン、結構特殊で、実力があまりなくても比較的安全に経験をつませることができそうだということだ。フィアナやレインはおるか、ワードやリリアも多少の実践を経験している。学生で唯一実戦経験の無いのがダイスケだ。現代日本にて培われた倫理がどこまで影響するか分からないが、自分自身を守る術くらいは養っておかなくてはいいだろう。

来月からは武器実践も参加させてもらう方向でシート工先生にも相談しておいた。

つづく

08 仲間 前

08 仲間 前

この地に来て2ヶ月経とうとしている。格闘科と鍛冶科の確執は今ではほぼ無くなり、格闘科、魔法科、鍛冶科全ての科の合同格闘訓練も和気藹々と、締める所は当然締めるが、いい感じになっていた。

「そこまでっ！」

肩で息をする、というより全身で息をするように倒れこむ。ワードが隣にいて同じとは言わないが肩で息をしていた。

「やるな……」

「……そう……か……な？」

模擬戦闘。1対1だから実際の戦闘に準じているわけではない。しかし個人のレベルを見るには都合がいい。これまで低級魔物と戦

う機会があつたが、それに罪悪感を感じることはあまりなく、逆に人相手だとまだまだしり込みするのが俺の今の現状だ。結局毎回『墮天者』としての膨大な魔力を使い、誰でも使える障壁で無駄に攻撃させて相手を疲れさせ、その隙に軽く一撃を与えるか、逃げ回るといふ戦術を取っていた。リリア程度の相手には体力差で相打ち程度まで持っていけていたのだが、ワードあたりやファイアナレベルになると障壁の隙間を狙ってくる。レインは足元の土を槍状にしてこられたので秒殺だった。こっちが。ワード相手にもだいぶなれたので障壁を何枚か展開して浮かしながら動かし、打撃を与える方向で今回は策を練ったのだ。上手くいきそうだったがこちらの魔力切れで終了した。初めて魔力切れを起こしたのだが、魔力切れの瞬間は何と言うかジェットコースターの落下の感じにも似た、何かがおなかから抜け出ていくような感覚だった。戦闘中には気をつけないときちん緊張が保てないだろう。

少し呼吸が整ってきた。これもこちらに來た弊害か、体力もそこそ上昇しているようだ。ま、空気の良い所でトレーニングすれば誰だって体力が上昇しそうだが。

「しかし障壁の多重化と移動にはびっくりだな」

「そうなの？」

「普通の人には自分を守るだけのものしかだせないな」

「でもでかい魔法出す人だっているじゃないか」

「魔力は等価交換だ。魔力量より、質で魔法の威力が決まるのさ。でかい魔法を出す人は魔力量よりも効率的に結果に反映させる魔力の質を持っているというわけだ。ディスクの魔力の質がもし高かったら魔国を一瞬で滅ぼすレベルの魔法が打てるだろうよ、ま、質は生まれつきのもので、ディスクは魔力量に対して質はいまいちだから障壁がせいぜいだろうけどな」

「ほつといて。でも一度くらい攻撃魔法って物を使ってみたかったなあ」

「もう1ヶ月やってるんだろ？」

「うん」

「じゃあ無理だ」

「断言か……仕方ない、自分や他人を守る方法があるだけよしとしよう」

そうなのだ、1ヶ月にわたり、超実力者であるレインや魔法科長オルフェールの個人指導の下、魔法の訓練もしたのだが、火ならライター、氷ならコップに入れる氷を出すくらいのことしかできなかった。より高等技術の回復系なんて発動もしない。結果、唯一の魔法障壁を伸ばすことだけを訓練してきたのだ。

「今度はわたくしと対戦してくださいませんかしら？」

「名前を聞いても？」

「ミリアル・リラブレムですわ。そちらの馬鹿ワードと腐れ縁ですの」

「馬鹿ワードって……」

「気にすんな、ダイスケ、ミリアは昔からこうだ。そしてキレると手がつけれないから気をつける。ちなみに貴族の娘だ」

「ミリアなんて愛称で呼ばないでくださるかしら。まったく……、ルークやマインの爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいですわ」

「ルーク？マイン？」

「オレの弟たちだ」

「ふうん、で、ミリアルさん、なんでわざわざ俺と？」

「おもしろそうだからですわ！それにこんな馬鹿でも対等に話ができる人はなかなかいないのですわ。そういう意味でもわたくし、あ

なたを買っているのですよ。他にはレイン様くらいしかおりませんしね」

「まだ魔力が完全に戻っていないのですけど……。しばらく待ってもらえませんか。それにあなたの戦い方も見てみたい。……レイン、手合わせしてみてよ」

彼女の視線からレインに気がありそうだと感じ、まずは実力を知りたいと思って軽く振ってみた。

「ぼ、僕が、ミ、ミリアル様とですかっ？」

「わ、わたくしがレイン様とっ?!」

「なんだ、相思相愛なの？」

「はっ？」

「えっ？」

これも地雷だったらしい、2人はうつむいてちらちらとお互いを見、目が合ったときに顔を真っ赤にしていた。

「やってられないね、リリア、ワード、行こうよ。あ、フィアナさんもお茶しにいくけど一緒に行くかい？」

「友人と一緒にでもいいか？」

「いいよ」

「では、リムナ！」

「は、はいです！」

喫茶室に行くとちょうど人数分のテーブルが空いていた。紅茶やお茶を頼みながら学生にありがちな世間話をする。ついでにさつきリムナと呼ばれた少女への自己紹介。それから彼女のことも少し聞いた。オーガ族の彼女は魔法がほぼ使えない代わりにオーガ族でも類まれな筋力を持つて生まれたらしい。この間会ったオーガ族の姉弟のさらに妹になるそうだ。ワードが格闘科の者で勝てない相手に入る。負けることもない、実力拮抗というヤツだ、極少数の。格闘科でフィアナとこのリムナ、魔法科でレインしかないが。

「しかし、ミリアルがねえ……。いきなり少女のようになるとは思わなかったよ」

「あ、あたしはなんとなくそうじゃないかと思ってましたです…」

「…」

「よくみているね、リムナ」

「で、リムナの意中のお相手はだれかな？」

「そ……それは……」

「ねえ、その会話にリリアはまだしも、俺がいていいの？」

「はっ！あ、……はずかしいです」

「あつはつは、飲み物取りにいつていないから言っけど、リムナの片思いはワードさ。あたしはやめろって言ってんだけどね」

「いわないでください」

「若いつてのはいいね」

「そういえばダイスケ、『墮天者』だったな、歳はいくつになるのだ？」

「36」

「はあ？」

「シート工先生よりも年上です」

「あんまり、そうは見えないけどね」

上からフィアナ、リムナ、リリアだ。「どうせ童顔ですよ」と少しすねてみるが、もっと若く見えますよと微妙なお褒めの言葉をいただいた。と、そこへワードが戻ってきた。このワードという人物、気を許した相手にはとことん楽になるようで、人数分のお茶を率先して取りに行っていた。

「あ、ワード、こっちに座って」

「どうしてだ？」

「いいから」

お褒めの言葉のお礼ではないが、リムナとワードが隣になるように席を移動する。ほのかに頬を赤くするリムナ。若い者同士、将来はまた別だが、ほんの少しの援護射撃だ。

「で、さっきもレインと話したんだが、来月から例のダンジョンが学生にも解禁になる。将来のことも考え、オレとレインは独占パーティを組むことにした」

「独占パーティ？」

「万屋を知っているか？」

「聞いたことだけは」

「平民、貴族、王など関係無しにいろんな人からの依頼を、メインは戦士や戦士のパーティに振り分ける所だ。少し前まではギルドな

んて言っていたがあらゆる依頼が舞い込むあそこは万屋として人々には定着しているな。迷い猫探しから浮気の調査、魔物の討伐までドラゴンや幻獣に会いに行くなんて依頼もあつたらしいな」

「で、パーティとどんな関係が？」

「ああ、高度な依頼になると個人では難しいものがあるだろ？それを数人のパーティでうけることもできるんだ。そして魔物との戦いも局地戦では少人数でも結束の強い団体の方が戦果が高いと言うか生き残りやすい。したがって将来一時的なパーティとは別に基本パーティを組むことができるという法があるのさ。特にパーティとして長く活動できる、若い世代はそれが推奨されている。ちなみにオヤジ、エガイド王とゲイン、ライラス殿は幼少からパーティを組んでいたらしいな」

「ほうほう。確かに損は無いだろうね。俺は戦力外かもしれないけど、前衛のワードとリムナ、遊撃や間接攻撃のフィアナとリリア、魔法担当のレインとミリアルさん。攻守遊撃ともに悪くないね」
「ダイスケは防御と拠点の守りの要だろうな。持っていける道具は多くとも、戦闘中に必要の無いものや折角の取得品を守ることができるのは大きいと思うぞ」

「そういう方向で使ってもらえるなら喜んで」

「と、来た来た、レイン、ミリア、ここだ」

「僕を置いていったね…？ワード？」

「上手くいかなかったのか？」

「な、なにを言っているのかな？」

「ふん、ミリア、レインはどうだった？」

「レイン様は暖かく大きかったですわ！」

「なっ？レイン、そこまで……？」

「う、誤解だ！」

「何が誤解ですのっ？！」

「い、いやミリア……」

「わあ、愛称です……」

「え、ええ？いえ？それは……」

「まあまあ、そこまでにして、落ち着いて！はいっ、深呼吸」

すーはーすーはー

「じゃ、場所を変えようか。どうも今日の授業も終わりっぽいし、寮の俺の部屋にでも来るかい？」

「そうしましょう」

「で、レイン、玉砕？」

寮への道に行くすがら、聞いてみる。ここでうまくいってないと

パーティを組むのに支障をきたす。

レインは苦笑いを浮かべながらうまくいったと言った。自分の考えていたシチュエーションとは180°。どころか数回転も違っていたようだ。

「良かったね」

「ダイスケのおかげと言うか、ダイスケのせいと言うか」

「上手くいったならおかげだということにしといてね」

「ふふふ」

「じゃ、少し散らかっているけど。ようこそ」

つづく

09 仲間 後

09 仲間 後

「ここが寮か。悪くないな」

「フィアナはどこから通っているの？」

「長老の1人にここに家を持っている者がいてな。なかなか断れん。どうだ、ダイスケ、ここは1人には大きkarou、あたしも一緒に住むというのは？」

「ダメー!!」

「なんだリリア？どうしてダメなんだ？」

「ダイスケはライラス父ちゃんが保護者になつてますから！」

「しかしダイスケが彼女と暮らすなら問題あるまい？」

「それならあたしで間に合ってます！」

頭が痛い。

「ちょっと待って！」

「なんだ？」

「なに？」

「なぜ俺の彼女の話に？」

「ダイスケほどの器量良しならばあたしやリリアならば立候補確実

だからな！」

「器量良しつて男に使う言葉だったけ？」

「関係ないもん！」

「たぶん君らの倍の歳だけど？」

「歳を気にして恋愛してられるか！」

「そうそう！」

「その若者、レインやミリアルさんのような甘い言葉を吐けないけど？」

「なっ？」

「わたくし達はいいのですわっ！」

「若いねえ……。というかなんで俺？」

「雰囲気？」

「魔力の感じ？」

「なんだ、そのあいまいなもの……」

「しかし気に入っているのは間違いない！」

「そうですよ！」

「しかしフィアナは急だとしか……」

「フィアナさんもいつもダイスケのこと見てましたです！」

「リムナ、なぜそれを知っている?!」

堂々巡りになりそうだ。

「まあ、落ち着いて。ここに堕ちて来る前には彼女はいなかったから心残りとかは無いけど、いいのかな？それにまだここに来て2ヶ月しか経ってないのに」

「会った時間は関係ない！」

「そうですよ！」

「しかし君らまだ若いからね、俺よりも……」

「シート工先生のような人がいいんですか?! 確かに最近仲がよさそうですね!」

「なにっ? ではシート工先生は敵だ!」

「ちよつとまてえい!」

「落ち着いた?」

「ああ……」

「うん……」

「なんでこんな話に……。まあいいや、俺まだこっちに来てあんまり時間経ってないからこの問題はもう少し先送りしてほしい。いまだに起きたら元の世界のベッドじゃないかな、とか考える時がある。まだ完全に心がこっちにあるわけじゃないんだ」

「「分かった……」」

「じゃあ、そこで一部始終をニヤニヤして見ていたワード君、説明をしてくれい。んで今日の酒はおごりだよ?」

「なんでだよ」

「助けなかったから当然だろう?」

「野暮はしないことにしている」

「ふうん、覚えておくよ。で、パーティのことだけど」

「ああ、万屋で最初にパーティを登録しておけば大きな依頼も、あとは魔国との戦いの小隊としてパーティで動くことが許可されるのはさっき説明した通りだ。で、ここにいる7人でパーティ登録をしなければいけないかという提案だ。さっきはミリアたちがいなかったからもう一回言うが、オレとレインはすでに納得済みだ。そしてダイスケたちともう少し突っ込んだ話をした結果、前衛にオレとリムナ、遊撃、間接攻撃にフィアナとリリア、魔法担当にレインとミリア、道具、拠点防衛にダイスケ。もともとオレとレインのパーティだと、前衛及び魔法担当が少ない他パーティと一時パーティを組みながらダンジョン探索とかになるからな。まだ学生だし、相手が熟練者だったりした場合、拾得物の配分なんかでもめそうだしな。こちらとしてもパーティになってほしいとお願いしたい所だ」

「戦の場合、小隊の最低規模は？」

「5人程度は必要だな」

「それから、ダンジョンは戦闘しながらと仮定して、横に何名くらい並べる広さなんだい？広間は別として」

「2〜3人といったところだな、隠し通路なんかは別として。得物の攻撃範囲にもよるが」

「パーティ登録してない人はどうなる？」

「有能ならひっきりなしにパーティ登録をせがまれるだろうな。ちなみに声を掛けてくるやつらはほぼ自分より実力の下の者だ。楽しそうってんだろ。実力のあるパーティはすでにきちんとパーティを組んでいるからな。まれに怪我や死で引退した穴を埋めるために募集することもあるらしいが、俺たちみたいなひよっこに声はかからないだろうよ。もし、声をかけられたら困要因の可能性大だ」

「よく知っているね」

「エガイド団はオレの血縁者たちだからな。地位のせいで冒険できないせいか、酒などに付き合つとそんな話ばかりだ。特に索敵担当まったくいなかったせいか、色々苦労したようだな。そういう点

ではもし今ここにいるメンバーで組めるならベストということと言える。実力が離れすぎているわけではないしな」

「エガイド団って……」

「陛下もお茶目な所がごきますしね」

「今の時点で反対の人はいる？自分はあまり乗り気でないとか」

「オレは言い出した方だからな」

「そういう点じゃ、僕もだね」

ワードとレイン。

「エルフの長老たちに、パーティを組むならできるだけ若いうちに、気の置けない者たちと固定パーティを組んでおけと言われている。だからこちらこそお願いしたい」

「わたくしも似たようなことを言われてますわ。貴族という付き合いを越えて、パーティを組みなさいと」

フィアナとミリアル。貴族でも、自分の意思で学校に入り、将来、戦士として戦う可能性がある限り、ちゃんと考えてパーティを組めと指導されている。ちなみに貴族の、特に女性が学校に来ることはあまりない。お花やお茶、あとは花嫁修業をするのが常だ。ミリアルは特に行動力のある女性といえる。

「よろしくおねがいします」

「おねがいします」

リリアとリムナ。なにかこの2人、両方とも妹ポジションだ。実力は2人とも十分であるのだが。

「みんなありがとよ。じゃ、『ワードと愉快的仲間たち』結成だ！」

「「「ふざけるな!」「」」

ボグツ!

レインに張り倒されていた。

「いてて……。レイン、本気で殴ったな……。?」

「死なない程度にはしてあるよ」

「俺は別にそれでもいいけど……」

「ダイスケっ?」

「いや、そういう名前ならワード以外は目立たなくていいかなと。王子だし。その内『ワード』とかって省略されてガキやおっさんにも呼び捨てされて、ワードの誰々とか呼ばれて。混乱するのはワードだけだから、俺はかまわないよ」

「やつぱ、だめだ!」

「なんだ?ワード、やめるのか?じゃ、どうするの?」

「『墮天者』の国にいい言葉は無いのか?」

「それを使って同じところから来た魔王に特に目をつけられるのも困るな、ある程度強くなるまでは」

「なるほど。じゃあどうすつか……」

パーティ名でうんうんと悩んでいたが、そこは学生だ、だんだん別の話になっていってしまう。鍛冶科では上の学年にならないと魔法の杖など特殊武器は習わない。まったく同じものを作るのであれば、品物と材料があれば出来るのが解析魔法高レベルの上、最高レベルのダイスケの能力だ。これでレインとミリアルルの武器は確保できそう。ミリアルルが伝手でちょっとだけ借りてくることになった。ついでに材料も。ワードとリリアは自作できるだろう。問題はリムナか。

「斧？ やつぱり」

「見合った重さが欲しいですから、斧か鎚が簡単です」

「バスタードソードは？」

「両手剣ですか？ あまり使ったことないです」

「何か考えてみとく。お姉さんの斧、ちょっと借りれない？」

「聞いてみます」

「騎士の魂とか言わないだろうから、大丈夫だと思うけどね？」

「なんです？ それ？」

「いや、武器は戦士の魂とか言う人いない？」

「ああ、たまにいるな、そういう人」

「欠けたり折れたりしない武器がない以上、命と武器を天秤にかけるなら命だと思っただけだね。持っているだけで回復するとかならまだしも、そういったのはアクセサリでまかなうべきだと思うし、いくら強い剣だって血糊や脂で切れなくなったりするからなあ」

「うむ、格闘科でも武器をなくしたときの対処法にはかなり力を入れているな」

「だからって訳ではないけど、俺は防具と特殊武器に力を入れることにしようと思っただよ。防具は一番の財産である人を守るため。あとはリムナの斧じゃないけど、剣や槍以外って軽視されてるような気がするんだよね。斧なんか、質が悪くても剣が20本くらい買える値が普通についてるし。間接武器なんかも。投げナイフなんて質が包丁よりも低いし。それから特殊石系の武器なんかも考えてるよ」

「魔法剣ってヤツか？」

「まあね、単に火が出るとかの方向じゃないけど」

「例えば？」

「魔力で刃を形成するとか、重さの制御を施してみるとか。投げナイフが戻ってくるとか。魔力の刃はドワーフ族と話をつける必要があると思ってるよ。投げナイフはエルフ族の刻印魔法が使えるそうかな。どこに戻ってくるかって設定をどうしたらいいかわからないけど」

「重さの制御って？」

「普通の石と区別のつきにくいけど、この間発見して、アースストーンって名前になった鉱石があるんだよ。魔力を流すと軽くなったり重くなったりするんだ。重い武器を軽くして、何かに当たった時に貯めた重さを放出とかも考えてるよ」

「軽くするだけでもいいと思うけど？」

「前にワードに聞いたように、魔力は等価交換でね。重さを取ったどこかでその分与えないといけないんだ。もしくはその分魔力を流して元に戻すか。延々と重さを制御してたら最後にはくだけてしまったよ」

「へえ。いろいろあるんだな。オレ、鉄で剣を打つしか考えて無かったよ」

「あたしも、短剣をメインで研究してたけど特殊石のことや魔力なんて考えてもいなかったなあ」

「絶対数の少ない戦闘用斧とか極めても稼げないってことがあるんだろうね。頑丈がとりえだし。投げナイフや矢は質より数だろうし。あ、あと、ミスリルってかけらを見たけど、あれ、刻印魔法と凄く相性がよさそうだったよ？ 投げナイフにミスリル使うわけにはいかないかもしれないけど」

「わたしたちの技術か。しかしミスリルなんてそうそう取れるものじゃないぞ？」

「そうなの？」

「俗に言う竜の鱗だ」

「ほんと！？ 凄いな、竜は。ミスリルにオリハルコンか」

「全部ミスリルかって訳でもないらしいが。それから生きているうちに瞳をくりぬくと賢者の石になるそうだ。あまりに数が無いから賢者の石がどういう性質を持っているかも分かっていないがな」

「へえ、見てみたいな」

「『墮天者』は運も強いからな、機会があるかもしれないぞ？」

「楽しみかな？」

「疑問形なのか？」

「危険もありそうだしね」

「そうか、そうだな」

「でもダイスケの魔法って他の人たちの架け橋みたいだね」
「なんで？」

「人族の魔法がドワーフやエルフの技術に貢献するって凄いことだよ？ダイスケが最初に学校に来た時にいい武器だって褒めた生徒があたしの他に2人いたでしょ？」

「うん」

「彼ら、ドワーフとエルフ族だもん」

「それが？」

「人族の技術ばかり進んでもね。でもダイスケの魔法があればドワーフ族やエルフ族ももっといいもの作れるって事でしょ？」

「そうだね」

「やっぱりダイスケはみんなの架け橋になっているんだよ」

「ふむ、じゃあもつと頑張ろうかな」

「それだっ！」

「どうしたんだ？ワード？」

「俺たち多種族混合パーティの名前だ！『架け橋』！いいじゃないか！」

「炎の剣とか槍王とか、かえってありきたりでなくていいかも」

「だろ？レイン」

「そのためにはわたしらは仲良くしてなくてはいけないな、『架け橋』ならば」

「馴れ合いはだめだと思いますよ？」

「当然だ、で、反対のものは？」

周りを見渡し、反対意見が無いことを確認したワードは、

「では『架け橋』結成だ！」

つづく

10 結成

10 結成

夕方になったが夜ではない。微妙な時間ではあったが、善は急げ、万屋にパーティ登録をしに行くことになった。

「いらつしやいませ」

「まいど！」

「あ、ワード殿下じゃないですか、今日は？」

「殿下はやめてほしい。オレはまだ学生だから」

「そう、じゃ、ワード君、今日はどうしたの？」

何回か来ているのか、すでに受付のおねえさんとは顔見知りのようだ。

「パーティ登録したい」

「レイン君かしら？」

「レインもだ」

「も？じゃあ後ろの人たちも？それにあなた、『墮天者』ね？」

「ええ。よろしく」

「他の人、個人登録は終わっているのかしら？」

「オレとレイン以外はどうか」

ファイナ、ミリアル、リリア、リムナはまだのようだった。当然俺も。

「じゃあ、まずは個人登録からね。リング作るわよ。名前と現在住所お願いね」

魔力がこめられた特殊技術と言うか、特殊金属により、名前と住所が書かれたリングを腕にはめるとぴったりとフィットする。解析はできるが、さらに一手間魔法がかかっているし、偽造の意味もない。ただの登録タグに近いものがある。銀行システムやランクを示すものなどはなかった。

「次はこっち、パーティ名と全員の名前ね」

もう1つリングができた。パーティ名『架け橋』と全員分の名前が入っている。

パーティ登録が終わり一息ついたので周りを見渡してみる。ただの日雇いのような仕事から魔物退治まで。いろんな仕事がある。

「これ、誰でも受けられるの？」

「他にも万屋は初めてな人がいるみたいだから基本から説明させてもらっわ。ワード君とレイン君は随時補足をお願いね」

「ああ」

「どの依頼も期日と金額が書いてあるわね。受けてから失効する、もしくは仕事を行う期間ね。金額は報酬。ここまではいい？」

「この畑を耕すつてのは半日と書いてあるから半日やればいい、熊

退治するのは受けてから1週間経ってもだめなら失敗ってことですか？」

「そうね。その失敗の場合、魔物退治なら最悪命を、生きて帰ってきてても表示金額をそのままそっくり罰として払ってもらうことになるわね。というより、依頼を受ける場合は表示金額をまず払ってもらうわ。成功なら倍にして返すというシステムね」

「なるほど。受けるもの、難度とかに制限は？」

「自分の力すら理解せずに高度な依頼を受けるような人は魔国の戦闘でも絶対役に立たないわ、いなくなった方がまわりの人のためになると思っわね。実際に無謀なことをする連中はそのまま賊になっているらしいわ」

（自身の力の程度もきちんと理解できているかも試していると言っ訳か）

「依頼を受けるに当たって金が必要ってことは実力がなくて稼げない人なんかは自動的に高い依頼は受けられないってことだな。学生もな」

ワードが補足してくれた。

「なるほど、理解しました」

「次はパーティね。人を増やしたい場合はその本人を含め、全員でいらっしやい。減らす場合もね。抜ける場合でも全員の同意が必要よ。もしくはきちんと証明された理由があるわ。盗みとか反逆とかそしてそのリングがあれば、そのほかの人から強くパーティに誘われたりはしないわ。逆にリングのある人を強く誘ってはだめよ？そんなところかしら。色々な問題はできる限りパーティ内で解決して頂戴。でも手に負えないと判断した場合は、こちらも労は惜しまな

いわ。逆により大きな問題になる前に相談をお願いしたいわね。その判断は難しいかもしれないけど、慣れるまでは些細なことでも私たちを頼ってくれるといいわ。万屋には一線を退いたとはいえ、あなたたちよりも経験の多い人がいるからね。それくらいかしら。質問あるかしら？」

「臨時でパーティを組む場合は？」

「パーティ全員の了承がいるわ。自分のパーティを第一にして欲しいの。いつか大きな戦争が起こってもパーティがそのまま小隊になるからね」

「わかりました」

「来月のダンジョン行きのためだと思うけど、怪我には十分注意してね」

「ありがとうございます」

やっと一息ついてこの間も行ったカフェテリアのような酒場に行く。そこに行くまでの道、及び酒場でも他の学生や傭兵、戦士あたりからパーティのお誘いがあったが、リングを見せるとおとなしく帰っていった。

「間一髪だったな。パーティ登録は無駄じゃなかった」

「うん、ワード、ありがとう、ついにご馳走様！」

「ちえ、覚えていたか、って、ダイスケ、最近武器修理で結構稼いだと聞いたぞ？」

「寮の力ぎつき地下研究室借りたらすっからかんだよ。『墮天者』だろうが衛兵の維持に金がかかるからって」

「陛下に頼めばよかったんじゃない？」

「借りを作って、作りたくないもの頼まれても嫌かなと思ってね」
「そんなことないと思うが」

「いい大人がすねかじりもどうかとも思ってたよ」

「ま、ダイスケがいいならいいさ」

「うん、ダンジョンでもし稼げたらラクス武具店の隣の土地を買って家を建てる」

「そんなに稼げるか？」

「だよー」

「まあ、できたらってことで。そういえば大金を持っている場合とか、どうしたら安全かな？」

「ああ、城か万屋でも保管を頼めばいい。もしくはドワーフの家具屋で金庫でも買っんだな。大概の商家なんかはそうしているようだ」
「なるほど」

パーティ登録も済んだことで、だんだん話はこういう風に索敵や戦闘を行うかなどという話に移っていった。そういう話は特に格闘科に授業があるほどだったので、フィアナとリムナの話聞くのがメインになった。

「もし森のような所なら索敵はわたしらエルフの独壇場なんだが。ダンジョン内ではわたしの索敵はあまり機能しないんだ。そういう場合は、リリアにメインを頼むことにする。進行方向にワードとリムナが並んで歩き奇襲を防ぐ形。すぐ後ろでリリアかわたしが索敵となる。その後ろにレインとミリアル。必要があれば明かりの魔法や防御、移動祝福だな。で、その後ろにダイスケ。まあ荷物持ちだ。殿は索敵役の空いた方、リリアかわたしになる。1つ言っておくこととして、前衛、後衛もできるだけ2人して同じ方を向かない

ということがある。ダンジョンでは特に1人が後ろを向いているならもう1人は必ず前を見ていること。安全が確認されていればいいが、そうでなかったらそれは徹底して欲しい」

荷物持ちといわれて周りからくすりと笑われたが、間違っていないのでなんとも思わない。それに運良くバランスがいいパーティを組めた。学生とはいえ、最高に近い。

ふと思ったことを聞いてみた。

「前衛はいいけど、索敵の人って戦闘はどうするの？特に武器」

「そうだな、ある程度広ければ剣でかく乱だろう。あとは弓か投げナイフだな」

「リリアは？」

「あたしは短剣が一応得意だけど間接武器がいるよね、やっぱり」
「少し弓の訓練してみるか？」

「うーん、そうね、フィアナさん、お願いしていい？」

「フィアナでいい。では近いうちに練習しよう」

「あとで弓も投げナイフも見せてよ。地下研究室の場所分かる？」

「ああ、知っている」

「ミリアルさんも杖と材料をそこへお願いしていい？」

「言っておきますわ」

「ありがとう。リムナもお願いね」

「はいです」

順調だ。ダンジョンがどの程度か分からないので慢心してはいけないが。

ちなみに投げナイフ、短剣系の作り方はリリアに1日の長があっ

た、投擲の姿勢などにより多少重心を変えたりするためだ。ついでに弓矢も一緒をお願いした。全員分の防具を担当することになり、単純に日も足りなそうだったからだ。

つづく

10 結成（後書き）

02 墮天

ご意見をいただいたので多少修正いたしました。
ありがとうございます。

11 古竜

11 古竜

3ヶ月経った。来週から夏休み、ダンジョンに向かうことになる。今はみんなの武器、防具を調整中だ。地下研究室で。ちなみに地下研究室の守衛というかで兵士が派遣されたのだが、前に会ったオーガ族の姉弟だった。『墮天者』ということでしり込みをした者もいてなかなか決まらなかったのと、その姉の外見と性格からしばらく小隊長の任が解かれて一兵士に戻ったこと、一度話をしたことがあったのが決定の理由らしい。「またすぐに戻れますよ」と言ったら「あまり人を率いるのは好きじゃないし、わたし頭使うのだめだし」と笑いながら言っていた。彼女が近くにいたこともあり、万屋へ材料の依頼がすでに常連になってしまった頃にはリムナの斧はほぼ出上来がっていた。実際は姉と同じものを作っただけだったけど。ただ身長や手足の多少の長さの違いで、重心を変えたりはした。ちなみに姉の斧の整備もお礼を兼ねてしておいた。弟の魔法杖もミリアルルの持ってきた杖との比較という上でもかなり役に立った。弟の方の杖は炎特化、ファイアストーンとスターストーンの複合連結。かなりの威力を誇る。ミリアルルの杖は万能型、スターストーンのみ形成。威力は落ちるが攻撃の幅が増える。結局魔法杖の機構はいかに速く効率よく魔力を事象に変換するかということらしい。温度を上げたり下げたり、風や土をを操ったり。戦闘において速さは命であるし、余計な魔力の消耗は長期戦には危険だから。ただ回復

系にはそういった触媒がまだ存在せず、多少時間がかかるのが一般知識になっている。

胸と腰を覆う軽鎧。それから籠手とブーツを兼ねた脛当か。頭はどうしようか。フルフェイスじゃ視界が狭くなりそうだしな、サークレットかなあ。

で、鉄だと重くなりそうだし、アルミないかなあ。軽い金属ってことでアルミがあるにはあるんだけど、ボーキサイトって原石しかこの世界には存在しないし、存在はほとんど海中だし、なかなか手に入らないんだよな。純アルミは意味無いからジュラルミン作りたいなあ。あ、アルミ以外の金属の種類と割合がわからないや。

そうだ、スターストーン加工してみようかな、薄い障壁の方向付けをして。数足りるかな。

授業のあと、独り言言いながら作業している。ラジオなどないこの世界、作業中独り言を言う職人は多い。

「いてっ！」

またやってしまった。留め金作っているときについ怪我をしてしまった。最高レベル解析魔法でちゃちゃっと作ってもいいんだけど、感情を多少なりとも部品にこめるために留め金といえど、技術で作ることには得はあっても損はない。それに死ぬまでこの魔法を使い続けられるかわからないから、腕も磨いておく必要もある。ダンジョン内で魔力切れで武器の修復しなくてはいけない時ももしかしたら

あるかもしれないのだから。

「薬水、薬水……って、無いよ。仕方ない、傷はこのまま布で覆って……、学校行くか」

前も言われたように、何でも触ってみたいので傷や毒が絶えない。いつもは常備してある薬水のストックが切れていた。すでに常連になっている学校の保健室の先生が「またか……」とげんなりする顔が浮かぶ。だが、待っていても傷はすぐには治らない。早く行かないと。

「またか……」

「すみません」

「ぜんぜんすまなそうじゃないな」

「申し訳ありません」

「少し自重しないと。ダイスケ君の薬水は有料にしたほうがいいという教師もいるからね？」

「わかりました。ってそれ言ってるの先生じゃないですよね？」

「あ、分かった？いつも経理に文句言われてるんだよ」

「考えておきます」

「考えるだけじゃなくて行動でお願いしたいんだが……」

「考慮します」

「……頼むよ……」

無駄だと思ったのか、保健の先生は早く行けといった表情で俺を追い出した。

傷も治り、落ち着いて寮への道を歩く。

ガサリッ

「！……子猫か……って、珍しいなこんな所に。っと、傷だらけじゃないか」

そうなのだ、魔物がいるこの世界で、家の中で飼われている犬猫、飼えるのは裕福な人々だけど、それ以外の犬猫に会うのは珍しい。市街地に行けば子供たちが内緒でえさをやっているのもいるが、こんな町の端の森付近で会うのは本当に珍しいといってよい。猫型の魔物というのもあるかもしれないが。鍛冶の勉強ばかりで魔物のことを調べていなかった。ちょっと失敗したかなとも感じたが、子猫だし、ほとんど動くこともできなさそうだったのでかわいそうに思えてきた。

「仕方ない、薬水は明日自腹で買いに行けばいいか。ちょっと動くなよ？」

こっちの声を理解しているのかいないのか。こちらに顔を向けたまま動かない子猫。動けないというのが正しいかもしれないが。

ちよろちよると傷の大きな所から薬水をかける。正直猫に効くかは分からなかったが、何もしないよりましだと思ったのだ。

「噛むなよ？」

多少傷にしめるのか、時折びくっと動く。薬水をかけた場所の毛を掻き分けてみると何とか治っているようだ。

使い方に無駄が多かったのかもしれないが、子猫の傷がふさがった時には薬水はすでに空だった。

一応恩を感じているのか、ぺろぺろと手をなめてきた。

「うーん、猫もかわいいなあ。死に目を見たくないから、70歳過ぎるまで飼わないと心に決めたことが揺らぎそうだ。って、俺の血もついてるかもしれないからそっちの手をなめるのはやめたほうがいいよ」

さて、と正直まだ構っていたかったがまだやらなくてはいけないこともある。ゆっくりと立ち上がり、寮にもどろつと、子猫に手を振ろつとした時だった。

子猫がかすかに発光していた！

「薬水がまずかったか？誰か呼ぶべきか」

決断しようとした瞬間、猫は少しふらつきながらも立ち上がり、こちらに向かって口を開いた。

「礼を言う、『堕天者』よ」
「はあ？」

「わが名は風の竜、リンスヴァーラなり」
「……なんで竜が子猫？」

「おどろかぬのだな」

「いや、かえって現実味がないといえますか」

「落ち着くまで説明しよう、我ら竜種の頂点、古竜は炎、水、風、土、光、闇の6種がある。当然生命ならば寿命があり、寿命が近づくと魂の残滓をその竜の体内に残し、あらゆる生命の中を廻ることになる。その魂が昇華すると新しい竜の体を形作ることになるのだ」

「じゃあその猫が死んでいたら……？」

「他の生き物などに魂が移るだけだ。植物の時もあるし、虫に移った瞬間、鳥に食われることもある。当然だ。それが我らの魂を昇華させるための道筋なのだから」

「普通ほかの動物にいる間はこうやって話せるの？」

「私の魂は生き物にある意味間借りしているようなものだからな、無理だ」

「また今回はどうして？」

「もう1000年ばかりかかると思った魂の昇華がお主の血と触れ合ったとたん、さらに一段上に上がってしまったのだ」

「むずかしそうだなあ、というよりここで聞く話でもなさそうだ。

ついでだから俺の部屋に来てもらっていい？ 寝床があるなら明日でもいいけど」

「ついていこう」

「じゃあ、まだ体も完全じゃないだろうから抱いてくよ」

「すまぬな。魂が完全昇華すれば安心なのだが」

「食べるものは」

「頼んでよいか？」

「わかった、寮の食堂でミルクと何か肉をもらってくるよ」

「恩に着る」

「いえいえ」

「すると、魂の力の大きさをゆえに今までは竜の体が必要だったと。そして『墮天者』としての俺の血に触れたせいでさらに高みに上がって、すでに竜の体が無くて竜以上だと？」

「そうなるな、魂の強さが神に迫ったということだろう。姿を気にしないでいいということは」

「なるほど。今後はどうするの？」

「古竜がいなくなるというのは世界にとってもいいことではない。最近見つかったという迷宮の最下層が我の住処だったのだが、そこに行って抜け殻に近い前の体に魂を少し分け与え、古竜としての世界への抑制力を保つ必要がある」

「ふむふむ」

「我らはこの世界を好いておる。力を保つためにも住処に行く必要があるだろう。ただ、古竜として、ありのままを受け入れるという考えも同時にある」

「魔物に対して敵対しないと」

「そうだ。しかしこのような小さな体を持てるならば竜の体と違い、生きたいように生きることができだろう」

「竜だとまずいの？」

「他の竜種と違い、古竜はその身に元素の力を秘めている。滅すればその力がこの世界から無くなる。光竜がいなくなれば光が無くなり、炎竜がいなくなればこの世界から火がなくなるのだ」

「それはまずいね」

「うむ。魂が高みに上ったことで、元素の力とわが意識ともいうべ

き力が分かれたのだ。我は風。風は自由に舞うものだ」

「好きに生きたいと」

「そうだ」

「そう。ならあまり俺や友人に敵対しない方向でお願いしますね」

「ふふふ、今までの生で一度も無かった『墮天者』との関わりだ。

面白そうだから少しついていこう」

「おもしろそうとは？生物の構造的にあまり変わらないと思うけど？」

「この世界の者にはない知識を持つておるだろう？」

「分かるの？」

「血とはその者の根幹だ。これからのことは分からんが、どう生きてきたかなどはそれなりに分かる」

「凄いな」

「だからこの世界で戦闘に特化したのではない『墮天者』がこの世界にどう関わるかが楽しみなのだ。それに今までの『墮天者』と違い、おぬしには何か惹かれるものを感じる」

「そうなんだ。リリアやフィアナが好意を向けてくれることと関係あるのかな？というか、そんなことまで分かるの？」

「古竜だからな」

「じゃあ、もし危なくなったら助けてくれる？」

「暖かい寝所とミルク、柔らかな肉で手を打とう」

「えらく安いね？」

「我は風、自由が一番のご馳走だ。それを最初にもらってしまったからな」

「そう、じゃあ、これからよろしくね」

「うむ」

「そついえば、皆にはなんて説明しよう？」

「もしばれたら幻獣とでも言っておけ」

「この世界にいるの？」

「おぬしの世界から見たら竜も十分幻獣であるっ？」

「たしかに」

「そうそう、名前は？リンズヴァーラとか言っちゃったら他の人に
もばれやすくない？」

「ふむ、ではリーンと」

「理由があるの？」

「一度食べ物をくれた少女がそう呼んだのだ」

「分かった、リーン。俺はダイスケ、と呼んで」

「ふむ、分かった、ダイスケ」

「ありがとう」

結局その日は仕事にならず、リーンといろいろな話をした。古竜
とは伊達ではないようで、風に特化しているが、それ以外のことも
人間が束になってすらかなわなないレベルで持っているようだ。知識、
魔法、戦闘能力。薬水用に使うと思っただけのお金も肉とミルクを山ほ
ど買う方向に変えることにした。そりゃリーンがいれば傷も一瞬だ
というからね。

「じゃあ、さあ！」

「うん」

11 古竜（後書き）

アクセス、評価、お気に入り。
自分でも本当に驚いています。

みなさま、ありがとうございます。

12 準備

12 準備

リーンが仲間になった。風、とか自由、とかとみに言っているけど、今まで竜である自分と力比べ以外で『墮天者』と関わってこれなかったからと俺が何をしても面白そうに覗いてくる。かわいいかわいいと女の子に囲まれてわずらわしそうに逃げてても、逃げる先は俺の頭の上。結局俺の視界から外れるほどどこかへ行くことは無かった。

ちなみにパーティのメンバーはおろか、クラスの人、教師にもリーンが古竜だと伝えていない。パーティは特に、リーンの力をあてにするようになって困るからだ。命が危ない時か俺が願った時のみ手を貸してくれるように頼んである。

そして最初、授業の邪魔になるからと外に出せと怒られたが、傷を治したら完全になついてしまったと伝え、俺の席の下に座布団のようなものを置いておけば、授業を邪魔することも無く寝ているようにじっとしている。実際色々聞いているのだろうが。粗相をするわけではないし、数日はおろか、数時間ですっかりなじんでしまった。

ついに明日から夏休みで1日の準備日があるとはいえ、ダンジョンに向かうことになる。リーンにとっては我が家だろうけど。

最終的に用意するものなど確認するためにパーティの皆で俺の研究室に集まった。

大き目のテーブルの真ん中にはミルクをすするリーン。ときおり誰かの会話に合わせてにゅん、などと言っている。リーンは今のところ、完全に猫として生きていくようだ。それを和みながら眺め、寝具や着替え等、些細な忘れ物も無いように話し合う。

「この世界には台車みたいなもの無い？」

「台車？」

「車輪がついて荷物を運ぶものかな」

「どうすんだ、それ？」

「荷物とか拾得物とか一緒に運べるように。ダンジョン近くで寝具とか預けられないだろうし、折角拾ったものを持てないからって泣く泣く捨てる羽目になってもいやだし」

「あるにはあるが。1人で引けるものではないぞ？」

「いや、それはずるできると思うから大丈夫」

「ずる？」

「いや、こつちの話。あるにはあるの？」

「一応ある。あとで食事がてら外に行けば見られるだろう」

「分かった。あるなら作っても問題ないよね？」

「ああ」

「この世界に無いものをいきなり作っても、もしそれを生業にして

る人がいたら申し訳ないからね」

「しかし技術や魔法が発達して職を失うものだっているではないか」

「一足飛びに新しいものが出るのが問題だと思っているよ。この世界の人々の発展で作られるものには問題ないよ」

「ダイスケならできてしまうのか？」

「理論すら知らないものもあるけどね。ちなみにまったくできる気がしないけど、あの光る夜空の星に行く方法もある」

「ほう。凄いんだな」

「あまり驚かないね」

「想像もできないからな」

「なるほど。そういう点じゃ俺も同じか」

「何かあったのか」

ふとリーンを見ていた視線をそらし、「魔法だよ」と答えておいた。

「そうだろうね。ダイスケの世界には魔法がないみたいだし。今までの『墮天者』も魔法にはびっくりしていたっていうからね」

うまくごまかせたようだ。

この世界の台車は人力車が馬車か。今まで何回か見たはずなのに、人を運ぶという観点でしか馬車を見ていなかったのですっかり意識から外れてしまっていた。最近寮と学校の往復しかしていなかったせいもあるが。

いつもなら町の酒場に夕食を兼ねて行くのだが、今日はラクス武具店からご招待というものを受けていた。壮行会も兼ねるらしい。ちよつと武具作りで最近足遠くなっているのでライラスさんにお小言もらいそうでちよつと怖い。

「ワード殿下、ミリアル様、ご無沙汰ですな」

「ライラス殿、お久しぶりです」

「わたくしもご無沙汰しておりますすみません」

「いえいえ、一介の職人にそのようなお言葉はいりません」

「今日はリアのパーティとして来たので、そう願います」

「わたくしもです」

「……はっはっは。悪いな、なかなか口が悪いのは直らんのでな」

「いえ、王やゲインとの友誼は聞いております。オレ、いや私にとつてもライラス殿は雲の上の存在。気にしております」

「わたくしの父にわたくしたち姉弟、特にわたくしが学校に入ることができるよう口ぞえをしていたいただいと聞いております。わたくしも頭が上がりません」

「気にしないで欲しい。ワシは言いたいことを言っているだけだしな」

「2人ともいつものとの差がひどいな」

「やかましい」

「そうですわ」

「で、ダイスケ、ひさしぶりだな」

「おひさしぶりです……」

「ここの隣に家を建てると聞いたが？」

「ええ、そのうちに」

「うむ、いい心がけだ。まあいい、入れ」

「はあ、ただいま」

「ダイスケも差がひどいぞ」

「分かってる。最近帰ってきてなかったからね。もっと怒られるか
と思った」

「あたしが結構報告してたからかも」

「そうなんだ、リリアありがと」

「いえいえ。お礼は城近くのあの店のケーキね」

「分かった……」

「きゃあ、かわいいわあ！」

「さすが？ アクセサリ職人のケイトさんだ。かわいいものに目が無い
ようで、リーンに頼ずりしている。リーンは何回か逃げ出そうと
したが無理っぽかったのかあきらめ顔でなすがままになっていた。」

「ともかくパーティ結成おめでとう。バランスも悪くないだろう。
あとは格闘科でのダンジョン攻略の教えを必ず守るんだな。あれは
エガイド団の経験がふんだんに入っている。それからリリアにす
でにメンバーを聞いていた。ワード王子、レイン殿、ミリアル殿、

ファイナ殿。ある意味この国の将来を左右するメンバーでもある。したがって少しワシの作るものからは離れてしまったが、短剣を人数分作っておいた。大事にはして欲しいが、もしの場合は躊躇なく使いつぶして欲しい」

そう言うつと、名前の頭文字の入った短剣を1人1本ずつに渡した。このメンバーはすでにそれなりの解析魔法が使える。ほんの少しであるが、こめられた感情をみんな読むことができたんだろう、『守る』と。みんなありがたく使わせていただくとお礼を言っていた。

すると、ケイトさんも木箱から何か取り出した。

「こっちは私から。ネックレスだけだね。男の子はちょっと恥ずかしいかもしれないけど、指輪の大きさまで小さくできなかったの、我慢してね。これはほんの少しずつ周りの自然から魔力を吸うわ。そして本人の魔力が半分になると吸収した魔力を放出するから魔力が回復するわ。休む時や自然回復の妨げにはならないはずよ。効果絶大って訳ではないけど、無いよりましだと思うわ」

「どうやって作ったんです？」

「ダイスケの発見したアースストーンを魔力半減時の条件付けにしてスターストーンにたまった魔力を放出する仕組みね」

「凄いな。そんな考えまったく無かった」

「『墮天者』には膨大な魔力があるからそういう考えにはならないのかもね。ただ、一般人にはあってもいいものであると思うわ」

「リリア、頂は高いね」

「うー……」

この国ではかなりの知名度を誇るエガイド団。そのメンバーの経験談、特に魔物の対処や罠の回避法。罠は魔物が作るよりも盗賊たちの方だから、今回に限りあまり役には立たないだろう。でもレインはそのまじめな性格によってか熱心にメモを取ったりしていた。

怒られるかとも思っただけで戦々恐々として久しぶりに帰った家は、なんとというか家庭という物を感じさせてくれた。ライラス武具店の人々には感謝の言葉も無い。わずかばかりの緊張もおかげできれいに消えた。

歴戦の戦士にはなんてことないダンジョン探索でも、学生にとっては初めての事である。安心してはいられない。奥の手のリーンがいるとはいえ。

明日、何の憂いもなく出発できるのはたぶん幸せなことなのだろう。

「みんな、がんばろうね……！」

うん

13 出発（前書き）

いつもありがとうございます。

多少描写を増やしてみました。文字数だけなら1500位です。

今後もし精進いたします。

13 出発

13 出発

町の外れに朝6時。それが集合の場所と時間であった。

「『架け橋』、出発である！」

「出発ですう！」

「ワード、リムナ、落ち着け。リリアもフィアナもつきつきしてるの丸分かりだぞ」

「む、そんなことは無いぞ！」

「そ、そうよ！ダイスケったら」

「レインとミリアを見なよ。ってミリア、なに、その荷物？」

武装や食器ははこちらで用意してあるので数日の着替えと最低の携帯食で道具は事足りるはずなのに、ミリアは結構な量の荷物を送ってきてもらった馬車から降ろした。

「お茶の用意ですわ！」

あっけに取られた。この娘はどこになにをしに行くと考えているのだろう。

「……レイン、説明してやって……」

ため息が出そうだ。

大丈夫か、このパーティ？

しびしび荷物を減らすミリア。いつの間にかワードのせいか、ミリアルはメンバー全員からミリアという愛称で呼ばれるようになっていた。それはさておき。

人力車と呼ぶにはちよつと、いやかなり大き目の、数人乗りの馬車のようなものを引っ張ってきたダイスケはみんなに荷物を載せるように促す。

「荷物はこれに乗せて」

「おい、これ馬車並みにでかいけど、何が引くんだ？」

「いいからいいから。乗せた？じゃあみんな乗って」

「ダイスケが引くのか？」

「いいからいいから、あ、ちよつと魔力吸われるかもしれないけどたぶん大丈夫だから」

「おいおい、大丈夫か？」

「じゃあ行くよ」

ミリアの馬車も帰ってもらい、まわりに人がいなくなったことを確認し、車に魔力を込める。

すいー

「どう？魔力吸われる？」

「い、いや、大丈夫だ。ってなんだよ！これ！」

「いやあ、底にスターストーンとアースストーン絡めた板を張ってあるんだよ。重力軽減と言うかほぼ一定にマイナス。良く見ると車輪は地面についていないことが分かんと思うよ」

「確かに……」

「で？」

「そして車の前方向に重力プラス。この車は常に前に向かって落ちているんだよ」

「前に落ちている……？」

「そうとしか説明できないし。いや、俺のいた世界では無理な理論だったけど、こんなに上手くいくとは、自分自身びっくりだよ。急に止まれないのが欠点だけだね」

「急に止まれないなら索敵が必要か？」

「そうだね。できれば頼みたいね」

「自然の中ならわたしらエルフ族の本領発揮だ。まかせてくれ」

「よろしく」

さらに何か言いたそうだったので聞いてみる。フィアナは少し顔を赤くしながら、

「……ついてはその、前が見えるようにダイスケの隣がいいのだが

……」

「いいけど？」

「あゝ！あたしもっ！」

「3人は無理かなあ」

「リリア、途中交代すればいいだろう、な？」

「分かった」

「フィアナとリリア、いつの間に仲良く？」

「恋するオトメには色々あるんだ」

「ねっ！」

「そうか……」

相変わらず俺の頭の上にいるリーンが、ため息を吐くかのように小さく鳴いた。

平穩に車は進む。ワードは遊びの札を、ミリアはお茶の道具を持ってきても大丈夫だったのではないかと言っていたが、それはそれ、なにをしに行くのかちゃんと考えてというレインの声に黙ってしまった。完全に安全とは言えないのだから仕方がないのだが。

3時間も走っただろうか。フィアナが何か気づいたように声を出す。

「前方に馬車発見」

「俺には見えないが、分かるのか？」

「もう5分もすれば見えてくるだろう。まだまだ人の目には見えな
いだろうな」

「どこの馬車だ？どれくらいで追いつく？」

「学校の紋章がついてる。この速度のままなら30分くらいかな」

「追いついた所で一緒にお茶にしようか」

「うむ」

すいー

だいぶはつきりと馬車の形が見えてきて、大声なら声が聞こえる位になった頃、何か学校の馬車の方は大騒ぎだった。

良く聞くと、「なんだ、あの馬車は？」「敵か？」「攻撃準備！」

など、あまりよろしくないことを話していた。
ちよつとまずいので、大声で自己紹介した。ちよつと恥ずかしかった。

すいー

「ダイスケ君！それは何ですか！」

見晴らしが良く、かつ木陰のできる大きな木がぼつんと立っている場所にて休憩を取る。

一通りお茶がいきわたったところでシート工先生が大声を上げた。

「それ、とは？」

「馬のいない馬車です！」

「ああ、発明品です。魔力を糧にしている機構だから結構簡単に作れますよ？俺でなかったら最低でもドワーフの技術が必須ですが」

「簡単じゃないじゃない！」

「そうとも言いますね」

「もう！先生だって慣れない馬車でお尻が痛いんですよ！そしてこのダイスケ君の仕打ち……。ああ、なぜこんな生徒になってしまったのでしょー！？」

「いや、まだ3ヶ月ですから」

「分かってます！あ、そういうえば他の皆さんは大丈夫？お尻？」

「ああ、ダイスケの車、まったく揺れないから」

「え……？」

説明中……。今朝と全く同じことを説明する。理解しているかどうかは分らないが。

ただ鍛冶科長の目が少し変わったことに気がついた。魔法科長と格闘科長は「よくわからない」といった顔をしていたが。その傍らでシート工先生がさらにまくし立てる。

「そんな技術いつ思いついたんですかつ？」

「最近ですが、形になったのは昨日でしょうか、だから昨日あまり寝てないんですよ」

「これ、普通の人にも動かせるんですか？」

「今日は長距離のテストも兼ねてますからね。たぶんとしか言いようがありません。でもここまで来るだけで俺の総魔力の1/4位使ってますよ？」

「そんなに……」

「戦闘区域に行くためにはまだ馬車の方がいいでしょうね。優秀な魔法使いを移動手段だけに使わないためには」

「そう……」

何とかシート工先生は納得したようだ。代わって鍛冶科長でドワーフのタダツカ先生が聞いてくる。この先生、教師の癖に無口であり話した記憶がない。

「……改良は？」

「ドワーフ族に丸投げの予定です」

「……それを与えるのか？」

「この遠出が終われば、格安で」

「……売るのか？」

「貧乏学生ですから」

「……話は通しておく」

「分かりました」

納得したのかまた黙ってしまった。他の人は「便利だな」程度しか感じていないだろうし、パーティの仲間も似たようなものだろう。唯一タダツカ先生がこの技術の凄さ、恐ろしさを感じたのかもしれない。

「まあ、魔力は多いけど、魔法は不得意という人にはいい仕事になるかもしれませんね」

タダツカ先生からにじみ出る、不穏というか悩んだような雰囲気。に飲まれそうになる前に、軽い口調で付け足した。転換はうまくいったようだ。

お茶の時間というには少し貧しい、ただの水分補給の休憩が終わったとき、シート工先生が言ってきた。

「ね、ね？先生もそっちに乗せて欲しかったり」

1人だけというわけにもいかないだろう、他の先生にも聞いてみる。

「他の先生はどうします？」

「正直、興味は隠せないな」

「……」

「ワシも！」

答えは順に魔法科長オルフェール先生、鍛冶科長タダツカ先生、頷いただけだが。そして格闘課長ドルディ先生。御者の人は苦笑いを浮かべていた。

「荷物を移動していただければ」

言ったとたん、嬉々として車の中の、特に大きな寝具をはじめとした道具をもともと自分たちの乗っていた馬車に移動させる先生方。先生たちもお尻の痛みに辟易としていたのかもしれない。

出発後、ほどなくして、

「わあ、凄いわ！」

「快適すぎて言葉もないな」

「……むう……」

「こんな乗り物、ワシも長いこと生きているが、生まれて初めてだわい！」

先ほどと同じ順で感嘆の言葉を出す先生たち。タダッカ先生ですら声が出ている。

「あと30分ほどで湿地帯が見えてくる。もちろん道はあるが、多少曲がりくねっている。どうするのだ、ダイスケ？」

俺の隣はリリアに譲り、後ろから声を掛けてくるフィアナ。リリアは俺の隣がうれしかったようで喜々としていたが、周りの情報をフィアナから聞かされたことで少しだけ落ち込んだようだ。「索敵できてない……」などと考えているのだろうか。ぽんぽんとリリアの頭になでるように触れる。笑みが戻ったようで一安心だ。

フィアナの言葉への返事は、

「直進」

「できるのか……？」

「昨晚、池の上は走れたよ」

「本当かつ！」

「うん」

「タダツカ先生、これ、この車、池の上を走ったようですよ？」

「……船の定義が変わる……」

耳のいいエルフ族のオルフェール先生が耳聡く聞き、タダツカ先生に言う。タダツカ先生もこの技術のさらなる可能性に驚いているようだ。

「でも馬車を待たないといけないから。馬車に合わせて少し速度を落とすよ」

湿地帯でも実際沈むことなく進む車。戦闘要員の魔法使いをこちらにまわしたとしても十分効果が高いと、乗った者たちは思った。この車を止めるには壁をつくり、炎をまとわせるしかない。

揺れない車の中は、お茶を飲んでくつろいでも粗相をする心配されない。上品にスープを飲んでも平気だろう。行きがけに荷物を減らさなければ、ミリアあたりなら十分やりそうだ。スープはなかったが軽い昼食は気持ちよくとることができていた。向こうの馬車の馬の休息などには合わせていたのでわざわざ車で昼食をとる必要は

まったくなかったのだが。

昼を過ぎて、体感で2時くらいだろうか。

「ダイスケ、入り口が見えてきたぞ」

フィアナが隣で声を出す。しかしエルフ族の索敵はなにでというより、どこで視ているのだろう。リリアも後ろの近いところで必死に目を凝らしているようだが、分からないといった表情だ。

「俺には見えないよ」

「もうすぐだ」

「そう、ああリリア、見えなくても気にしなくていいよ、俺も見えないから」

「うん……」

また頭をなでてやる。フィアナも。

フィアナは「子供ではない」などと言っていたが、まんざらではないようだった。表情がそう言っている。背後からワードあたりが茶化す言葉をかけてくるかとも思ってた見たが、馬車内の他の人たちはほぼだらけきっており誰も気にしていなかった。唯一魔法科のオルフェール先生がなにかとても優しそうな目をしていた。

30分ほどたってダンジョンの入り口が視認できるようになるとやはり男の子なんだろう、ワードとレインの瞳が輝いていた。

「着いたぞ！」

「着きました〜」

ワードとリムナの遠足のような感じはまだ抜けない。遠足当日というより前日の感じだ。

我慢できないといった表情で鼻息も荒い。

フィアナですら同じような感じを受ける。

「早速潜るか？」

「だめだよフィアナ、ちゃんと準備しないと」
まだ武具の点検もしていない。

「お茶が飲みたいですわ」

「ミリア……」

この娘はわが道を行くという感じでうまくつかめない。慣れるしかないだろう。

しかし俺には結構切羽詰った事情があった。

「残念だけど今日は無理」

「どうしてだ？」

「俺魔力切れ。ケイトさんのアクセサリのおかげで完全枯渇ではないみたいけど」

「そうか、ではオレたちだけで偵察するか？」

「いや、今日は情報収集にしよう」

「情報収集？だれから？」

「先生から」

一瞬驚いたように、その後は喜んでるように見えた。

「あら、どうして私たちが情報を持っていると？」

「夏休みにあわせて各科長が出張、となれば生徒がかなりの確率、数で来るはず。そして学生とは言え、先生が止めないということはそれなりの情報があると考えました」

「まあ正解ですね」

表情は優秀な生徒を褒めていたものかもしれない。

「そういうわけで今日は情報も含め、準備しても遅くない」
「なるほど。じゃあ先生頼む」

「はい、これ」

「なにこれ？」

「このダンジョンの冊子。質問は受けるわ。正直来る人来る人にいちいち説明してられないから。それに直に助けに行けない可能性があるわ。自分たちで読んでみて、分からない所があったら言うてちょうだい」

「分かった」

車座になって冊子を開く。なんというかこういうときは必ず中心にリーンがいる。リーンを中心に車座になると言っただ方がいいか。大いなる力を無意識に人は感じるのだろうか。

リーンは何も感じていないかの様にミルクを舐めている。ミルクは保存の関係で今日の分しかない。分かっているかのようにちびりちびりとやっていた。いや、当然分かっているのだろうが、この外見ではなかなか納得するのは難しい。

そして冊子の情報は。

このダンジョン、入り口を入ると部屋が1部屋しかない。そして部屋の奥の何の変哲もない壁に触れると、そこから転移させられる。転移の条件は万屋に個人登録してあること、もしくはそれなりの強さを持っていること。すなわち一般人がここに入って壁に触れても何の反応もない。ダンジョンの発見が遅くなったのはそのせいだ。たまたま雨宿り用に一般人が発見した部屋に兵士が入った折に発動し、発見されたらしい。そしてパーティ登録していない場合、ばらばらに転移させられる。調査団の学者が最初に入れずに戻り万屋登録。パーティがばらばらになったのでまた戻ってパーティ登録したのは本人以外には笑い話だ。ちなみに個人登録してあっても実力がない場合、風の膜で覆われ、中を見ることしかできない。危険はないが得るものもない。ただの見学者になってしまう。まだ発見されていない、宝物庫らしきところをただ見せられただけだったらしく、

とても歯がゆかったらしい。まだ魔国との戦いも続いているのだから本当の実力者を呼ぶわけにはいかず、まだまだ浅い所をうろろしているだけのようだ。そして学生にも開放しようとした、最後の理由として、いくら奥に進もうが、すぐ背後には入り口への転移門がついてくること。安全面でこれは大きい。誰が何度潜っても例外なくそうだったらしい。

「なるほど、安全なのは大きいな」

安心したような表情のワード。レインはそうでもなかった。

「いきなり強い魔物に一撃でやられない限りね。もしくは罠とか」

「ワード、レインのように最悪のことをまず考えて行動しろってエガイド団の言葉にもあったよ？」

「う、気をつける」

ワードの気性も言動もなかなか難しいところがあるが、こうして素直な所はいい。気の知れた人にしか見せないが。

「うん。じゃあ情報も入ったし、武具や道具の点検しておこうか。こっちの車なら揺れないから心配なかったんだけど、馬車に移されたものもあったっぽいし。正直防具はきちんと点検したい」

武器はある意味頑丈でなくてはならないのだからあまり心配はしていない。弓だけはちょっと分からないが。ただ防具は今回普通と違うものを持ってきている。各々に渡し、解析でチェックしてもらう。当然俺自身も全て目を通すが。

「ヒビ……？」

「やっぱりか」

精密に作りすぎたのだろうか。教師陣の馬車のゆれ程度でヒビが

入ったようだ。袋の中に入っていてガチャガチャしていたのだから余計に。これは今後の課題になるだろう。

「……スターストーン……？」

横からタダツカ先生が口を挟んできた。生徒のというより俺の作ったものに興味を示したのだろう、先ほどから覗いていた。

「ええ」

「……この技術は……教えられるか？」

「命が一番大事ですからね。障壁が出る程度ですから悪用はできないでしょうし、広めるつもりです。他の人が作れるかはわかりませんが」

「……そうか。ドワーフに全面協力させる」

「ありがとうございます」

タダツカ先生、実は無口ではないのかもしれないと思うようになってきた。

いくつか最高レベル解析魔法で修復する。いつも思うが最高レベルの解析魔法は「解析」じゃない。「製造」と言っているほどだ。

修復後、一応着けてみてもらい効果も確認することに。

「着けた者の魔力を使用することで、鉄鎧の対衝撃効果と、少しの対魔法効果があるはず。多少魔力を吸われるかもしれないけど、安全の為だと我慢してね、ホントは足部には刻印魔法で移動力アップとかしたかったんだけど、公開されている基礎の刻印魔法が片足ずつまったく同じに書けなくてね。何度も盛大に転んだからあきらめたよ。あまり時間もなかったし」

「その時はわたしらエルフが力を貸そう。ドワーフ族にばかり良い思いをさせるのもしかたしな」

別にエルフとドワーフの仲が悪いわけではない。ただ単にエルフ純血のハイエルフとしてエルフ族全体としてのことも考えているのだろう。□ではマスターにはならないと言っていて、言動が少々あれなところはあるが、エルフ族全体のこととも考えられる優しい娘だ。

「その時はよろしくね、ファイアナ」

「まかせておけ。長老のじじいたちを遊ばせておくのも問題だ」

……やさしい、よね……？

「じゃあ、特に問題ない？食事の準備をしようか」

修復も終え、食事にしようと思をかける。初日は持ってきた食料を使うのかと思ったが、知識のある者にとってはそうではなかったようだ。さつと立ち上がり狩りの道具を用意している。こちらがあとけに取られるくらいだった。まだまだ俺は知らないことばかりだ。

「よし、リムナ、罾を仕掛けに行くぞ」

「はいです」

ワード、リムナは罾を取るための罾を。

「リリア、今日も投げナイフと弓の練習だな」

「今日は勝つもん！」

ファイアナとリリアは武器で狩るようだ。

「僕たちは木の実でも見に行こうか」

「そうですね」

レインはミリアを気遣い、ミリアでもできそうなことを提案している。

「……俺、ここで車の調整とかしてるから……」

山菜取りくらいはできるのだが、現代人では単なる足手まといになりかねない。申し訳ない気持ちで皆を送る。ワードは知ってか知らずか、声をかけてくれた。

「ダイスケは魔力をきちんと回復させる方向でな。リーン、頼むぞ、じゃあ行ってくる」

「にゃ」

ありがたい……。

「私達もついていきましようか。教師としても少しくらいは良いところ見せたいですし、車に乗せてもらったお礼もありますし」

「防具が傷ついたのもワシらのせいもあるからな。ワシの釣りの腕をお見せしよう」

「ですね」

「……ウム」

教師陣もそういったことはお手の物のようだ。本気で少し勉強した方が いい のだろうか。

色々触りたがりなところがあるからやめてくれと懇願されるのがオチか……。

それぞれの獲物を適切に調理し、鍋にする。多少は燻製にするよ。うだ。翌日も同じように取れるとは限らない以上当然なのだろうが、そんなことにすら俺は考えがいたらなかった。

それでもそれなりに肉とそこの野菜もどきが入った鍋は豪華に見えた。

「また豪華ですね」

「今日はまだ生徒はあなたたちしかいないからね。生徒が増えれば

わからないわ。格闘科ではこういうことも教えるけど、魔法科や鍛冶科ではあまり教えないからね。そういう意味では躊躇なく森に入っていくミリアルさんには驚いたわ」

「わたくしだって生きていく術を日々勉強しているのですわ」

「レインに感化されたのか？」

「お黙りなさい、馬鹿ワード！」

「おゝこわ」

火を囲み、たわいない話をしながらの食事だった。

食事も終わり、就寝の準備をする。今日はパーティと教師陣以外の目がないので、車を就寝場所として利用することにする。

「じゃあ、女性陣は馬車と車の中な」

「ごめんなさいね、レイン様」

「レインだけかよ？」

「先生方やディスク様もすみませんわ」

「それだけ？」

「他にありますの？」

「もういい」

「今でこそ平気ですが、毛虫や蛙でされたことは忘れておりませんのよ、馬鹿ワード？」

「……」

「なにしたの？」

「……もう寝るっ！」

「くつくつく、お休みワード。6時間後にな」

「ああ……」

幌付きの馬車と、折りたたみ機構で幌を出した車。女性陣をそこで寝かせ、男性陣は交代で番をする。そのうち疲れが出てくれば番を女性に任せることがあるかもしれないが、初日くらいは女性にいいところを見せたい。ミリアとうまくいつているレインは当然、ちよこまかとかわいらしくついてくるリムナをワードも気に入っているようだ。

たわいない話、レインや教師にとってだが、食べられる植物や、食べられない部分。そういったことを聞く。案の定レインには、「ダイスケはすぐ色々触るから正直すめたくない」と言われ、結局は毒草、毒物講義になってしまった。

会話も徐々になくなる。

ふと視線を感じ、その原因に目をやる。リーンだ。リーンはひとつ頷くと一瞬で番をしていて起きていた人たちも含めこの近くのもの眠らせた。

シューイイン！

「ここを中心に半径100メートル以内の生き物は即座に眠る結果を張った」

「そうなんだ。じゃあ行くんだね、ついていっても？」

「ああ、構わぬ」

「それなら行こうか。あまり時間をかけすぎて時間の誤差ができるのもまずいし」

「そうだな」

リーンを頭に乗せたまま、部屋に入り、壁に触る。少しの浮遊感のあと、大きな扉の前にいた。扉に近づくとひとりでに扉が開く。とても大きな広間の中心に広間よりも大きな存在感を持つモノがいた。

「竜……か……」

つづく

14 初日

14 初日

「竜……か……」

竜。

全長数十メートルはあろうかという体躯。風の古竜の鱗はその魔力により緑色に光り、美しい。

元の世界ではスクリーンか画面、模型でしかお目にかかったことのないものだ。

その圧倒的存在感。肺腑をえぐられるような。

この世界にとっては神のような存在でもある。

より高次元の存在を認識しそれに接することは潜在的恐怖とある種の高揚感をもたらした。

蟻が知能を持って人を認識すると同じような感じを受けるのだろうかとどこかで思った。

リンよりもさらに深く、重厚にしたような声が響く。それだけで受ける感じは、近くで雷鳴を聞くような畏怖をももたらした。

「この姿では初めてだな、ダイスケ。リンスヴァーラだ」

畏怖も感じるがそれ以上に感動が出てきた。もう少し俺が子供なら、「竜！竜だよ！」と飛び上がらんばかりに喜んでいただろう。危険でないならなおさら。

歳を取ろうがあまり中身は変わらない。喜びを表しつつリーンに聞いてみる。

「あれがリーンの本体なの？」

「失礼な。今はこの体が本体だ」

「しかし、大きさだけでも圧倒されるね……」

「生物の持つ、元素の力への潜在的畏怖もあるのだろっうな」

「なるほど。手に入れたり破壊してはならないモノへの畏怖なんだね」

「うむ」

恐怖の元はこれか。人は手に入れてはいけないものへは自然と恐怖を感じるのだろうか。

そんな俺とは関係無しに、リーンは早速ここへ来た理由である用事を済ませる。

「リンズヴァーラ、わが半身よ。力を与える」

「受けよう」

お互いの体が光を帯びる。先ほどはリーンに失礼な口をきいてしまったが、リンズヴァーラの放つ光以上にリーンが光輝いている。それはやさしく、まるで冬の終わった、春の暖かな風のようなだった。しばらく見とれていたが、次第に光は落ち着く。

「うむ、この地を頼む」

「分かっている。我は我、我は風。風は我、即ち自由。『新しい経験』とやら、楽しみにしているぞ」

「ああ、ここは私の住处。自分の地に戻ることになんの理由もないだろっうな、では他の竜は上手くごまかしてくれよ」

「任せておけ。誰も意識体を切り離れたとは思わぬだろっうよ」

この会話は……。

「……」

「どうした、ディスク？」

リーンが小首をかしげて聞いてくる。こう見るとまんま猫なんだけれど。

「尊大な話し方同士の会話って、聞いてるだけで疲れるね」

「そうか？我自身は以前より少しくだけたかと思っておるが？」

「そう言われればそうだけど、まだあまり変わらないね。長い時間はそうすぐには覆せないってことかな」

「だろうな」

リンズヴァーラは自身であった者の変化が面白いのだろうか、くつくつと笑っている。リンズヴァーラにしてみれば、リーンはとても変化しているのだろう。そう、自由な風のように。

近くにいればお互いの経験を取り込むと言うか、念話のようなもので一瞬で情報を交換できるらしい。あっさりしたものだ。

時間が止まっているわけではないのだから、何時間もしここにいるわけにはいかない。

リンズヴァーラとリーンの会話は一瞬だし、力を分ける時の会話すら俺に考慮してくれたものだろう。説明と言うか。

俺も今はなにを話したらいいのかも思いつかない。小さくなったとはいえ、恐怖感は消えていないし、なんというか感動で胸がいっぱいだ。時間を忘れたせいで外も心配になってきていたし。

「そろそろ行く？」

会話も途切れたので言ってみる。

「少し待て。リンズヴァーラ、あれを渡してやってくれ」

「うむ」

そう言つとリンズヴァーラはその長く鋭利な爪で自らの両瞳をくりぬいた……。

「わっ！わぁ！大丈夫？！」
「平気だ」

そういつて瞬きする間にもすでにくりぬいたあとの空洞にはまた美しい瞳があつた。

「あれ？」
「何を呆けておる。足元を見てみよ、『賢者の石』だ」
「これが……」

竜の瞳の大きさから見るとかなり小さな、小指の爪の大きさ程度の不思議な光を放つ石が2つ、転がっていた。
拾い上げて見る。

「きれいだ……」
「それは下手に研究などしようとはせず、いつも身につけておけ」
「……解析してみようかと思つたけどかすんで無理だ、これ」
「当然だ」
「でもどうやって身につけてようかな」
「両腕を出すがいい」
「こつ？」

ずるり……

石が手を離れ、両手の人差し指に入ってくる。感覚が正直気持ち悪かつたが、好意だらうからと我慢する。するとそのまま爪の部分

に収まり、両手の人差し指の爪が不思議な光を放つようになった。少しして分らないほどに収まったが。

「ふう、正直あまりいい感覚じゃなかった……」

「ふふ、すまぬな、竜とは巨体ゆえにあまり痛みというものに頓着しないのでな」

「もう収まったからいいよ。それより『賢者の石』の効果は？」

「全属性を持つ賢者の石はあらゆる魔法を魔力として吸収する、発動するかしないかは最初に決めておけるがな」

「それなら訓練でも要らぬ誤解を受けず安心だね」

「2つを共鳴させると……」

「させると？」

「それは自身で体験してみるのだな」

「お楽しみって訳だね」

「というより、竜と人、特に『墮天者』では発動する効果が違うだろうよ。我も楽しみだ」

今までの人にどういった効果があったのか知リたかったのだが、リーンもリンスヴァーラも楽しみだと言うばかりではぐらかされた。察するに危険はないのだろうか。

ふと何かを思い出したようにリンスヴァーラが言う。

「それからこれも遣わそう」

竜の手のひらに光が集まり徐々に金属質のものに変化する。結構な大きさの塊だ。

「これはもしかして……？」

「オリハルコンだ。リリアと申す娘の父親にも少し分けてやるがいい」

「おお、ありがとう！」

「ミスリルも渡してやりたいが、その重量は持って帰ることができぬであろう。ミスリルは明日からの探索次第でしょう」

「みんなに伝えるわけにはいかないけど、がんばってみるよ。じゃあまたね」

「ああ、健勝でな、リーンも」

「ありがとう」

「また来る」

なんとつかうれしくてたまらない。お土産もそうだが、賢者の石をもらったことで何か1つ高みに上がった感じがするのだ。小学生から中学生になった時のような。わくわくする。鼻歌の1つも出た。しまいそうだった。

その分、自分は自分であるときちんと自身を保たなくてはならな
いだろうが。

リーンが振り向いたのでついていこうとした。扉でもあるのかと思っ
たのだ。

しかしそこにあつたのはなぜか場違いに浮いている門。黒い空間
があり、向こうは見えない。

「本当に真後ろに門があるとは」

「そう言ったであろう」

「実際見るまで信じることなんてできないと思うけど……」

「では信じたか？」

「うん、これ以上なく。ちなみにこれ、外にも作れないの？」

「古竜クラスの魔力の量と質が要る」

「じゃ、無理か」

「であろうな。魔法がもつと思っても寄らない方向へ進化すれば可能
性もあるかもしれんがな」

「へえ……」

「それより、オリハルコンを例の場所に隠したほうがいい」

「そうだね。言われるまで気が回らなかったけど、何かを隠せる場所も必要だったよね」

隠した場所は車の下側に巧妙に隠された空間だった。リーンの住処に行くことが分かってたので作っておいたものだ。

ドワーフ族に渡す時にはつぶしておく予定。どんなことでも隠し玉は必要だ。

戻ってきた。どうも時間は30分程度だったらしい。イベントの巨大さのおかげで何時間にも感じていたのでやきもきしてしまったが。

オリハルコンを隠してから元いたところに座り、リーンと目配せする。

「にゃ」

シュイン！

「はっ！」

「！」

教師陣は瞬時に目を覚ました。当たり前だが。ただレインは睡魔と闘っていたのか原因が起きなかった。

「どうしました？」

「ついうとうとしてしまった。教師として恥ずかしい」

「今日一日驚きすぎだったからでは？」

「ふふ、否定できないな」

「ワードもレインも熟睡のようだし、仕方ありませんよ」

「冊子には書いていなかったが、入り口を中心に特殊な力場が存在するらしいのだよ。魔物はおるか、賊すら近寄りたくないと思わせているようだ。昔からこの場所はそういう休憩所の役割がある」

「そうなんですか。では熟睡しても問題ないんですね？」

「ああ」

「これから来る生徒も安心ですね」

「うむ」

「そういえば馬車の御者の人は？」

「見回りをしているはずだ」

がさりっ

草を掻き分けて現れる人影。つい体がこわばってしまっ

「うわさをすれば影、だな」

「どうなさったんです？」

「いや、ダイスケ君が馬車の御者の者はどうしたのかと聞いてきたのでな」

「ああ、私は万屋の者ですよ」

「そうなんですか？」

「ええ、パーティ登録はおるか、万屋登録してこない生徒もいそうだと言われましてね。臨時万屋出張所と言ったところです。そういえばダイスケ様、いつもごひいきありがとうございます」

「とんでもない、こちらこそお世話になってます。頑張ってください」

「ええ、ありがとうございます」

「ごひいきとはスターストーンや鉄のことだろう。1度ノームの村にも行ったのだが、結局質を何とかしてしまうこの解析魔法のせいで、どこで買っても問題なくなってしまうのだ」

ライラスさんも世話になっていることだと、ノームの村からより重点的に買ってはいたが。

くず鉄だろうが構わないダイスケの依頼はノームの駆け出し発掘者や子供にも喜ばれているようだ、といまだに自身が買い付けに行くライラスさんが言っていた。

眠気も出てきたが、紛らわせるために教師陣と話をする。

普段鍛冶科では習えない魔法の理論。それから杖の働き。特に杖は丸々コピーして作ったが、その部分がどう機能しているかは鍛冶科の1年では習わない。なぜ魔力をそこに通すのか分からず作った部分もあるからだ。

その機構がより魔力との親和性が高い物質で作ったらどうなるだろうか。物さえ揃えば試したい。剛性も高くして殴れる杖などだろう。

色々考えが浮かぶ。面白そうではあった。

眠気は醒めてしまった。

「さて、交代の時間かな、ワード、起きて」

「う、うーん。……もう時間か？」

「うん、よろしく」

「ああ、おやすみ」

「うん、おやすみ……」

それでもやはり疲れていたのか、眠りは早く、あっけなかった。

つづく

15 万全

15 万全

「……………！……………ふわわあああぁ」

気持ちのいい目覚めだ。

6時間寝たとはいえベッドでもない所で寝ていたのだ。それに前日は半徹夜にも関わらず。

知らないうちに賢者の石が周りに漂う魔力を吸収し、体力に変化させてくれたんだろうか。

ワードたちが元気ならば、彼らから魔力を奪ったわけではないだろうと考え、大きく伸びをしながら起きる。

案外元気そうな感じでワードが声をかけてくる。

他の人から魔力を奪ったとかはなさそうだ。

そんな思いを感じたのか、いつの間にか膝に乗っていたリーンが面白くなさそうな顔をしていた。「竜の瞳をなんだと思っている」
とでも言いたいのだろう。

ひとなでしてリーンに謝意を伝えておく。

「起きたか、ダイスケ。他のやつらはまだだ」

「番、ありがとうね」

「案外疲れなかったな。今まで何度も徹夜したりしたが、これほど楽だったことも珍しい。タダッカ先生もそんなことを言っていたぞ」
「場所のせいかな」

「俺も聞いたが、それだけでは説明しきれないのも事実だそうだ」
「そうなんだ、初日からついてるね」

リーンに詳しく聞くことにして、今は運が良かったことにしておこう。

後で聞いた話では本体が地表にすることで竜の祝福が増大しているのが最大の理由だそうだ。

危うく俺の力が凄いんだと、図に乗るところだった。

レインも起きた。3人で水を浴びに行くことにする。

風呂なんか当然ないし、夜に水浴びするなどと好んで危険を冒すものなどいない。

何もないだろうが、経験のためにも見張り役を交代しながら、順次水浴びをする。

湯を沸かせるわけでもないし、石鹸があるわけでもない。汗と埃を落とす程度だ。

少し水は冷たいが、引き締まる感じでそんなに悪くも無いと思った。

恋愛物語にありがちなイベントなど存在しない。

「ふう、さっぱり」

「水を浴びてきたのか？」

「あ、オルフェール先生、おはようございます。タダッカ先生も」

「ああ、おはよう」

「……うむ」

「おはよ」

車から順次女性陣が降りてくる。

これが元の世界ならかわいらしいパジャマを着て、眠そうな表情に少し心惹かれたかもしれない。

野営でそんなことありはしないが。

「お風呂に入りたいですわ……」

「開口一番それかよ」

「馬鹿ワードのような野生児には分からないでしょうけど！」

「はいはい、すみませんね」

いきなり朝っぱらから喧嘩は勘弁してほしい。2人をなだめ、他に気が行くよう提案にする。

「水浴びてきたら？少し冷たいけどさっぱりするよ？」

「そうだね、汗も流したいし、行こっか。ダイスケも一緒に行く？」
リリアの瞳にいたずらの色が浮かぶ。しかし残念ながら昨晚竜を見、魔と生きるとはどういうことか、魔物、魔法、魔力。そういったものを肌で感じてしまっただけから特に目に見えて守られていない屋外で安易に気を緩めることはできなかった。

10代の小僧でなかったのもあるが。

「俺はもう済んだよ。全員で行って見張り役を交代しながら、順番で浴びるようにするんだよ」

「反応がつまらん」

フィアナも言動で惑わされがちだがまだ子供という所なのだろうか。それともこのリリアの問いかけは馬車内で決めて、言ってみようかという所か。

どうもミリアもそれに乗ってたようだ。

「レイン、わたくしと行きましょうか」

「い？え？……」

レインが真っ赤になって撃沈する。なにを想像したのかとワード

から聞かれてさらにうつむいてしまった。

まあワードも似たようなことをリムナから言われて絶句していたが。

「こういう反応を期待したのに」

「子供じゃないからね。まあ気をつけて行っておいで」

「はい」

何度も言うが、恋愛物語にありがちなイベントなど存在しない。

「さっぱりですわ。お湯でないのが残念ですけど」

からかいに謝るでもなく。きやいきやいと水浴びしていた声が聞こえた感じではすでに忘れているのだろう。

「さ、朝食にしよう」

昨日の残りのものを暖める。2日目のカレーではないが、より味がしみ、やわらかくなっておいしい。

干しパンのようなものは固さに辟易するが、慣れれば素材の味が強く、美味である。胡椒や塩など単一系の調味料は存在するが、醤油やソースはない。元の世界のコンビ二物などに慣れてしまっていれば苦労したのだろうが、田舎育ちでは山野草のてんぷらも普通であるからそれほど苦労はしない。ただ醤油は欲しいと切実に思った。でもおいしいものを食べるとそれだけでも気力が出てくる。今日は頑張ろう。

女性陣が出た車から、ダンジョン荷物持ち用の小型の台車を出す。いつもは折りたたみ床の底に収納してある。

金具で箱型に固定、底にこれまた施してある重力制御も確認する。

「こちらも車と同じ原理？」

シート工先生が聞いてきたのでそうだと頷いておいた。前方への重力制御はないが。最初はこれを大きくして引いていく予定だった。たまたまつける板を間違え、重力制御の板を横につけてしまい、箱が盛大に転がったのが前方への重力制御のきっかけだ。失敗は成功の母とはよく言ったものだ。

武器を装備すると次第に旅行気分が無くなってくる。

最悪命のやり取りをする場に向かうのだ。みんなの表情も引き締まる。

準備が整った所でワードが声を張り上げた。

「じゃあ、『架け橋』出発！」
が。

「……架け橋って？」

「シート工先生、話の腰を折らないでくれ。『架け橋』は我がパーティの名前だ」

「理由を聞いても？」

「オルフェール先生まで……。オレたちのパーティって珍しく多民族だろ？その架け橋は確実にダイスケだ。そしてダイスケの魔法は確実に種族の架け橋になろうとしている。そのダイスケを擁するパーティにこれ以上ない名前だと思うんだ」

「すばらしいな」

本当に感心したと言う表情で言うオルフェール先生。

種族間に溝はないが、この世界の人々には種族の『違い』を感じ

ているのだ。

それを積極的につなげようとするこのパーティに好感を得たようだ。

そして同じ感想を得たのかシート工先生が言ってきた。

「ええ、ねえ、ワード君、私も入れてくれない？」

「「ええ」？」

あからさまに嫌そうな顔をするリリアにフィアナ。

「こら、フィアナさんにリリアさん、女の子がそんな言い方するものじゃありませんよ」

「でも……」

「リリアさんにフィアナさん、ダイスケ君が先生に取られそうだと考えているのね？」

「うん」

素直に言うリリアと頷くフィアナ。

「そんなに自分に自信がないのかしら？」

「くっ……」

「私、畏解除には相当の自信があるのにな」

「うっ……」

言われた言葉とシート工の技能に言葉がつまる。

「正直、畏解除の技能には惹かれるけどな、先生、とりあえず臨時パーティで様子を見るが、いいか？本当にパーティに入りたいならだけど」

「ええ、それでいいわ」

「俺からも1つ」

「ダイスケ君、何かしら？」

「俺の道具を当てにして楽しようとしないこと」

「ぐっ……いいわ、教師だもの、当然よね」

「当てにしてたな、あれ」

「ぜったい」

「フィアナさんにリリアさん、何かしら？」

「いいえ」

ちよつとだけやり込めることができたと思っっているのか、リリアとフィアナはまんざらではない表情をしていた。

「それから……」

「まだなにかあるのかしら、ダイスケ君？」

「パーティとは対等な仲間です。色々言いたいこともあるでしょうけど、最初は勉強のためにもあまり口を出しすぎないでいただきたいんですが」

「分かったわ。ダンジョン探索、それから戦闘。あなたたちの経験の助けはすれども邪魔はしないわ。それでも元々エガイド団にいたもの」

「そうなんですか？」

「ケイトさんの弟子としてね。下っ端で戦闘にはほとんど出てないけどね。もっぱら罨解除だけだったわ。私、あまり戦闘能力ないし」「オヤジやゲインさん、ライラスさんの全盛に比べたら誰でも戦闘能力があるとは言えねえよ」

「……それもそうね。ではとりあえず、指南役としてついていくわ。」

何かを思い出しているような、そしていい思い出を楽しんでいるかのようなシートエ先生の表情が見える。

戦闘をし、命のやり取りをしたことは必ずあるだろう。

それでもここまでいい思い出となっている、エガイド王のエガイド団とはいったいどんなパーティだったのだろう。

想像もつかない。

凄かったのだろうとは思うが、どう凄かったのだろう。いずれ聞いてみたい。

「じゃ、お願いします」

「こちらこそ」

臨時パーティといったが、色々めんどくさかったし、特に反対者もいなかったなので正規パーティとしてシートエ先生を迎えることにした。

怪我や死の確率が下がるなら反対する理由が無いのもあった。

口では強気だが、いざ、初めてのダンジョンに行こうとするなら経験者はとても心強い。

「よし、今度こそ！……いくぞ、『k』」

「『『『『『『架け橋、出発！』』』』』」

「……………」

ちょっとワードが落ち込んでいたとか……。

つづく

16 各々

16 各々

「行くぞ……」

ゴクリと喉を鳴らしたあと、恐る恐るではあったがワードが壁に触れる。どうも全員壁に触れる必要はなかったらしく、全員同じ場所に転移していた。

結構広い、2〜3人なら前衛で立ち回っても余裕のありそうな通路に立っていた。

俺はある意味2度目、慣れたものだ。すぐに後方の転移門を確認、リリアとフィアナに索敵するように声をかける。

「転移門確認！フィアナ、リリア、索敵！」

「は、はいっ」

「みんな、落ち着いて、かつ気を抜かないように。よし、ゆっくり進むよ！」

みんなのそれぞれ落ち着いたらしい返事を聞き、ようやく安心して進むことができる。

転移門のおかげで今回は後方への憂いはない。索敵も前方にフィアナ、リリアの2枚看板で進む。

「ダイスケ君の声かけは適切でしたね」

「リーダーは一応ワードですが、初めての経験に戸惑っているようでしたから」

「良く落ち着いていましたね？」

何かを探るような意図があるのか地か。

「年長者ですから。後ろは安全と聞いていましたし、魔物に最初に攻撃を受けるのは前衛。それだけでも理解していれば、上がりようもないですよ」

「そうですね」

納得したのかしてないのかよくわからないシート工先生の返事を聞き流す。

これからは無駄話をしている余裕は無い。気を引き締めないと。

「私もパーティに入れてもらったからには役に立たないといけませんね」

「何かするんですか？」

「基本を教えるだけですよ」

そう言うのと、色違いの壁や天井、床に気をつける、や、不自然な隙間、特に風の流れるところも隠し扉などがあつたりするから注意するようになどと指導していく。

もしかして、いや、もしかしなくても、前衛2人、魔法2人。前衛もこなせる索敵2人。罾解除1人。後方及び拠点防御1人。このまま成長すれば最強パーティの名をほしいままにするのではないかな？そんなことを考える。

と、何かを言いたげにリーンも一声鳴く。そうそう、リーンは最大の切り札ですよ。と、そんな声が聞こえたのか、リーンは台車の片隅に置いてある座布団の上で満足したようにあくびをしていた。

一本道と言っているいい通路を進む。時折スライム状の魔物がいる位で、『架け橋』の敵ではなかった。それを見ながらごろごろと台車の車輪を鳴らしながら進む。

「これ、あんまり音がしないように改良しないと」

「音に魔物が寄ってきたらこまるね」

「だね」

一応現在後方担当のリリアと話をしながら進む。と、前方、ワードが大声を出した。扉があるぞ、と。即座にシート工先生とフィアナから大きな声をあまりだすなと怒られていたが。

「畏の有無を確認後、扉を開けるわ。即座に前衛は飛び込み安全確認。後衛は今から攻撃魔法詠唱開始、いつでも発動できるようにして。できたら2人で違う系統の魔法を。準備はいいかしら？」

すでにリーダーの仕事はシート工先生に取られているが、ワードがリーダーとして活躍するためには経験を重ね、かつ生き残らなくてはいけない。

シート工先生もリーダーとしての指示ではなく、エガイド団で重ねてきた経験からの自然な行動なんだろう。ワードにとってもいい経験になるに違いない。

「ワード君、合図。大声でなくていいわ」

「分かった。3、2、1、突入！」

「もう、大声でなくてもいいと言ったでしょうに」

一応俺も後方から、いつでも障壁が展開できるように、部屋が視界に入り邪魔にならない所に移動する。

すると、突入の瞬間には何もなかったが、もぞもぞと床が動き出した！

「！」

「ゾンビ？」

いきなり試練だ。不死系の魔物には打撃が効きにくい。鎚あたりでつぶす位しか方法がないのだ。

首をはねようが、腕を落とそうが、やつらは意に介さず攻撃してくる。

一応核が存在しそれを碎けば土に戻るが、人サイズのゾンビの核は小指の先より小さい。

熟練者ならまだしも、学生には荷が重かった。そして、そういう魔物を倒すのに必要なのは魔術師。

このパーティにもいる。この程度の魔物に負ける理由がなかった。

……魔術師が普通の精神状態ならば。

「い、い、……」

「ミリア？早く炎の魔法を」

突入時、保険をかけて2人は違う魔法を準備していた。レインは氷系、ミリアは炎系。ゾンビや不死系魔物は炎系に弱いとされているのが常識だ。ここはミリアの独壇場になるはずだった。

「い、いやーーーー！！！！！！！！」

「みんな、障壁内に入れっ！」

とつさに障壁を展開し、ミリア以外の仲間を入れる。ミリアは自身の魔法に傷つくことはないから、彼女が落ち着くまで待つより無い。もしくは魔力がなくなるまでか。

障壁内で見える彼女の炎魔法はシート工先生にすら、高等魔法だと言わしめるほどの威力を誇っていた……。

炎が収まってきた。ミリアが冷静になったのか魔力が枯渴したのか。たぶん後者だろう。

「落ち着いたか？ワード、保護！レインは回復魔法詠唱開始！」

安全な立場からではある意味ゲーム感覚で、落ち着いて指示ができてしまう。本人たちには申し訳ないのだが。

飛び出しそうなレインにあえて回復魔法を詠唱させる。

何百回、何千回と使いなれた詠唱をさせ、落ち着かせるためだ。できたばかりの彼女が心配なのは分かるが、動転しては何もできない。

「あちっ！あつつっ！」

まだくすぶっている炎の中からミリアを連れて障壁の保護の中に入る。一応レインの回復魔法をかけさせる。ついでにレインの顔を見せて、レインに抱きしめるように言い、ミリアを落ち着かせる方向に持っていく。

「ダイスケ」

「どうした、ワード？」

「オレの荷物の中に小さなチョコレートが入っている。出してくれ」
「チョコレート？分かった」

なぜチョコレートかは分からなかったが言われたとおりに出し、ワードに渡す。

ワードはぶつきらばずにミリアの目の前にチョコレートを出した。受け取るミリア。

「ふえ、……もぐもぐ……ふえええん……もぐもぐ」

食べるか泣くかどっちかにした方がいいと思ったが口に出すのは野暮なのだろうか。

泣くのも収まったようだ。

「落ち着いたかな？」

「ダイスケ様、申し訳ありません……。レイン様もありがとうございます……」

「か、彼氏として、と、当然さ」

「ひゅーひゅー」

「ワード君、茶化さない！」

シート工先生の叱責に首をすくめるワード。

それよりも理由が気になったので聞いてみる。

「理由を聞いても？」

「ええ、わたくし、幼少の時、お化けとかものすごく怖くて……」

「幼少？」

「ええ、怖がるわたくしに面白がってワードが怖い話をやめてくれず……」

「お前かよ！」

つい突っ込んでしまった先では怒りの形相のレインと申し訳なさそうなワードとの一騎打ちの様相を呈していた。

それを何とか止め、ミリアに続きを聞く。

「泣いてしまうわたくしをいつもワードやワードの弟たちがお菓子で慰めてくれるのですわ。今では友人たちと怖い話をしてても平気なのですが、本物を見て幼少の記憶がよみがえってしまい……申し訳ありません」

また泣いてしまいそうな雰囲気 of ミリアをレインがやさしく抱きとめ、慰める。

気持ちとは分からなくても声をかけておく。

「そう、まあ、今は仲間がいるからね。頼るといいよ。特にレイン、頑張ってね」

「もちろん」

「おーおー、彼女が来ると違いますな」

ワードは先ほどシート工先生に叱責されたことに懲りていないようだ。

いくらなんでもそれはミリアがかわいそうだ。ここはひとつ言うておくべきか。

「おい、ワ「ワードさん！ひどいですっ！」

俺の言葉をさえぎってリムナが叫ぶ。

さすがオーガ族。小さくても無視できない迫力があつた。

斧を構えて臨戦体勢にあつたことも大きいが。

「い、いや、リムナ、これはだな、ちよつと聞いてくれ、だから、その斧をな……」

「女の敵かもですうっ！」

何とかリムナの攻撃範囲から逃れようとじりじりと後退するワード。

逃がすものと真剣な表情で詰め寄るリムナ。

しばらくはいい薬だと思つて見ていたが、さすがに本気で斧を振り下ろすタイミングを計りだすと、そうも言つてられない。

さすがに助け舟を出すべきか。

「リムナ、そこまで。ワードだつて申し訳なく思っているからチョコレートなんて用意したんだよ」

「そうですか？」

「ふん、後衛から背中を焼かれるのが嫌なだけだ」

火に油を注ぐワード。

このタイミングでは、その油はガソリンという事になってしまう。こんなセリフをこんな雰囲気の中、さらりと言えるワードにある種の感動さえ覚えるほどだ。

もちろんリムナは鬼の形相になるのだが。

普段はかわいらしいリムナだから、鬼の形相と言っても、冷静に見ればそれほど顔自体は怖くない。

纏う雰囲気は無視すれば。

「……ワードさん？」

「すみませんっ！だからリムナ、その斧を……」

さすがにワードとはいえ、ここで怪我しても誰も思いやつてくれないと思つたのか。

それともまわりの白い目に危険を感じたのか。

一番はリムナの雰囲気だろうが。
それに盾を持たないワードがリムナの斧を剣で受けようとすれば
確実に剣が逝くのだから。

空気を読まずに茶化したワードが次第に滑稽に見えてくる。

どつき漫才を見ているかのようだ。ワードにとっては命がけだが。
たまらずに笑いが出てしまう。

「あっはっは、リムナ、そのくらいにしたら？」

「でもお〜」

まだリムナは収まらないようだ。

ここは方向を転換してみる。

「リムナはワードを呼び捨てにしていから」

「えっ？」

「オレの意思外で決めるな！」

なにを言っているんだワードは。自分の立ち位置くらい把握する
べきだろう。

絶体絶命だと。

まわりもため息をついている。

もういい、やれ、リムナ。

「リムナ、やっていいよ」

「はいです！」

「すみません！呼び捨てで呼んでください！」

瞬間的に土下座するワード。

やはりこの世界でも最高級のお詫びは土下座なのか？

それとも本能的行動か。

まあどうでもいいと思ったので許すことになるだろう。

「……だつてさ」

「うーん……」

いまだ納得していないようだったが、ここはリムナにとっても
得になるであろう提案をすることにする。

小声で。

ぼそっ

「これでワードと進展するんだよ」

ぼそぼそっ

「そうなんですか……？」

ぼそぼそぼそっ

「みんな、応援してる」

ぼそぼそぼそぼそっ

「ががが、がんばりますっ」

「なにをぼそぼそ話してる？」

いまだに土下座から戻らず、顔だけをこっちに向けて言うワード。

「ワードを呼び捨てる練習だよ、ね」

ワードがどんな反応を示すのか多大な興味を覚えながらリアを促す。

「はは、はいです！……ワード……？」

ずっきゅーん！

ワードにクリティカルヒット！胸を押さえてうずくまる！

ワードは毒を受けた！

ワードは麻痺した！

ワードは石化した！

ワードは4レベル下がった！

ワードは首をはねられた！

周りはニヤニヤしていた！

本当にワードにはクリティカルだったようだ。ワードが顔を赤くしているのは初めて見た。

春売りの魅力的な女性たちですらわずらわしそうにしていたのに、ロリコンではないよな？って10代程度でロリコンもくそもないか。

王族として生きてきたワードは、純粋な好意を受けたことがないのかもしれない。

「しかし、ワードって今までどのくらい敵を作ってきたんだろうね」

「関係ないのに、本人は怖いからって僕が報復を受けたのも一度や二度じゃないよ……」

「完全に王に向いてないわね」

うんうんと頷くまわり。誰も否定できない。

王にならないではなく王になれないのではないだろうか。

「うるっせーよ！」

まだ意地を張ろうとしているのだろうか。

しかし、とどめを刺しておく。

「リムナを大事にするんだぞ？」

「うぐっ」

「大事にするんだぞ？」

「………も、もちろんだ………」

「みんな、聞いた？」

「しっかりと」

「リムナ、良かったね」

「………はいです………」

小柄で口調は幼いが、普段はきっちりとしているリムナがふにや

ふにゃとしている。

よほどうれしいのだろう。

これも珍しい光景ではあった。

相手が王族ということでもまた何かありそうだと思ったが、まわりもそう思ったのだろう。

パーティの仲間お互いが助け合って乗り越えていこう、いく手助けをしようとみんなと頷いた。

真摯な告白や掛け合い漫才も終わり、部屋の中を調べる。

「よし、この部屋はもう大丈夫そうだな、先生何かあるか？」

「ええ、壁の一部に隠し金庫のようなものがあるわ」

「じゃあシート工先生お願いします」

「まかせて」

結局ミリアの魔力が枯渇するほど放たれた攻撃魔法でこの部屋にはもう敵がいらないようだ。シート工先生が何か見つけたようで調べている。ふと、ミリアが気になり聞いてみる。

「まだいけそう？残りの魔力はどの位？」

「1/4くらいだと思いますわ。リリアのお母様、ケイト様のアクセサリは高性能ですね」

「ふーむ。魔力が半分以下なら基本的に帰る1択なんだけどね……」

「でも帰り道を考えなくていいならまだいけるのではないですか？」

「それはそうなんだけどね。まあいいか、シート工先生の成果で決めよう。いいものがあつたらもう少し進んでみようか」

「分かりましたわ」

壁に隠し扉を見つけ、鍵を開けようとしていたシート工先生から

声がかかる。

「開いたわ」

「何か入っているか？」

「急かさないで、ワード君。さっきの大声といい君はもう少し落ち着いて、戦局を見るようにするのよ。前衛の仕事がいっぱいはいないなら、そのつど余裕のある人に指示を任せるのもリーダーとして重要よ？」

「そうか」

感じるものがあつたのだろう、素直に返事をするワード。

「あなたにも守るものが出来たのでしょうか？用心に用心を重ねても損はないわよ」

「……気をつける」

「ええ、頑張つてね。と、よし、出てきた。？これは巻物かしら？よくわからない文字で書かれたものだわ。半分しかないけれど」

「み、見せてくれっ！」

凄い勢いでフィアナが食いついた。あとから聞いた話では、よくわからない文字、イコール刻印魔法の資料らしい。

その巻物を広げ、時間が止まったかのように固まるフィアナ。

「こ、これは……」

それだけを声に出した後も何も言わなくなってしまったので、悪いと思いつつ声をかける。

「それ、凄いの？」

当たり前だろう。

古竜リンズヴァーラの住処での隠されたものなのだから。

うつむいたまま話を始めるフィアナ。

「パーティで得たものは公正に配分するのは知っているし、守ると決めていた。しかし、これだけはわたしに、エルフ族に譲って欲しくないか？」

「封印魔法に関わりがあるものなのね？」

顔を上げ、声に力がこもる。

「そうだ、シート工先生。これはわたしの命をかけてもエルフ族の長老に渡さなくてはならないものなのだ……！」

「フィアナ……」

「ダイスケ……、勝手を許して欲しい……」

フィアナの泣きそうなほどの真剣な表情に心が打たれる。

「……シート工先生、開錠が成功したにも関わらず中身が2重罫で燃えてしまったとか、エガイド団に申し訳がたちませんよ？」

ダイスケのぎこちないウインクにシート工もまわりも空気を読む。
「……そうね、しばらく開錠もしていなかった私のミスね、今後は気をつけるわ」

「ええ、またそういうこともあるかもしれませんが、怪我だけは気をつけてくださいね？」

「ええ、時々失敗するかもしれないけど、怪我だけはしないようにするわ」

「残念だったなあ」

ワード。これで貸し借りなしだ、という表情。

「いいものがあつたかもしれないです」

リムナ。今日はすでにいいことがあつたのでどうでもいいという感じ。

「仕方ないよ。先生は怪我してない？」

「そうですね、怪我さえなければいいことですわ」

レインとミリアは封印魔法にそれほど興味がないので欲しいとも思わないようだ。

「次はいいものを見つけようね！」

リリアはフィアナが喜んでいるからいいといったところか。

このパーティのリーダーはワードだが、要となっているのはダイスケと言って過言はない。

一般的なパーティならばそれを盾にして今後の宝はフィアナに行かないようにするだろう。

物欲は誰にでもあるのだから。

ひどければ今後パーティの先陣を切らなくてはいけないほどに。

「ありがとう」

「なにが？」

「……いや……」

「そう……」

この宝はこのパーティの中では2重罫で燃えてしまったのだ。
責められることはあっても感謝などありえない。

つづく

16 各々（後書き）

いつもありがとうございます。

気がついたら3000文字追加しました。

12話より前は暇を見つけて追加していきます。

17 覚醒

17 覚醒

2日目。

もう突入時にディスクが指示を出すまでもなく、確実に個々の仕事を済ませる。

通路はやはりスライム系ばかりで本気を出すどころの話でもなく何かいる、もしくは何かあるであろう扉を目指す。

いくつかの扉が見える少し広めな所に着いた。

順次入って調べようということになった。

身振りのみで突入の合図を出すワード。着実に経験を積んでいるようだ。

最初の部屋ではゾンビと同じ不死系というべきスケルトンが。

「ぎゃー！ガイコツーーー！」

フィアナは骸骨がだめらしい。

次の部屋ではワーム。

「ミミズ、ミミズ！いやーーー！」

リリアにクリティカル。

3部屋目は異形系の首だけの魔物。

「ひっ！生首……ガクっ……」

レインが崩れ落ちる。

そして次は。

「蛙、カエル、帰るうーーーーー！」
リムナ。

ここまで飄々としていたワードだったが。
「蛇だけはだめだああああ！」

開ける扉の先々で。

「ぎゃーーーーー！」
誰かの悲鳴が上がる。

弱点は誰にでもあるようで。

何とか平気な者が撃破することでのいでいた。

ここまでの成果は最初の刻印魔法の巻物を除けばあとは素材になるものしかなかった。

倒した魔物から得た素材も含め。

ぜいぜいと息を切らし、安全を確保した小部屋で休憩する。

「今日はこれまでにしよう。多少回復したとはいえ、レインもミリアも1/6切ってるんじゃない？」

そう、残魔力のことだ。

「ええ。あと魔法1／2発が限度でしょう」

「じゃあ戻ろうか」

「仕方ありませんわね」

無事帰ってきた。と言っても転移門のおかげで一瞬だけでも、部屋に戻ってきて地上に出、安全な場所に戻ってきたことでようやく安堵のため息が出た。

「ふう……」

安全になってワードも冷静になったのだろう。

弱点があることがいかにきついかも分かってきたようだ。

「ダイスケ、夕飯にはまだだいぶ早いようだが、どうする？」

「シートエ先生に指導してもらって今日の反省会を皆でやってほしい。その間俺は武具の点検をするよ。1つ俺からは、言葉が通じない時も考慮して、何かサインを決めたほうがいいと思ったくらいかな」

「分かった。おーい、みんな、集まってくれ！」

仲間を集め、あれこれと話をしているようだ。

隊形の補佐の時はどうするか、前衛、もしくは後衛が使えなかった場合はどうするか。

などと聞こえてくる。

1人台車の所にとどまり、台車の傷みと、各防具の傷みも確認する。メンバーの使い方により、防具の部分的カスタマイズを施すのも装備を提供した者の定めだろう。ついでに独り言のようにリーンに話しかける。

「刻印魔法の巻物はあれでよかったの？」

台車の、みんなから見えない影になる空中に文字が浮かぶ。竜とはこのようなことも出来るのか。

“元々エルフ族のものだ。使えないものが持っているより使えるものが持った方がいい”

「何でまたここにあったんだろうね」

万が一聞かれてもごまかしやすいようにいろいろな点をあやふやにして独り言のように言う。

“刻印魔法、大昔の『墮天者』の持っていた文字を研究したものらしい。その研究成果を2人の弟子が半分ずつ継いだということだ。その片割れは魔物に襲われた。廻り廻ってわれのところに来た、それだけだ”

「『墮天者』は俺の世界以外からも来ていたという事なのかな」

“世界は無限に存在する”

「そつえば今日の魔物は？」

“弱点は若いうちに克服しなくてはな”

「そつちの差し金か、まあ今のうちに分かるのはいいかもね」

“ダイスケは特にそういうものがなさそうだな”

「魔物だと思っ飛ばしまえばそついった先入観は関係ないと思っんだよね」

“この地に生まれたものの弊害か”

「俺は、そういうやつらもいるんだ。としか感じないからね。元の世界の記憶もあるし、変に落ち着いているのも、そういう理由があるのかもしれないね」

“そうか、やはりダイスケはおもしろい”

「そうかな？」

「にゃー」

リーンの警告が飛ぶ。あえて鳴き声を出すときはたいていそうだ。するとフィアナが近づいてきていた。

「なにをリーンと話しているんだ？」

「つと。フィアナか。いや、子猫と会話なんてできないよ？」

「何を言っているんだ？他の者は分かっているかもしれないが、

リーンは幻獣かなにかだろ？」

「なんで？」

「なんでと言われても。ハイエルフだからとしか。古のハイエルフは植物や動物も統べていたという話もあるしな。そのハイエルフより上位種族の幻獣だとしても納得できる。と言うかそうでなくてはおかしいとわたしは思う。リーンが人語を話せるかは分からないが、理解は出来ているだろう」

「そんなことが分かるんだ」

「というより、生まれつき動物の感情などが分かるし、ある程度なら従わせられるんだ。そういう点で狩りは本当はつらい。わたしが生きていく上で必要であることは理解しているんだが。わたしが野菜や果実、もしくは魚介類しか食べないのはそういう理由によるんだ。そのわたしでも、いや、わたしだからこそリーンはわたしよ

りも上位の者だと理解できる」

「へえ、リーンって幻獣だったんだ」

「にゃん」

「なにか隠しているのか？……というより、自分の精神衛生のためにも聞かないほうがいい感じだな」

俺とリーンの表情からなにか感じたのか、そう言っ「今は聞かないでおく」としてくれた。

ありがたい。

「で、フィアナ、何かあったの？こっちに来て」

「ああ、食事の用意を始めるらしい。食べ物探しに行くそうだから、そう言いにな」

「ありがとう。こっちはもう少し修復がかかる。今日も手伝えなくて申し訳ないけど……」

「自分の防具を自分で修復できないこちらの方が申し訳ないと思っている。防具の修理などは鍛冶屋に持ち込むのが一般的だ、本当は対価が必要なのだろう。ダイスケはいいと言ってくれたが、ならば食事の用意などは是非わたしらにさせてくれ」

「そう、ありがとう」

「いや、こちらこそ、な」

「フィアナ、抜け駆け禁止！」

「そうですよ！」

いい雰囲気になりかけたことを目ざとく見つけたのだろうか、リアとシート工先生が駆け込んできた。

「リリア、シート工先生まで……、いや、わたしはそういうわけで

はなくてな」

「じゃあどういうわけ？」

「説明してもらいましょう！」

「いや、だから、その……。というよりシート工先生、こういってきだけ先生にならないでください！」

「まあいいわ、次はあたしだからね！」

「私の番も」

ワイワイガヤガヤ。女3人寄れば姦しい。女性3人は昨日仕掛けた川魚用の罠を見に行くらしい。

「いつてらっしゃい」

「「「いつてきます」「」「」

また文字が浮かぶ。

“ 案外早く気づかれたな ”

「ハイエルフなら仕方ないんじゃない？他の人にばれてないならよしとすれば？」

“ 子猫の姿だからか、力があるとは思われていないようではあるし、あまり気にしなくともよいか ”

「だね、じゃ、修理進めちゃおうかな、あ、ここの部品は壊れやすいのかな？ワードとリムナの足防具、同じところが傷んでる。もつと動きを考えて防具を作らないといけないということかなあ……」

リーンもよほど何かないと作業中には口を出さない。が、今回は違った。「おい！」と下手したらまわりに聞こえるほどの大きさの声を出していた。

俺はというと、同じ修理箇所なんだからと、1つずつ両手に持ち、魔法をかけて修復しようとしていたところだった。両手に魔力を集めたせいで賢者の石が発動、共鳴してしまったのだった。

澄んだ風鈴の音のようなものが聞こえる。

まわりの人が何も言わない所を見ると自分にしか聞こえていないのだろうか。

共鳴している両手の間に、黒い渦巻きができていた。

門をつければダンジョンの帰りに使う転移門とそっくりだろう。

「おおっ！って何かちっさい転移門みたいのが出てきたただけだけ……？」

「特に危険は無いようではあるが……」

もう文字を浮かべるのがもどかしいのか、小声でリーンが話しかけてきた。

「何か出てくるのかな？あ、これ持てるし動かせる……」

「すぐに色々触るなどいわれておらなんだか？」

「忘れてたよ」

「気をつけるように、ほどほどにするのだぞ」

「うん」

いじくりまわしてみるが、特に変化は無い。

便宜上門と言っておくが、門の中に何か入れたりすることも出来ないようだ。

手をつたもつとしてリーンに止められ、そこらの棒切れで試してみたのだが。

「もうダイスケのその癖には諦めしか感じぬな……」

「申し訳ない」

「全く申し訳なさそうな顔ではないがな」

「あはは」

「笑い事でもないのだが……」

これはどう発動するのだろう。

効果は？

考えすぎて頭がこんがらかってくる。

「ふーむ。こういう場合は……」

「こういう場合は？」

「ガツンとしたブラックコーヒーで頭を切り替えたいな」

「ぶらつくこーひー？」

「ああ、元の世界の飲み物だよ、って、なんか流れてきたよ！」

慌てて台車にその液体がかからないように移動させる。

その間も液体は流れてきていた。

止まらないのかなと考えた瞬間、それは止まったが。

石の上に垂れた液体を観察してみる。

草にもかかってしまっているが、特に変化なさそうだったので、何かを溶かすような液体ではないようだ。

指で……、いやリンに怒られるからと何とか踏みとどまり、草についた液体を葉っぱごと近くに持ってきて観察してみる。

解析をかけたが複雑すぎてよくわからない。主成分は水だと分かったのでさわっても大丈夫かもしれないが、その他の成分がどういう影響を及ぼすか分からない。

匂いはあるか？と鼻の近くにそれを持ってきたとき、その液体の正体がついに分かった。

「コーヒーじゃないか？これ？」

我慢できず、草についていた液体を指ですくいひとなめ。

確かにコーヒーの風味がする。

傍で見ていたリンも心配してくれたのか、自分なりに調べていたようだ。

「毒の類でないことはわれにも分かったが、こちらの世界では見たことのないものだな」

「コーヒーだった。ああ、もったいない」

「ダイスケの世界の飲み物か？」

「うん、そうだね、たしかここらに水筒に使用するかもと用意していたコップが……」

「ダンジョンにコップを持っていたのか？信じられぬ……」

「そう？年頃の少年少女って回し飲みとか嫌がるかと思って」

「生死を別つ水分補給にそんな馬鹿なことを言う者などいる訳なからう」

「ミリアあたりは言いそうだけだね」

「……否定できぬな」

「さて、ではもう一度コーヒーを、と。お、出てきた出てきた。これくらいでいいかな、うん、なかなか」

「我にも味見させてくれぬか？」

「いいよ、はい」

コップを傾け、リーンにも飲ませてやる。

「苦いな……、いやしかし単に苦さだけではない深い味わい。香りもいい」

「子猫がコーヒーを飲んで評価するとか、違和感凄いな……」

「……、そして、そうか、そういうことか……」

「1人で納得してないで教えて欲しいんだけど」

「賢者の石は生きた竜の瞳。それは知っているな？」

「うん、目の前で見たからね」

「古竜は食事という物をしない。自らと同じ元素を呼吸とともに吸収する」

「リンドブルムなら風の元素をつてこと？」

「そうだ。それが肉体維持のための力になる。そして、強靱な精神力を保つための機構が両目の賢者の石だ」

「竜にもさみしいとかつまらないとか思うことがあるって事？」

「他の生き物などめつたに見られぬのだ。挑んでくる者など数百年に一度あれば多いほうであるしな。常時退屈という方が正しいであろう」

「その精神を守るのが賢者の石の共鳴ってこと？」

「だろうな、ダイスケ、元の世界で退屈な時、疲れたとき、落ち込んだとき。どうしていたのだ？こちらの世界でも出来そうなことだと」

「おいしいものを食べる事だろうね、この世界で出来ることとなると、酒かな。実はこっちのビールはあまり上等じゃないんだよね」
「出るものが中身だけと考えると、体に摂取したものだけかもしれぬな。肉体の記憶しているものを取り出すのかもしれない。もしくは血か」

「肉体でも血でも、出てくるものが変わらないならどっちでもいいや。とりあえず便利に使えそうだね」

「うむ、他の者にどうやって説明するかにもよるがな」

「そうか、また特殊魔法とか言っておくかな。元の世界で摂取した物を現実化できるとか。あ、でも解析魔法のように研究したいとかいわれても困るなあ……」

「『墮天者』の魔法が人によつて研究できるなど、ダイスケが初のことだ。気にしなくて良いと思うぞ。断ればいいのだしな。門を隠し、袋から出すような仕草なら遠目で見ていようが理解できぬだろうし、言いふらすのならもう出さないことにすれば軽々しく言う者はいないであろうよ」

「コーヒー気に入った？」

「うむ。命の維持目的とは違う飲み物の摂取を人がすることは知識としてあつたが、酒に酔いもせず、食事の必要のない竜体では味覚もほとんど無いのでな。知識としてしか持ち合わせていない。確かに生き物の中に魂として存在する時はその生き物の感情なども我自身のように感じるが、その生き物から出てしまうとき、それは経験したことではなく、単に知識として整理されてしまうのだ。この体にとどまることができるおかげで竜では出来ぬ、さまざまな経験をたのしんでおる。酒はこの体が毒物として排除してしまうかもしれないが、いつかいいものを味わってみたいものだ」

「ワインでいいものを昔飲んだ記憶があるけど……、自分が覚えていないようなことでもいいのかな？ワイン、ワインと。お、出てきた。うん、良し悪しが分かるほど飲みつけていないからよくわからないけどこんなものかな？味見する？」

「うむ」

「ほう、味も香りもいい。酒の酔う成分はどれも毒ではないと体が判断したのかそのままのようだな」

「酔っ払う子猫か。子猫に酒など飲ませるなと怒られそうだけど」

「他に人がおらぬことを条件としよう」

「そうしてくれると助かるよ」

「折角の機会だからな。ダイスケに迷惑がかかることはせぬ」

「よろしく」

「うむ、われの方こそ先が楽しみだ、よろしく頼むぞ」

「ただいま」

つづく

18 掌握

18 掌握

「ただいま」

「おかえり、いいもの取れた？」

「魚はそれなり、後は山菜だな、動物はどうやらたくさん気配が近づいてきたようでこの辺りから逃げ出したようだな」

「気配？」

「学校の生徒たちだろうな。金のかかる馬車を使える学生などいない。オレやミリアだってそんな金は出してもらえない。ここまでの馬車道は大きく迂回しているし、休みの初日から徒歩で向かったとしたら、ちょうど今晚あたりにつく計算だろうな。もともとオレも徒歩で明日の夜到着の予定だったからな。ダイスケのおかげでだいぶ予定変更だったさ。いい方向にだけどな」

「そうなんだ」

「ああ、じゃ、用意するか。そうだダイスケ、補修はどうだ？」

「あと少しかな。そうだ、ワードとリムナ、足具の同じところが傷んでいたけど理由分かる？」

「それが、一度敵に剣をよけられて空振りした時に踏ん張ったら、少しいやな音がしたな」

「あたしもです」

「そうか、前方向に踏ん張ることをあまり考えてなかった。改良し

「てみる」

「便利だな」

「否定できないね、あ、あとダンジョンのそこらへん、色々解析してみたけど、ここのほんとに下層の方は竜がいるかもしれない」

「本当のことだが、解析魔法云々は嘘だ。だが教師陣は食いついてきた。」

「ほう、それは確かか？」

「そういえば古竜リンドブルムの住処がこの地にあると伝承にありますね。今まで見つからなかったのだから言い伝えとっていましたが」

「リンスヴァーラならここまで安全なダンジョンも理解できますね」

「ドルディ先生、シートエ先生、オルフェール先生がそれぞれ言った。」

「確かには実際に会ってみたいとなんとも。ただ所々に前に見たミスリルに似たものがありましたよ。石にこすったような程度で、採取は不可能でしたけど」

「ふむ、鱗がミスリルになるほどの竜と伝承、そしてダンジョンの造り。本当にリンスヴァーラかもしれんな」

「ところでオルフェール先生、リンスヴァーラのダンジョンならつてどうということですか？」

「風の古竜リンスヴァーラ。彼は知的好奇心の強い竜だと聞いています。他の古竜と比べて、ですが。人前に姿を現したという記録は彼が一番多いですね。技術や魔法を発展させた者、それに『墮天者』

。ちよくちよく大きなダンジョンに現れてはそういった者と会ったと。この世界のダンジョンは彼がそういった者を呼ぶために作ったんではないかと言う者もいるくらいです」

「『風は自由、自由は風。それが風の古竜リンズヴァーラ。住処を1つとしないのは彼の生き方』」

「フィアナ、それはなんですか？」

「この大木の声が聞こえた……」

「おお、おめでとうございます、フィアナ君、いえ、フィアナ様。植物の感情がある程度読めるのはエルフの血。そして植物と意思疎通ができるのはハイエルフの血なのです」

「オルフェール先生……ありがとうございます」

「いえ、やはりエルフは自然に生きてこそなのかもしれませんね。自然と古竜の力でハイエルフの力が開花したのでしょうか」

俺はなんでもない、いつもの行動として、フィアナは喜びを表現しながら周りを見渡すようにして、とあるところに視線を向ける。

「にゃああん」

「……フィアナの実力だろうね。すばらしいよ」

「ありがとう。慢心しないようこれからも精進する」

「応援するよ」

「ああ、よろしくな！」

「じゃあフィアナの成長のお祝いを兼ねて俺が食事を作りましょう！」

「ダ이스ケが？出来るの？」

「失礼だね、リリア」

「だって見たことないもん！」

「それもそうか。ま、簡単な料理だよ」

「それがお祝いになるの？」

「材料がよければそれなりに出来るさ。手伝ってはもらうけど」

「いいよ、何をしたらいいかな？」

「じゃあ、あ、フィアナは座ってて。これでも飲みながら」

と、門を発動し、フィアナのコップに紅茶を注ぐ。おそろおそろ口をつけ、味に驚いているフィアナ。他の人にも振舞いながら、危険はなく後で説明すると言っておいた。見ていればそのうち理解できるとも。自分しか使えないという事も忘れずに。

このメンバーには隠すつもりもなかった、後教える予定は総学長とエガイド王、ゲインさん、ライラスさんとケイトさんくらいだろうけど。協力してもらうこともあるかもしれないから、胃袋を握る感じで。食の誘惑に勝てる人が出来る人はほんの一握りだろう。それが極上ならば余計に。

「魚はワタを抜いて、これをかけて串焼きに。そのイモは洗って皮

をむいて一口大に切っておいて」

「わかった」

「鍋もだいぶ熱くなったぞ？本当に水も何も入れなくていいのか？」

「うん、じゃあまず、バター、と」

じゅうつ！程よく伸ばし、野菜を炒める。そしてころころと高級な肉、牛も豚も。ひとかけらはリンにやってみた。少しかじったら動きが止まったので、おいしいのかそうでないのかは読めずじまいだ。

いつもはカレーのパッケージの通りに作るだけで、こだわりも何もないから手順が合っているかすら分からないけど食べられる程度ならいいとする。こだわりのある方には多大なツツコミが来そうだが。

水を入れる。程よく煮立ったら少しだけ冷ましてころりころりと出した塊を入れる。ふとどのメーカーだろ？などと考えた。そして混ぜながらまた加熱。

「って、良く考えたらお皿を出してカレーライスを出せばいいだけだったよ！次はそうしよう。ありがたみは無くなりそうだけど」

「何を独り言を言っているんだ？それよりこれ、うまそうな匂いだな！」

「うん、楽しみにしてて」

「まだかな、まだかな？」

「もう少しだよリリア」

「こんなものかな。後はパンかな？ご飯にしようかな？」

「パンは分かるがご飯とは？」

「ああ、俺のいたところの主食だよ。カレーにも合う」

「にも？」

「そのうちね」

「ああ。これだけのいい香りを出す料理を作れるのだから、それも楽しみだな」

結局、布を敷いた上にいくつかのパン。あまっていた鍋にご飯。米の状態で出てくるかとも思ったが、そこは俺の意思を汲んでくれたのか、あたたかなご飯の状態で出てきた。ありがたい。実際は炊く前の米を食事として認識していないからって理由だと分かったのは後日だった。

「お皿にこの白いのを盛る。あまり多すぎないようにね。そしてこちの汁をかける。そして混ぜながら食べると。いただきます」

「いただきますっ！」

「まあまあかなあ」

まわりの反応は「うまいっ！」「おいしい！」「お代わり！」などとうたのようだ。

「他の生徒が近くでなかったら酒もいくつか出したかったですけど」

「……酒、だと？」

ドワーフ族は酒豪が多い。その例に漏れずタダツカ先生が最初に食いついてきた。

「ええ」

「それはみんなが無事に乗り切ったときにお祝いにしましょうね！」

「そうですね、シート工先生、それはいい案です」

「おい、ダイスケ、魚に何かつけたか？」

「ええ、ドルディ先生、なかなかでしょう？」

「ああ、うまいな。この白いものにも良く合う」

「川の魚は骨が多いのでだめですが、海に行く機会があれば生の魚をさばいて切り身にしてそのたれ、『醤油』といいますが、それで食べるのもおいしいですよ」

「総学長に研修は海沿いにするように進言する！」

「研修があるんですか？」

「それほど危険はないとは言え、旅行などと言うと文句が出るからな。生徒同士の親睦、連携を深めるという名目だ」

「なるほど」

「ダイスケさん、このパン、とてもおいしいのですけれど、これはケーキではないのですか？」

「え？もぐもぐ。ああ、ミリア、俺のころのパンはみんなこんな感じだよ？」

「甘みもあり、とても柔らかいですわ。でもこれがパンだとしますと、ダイスケさんのところのケーキとはどんなものなのでしょう？」
「チョコレートはあるんだっけ？んと、じゃあこれ食べてみて？少

しずつね」

「甘い、甘すぎますわ!」

「だめだった?」

「おいしいですわ! リリアさん、リムナさん、フィアナさんもこれ、食べてみてくださいまし!」

「「「!」」」

「はあ、これがもし店に並んでいたら持ち金を全てはたいても買うかもしれないな」

「ダイスケ、もっと!」

「甘くておいしいですう」

「ケーキで思いだした! フィアナのお祝いには何か足りないと思うたんだよね」

「ダイスケ、まだ何か出すのかい? いい加減、戻れなさそうで少し怖くなってきたんだけど」

「気にしないで、レイン。俺は戦えない。みんなに守られる側なんだ。そしてその代償として、武具と、……これだよ。俺はみんなを頼らなくてはたぶん魔物のいるこの世界で生きてはいけない。それに鍛冶に携わるものとして武具を使ってくれる人がいなくても当然生きていけない。これまでの『墮天者』としてかなり特殊だろうね。好意を向けてくれたり、当てにしてくれる人、必要だといってくれる人のために俺はこの力を使うんだよ。本当はこの力、魔法はパーティの仲間だけに教えるつもりだったけどね。」

そう言いつつ、ホールのケーキを出す。門の大きさが変わらないのに、なぜ出るんだろうと少し疑問を持ったが、視覚的に違和感があるだけなので気にしないでおう。ナイフで切り分ける。最初はフィアナだ。次に凄い表情になっているミリア。とても興味を示している、女性陣から配るのはご愛嬌か。

「じゃあフィアナ、おめでと」

「」「」「おめでと」「」「」

「ありがとう、では……」

フィアナがケーキを口にするまで他のものが抜け駆けしたものはいない。いい人たちだ。

ぱくり

「……」

「フィアナ？」

「言葉もないとはこのことだろうな。ダイスケ、ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、みんなも食べようか」

さっきのチョコレートの反応すら上回るフィアナの感想に、全員怖いものに触れるかのようにしてケーキを口にする。

ケーキを口にしたまま、誰一人として言葉を発しない。最初に立ち直ったのかワードが言葉を漏らす。

「甘いな。柔らかくてそれなりにうまいと思うが……」

立ち直ったのではなく単に甘いものがそれほど好きではなかっただけだったか。

「……それなりどころではないと思うが？」

次に声を出したのは一番最初に口にしたフィアナだった。

みんなだんだんと復活したようで、口数が多くなる。そしてまた口数が少なくなる。もっともって食べたい、ということなんだろう。俺はといえばああ、結構おいしいケーキだな、どこのやつかな？

などと半分以上をリーンにかじられながらのんきに考えていた。

「……もつと!」「」「」

「うーん。そうだ、フィアナ、こちらに向かつてる生徒ってどの辺?」

「……みんな疲れているようだが、あと30分程度だろうか」

「じゃあ、今日はここまで〜!」

「……ええ?」「」「」

「他人に言わないこと。このダンジョンで大きな怪我をしない、そして今後も自分の命を第一にしてもらうこと。それが守れるなら、シートエ先生も言っていたお祝いをしましょう。ついでにダメ押しものを一口ずつどうぞ」

仲間たちには普段口になっているのを見たことのある酒を、先生にはイメージでオルフェール先生にはワイン、ドルデイ先生には日本酒、タダツカ先生にはウイスキーを。

味覚、胃袋を握るという効力は絶大であった!

「王家の名にかけて、言わん」

「僕は神ミネラの名にかけて」

「わたしはハイエルフとして」

「あたしは、今は保護者の家族として」

「貴族の誇りをかけますわ」

「いただいたこの斧に誓います」！

「ワシは人族、同属としての矜持をかけよう」

「フェアラ族のわたしにとって約束を破るということは死と同義ですわね」

「……ドワーフ族、それから同じ鍛冶の道を歩むものとしての人生を……」

「エルフ族としてハイエルフの意思は至上ですね」

そして忘れ去られた感のある、教師陣の馬車の御者で万屋の職員であるという人には。

「万屋さんはどうです？」

「情報は命です。一存では決められません。ただし長の命令は絶対です。それから長は無類の酒好きでして。わたしもですが」

「名前を聞いていませんでした、申し訳ありません」

「いえいえ、一介の職員ですよ。でも名乗っておきましょか。ハルと申します」

「ではハルさん、依頼です」

「万屋はあらゆる依頼を遂行いたします」

「正直、竜に会うとか言う依頼は常人には出来ないと思いますが？」

「今までこちらから取り下げた依頼は、ありません」

「依頼者が死ぬまで掲示しておいたとか、ありませんよね？」

「それは長が決めることで、ただの職員にはどうしようもございません」

「ものは言いようですね。では依頼です。帰ったら酒を1瓶、長宛てに贈って下さい。依頼料は同じ酒1瓶。『今後もお力添えをいただけるなら、同じものを贈る機会もきつとあるでしょう』と伝言もお願いします。伝言の分の上乗せ依頼料はこれで」

言いつつあいているコップにワインを注ぎ、渡す。

「！」

「……依頼、承りました。万屋に務める全てをかけて遂行いたします」

「お願いします。寮や研究室の場所はいいですよね？」

「はい。万屋は情報が命ですから」

「ではお願いします」

がやがやと、人の集団が集まってくるのが聞こえたのは、片付け後の食後のお茶を飲み干した時だった。

U
U
<U>

19 邂逅

19 邂逅

「あれ、ワードたちじゃん？」

「一番乗りだと思ったんだけどなあ」

集団内で比較的余裕があるように見えるのは当然2年生だ。聞けばすでに1年の時からバランスよくパーティを組んでいるらしい。ワードとフィアナの確執の影響が大きかった1年生の団体は、満足にパーティを組めていないようだった。万屋のハルさん大忙しだ。

「オレたちのパーティ、ド素人がいるからな、歩きやすい馬車道歩いていたら先生たちに拾われてな」

「ああ、そういう手もあったか」

大嘘だが、同じ車に乗って来たのはある意味間違いではない。こちら側の、という説明を省くだけで、学生なら簡単に話に乗ってくれる。

ひそつ

「……『墮天者』の力はどんなもんだ？道中『墮天者』に守られてきたのか……？」

ひそひそつ

「ディスクに戦闘能力なんか全くない。正直オレやフィアナ、それから教師陣に守られてきたようなもんだ」

ひそひそひそつ

「そんな程度なのか？『墮天者』って」

「そんなわけあるか、『墮天者』の血が王家や有力者にも流れているんだぞ？王やオレたち兄弟を見たって分かるだろう。ディスクが戦闘特化でないだけだ。鍛冶以外に力はねえよ。解析魔法の顛末をしっているだろう？ディスクをオレたちのパーティに入れたのも、鍛冶の腕を期待したからとしか言いようが無い。後はオレの王家の名前やフィアナのハイエルフの威光でディスクの鍛冶が悪用されないように、という程度だ」

上級生がこちらを向く。ワードと何を話していたかまでは聞こえないが、フィアナは聞こえていたようで頷いて上級生に同意を示しているようだ。

「なんだって？」

「ディスクを過小評価しているだけだ」

「いいね」

「いいのか？」

「下手に恐れられて危ない目に会うよりずっと、ね」

「なるほど、しかし気にするな、わたしとリリアが必ずダイスケを守る」

「まずは自分の命と言ったはずだけど？」

「自分の命を守る技術や能力の余裕がなければ他者も守るなどと大それたことはいえないと思うが？」

「自分の命を引き換えにして……。ということがないならお願いするよ」

「あたりまえだ」

「そう、ありがとう。俺が生きている時間が長ければそれだけケーキを食べる機会も増えるよ！」

「それだけではないのだが……。シートエ先生も本気で参戦しそうだしな……」

「……分かつてはいるんだけど、ねえ。リーン、どうしたらいいかな？」

「にゃーん！」

「子猫に聞くな！」

「さて、ここに来た学生も今食べ物を探しに森に入っているよ。申し訳ないけど、今日からは車で寝るのは難しいと思う。先生たちに乗せてもらったと言った以上、車は馬車の連結車両に似せるようにしてごまかすしかない。最悪男女混合になってしまうかもしれないけど、寝床を作らないといけない。ワードやミリアの権力で馬車が使えたとか言う理由も考えたけど、王族や貴族の将来が少しでも曇るようなまねをわざわざしたくない。それなら俺自身が笑いものになった方がマシだと思う」

「オレももう少し気のきいた嘘が言えればよかったんだがな。すまねえ」

「ワードだけじゃないよ、みんなそんなに差がないよ」

みんなもうんうんと頷く。あまり事情は変わらないようだ。

「野営の基本ですけど、火の番をしながらお互い寝袋にくるまることにするしかありませんわね」

「こちらの遠出の就寝道具をいじる時間がなくてね、ごめんね」
「なにことも経験ですう」

「こんなもんか？」

「もう少し地面の凹凸をなくしてあっち側を削った方がいいんじゃないかな？」

「しかしな、レイン、もう結構平らだと思っぞ？」

「じゃあ寝転がってみたらいいさ」

「だめだ、ごっごっしてる。それにそっちに向かって転がっていきそうだ」

「だから言っただじゃないか」

「難しいな……」

「ダイスケの力は大きいね」

「ああ、助けてもらってばかりはしゃくだな」

「うん、同じ男として僕もそう思うよ。当然僕たちにしか出来ないこともあるわけだけど、誰でも出来ることで遅れは取りたくない」

「そうだな、もう少し調整しよう」

そう言った視線の先では、ダイスケが教師陣となにごとか話していた。車のことを相談にいくとは言っていたが。

「そういうわけで、車はここでは教師陣の馬車の後部に連結させて引っ張ってきたことにして欲しいんですよ。そんな感じにいい感じ」

「確かに学生が馬車に乗ってくるわけないしね。そうまわりに言うことにするわ」

「おねがいします」

「教師陣も基本野営だからね。昨日は馬車を使わせてもらったけど、教師の立場上、最初の数日しか使えないとも分かっていたわ。そんなに問題の起こることではないと思うわよ」

「ありがとうございます」

野営の焚き火がそこかしこに見える。狩りや山菜取りがうまくいかなかったものたちも当然いるので教師陣のストックしておいた魚を配布したようだ。保存食を日数分持つてきているが、使わずに現地調達できるならそれはそれに越したことは無い。

今の番はレインとだ。火が弱くなり、木切れをくべながら、レインにきいてみる。

「火の魔法って、燃えるものがなくなるか、意識して魔力を供給しないと消えるよね？」

「ええ」

「氷の魔法も、対象を凍らせて、それが砕けたりすると氷もなくなるよね？」

「はい」

「対象がいようがいまいが一度の魔力供給で効果が永続する魔法ってないの？」

「燃えるものが何もないのに炎が燃え続けていたり、凍らせるものがなくても氷柱が出来て、一定時間残るといったものですか？」

「うん」

「どうでしょう。僕には出来ません」

すると聞いていたのか暇でつい聞いてしまったのか、教師陣の焚き火のところのシート工先生が声をかけてきた。

「その魔法自体は存在するわ」

「シート工先生、そうなんですか」

「ええ、ただし、フェアラ族の最高魔法に属していたわ」

「いた？」

「少し長くなるけどいいかしら？」

「暇をもてあましていたので喜んで」

「そう。最初に一般常識からね。レイン君は知っていると思うけど。私達フェアラ族は昔はこんな小さな名残の羽根ではなくて、大きな翼を持って空を駆けることの出来る種族だったらしいわ。他種族にはない、空を駆ける能力。ご先祖様たちは他種族より優れていると得意だったようね。それは私のようなこんな小さな翼でも触れるだけで婚姻が成立することがあるように、とても神聖なものだったのでしょう。でも慢心の罰なのか、血が濃くなりすぎたせいかな、直系のフェアラ族なんて翼は私の半分ほどしかないわ。別に翼が翼として機能していないから、大きさを地位とかフェアラ族としての順位が付くわけではないけどね」

「なるほど」

「そして、今では発動できるフェアラ族はいないけど、大きな翼は飛ぶだけでなく、何らかの魔力装置の役割もになっていたようね、記録では時空魔法というものらしいけど、最低魔法能力の魔法障壁を魔力補充もせず、その場におらずとも何日も保たせたり、魔物の巣穴の入り口に何時間も炎の壁を発現したり。冒険にも探索にも、普段の生活にでも、とても重宝されていたようね」

「へえ、見てみたいですねえ」

「そうね。私もフェアラ族としてその魔法を使ってみたかったわ。エルフの刻印魔法、ドワーフの技術。ノームは鉱石発掘では右に出るものがないし、オーガ族の力も他族にはないもの。フェアラ族がよく好戦的と言われているのは昔、時空魔法の力をなくしたときに、もうフェアラ族は使えないと言われたせいだと祖母から聞いたわ。納得してしまっただけね。少しばかり身軽というだけで、観

賞用の翼以外、フェアラ族には何もないものね」

「そうなんですか」

「私のように混血のフェアラ族しか町に出てこないわ。というより今いるフェアラ族の大半は混血でしょう。わずかに純血もいるようですけど、私から言わせれば彼らは完全に引き籠もりね」

「それほど時空魔法というものが大きかったんでしょうか」

「それもあるわね。でも直系の純血の人たちには「昔は使える種族だったのに」って言われるのが一番つらいんでしょうね。失われた魔法を取り戻そうと躍起になっているようなね。もう今の世界では伝承以外では古竜くらいしかフェアラ族の時空魔法を知っている者がいないのにな」

「そうなんですか。身軽だという以外に身体的な特徴はないんですか？」

「手先が器用な人が比較的多いことかしら？実はケイトさんはわざわざばかりフェアラ族の血が流れているようなね。アクセサリ造りが得意なのもそれもあるのかも。ケイトさんもあまり言わないし、ライラスさんもリリアも知っているかどうかはわからないけど、一応内緒にしておいてくれるかしら」

「それはもちろん」

「ありがと。それにこのダンジョンに古竜リンズヴァーラがいるのなら、そしてもし……、もしリンズヴァーラに会う事が出来たなら力を取り戻す方法があるか聞いてみたいわ」

「取り戻せるといいですね。「絶対無理だ」と最初からあきらめず、方法を模索しているのも素晴らしいです」

「学校の古書を読みふけりたくて教師になったようなものだからね、収穫はなかったけれど」

「フェアラ族の古書には？」

「先祖の建てた巨大な城は雲の上よ。今は誰も行けないわ。今のフェアラ族の集落は山の上。少しでも城に近いところがいいということかしら。古書の類は少ないでしょうね」

「いきなり急に飛べなくなっ たんですか？」

「そんなことはないはずだけど……？」

「どうして城を捨てたんでしょう？」

「だって雲の上で雨は降らないし、地面もないんですもの。飛べることを前提とした場所ですからね。食べていかなくてもは生きられない以上、空の上に留まることはできなかったんでしょうね。力を取り戻そうと模索しているうちに、かなりの重量になる本の類を運ぶことも出来なくなったのではないかしら」

「なるほど。古竜が何かいい情報教えてくれるといいですね」
「ええ」

ひそつ

「実際にできそう？」

リーンにだけ聞こえるような声で聞いてみる。答えは他の人からは見えない所へ文字が浮かんだことでもたらされた。

“フェアラ族だけ出来る、特殊な魔力制御。ただまずは、それを理解するための道具が必須だろうがな”

「それで、可能になると？」

“シートエの魔力量なら問題ないだろう。道具も熟練してくれば必要なくなる”

「そうか、道具はあるの？」

“ダンジョン内にあるはずだ”

「うまくいくといいなあ……」

「にゃあん」

「そういえばシート工先生はその時空魔法というのを使ってみたという以外の望みも持っているんですか？」

「以外の望み？」

「ええ、フェアラ族、全体の発言力を全盛期に戻したいとか、そういったものです」

「どうかしら。私は祖母は生粋のフェアラ族だったようだけど、祖父はドワーフだし、その娘の母はその時点で純粋なフェアラ族ではないでしょう。父は人ですし。あ、父方の祖父にもフェアラ族の血がすこし混じっていると聞いたこともありますね？ さつき翼の大きさが血の濃さとは関係ないとは言いましたけど、魔力量には左右されるようです。私の翼は母や祖母よりも大きいようです」

「そういえばここに来たはじめてのときはノームの混血の戦士さんがいましたね、とするとみんなが言っている種族とはなんなのですか？」

「外見の種族的な特徴、先天的な能力を現しているものですか？」

「しかしエルフとダークエルフの混血でハイエルフが生まれたのはフィアナが初なんですよね？」

「ああ、エルフとダークエルフだけはほとんど同族以外では子が成せないのよ。エルフとダークエルフでなら子も成せるけれど、お互いが仲が悪かったこともあってエルフとダークエルフ同士で結婚しようなどという人がいなかったのもあるわね」

「そうなんですか」

「あと付け加えると、両親は人なのにノームが生まれたりすることがあるわね」

「そんなこともあるんですか？ 疎まれたりします？」

「そんなことあるわけじゃない。親の種族の特徴を凌駕してそ

の種族の特徴が出て来るなんて、よほどその種族の力が強いって事よ？血のつながった親なら喜びはすれ、疎まれたりは決してないわ」「そうなんですか」

「簡単に言ってしまうえば、生殖のためのものは種族間に差が無いのだから、純血や混血なんて気にしたって仕方ないのよ」

「生殖って、先生、直接過ぎませんか？」

それまで話を黙って聞いてたレインが話に入ってきた。

「なにを言っているんですか、レイン君。学生はまだだめですけど、学生でない子供は17歳になれば結婚できることを知っているでしょう？」

「それは知っていますが……」

「ではそろそろ適齢期のレイン君にしても子供はどうやってできるのか位は知っているでしょう？」

「えっ？……え、その、ハイ……」

「恥ずかしがらなくていいのよ。当然のことなのだから。そのうち授業でもやるでしょうけど、学生や戦士の生殖行為の最悪な結果や身ごもることを防ぐ魔法なんかも教えるわ」

「最悪な結果とは？」

「ダイスケ君の世界にはありませんでしたか？有能な学生や、戦士が半年以上使えなくなるのですよ？戦士は激戦地ならば有能であればあるほどその使えない期間の穴埋めが大変になります。学生であれば一番伸びるこの時期に動けないのは国にとっての損失とすら言うことが出来るのですよ」

「相手の男性は？」

「私は女性とは一言も言っていないせん。戦士なら、その女性が有能であればあるほど、戦力を落とすし、命の危険度を上げた相手の男性に向けての非難が高まるのは当然でしょ？学生は命のやり取りがない分、それほどでもないですが、あまりいい感情を持たれないでし

ようね」

「なるほど。レイン、気をつけなよ？」

「そのつもりでいる、と言うか僕はミリアのことは真剣に考えているつもりなんだ」

「じゃあ、レインなら大丈夫だね！万が一があつたら今こうして太鼓判を押した、俺の評価まで下がっちゃうからね」

「うん。ミリアとの子が生まれるまでにこの国を平和にしたいと思っているんだ。最初片思いだった時は、夫が誰だろうと、ミリアが結婚して子が生まれたとき、平和ならいいと漠然に考えていただけだった。地位も釣り合わないから結婚はおるかお付き合いだって無理だと思っていたから。たまたま何の因果かワードと仲良くなって、その頃はワードが王族とは知らなかったけど。そしてダイスケが現れて。お付き合いが出来るようになって。今は真剣に平和をめざしたい、そう思っているんだ」

「そういえば、レイン君はワード君が学校に入ってから模擬戦で初めて引き分けた相手でしたね。それからの付き合いなのかしら？」

「いえ、最初の模擬戦で引き分けた後、何度も再戦しようともちかけられました。でも模擬戦とはいえ、私闘は学校では禁止されているからと断っていたんです。当時は「なんだ？こいつ？」といった思いしかありませんでした。そしていつだったか、模擬戦の許可を取ったと言って僕を引っ張っていったんです、あるうことか城へ。

城の錬成場にはエガイド王とゲイン近衛団長が立会人だと言って立っていました。完全に緊張してしまつた僕はワードに簡単にのされてしまいました。するとエガイド王が「その程度か？」とおっしゃられて……。緊張と恥ずかしさで逃げ出したいくらいだったと今でも思い出します。ところがゲイン近衛団長が、「いきなり王の面前で模擬戦となれば誰でも実力など発揮できますまい」とワードから何か聞き出したのでしよう、そう言ったんです。今でこそ分かるワードの表情と比べると、ワードのその時の感情は、隠していたことがばれてしまったという表情でしょうか。すると王が……。

「ワシは目上の者といきなり会ったところであがりなどせぬわ
！」

「では上位竜種に鉢合わせた時の話をするべきでしょう、あれは…
…」

「その話はやめろっ」

「同じことではありませんか？」

「ワシは人相手の話をしておるっ！」

「ほう、王になる時の先代の言、「ゆめゆめ一般の民の心を忘れる
でない」と言っのを忘れたということですか」

「ぐっ……」

「衛兵、模擬剣を持ってきてくれ！」

「ワシは悪くないわ！」

「その性根、叩きなおす必要がありますね！」

「やかましい！」

「衛兵、王のための回復魔術師も呼んでおきなさい」

「隙あり！」

「甘い！毎日鍛錬を欠かさない私にかなうわけないでしょう！」

……と、ワードと僕を差し置いて戦い始めてしまっ。あれはあつ
けに取られて2人して眺めていたら、いつしかワードと2人、大声
で笑っていましたよ。それ以来一応友人として接してもらっていま
すね」

「なんと言っか、大変だったね」

「エガイド王とゲイン近衛団長の、私からすれば団長と副団長のあ
の頃の感じそのもので、少し懐かしいですね」

「シート工先生は最近王に会ったりしたんですか？」

「一般人はなかなか王に会うための理由がないわね。パーティとしても2年程度だもの。何十年も色々まわった王やゲイン近衛団長が私を覚えているとは思わないわ」

「さみしいですね」

「私にとっては駆け出しの頃の2年間だもの。今でも思い出は宝物よ。たくさん迷惑もかけてしまったけれど」

「今、生きていられるからこそその思い出でしょう。これから宝物の思い出が増えるといいですね」

「ダイスケ君と会えたのも宝物だわ」

「ありがとうございます」

「10年後にもきつとそう言えるわ」

「それなら僕もきつとそう言えると思うな」

「平和になれば、いえ、平和にすればいいことですね」

「ええ」

「そうだね」

つづく

20 経験 前

20 経験 前

ぱちり。目が開く。右、リリアのドアップ。左、フィアナのドアップ。ため息が出た。

「どうせ起きてるんでしょ？2人とも」

「えへっ」

「気づいていたか」

「気づかないほうがおかしいよ。寝袋で目の前に顔があるということとはかなり無理な体勢をしているということだから。まあ俺も男だから、起きて目の前が男だったという事態よりは大変うれしいね。ちなみに隣に女性が寝ていたからといって、うろたえるような歳ではないのでそのつもりでね」

「フィアナ、それって色仕掛けが効かないって事かな？」

「たぶんそうであろうな。だから言ったであろう、きちんと自分を見てもらう機会を作った方がよいと」

こそそそと話す2人の言葉を聞き流し、ワード、レインを伴って汗を流しにいく。昨日はまだ遠足気分が抜けなかったのだろう、女性陣にからかわれたが、危険は少なかったとはいえ、本当の戦闘を潜り抜けた者として、色々考えさせられたのだろう、それでもふざ

けるような者は『架け橋』にはいなかった。

朝食も終わり。

「シート工先生、今日はどうします？」

「どうしますとは？」

「探索に同行するのかどうか。他の生徒もいますし」

「もちろん行きます」

「もちろんなんですか」

「もちろんです。ちなみに明日からは科長先生方も潜るそうです」

「一緒に？」

「パーティ契約をしてないのでですからそれはありえないでしょう？」

「あ、まあたしかに」

「明日にはミサネラ国の神殿団が着くそうです」

「神殿団？」

「ああ、ミサネラ国の神殿に属する回復専門職の魔術師団だよ」

「そっか、レインはミサネラ出身だっけ」

「回復魔法なら僕でもなかなか追いつけないと思わせるほどの実力を持っているね」

「なんでまたそんな人たちが？」

「ミサネラ国には学校がなく、ガイゲルド国の学校に通わせているんだ。でも国としても支援はきちんとするということだと思っよ」

「ま、両国で学校を作れば教師の数も倍必要だからね」

「そっか」

「そのミサネラ神殿団に何かあったときの回復をお願いするようです。折角リンドブルムの住処ではないかと思われるこのダンジョン、他の先生方も入ってみたいと思ったようですね」

「なるほど」

「よしっ、せーのっ！」

「架け橋、出発！」

「いじいじ……」

「昨日の続きのようですね」

「本当に安心設計だなあ。じゃあ、リーダーのワード、頼む」

「おう！……昨日の醜態で各々の弱点は分かったと思う。慣れて平

気になるのに越したことはないが、そいつらが出てきたら対応する人を守り、援護する方向で行く」

「わかった」

「よし」

「いいよ！」

「まかせなさいですわ」

「いくです」

「リーダーとして上出来ね」

「了解。んで俺からも1つ。今日来て思ったんだけど、前の部屋に後戻りできない可能性が高い。少しでも気になることがあったら必ず言ってほしいんだよ」

「分かった。全員、いいな！行くぞ！」

ワードの剣は敵を切り裂き、リムナの斧は敵を叩き潰す。ミリアの魔法は敵を燃やしつくし、レインの回復魔法があらゆる傷を癒す。リリアとフィアナの索敵は完璧で連携により間接武器で敵を寄せ付けない。シート工先生の罾や扉の開錠率も100パーセントだ。ダイスケは時折、詠唱中のミリアやレインを障壁でかばったりしている、ふと、違和感を覚える。いまだに現実味の無いこの世界で何かゲームか物語の登場人物になっている感じが抜けないのだ。ならば

第三者的に見てこの状況ならばどうするか。いやどうなるか。初心者が、全てがうまくいつている、自分たちは強い、という心を折りに来るのではないか。次の部屋に行こうとするパーティを見ながらそんなことを考えた。

開けようとしている扉が今までと少し違い、豪華だったことに気がついたのは、半分以上扉を開けていた時だった。

「伏せろ!!!」

言いつつ荷物をその場に置き去りにして走る。もう一度叫び、部屋に入った仲間の前に魔法障壁を全力で展開する。

その直後にそれは来た。炎でも氷でもなかったが、純粋な魔力の塊。障壁が間に合わなければ全員したたかに体を壁に打ち付けていただろう。

「竜……!!」

少したって視界の良くなったところにいたそれは、紛れも無い竜

だった。

「ほう、わが一撃を予見し、障壁を張るとはたいしたものだ」

「ちい、いきなり大物過ぎるぜ！」

「大きいです」……」

「リンスヴァーラの住処に侵入する者よ。命をかける覚悟を見せて
もらおう」

「フィアナ、どうしよう……」

「くっ……、生き残るためにもやるしかないだろう、リリア！」

「なにか死ぬ前に言い残したいことはあるか？」

「レイン、わたくしよりも先に死なないでくださいましね」

「将来の計画はもう出来ている。死んでいる暇はないさ」

「ここは本当にリンスヴァーラの住処だったのですね……」

「リーン、あれ本気？」

「我がおるのだぞ？そんな訳なかるう」

「だよ。最初の一撃もただの魔力の塊だったし」

「ただ、リンズヴァーラの分体だがな」

「おいおい、力の1/1000だとしても手に負えないよ？」

「まあ見ておれ。これはわれの考えではなく、リンズヴァーラの考えだが、ヤツもわれだ。楽しもうとしか考えておらぬよ。われには分かる。なにせ」

「「風は自由、自由は風」」

「だからな」

「おぬしらもわれにかなわぬこと、理解しておるだろう。体が。感情を奮い立たせようとしても体がついてこぬ。分かっているぞ。まあわれもこのような浅い階層で遊んでおるわけにはいかんのだな。土産を置いていこう。それでも生きてまたここに入ってきた時には遊んでやろう。ああ、色々考えるのだな。土産はそちらから仕掛けない限り動かないように指示してある。……ではさらばだ」

そういつて消えた後に残ったのは翼竜が1体。竜種としては下位だが、それでも竜種であることは間違いない。1体だが、倒すには熟練戦士がぎりぎり1対1で。この駆け出しパーティならば全員が全力を出さなくてはならないだろう。

いまだにリンズヴァーラの分体の影響が残っているのか、誰も動けない。

「よし、時間ももらったことだし、考えようか」

いつそすがすがしいほどの軽い声でみんなに呼びかける。

「翼竜だぞ！簡単にいくか！」

「そうですっ、こわいですっ」

「だから、あの竜はこちらが攻撃するまで手を出さないと断言していただろう？怖いのは分かるけどなにか手を打たないと。あ、転移門

で帰るのも手だね」

「父ちゃんの翼竜相手の武勇伝を耳にたこが出来るくらい聞いたから、ここは戦ってみたい。あたしにもなにかできるかもしれない」
「ハリエルフとして翼竜に負けるわけにはいかないな」

「レインの将来の計画を聞くまでは死ぬわけにはまいりませんわね。それに翼竜を倒したという名目は、レインとわたくしが結ばれるための大きな利点になりますわ！」

「利点よりもミリアが無事な方が僕には大事なんだけどね。でもいつかやることなら、最悪転移門で帰ることが出来る今は、とても幸運かもしれない」

「リンズヴァーラがこのダンジョンにしていると分かった以上、引く気はないですね。フェアラ族としての奥義魔法のことを聞くまでは」

「よし、一撃必殺。そしてヒットアンドアウェイ」
「なんだ、それ？」

「全員の最大の一撃を持って攻撃し、そのまま俺の障壁内に戻る。翼竜が倒せなかった場合、おとなしく転移門で帰還する。これで最低でも命を守ることが出来るよ」

「分かった。オレはどうしたらいい？」

「まずリーダーのワードと副リーダーのレイン中心で考えて欲しい。所々はシートエ先生に補足してもらおうといいよ」

「ダイスケはどうすんだ？」

「ちよつと試したい武器を調整するよ」

「そんなのあつたのか！」

「いや、危なくなるまで出さないつもりだったし」

「そうか」

相談しているパーティを横目で見ながら台車の底から武器を取り出す。リーンが話しかけてきた。

「それを使うのか？」

「うん。慢心は十分なくなつたと思うから」

「その武器でまた増長しないか？」

「その時はきつと分体でなく本体が「攻撃してみせよ」とか言うんでしょ？」

「ああ、確かにその武器の威力を感じてみたいと思うだろうな」

「いいよね、無敵。色々考えたこの武器だつてそんなに感じないんでしょ？どうせ」

「そう言うな。人、いや人族だけではない世界に生きる者たち。彼らの成長はわれも楽しんでおるのだ」

「はいはい、上から目線、上から目線」

「怪我をさせないように言っておくからその程度にしてくれぬか？」

「……これは古竜を初めてやりこめた偉業かな？」

「否定できぬ」

「どう？作戦決まった？」

「ああ、結局王道だ。オレが翼を、リムナが尾をそれぞれ担当、できれば無力化する方向。翼の衝撃や尾の一撃が一番きついからな。そして翼竜の属性を考え、ミリアは風の魔法。翼竜の風攻撃を相殺する。レインは回復に専念。フィアナとリリアはうまくいくかは分からんが、翼竜の魔法とブレスを阻害する意味でも弓や短剣で翼竜の口を狙ってもらう。残念ながらシート工先生の出番は無しだ」

「私にフェアラ族の時空魔法が使えれば……」

「いいんじゃないかな。俺が「こんなこともあるつか」と作ったものが無駄にならずに済んだよ。じゃあワードの武器はこれ。リムナはこれね。リリアとフィアナは弓にしてこの矢を使ってね。魔術師用のものは今のところまだないから現状維持で。シート工先生も弓が使えるならこの矢を使いますか？」

「この剣はどうしたらいい？」

「魔力を流してみて。どうせワードは魔法使わないから多少武器に魔力を食っても戦闘に問題ないでしょ？」

「ああ、わかった。おおつ、なんだこれっ？」

「魔力の刃。ドワーフ族のお株を奪ってしまいそうで申し訳ないんだけど。魔力がもつ限り、切れ味最高の剣。どう？」

「いいな。ちなみにオレにも作れるか？」

「どうだろ？ドワーフと仲良く出来るなら」

「オレは出来たら自分だけで作りたい。今はあきらめよう」

「今は……ね。ちなみに魔力の刃を魔力で相殺されたり、多方向から同時に攻撃を受けたり。それからあまりに強い魔法障壁を切ろうとしたりすると簡単に本体が折れるから。魔力が通っていない状態なら木剣よりも格段にもろいよ」

「わかった」

「この鎚はどうしたら？」

「今のうちにぶんぶん振り回しておいて。そうそう。そうすると中のアースストーンが重力変化するから軽くなったでしょ？後は軽くていいから敵に当てて。そうしたら今まで貯めた重力を開放するから。分かる？」

「よくわかりませんが、これを良く振って翼竜に当てればいいんですね？」

「そのとおり。ただ溜め込みすぎると魔法の重力で碎けるから、あまりにも軽くなったら魔力を注いで相殺して。もしくは適当に何かを叩くか」

「はいです」

「この矢のヤジリはなんだ？」

「2層構造なんだ。魔力をこめて打つと、1層目が狙った所に誘導。2層目が爆発。まあ、それなりに狙ってもらわないといけないんだ

けど。さすがに真後ろに飛ばすとか出来ないから、魔法を打つときに目標を定める感じでおねがい」

「エルフ、ダークエルフ族には喉から手が出そうな代物だな」

「狩りに使うと対象も爆発しちゃうから、戦闘特化だろうね」

「ごめんね、俺が魔法使えないからね。特に魔術師用のものは用意できなくて」

「構いませんわ。前衛や遊撃の方に守られなければ魔術師としての力は発揮できませんもの。彼らの能力が上がるということは自然と魔術師の能力が上がるということですわ」

「そうだよ、ダイヤスケ。充分だ」

「一応、魔法発動の時間を半分以上減らせる杖の開発も考えていたんだけどね。回復魔法も含めて」

「本当ですか?!」

「本当かい?!」

「必要なのがオリハルコンとミスリル。それからエルフの最上級刻印魔法」

「あゝ無理無理」

「だよね」

「では行くぞ。詠唱開始。……ではカウント0で。3、2、1、0
！」

っ
っ
く

21 経験 後

21 経験 後

「3、2、1、0！」

ミリアの風の魔力の発動で翼竜が微かに体勢を崩した。が、攻撃を受けたと判断したようですぐに体勢を整え、プレスかその刃物のような翼で攻撃しようところらに向かってくる。が、風の魔法により、攻撃としての効果は望めないが、体勢を乱されているのか動きに精彩が欠けていた。

そこへワードは正面から、リムナは回り込むようにして翼竜に突撃する！フィアナも矢を放った！

リムナ、フィアナ、シートエの連携、順番に時間をずらすことでほぼ休みなく放たれる矢。矢の恩恵もあるが、正確に目と口に当たっているようだ。

さすがは竜種。瞳や口が焦げようが、わずかの間に治る。が、数瞬とはいえ、翼竜の視界を防いでいるし、プレスを吐く間を与えない。そして『架け橋』の前衛はそのチャンスを逃すような者たちではなかった。

「おりゃあああ！」

前衛としてパーティの盾として、敵の注意を引き付けるように大声を出して突っ込むワード。

翼めがけ武器を振り下ろす！

ギーン！

いやな音を立てながら翼竜の表皮を削る。やはり生半可な攻撃では一撃で倒すことは出来ないようだ。剣が欠けたり砕けたりはしなかったが、奥の手の魔力剣でも一撃とはいかなかった。

ドカツ！

ワードの陽動もうまくいったのだろう、迂回しつつ巧みに翼竜の視界から外れるように近づいたリムナが尾に一撃を入れた！

ぐらりとよろめく翼竜。翼を持ち空を駆けるものにとって尾はバランスをとるための重要な器官だ。打撃の威力と重力開放の力が相まったこともあり、翼竜は見事に地に落ちた。

「捕縛！」

唯一人並みに使える魔法障壁を退路用に展開していたものと別に翼竜の上にかぶせる。

翼竜の腕は翼だし、足は飛び立つ時に使う程度の力しかない。それでも人にとっては脅威だが。上から押さえつけられじたばたして

いる。もう数秒は持つだろう。

「リムナ、首を狙え！ワードは首が伸びきった時に鱗の隙間を狙うんだ！」

「は、はいです！」

「きついな、ディスク！でもやってやらあ！」

もがく翼竜の翼や尾がワードやリムナの体をかする。作戦行動に支障が出る傷が出来る前にレインの回復魔法が傷を癒す。ミアの風魔法は地味ながらも翼竜の動きを確実に阻害している。フィアナ、リリア、シートエの弓の連携もうまくいっている。連射といって差し支えない。

ドン！

「ギャウウ！」

ザシュ！

無謀かとも思える俺の指示を確実にこなす前衛。

「ヒットアンドアウェイ作戦破棄！全員、全力攻撃！」

ワードは切れた首に、致命傷を与えようと同じところに攻撃をする。

リムナは背中や翼をを叩きまくり、起きる隙を与えない。

リリアとフィアナは短剣に持ち替え、シートエの弓の援護を受けながらそれぞれの目に短剣を突き立てる。

レインは回復に専念し、どんな傷だろうが瞬く間に癒す。

ミリアは守護祝福に切り替えたようだ、全員の鎧がほのかに光っている。

俺？客観的にみれば安全な所から指示してるだけ。一応安全地帯を作ることはしているけど。

「やったか？」

生物的に首が半分以上切断されれば生き残ることは難しい。それでも敵は竜だ。下位種とはいえ。

「気を抜いちゃだめ！息の根をとめて！」

「わ、わかった」

「今度こそいいだろ」

首が完全に切断され、ピクリとも動かない翼竜。

「よし。ではこの部屋を探索しよう。今までの部屋よりつくりがい
いようだし、期待できるかもね」

「オレは翼竜の素材を剥いでいるからシート工先生主導でやってく
れ」

「翼竜になにか材料になる所はあるの？」

「何を言っているんだ、ダイスケ。翼からマントを作ることが熟練
戦士への一歩とか言われているんだぞ？」

「そうなんだ」

「まあ、1匹程度で作れるものじゃないがな。あとは鱗と牙も悪く
ない。鱗も牙も砕いて武器の素材に混ぜれば他の弱いものが寄って
来なくなる」

「武器の強さが変わったりしないの？」

「翼竜程度にそんなものはないさ。上位種のミスリルならば別だが
な。下位種ならその匂いだけ知らないが、武器や防具に練りこむこ
とでそこらへんの弱いやつは逃げていくぞ」

「そうなんだ」

「ああ」

「なにかありました？」

「ああ、ダイスケ君。ここはどうも戦いをする場のようですね。隠
し扉の類もないですね」

「そうなんですか」

「ただ、ゴミ捨て場なのかしら、今まで私達と同じようなことがあ

つたんでしょう、その戦士や冒険者の残した武器や防具の一部であったであろう、ガラクタがあるわ」

「掘り出し物ありました？」

「どうかしら、素材として使えるそうなのは回収したわ」

「翼竜を倒しただけでいいとしましょうか」

「そうね」

「これからどうする？」

「ワ、ワード、あたしはまだまだ元気ですっ！」

まだまだなれないのかどもりながらワードに答えるリムナ。

「僕の魔力は3/4は残ってる」

「わたくしは半分程度ですわ」

「こちらもそれほど損傷は無い」

「あたしも元気」

「でも教師として考えても今日は戻るべきだと思うわ」

「ふむ。さっきのでかい竜が次の部屋で待ち構えていると厄介だね。もしくは今度は土産だといって翼竜3体とか」

「うっ……」

「今日は戻ろうか。翼竜倒したなら今日は充分だよ」
「そうね」

「ふうう、無事に帰ってくるっていいねえ」
「にゃんにゃん」

自分を忘れるなといわんばかりのリーンの鳴き声が聞こえた。確かに忘れていたけれども。申し訳ない。確

まだ時間は早かったが、この時間に帰ってきている学生もいた。やはり最初の壁、苦手な魔物が出たらしい。それは確かに今日もう一度潜ろうとは考えられないだろう。

だいぶ帰ってきた人が多くなって夕方になり、ミサネラ国神殿団の人たちが着くと、ようやく教師陣も余裕が出来たようだ。一応翼竜が出たことを報告しておく。他のパーティに出るかは分からないが。

「翼竜だとっ!？」

ドルディ先生の大声は周囲の生徒にも届いたようだ。そんなものと戦えないと言い出す者、転移門があるんだから挑戦してみたいと言い出す者。明日からはより緊張感を持った探索になりそうだ。

「ええ。何とか撃破しましたが。これ証拠の品です」

そういつて翼を見せる。

「たしかに翼竜の翼だな。鱗も牙もきちんと回収してきたか。よしよし。危険がないうちは得られるものはきちんと得ておかないとな。明日からワシらも探索出来そうだし、楽しみだのう!」

「楽しみなんですか?」

「うむ、若い頃に1対1で引き分けたただけだったな。それなりのパーティを組んでしまえばそれほど強敵というわけではないしな。明日遭ったらオルフェールとタダッカには休んでいてもらおうか」

「ちなみにどこを狙うんです?」

「そうさな、翼を後ろから切り裂き飛べなくする方法。胸の1箇所

にある逆さの鱗から剣を突き立てる。そのくらいか」

「逆さの鱗？」

「ああ、逆鱗は竜種の弱点なのだ。と言っても上位種ほどだんだん小さく、狙いにくい所にあるが。翼竜は比較的大きく5センチほどだな。」

「色とかあるんですか？」

「ある訳なからう」

「ですよ」

「形も他の鱗と変わらぬよ。ただ逆から生えているだけだ。ちなみに逆鱗を狙っても倒せなかった場合は逃げるか魔法障壁を全魔力で発生させる。魔力を爆発させるぞ。いくら翼竜とはいえ人より大きな魔力だ。普通に受けたら大怪我で済めばいい方だ。耐え切れれば竜はただの鱗の硬いだけのものになるが、それも数分のことだ。こちらが逃げ切れなければ全滅だろうな」

「なるほど」

「あゝ、腕が鳴るな。早く明日にならないかのう……」

すでにドルディ先生は自分の世界に入ったのか、翼竜に遭ったらああして、こうしてとぶつぶつ言っていた。

「リンスヴァーラも逆鱗つてあるのかな……？」

「古竜にそんなものある訳なからう。われらが生まれるより前にいたこの世界の竜種にはあるがな。われらのようにある意味神の力で故意に作られたものにはなかなか弱点など存在せぬよ。ただわれら

は神ではないからな、われらの作る竜種には逆鱗は存在する。自然の摂理にはさからえぬ。われらにも寿命はあるしな」
「そうなんだ」

今日から『架け橋』のパーティの夜の番は複数人になった。危険は少ないが、経験しておいて損は無い。数時間ずつ、ワードとリムナ、レインとミリア、ダイスケとリリアとフィアナ。これが一番喧嘩がおきにくいということだ。

「ダイスケ、今日の指示それなりに的確であつたな。余裕があつたのか？」

「あたしは弓を打つのでいっぱいだったなあ」

「死なない自信はあつたからね」

「まだ隠していることがあるのか？」

いや、ちょっと考えたんだといいながら、薄い魔力障壁を展開し、草に向けてそれなりの速さで動かしてみる。イメージとして薄い魔

力の刃だ。草は音もなく切れ、ぽとりと落ちる。

「魔力障壁にこんな使い方がるのか……？」

「うん。今日の突撃してくる感じの敵には薄い障壁を横にして置いておけば勝手に切り刻まれてくれると思うんだよね。竜に効くかは別として。それから……」

「「それから？」」

「なんていうか、2人が俺に対してそれなりに本気に見えるから隠しているのも申し訳なくてね」

「見えるのではないっ！本気なのだ！」

「それなりじゃないもん！本気だもん！」

「そうか。まだ俺の心の準備がなあ……」

「お婆さんになるまでには頼むぞ？」

「待つもん！」

「じゃあ、リーン……」

ひゅうつうつん。あたりが静寂を満たす。ほんの数日前に見た、周りのものを眠らせるものだ。今日は他のものが多いせいかな、少し威力が大きいようだ。

「な、なんだ!？」

「なにっ？」

「周りの人は完全に寝てるよ。じゃあ、こっちに来て」

そういつてダンジョンに入る。壁に手を触れ、転移する。

それを見ていた人物に気がついたのはリーンだけだった。

つづく

22 魔歌

22 魔歌

「ここは……」

「ようこそ、失われたハイエルフの血を継ぎし者よ。われはリンズヴァーラ。おぬしとは一度顔を合わせたいと思っておった」

「リンズヴァーラっ?!」

「あたし初めて見たよ! 古竜リンズヴァーラ! もしかしてリンズヴァーラ様とか言った方がいいのかな……?」

「おぬしはエガイドの仲間である者のうちの1人の娘であるな? われはリンズヴァーラ。敬称はいらぬ。名が畏怖を持って呼ばれるものであるからな」

「なぜここに……? そうだダイスケ、どうしてここにっ!」

「もういいだろリン、説明を頼む」
「リンに……？」

「われはリンでありリンズヴァーラである。フィアナは幻獣と思
つておったようだが、われは古竜リンズヴァーラの意味体である」

「わあっ！リンがしゃべった！リンがしゃべったよフィアナ！」
「分かっている！黙っているリリア」
「ごめん」
「いや、きついこと言ってすまん」

「われら古竜は寿命が近づくと、魂を飛ばす。その魂はあらゆる生
き物の中を廻る。その生き物本人は気づかないだろうし影響はない
が。その生き物の生や死、経験をわれの知識として得、魂は徐々に
昇華されていく。たまたま傷を治してもらったこの子猫の中にわれ
の魂があり、たまたま子猫は礼にとダイスケの手を舐めた。結果だ
け言えばそれだけなのだが、子猫の中にわれの魂があったこと、ダ
イスケの手にダイスケの血が少しばかり付いていたこと。『墮天者』

の血に触れたことでわれの魂は一気に昇華したのだ。それももう一段高みに」

手に血がついていた。怪我をしていた。外に行った。薬水が切れていた。ファイナとリアの鋭い視線が突き刺さったが、「結果的にリーンと出会えたんだからいいじゃない」と言いくるめておいた。まだ何か言いたそうな表情のままだったが。

「ではこのリンズヴァーラは……？」

「われの力の残滓に近かったな。もう2000年程で寿命が来るほどに」

「それでも長いですね」

「ああ、人に比べればな。ただわれの魂の昇華にも普通ならあと1000年ほどかかるはずだったのだ。それを思えばそれほど長くは無い」

「では2000年後、リンズヴァーラが亡くなったりしたら……？」

「魂が一段高みに上ったと言ったであろう。リンズヴァーラに力を分け与えてある。古竜を倒すことが出来るほどの者がいなければ問題なかるう」

「倒せる者がいるんですか？」

「生まれ出でてこのかた、会ったことはないな。歴代最強と言われたガイゲルド初代剣聖も、現魔王も会ったことはあるが、われを倒せるほどではなかったな」

「魔王にも会ったことがあるんですか！」

「うむ。なかなか人族にしては美形の女性であったな」

「しかも女！どうして倒さなかったのです？」

「われら古竜はその体に元素の力とも言うべきものを持っている。われは風の元素を。すなわちこの世界を構成する者なのだ。どこの誰が戦争を起そうと、国を興そうと関知しない。そこに存在する姿を認めるだけだ。『正義』とは己の立場によるものであり、真理ではないと心得よ。さすがにこの世界を破壊するような者が現れたら、……われの『正義』を持って滅するがな」

「しかしつ、いくら古竜とは言え、魔王に直接相対するなど！危険だと思わなかったのですか？」

「われの本体が出向くわけなかるう。分体だ。おぬしらも今日会ったであろう？」

「あの巨大な竜もリンスヴァーラだったのですか……」

「翼竜もだ。われら古竜が眷属を作り出すことなど造作も無い。そういう点では今日は見事だったな」

「リーンはニヤニヤしながら見てたつて訳？」

「なかなか楽しかったぞ。そう言うなら、危険ではないと分かっていたダイスケも同罪ではないか？」

「だから心苦しかったから連れてきたんだよ。フィアナとリリアの将来を縛ってしまいそうで申し訳なかったけど」

「望むところだな」

「うん。これからもよろしく、ダイスケっ」

「私も仲間に入れてもらおうかしら？」

「「シート工先生！？」」

「リーンは知ってたんでしょ？どうせ。眠りの技が効かない者なんていないだろうし」

「うむ。仲間はずれもどうかと思ってな」

「だめよリーン、敵を増やしちゃ！」

「どうしてまたシート工先生を？」

「うむ、最近われを疑惑の目で見ていたからな」

「よくわかったわね。あからさまにしないようにしてたのに……さすが古竜という所かしら。子猫にしか見えないのに」

「なぜわれを疑惑の目で見ていたか聞いてよいか？ここならば言っても問題あるまい？」

シート工はリーンの傍に近づき、リーンを抱き上げる。

「人の言うことを聞く子猫なんて、可愛いすぎるじゃない！でもダ

イスケにしか寄っていかないし。私だって抱きしめたかったです
」

ガク……

「……コホン……猫などをはじめ小さな動物は、戦闘の気配と言う
んでしょか、そういったものに敏感です。授業中はうるさいほど
の鳥が戦闘訓練中には全くないでしょう？そんな中で平気にいら
れる子猫なんて普通じゃないわ。何かあると思っていたわ。リンズ
ヴァーラの分体や翼竜に動じない事で確信したわ」

「なるほど。持つ者、もしくは持たない者にしか分からないことも
あるってことかな」

「ふむ。われは戦闘の気配や竜の姿におびえることなど考えもしな
かったからな」

「やっぱり幻獣とかって言っておいた方がいいのかな？」

「だがな、そこまで気が回らない者が多いのも事実。フィアナはハ
イエルフとして。シートエは教師や戦士として得たものから。それ
ほど気にすることもないのではないか？われに危険はないのだしな」
「たしかに『幻獣』と分かって、この子猫の姿ならいらぬことを
考える人もいるかもね」

「うむ。中身が古竜だとは思わないだろうしな。子猫の姿ならばさ
らいやすいと考えるかもしれぬ」

「では今後も特に何も言われなければこちらからはいわない方向で
なにか言われて、その人が信用できそうなら幻獣ってことにしよう」
「うむ」

「ところでリンズヴァーラ、もしくはリーン、聞いてもいいかしら？」

いまだリーンを抱いた手を離さず、古竜と子猫を見る。

「なんだ？」

「私たちフェアラ族の全盛、時空魔法をご存知でしょうか？」

「もちろんだ」

「どういったものなのでしょう？純血の者たちも研究しているようですが発動の方法のかけらも見つかっていないようですし、私に出来るかどうかは別として、どういったものなのか知りたいのです」

「うむ、この竜の姿では実際に見せてやれぬのでな。説明しか出来ぬ。子猫でもだ。それでもいいか？」

「もちろんです」

「時空魔法とは魔歌だ」

「うた？」

「魔力を用いて特殊な歌を歌う。結果、魔法の模様、魔方陣というものが発動し、魔方陣が発動している間、魔法の効果が現れる。

それがフェアラ族の時空魔法と呼ばれるものだ」

「時空魔法って言い方が何か合っていない気がしますね」

「それはその魔法の一番の効果が、フェアラ族の飛翔効果によるものだな。魔方陣はその延長だ。最初の頃フェアラ族というのは種族の専用魔法で飛ぶことの出来るだけの種族だったのだ。単に飛翔魔法と呼ばれておった。魔方陣の研究により、長い時間効果を発揮す

る魔法が開発されたようだ。そして時空魔法と呼ばれるようになった」

「そうだったのですか……。私にも使うことが出来るでしょうか？」

「慣れるまでは特殊な道具がいるがな。見たところ、おぬしの魔力はフェアラ族—と言われた、妖精姫をしのぐぞ？」

「私がですかっ！しかし私にはこんな小さな翼しかありません……」

「もともとフェアラ族の翼はそんな程度なのだが？さっきも言ったであろう、飛翔のための魔法だと。飛翔魔法は翼を魔方陣の触媒として魔法を展開するのだ。おぬしほどの翼であればそれなりの重量があつたとしても、さらに訓練しだいでは人を抱えても飛ぶことが出来るであろうな」

「ああっ……！」

「よかったですね、シート工先生。で、リンスヴァーラ、ここにはその道具はないんですか？」

「あるにはあるが、どこにおいたかまでは覚えておらぬ。われには使えないものだからな。確か妖精姫が亡くなる時に鎮魂のためにと献上されたと覚えているな。豎琴だったか」

「妖精姫の豎琴ですか？伝説の道具ですよ！」

「そうかもしれないな。われのひげを弦に、角を胴に使っておるからな。まあよく探してみるがいい。運良く見つけることが出来たら進呈しよう」

「いただけるのですか？！」

「時空魔法をまたこの目で見る事が出来るのなら安いものだ。道具は使える者が使うのが一番よかるう。眠らせておくよりも使つてこそその道具だ」

「ありがとうございます！」

「明日は豎琴がおいてありそうな部屋へ案内しよう」

「そろそろ時間だ。地上へ送ってやる。ではさうばだ」

つづく

23 勉強

23 勉強

「おはよう」

「ああ……」

「どうした、ワード？元氣ないな」

「ダイスケか……。昨日あんなヤツと戦っただろう？今日、もっと
凄いヤツが現れたらどうしようかと」

「なるほど。戦いに恐れがあることはいいことだと思っけどね」

「しかしリーダーがこんな体たらくでは……」

「危なくなったら転移門で帰ってこれるんだし、今回は大丈夫だよ。
でもその恐れという感情は忘れない方がいいかも。生き残るために
は」

「そうだな。『初心を忘れるな』、エガイド団の掟だったな。それ
に確かに後ろが安全なうちに色々経験しておくのは損ではないかも
しれん」

「そうだね。今日も頑張ろうか」

「ああ」

「よし！」

「架け橋、出発！」

「この扉は……」

「昨日は言われるまで分からなかったけど、確かに今までの扉とは違つたんだね」

「また翼竜が出るんです……？」

「しかし、先に進むしかないな」

「うん。頑張らなきゃ」

「ミリア、防御祝福かけようか。僕は行動祝福かけるから」
「そうですわね」

「鍵が開いたわ」

「じゃあ行くのか。まず少しだけ開けて索敵魔法。突入はそれからにしよう」

「分かった。リリア、どうだ？」

「もう少し……いる！昨日の竜……」

「翼竜か？」

「うっん、大きい方」

「大きい方が……」

「ワード、どうするの？」

「戦闘の意思は読めるか？」

「魔力の充填とかはないみたい」

「では昨日のように不意打ちとかはなさそうだな。仕方ない、飛び込むぞ！」

いくら鍛冶科や戦闘科とはいえ、自分を守る障壁くらいは作り出せる。ワードとリムナは障壁を展開し、他のメンバーの突入を支える。部屋に入ると昨日の大きな竜がこちらを見ていた。

「ようこそ、昨日は名乗らずに去ってしまったな、われはリンスヴアール。風の古竜と言われている」

「本物……？」

「すまないが本体は大きく動くことはせぬのでな。われは分体だ」

「全くかないそうな気がします」

「人にどうこうできる程度の存在ではないね。本当に」

「古竜に会えるなんて、わたくし、感動ですわ！」

ひそひそっ

「ノリノリだね、リンスヴァーラ」

「昨日は本体だったのか？」

「昨日ほどの威圧感がないからそうかも」

「昨日の衝撃に比べてしまうと仕方ないのかもしれないわね」

「余裕があるな、おぬしら」

「昨日の戦いは見事であった。わが眷属翼竜を倒すとは。6人がかりであつたが、その歳ならば上出来であろう。そなたたちがまた成長した時、またここに訪れるがいい。今日は昨日よいものをみせてもらった褒美だ。ためになるかは分からぬが。ついてくるがいい」

そう言つて背後の扉に入っていくリンスヴァーラ。

中は使い古された武器がある所と何かしらの本の類だつた。

「この武器は？」

武器に食いついたのはワード。リムナもそっち系か。

「戦死者や寿命を全うした者の魂というべき武器を祭ってある。今はあまりないが、昔は死ぬまで持っていた武器を竜の住処に献上という意味で投げ入れるという風習があつてな。捨てることも忍びないのでこうして祭ってある。気に入ったものがあつたなら持つて行くがいい。道具は使うためにある。といっても武器の類は使えるか分からぬがな。手入れもしておらぬし」

色々見てまわっているワードとリムナ。しかしどれもよほどの名剣というわけではなさそうだ。ふと一段高い所にあるものを見つける。

さすがに古竜相手ではいつものようにいかないのかワードの口調もいつもの荒い面を抑えていた。

「この一段高い所に祭ってあるものはなんですか？」

「われが直接貰い受けたものや顔見知りの者の持ち物だったものだ」
「でもこれも名剣ってわけではなさそうですね」

「無論だ。いいものは誰かが継いでおろうよ。案外子供の頃から持ち歩いていたようなものが多いな」

「そうですか……」

「でも魂は感じるです」

「そうだな」

「これはっ！」

ワードが心配だったのかワードについていったシートエ先生が大きな声を出す。

「おお、そこにあつたのか。それはフェアラ族妖精姫の豎琴だな。その前に置いてある本が魔歌の譜だろうよ」

「これが……」

「それはフェアラ族にしか使えん。持って行くがいい」

「ありがとうございます……」

「それから、フェアリ、出てくるのだ」

そう言つて現れたのはリムナよりも一回り小さな妖精だった。リムナが140センチほどしかないから、フェアリと呼ばれた者は人の子供程度の大きさだ。翼というより羽根でふわりと浮いていたので、目線はそれなりだが。

「なんでしよう、主様？」

「うむ、妖精姫の譜を読んで聞かせてやるがいい。もう地上から姿を消してしまつたおぬしら妖精の者たちが魔歌の、時空魔法の発展に貢献したのだろう？ 折角豎琴を使えそうな者が現れたのだ。まずは飛翔魔法と豎琴の所有者固定魔法を教えてやるのだな」

「あなたが私達妖精の心を引き継いでくれるのね……。私達妖精。もう私しかいないけれど、その心を伝えるわ。そして私たちの心と時空魔法をお願いね」

「私なんかでいいのでしょうか……？」

「あなたほどの魔力があればきつと全ての時空魔法を覚えるわ！」

「ありがとうございます！ おねがいします！」

「ではこちらに」

2人して違う部屋に入つていった。

「妖精つて絶滅しそうなんですか？」

「うむ。あの容姿。魔法力はあるが、攻撃に向かないのだ。愛玩用にと、それから妖精は女性のみで子を成す種族だ。寿命も長く、そのありようは魔物に近い。羽根が高級な服に使用され、流行したこともあった。おかげで彼女、フェアリ1人を残すのみだ」

「そうなんですか……」

「まあわれにもわからないこともある。魔法で隠されたりした場合などな。もし生き残りがおったなら是非連れてきてほしい」

「わかりました」

「この本、凄いですわ!」

「ミサネラ国の古書図書館も及ばないかもしれない」

「ハイエルフの書いた本だと……?」

「歴史と魔法の本がいっぱいだね」

「歴史の本はわれがフェアリに書かせたものだ。覚えうる限りのことを書いてある」

「凄いですわ! ああ、わたくし、ここに住みたいですわ!」

「そんなに?」

「レイン? なにを言っていますやら。貴族として、将来の国を担う者として歴史とは重要なものなのです。同じ過ちを犯さぬようにするためにも」

「そうなんだ。でも僕はこっちのミネラ神の記述が気になるね」

「ふむ。ミネラ神か。彼女はわれら古竜の母親に当たる。当然竜の神だ。長男の神竜がこの世界を支えている。そしてわれらおのおの

の古竜が世界の元素を守っておるのだ」

「その話は本当だったんですね」

「ああ。その物語としてもミネラ神が書いたものであるしな。間違えようもあるまい。ちなみにミネラ神はこの世界の最初の知性ある生き物で『墮天者』だ」

「え？初めて聞きました！」

「どこの世界から来たかは分からぬがな。ちなみにミネラ神は人間が好きでな。今もきつとそこの人間にまぎれて生活しておろうよ」
「本当ですか！」

「ああ、神として世界に介入したりはせんし、人にまぎれていると言ってもその人の魂に少しかだけ同化して楽しんでおるのだ。元々竜族だしな。普通に生きて普通に死んでいるだらうよ」

「はー理解をこえています……」

「われらにも理解できぬよ」

「この刻印魔法は……？見たことがないぞ？」

「この魔法も知らないね……」

「それはハイエルフの刻印魔法だな。エルフやダークエルフの刻印魔法の基礎になったものだ」

「基礎に……」

「実際は先日おぬしらが見つけた巻物で完成するであろう刻印魔法の方が上等ではあるが、刻印魔法の歴史として面白いものではある

うな。そちらの魔法の本は墮天者が持っていたものだ。この世界ではなかなか発動せぬだろうよ。墮天者とはいえ、ダイスケの世界以外から来る者もいる。この世界で魔法が使える以上、魔法のある世界があっても不思議ではなからう」

「ああ、ちなみに本の方は写本するか覚えていつてくれ。われにも大切なものだからな」

「必ず写本に来ますわっ！」

「お茶にしたいがフェアリがあらぬのでな。ダイスケ、頼んでいいか？」

「どうして俺の力を？」

「この場所はわれの住処だ。いくら地上とはいえ、われの耳の届かぬ所ではないのだよ。魔物が寄りたがらないといわれるここ一帯はすでにわれの支配下だ」

「そうなんですか。古竜って凄いですね」

白々しい言葉を吐きながら台車からコップを出しコーヒーをいれてみる。リンズヴァーラはどうするかと思ったのだが、コップを差し出すとするりと古竜の傍にコップが勝手に引き寄せられ、口に注がれる。

「うむ、やはりこれはいいな」
「やっぱり？」

レインは冷静な対応が出来るのが売りだ。それ以上に驚いてしまえば関係ないが。今日は驚きすぎて返って冷静になったのか、つい古竜につつこんでしまった。

「あ、ああ、大昔に似たようなものを飲んだことがある」

おとといだろ！とつつこみそうだったが何とか耐えた。結構お茶目な所があるな。もしくは真面目過ぎてあまり嘘をつけないのだろうか。

「苦っ」

「にがいです」

「そうか？香りといいなかなかではないか？」

「オレも結構いいかも」

「わたくしはちょっと……」

「僕も苦手かな」

コーヒーが駄目組にはちょっとコップを水で流した後に紅茶をいれてやる。

結局本を読んだりお茶を飲んだり。ミリアは紙と筆を借り、一生懸命写本している。レインはお手伝い。お茶もコーヒー、紅茶はミルクや砂糖も。ココアや緑茶。はては昆布茶まで。帰った時に酒の匂いはまずいと言うことで酒はなし。炭酸飲料はみんな一様に驚い

ていた。ビールがあるというのに、炭酸の飲み物は他には存在しないのだ。ま、技術力がないから仕方ないのかもしれない。ビールもそんなに質がいいわけではないし。

ちなみに酔うことも無い古竜には酒もいくつか試してもらった。ブランドーが特に香りの観点からか受けがよかった。

「ただいまっ！」

少し疲れた表情ながらも声は明るく、シートエが帰ってきた。

「お帰りなさい。はいこれ」

「ありがとう、何かしら？」

「疲れたときは甘いものもいいそうですよ。ココアと言いますが」
「んっ。甘い。でもおいしいわね」

「喜んでもらえたようでなによりです。で、首尾はどうですか？」

「ええ」

「私が。主様、このシートエという者、私達妖精の心を理解してくれました！」

「そうか」

「はい、これで私も心置きなく……」

「ふむ、まだフェアリにはわれの役に立ってもらわねばな」

「はい」

「にゃ〜！」

「うふふ。はい」

フェアリだからこそリーンの真の姿と真意を感じたのだろう。リーンにも返事をした。

「フェアリさんは甘いものは大丈夫ですか？」

「甘いもの？ 甘いとはなんでしょう？」

「え？ 食事などはどうしているんです？」

「主様の魔力をいただいてますわ」

「そうなんですか、まあこれどうぞ」

「ありがとうございます。んう。何かとても幸せな感じがします。これが甘いということですか？」

「ついでだし何か出しましょうか」

「ケーキ！」

「賛成！」

「うーん、甘いものか」

「今日はドーナツにしよう」

「ドーナツ？」

「甘くないものもあるから」

「それならいいか」

「わあ、おいしいですね。生きていてよかったですわ」
「お気に召したようで」
「はい。是非またいらして欲しいです」
「機会があれば」

他の者はわき目も振らずドーナツを平らげていた。リーンも含めて。さすがにリンズヴァーラの前に出されたものまで手をつけたりはしなかったが。

「よし、帰還する」
「また来るがいい。それまで健勝でな」
「ありがとうございます！」
「うむ、さらばだ」

つづく

24 成長

24 成長

帰ってきた。今日は戦闘自体なかったが、今の強さでの連携はすでにそれなりと言っている。苦手な魔物や翼竜の戦いが大きく連携を高めたのだ。急に実力が上がらない以上、連携を高めることは大事だが、単一的な連携では破られやすいし、まだ学生、これから戦闘スタイルが大きく変わる可能性もある。

「最初の計画通り、明日帰るって事でいいか？」

「ただ、車だけはどうにか隠してでも持って行きたい気がする」

「来る時間が浮いているからもう1〜2日いてもいいんだが」

「先生たちは？」

「あと3日いるようだ。ミサネラ神殿団は最後まで、と言っても5日だが。神殿団は最後の生徒たちに付いてガイゲルドまで来るようだ」

「出来れば3日残って車を回収したい」

「何かあるのか」

「うん、ちよつとね……」

昨日の晩、実はミスリルまでいたでいてしまい、オリハルコンと

同じように車に隠したのだ。何とか車の隠し庫も大きくしてぎりぎり入れた。だが教師陣が帰ってそのまま車を取られると、それらを回収する間がなくなってしまう。

「オレたちにも言えない事か？」

「まあいいか、戦闘特化でない『墮天者』が珍しいらしくてね。昨日の夜リンスヴァーラと呼ばれたんだ。番の人たちがみんな寝てしまったのはそのせいだね」

「それで？」

「オリハルコンとミスリルをもらった」

「オー！ぐむっ！」

よかった。きつと叫ぶと思ったんだ。リーンには悪いけど、リーンをぶつけてワードを黙らせる。リーン、あとでいいミルクあげるから許してね。

「しっ！こつちからばらさないで！」

「……すまん」

「にゃあ〜！」

「あ、リーンはごめん、これミルク……。そういうわけで横取りされたくない」

「そうか。オリハルコンとミスリルのためなら3日くらい平気だ。よし、架け橋は3日滞在を延長する」

「ごめんね」

「いいさ。オレにも少し分けてくれるんだろう？」

「いいよ、ミリアとレインの杖の分だけとりあえずあれば」

「前言っていた杖を作っていただけなんですの？」

「そのつもり」

「家宝になりますわ！」

「ちよつと魔力消費量が増えそうだから、余裕があるときは普通の杖の方がいいよ」

「へえ、楽しみだねえ。2刀流の杖使い」

「頑張ってみるよ。じゃあ先生たちに相談してくるね」

「ああ」

翌日。

「リリア、援護！口を狙え！オレは逆鱗狙ってみる！もしもの時は

「ダイスケ頼む！」

「分かった！」

「了解」

「あたしが頭を叩きます！土魔法で逆鱗狙ってくださいです！もしもはレインさんおねがいです」

「わかりましたわ」

「よし、障壁」

「おし、だいぶ翼竜に苦戦しなくなったな」

「上達したね」

「そういえば翼竜以外に竜種ってどんなのがいるの？」

「中位種に火竜、水竜、風竜、土竜など、属性持ち。上位種は嵐竜、雷竜、溶岩竜、水晶竜など複数の属性持ちと言われているな。まあ人がどうこう出来るのは中位種が限界だろう。明日は休息も兼ねてまたリンズヴァーラのところへお邪魔しよう。そこでなら詳しく聞けるだろうよ」

「そうだね」

「よし、帰還する」

また翌日。

「結局3日ほど残ることにしました。もう少しご迷惑おかけします」
「構わぬよ」

ミリアとレインは写本、シートエはフェアリについて指導を受けている。

ワードはリンズヴァーラに近づくとたずねた。

「リンズヴァーラ、何か鍛冶のこと教えて欲しい」

「ワードか。類まれな戦闘能力を持つておるのに鍛冶とはおぬしも変わったヤツよの」

「そうは言われても」

「まあよい。ほとんど知られておらぬ金属にダマスカスというものがある」

「ダマスカス？伝承のみで存在しない金属では？」

「作り方も効果も特殊でな。別名悲しみの鉄と言われておる」

鍛冶科のリリアと俺も会話に入ることにする。

「悲しみの鉄？」

「そうだ。まずその金属、ダマスカスというものは人の心のこもった金属だ」

「人族の鍛冶の技とは違うのですか？」

「意思を持って動くことがあるほどに違うな」

「意思を持って動く金属……？」

「うむ。生まれた頃から鉄の装飾具を身につける習慣のあった時代があった。その者がその装飾具に愛着を持てば持つほどいい。そして身につけている時が長ければ長いほどいい。そして、煮えた鉄の炉に生きたまま飛び込ませる。そして出来る鉄がダマスカスだ」

「そんな……」

「ダマスカスは炉に入った人の愛で装備者を守る。だから効果はその者から愛を注がれていた者に限られる。その時代は子や孫へダマスカスを遺すものも多かったらしいな」

「だから悲しみの鉄ですか」

「そういうことだ。あとは金も悪くない」

「金ってお金の金です？」

「そうだ」

「でも、魔力が通らなくてやわらかすぎて。武器にも防具にも使われず貨幣としての価値しかないと言われてますよ？」

「膨大な魔力を通すことで変質するのだ。古い装飾具には金を使つたものもあったと思うが……？」

「記録で見たことがありますけど、金でも白金ではないか言われていますが。それに魔力を通すと変質するなんて知りませんでした」

「それは無論必要な魔力量が半端ではないからだ。ダイヤスケほどの魔力の持ち主が人のこぶし大の大きさの金を変質させるには1ヶ月毎日魔力を注がなくてはならないだろうな」

「そんなに……」

「それはさすがに試す人がいないでしょうね。一般人なら何年かか
ることやら。技術が廃れるのも分かりますね」

「うむ。そしてだ、変質した金は白く変わり魔力との相性が良くな
る。魔法効果が高まったりするな」

「たしか、研究者が白金を使つて失敗したと聞いたことがあります
たが。それは元が金だからなのですね」

「他にスターストーンとの面白い性質がある。近くに置くと何もし
なくてもお互いが引かれ合う」

「それは凄い！何か作れそう」

「ダイヤなら作れそうね」

「時間はかかりそうだけど」

「試せるだけのものをやろう。これだ」

「これが金？」

「元はな」

「われなら一瞬だ」

「そうか、古竜の魔力なら……」

「まあ自分で作るときの感覚も養っておくんだな。出来て損はない
ぞ？」

「そうですね」

またまた翌日。

「今日はいろんなパターンで誰かが戦闘不能になったと仮定して戦
うことにしたいんだが」

「それ、この駆け出しパーティに必要な？」

「必要であると思うぞ？」

「このダンジョン、安全とは言っても魔物は本物だし、遠慮なんてしてくれないよ？ちよつと余裕が出たからって調子に乗りすぎじゃないかな？」

「レインに賛成。本当に相手を考えて息をするように連携できるようになれば、そんなことを考えるのは必要なくなと思う。それよりも声を掛けずに連携できるのが最終的には一番の目標だと思うよ」「ダイスケの言うとおりだな。サインもいいが、前衛はどうして欲しいのか。後衛はどんな魔法を使いたいのか。遊撃はどちら側からいくのか。声かけは初期の連携として当然のことだが、それを超越したパーティは数少ない。そしてそれが出来るパーティは全て名前を知るほどのものになる。わたしはそんなパーティになりたいと思う」

「目だけで通じるってヤツかな？かつこいいね！」

「それが可能ならいいパーティになりそうですわね」

「それが出来るパーティなんて数えるほどですけど、目標としておいて置くのは悪くないとおもいますよ」

「あ、あたしはワ、ワード、の言うことをやってもいいと思うです……でも……」

まだ名を呼び捨てるのが恥ずかしいのか、どもりながらリムナが言う。

「でも……？」

「はいです。いつかは必要だと思います。でも……」

「でも、なんだね？ワードは何か言われてもリムナのことを嫌わないから大丈夫」

「レインさん……」

「言っていいよ。言いたいこといえないなら仲間じゃないしね」

「ダイスケさん……」

「言ってくれ」

「ワード……はいです、確かに後衛が魔法を使えないとき、索敵中に敵に見つかって前衛が間に合わない時。誰かが怪我をしたとき、誰かを保護した時。それから奇襲を受けた時。それを出来るだけ考えておくことだけでもとても重要だと思います。でも、でも目的が手段と変わっている気がするです。いろんな準備はパーティの形を目指すものにするためだと思います。その準備を目標としては駄目だと思っです。……ごめんなさいです。よくわからなくなっちゃいましたです」

「確かにワードの言うことももっともだがもつと高みを目指せというとか。通過点を目標にはしない方がいいと」

「ああ、フィアナ、そういうことだろうね。いいこと言うね。たくさん勉強したんじゃない？」

「あたし、ずっとワードを見てましたです。あたしはただ力があるから格闘科に入っただけなんです。でもワードは能力があってもやりたいことをすでに考えてやろうとしているです。凄い人だと思います。あたしも見習わなきゃって。それからはいっぱい勉強したです。いつか胸を張って隣に立てるようになって考えたです」

「……」

「良かったねワード。ワードは結構誤解されることが多いからこういう娘は大事にしないとね」

「どういう意味だ、ダイスケ？」

「ワードって気になった人に突っかかるでしょ？たしかにその方が相手の本質を見抜きやすいのかもしれないけどさ。でも敵を作りやすいし、それに付き合ってくれる人か無理やり付き合わせた人以

外はワードを理解してくれないと思うんだよね。レインのように。それをワードの気持ちを考えてあまり悪い言い方をしないで納得させる。すばらしいね」

「リムナ、ありがとう」

「ワード、そんなことないです。あたしももっともつとがんばるです！」

「ああ、一緒にな」

「はいです！」

「結局今日はどうしようか？」

「うむ、結局みんなの言うとおり、パーティとしての最終形、無言の連携まで持っていくために、色々な展開を仮定する」

「……言い方でだいぶ違うね。それならもしかしたら否定しなかったかも」

「ワードは色々省くからな。わたしとの喧嘩もそれが原因だったろ。言葉が足りない時がある」

「リムナ、支えてあげるのですわ。わたくしもレインを支えますものの」

「はいです！ミリアさんお願いしますです！」

「わたくしたち仲間ですものね」

「話はまとまったかしら？では行きましょうか」

「ふむ、なかなか興味深い動きをしておったがそんなことまで考えるようになったのか。おぬしらが熟練のパーティになる日も遠くないようだな」

「オレはまだただけど、それなりにやってみます！」

「ふふふ。よい心がけだ。では1つ助言だ。仲間を頼るのは恥ではない。これは覚えておくのだな」

「肝に銘じます」

「うむ、最後に饞別を与えよう」

「なにかもらってばかりなのですが……？」

「なに、おぬしらのパーティには色々面白いものを見せてもらった。教師陣が翼竜の連戦をくぐり抜けたことも興味深かったが、やはり人の成長を見るのはいい。ダイスケの異世界の食べ物もとてもな。ではこれをやろう。その子猫につけてやるがいい」

「なんか首輪に見えるんですけど？」

「普通はな。だがそれにはわれの力が込めてある。本当に助けが必要な時は呼ぶがいい。それからそれをつけていることでリーンは人語が理解できるようになるだろう。われ以外のものには外せないようにしてあるゆえ、何かあればリーンを幻獣として紹介してもよからう」

ついリンスヴァーラを見てにやりとしてしまう。これなら確かにファイアナ、リリア、シートエ先生以外にリーンの力を仲間に見られてもごまかしやすくなる。

「本当に危険でない場合はわれも反応しない。出来る限り己の力で物事をくぐりぬけよ。それでも駄目なら願うがいい。きつと力を貸

そう。それにわれはそれを通しておぬしらを見ておる。今後モ期待しておるぞ」

「はいっ！」

「うむ、今度こそ健勝でな」

「ありがとうございます！」

「また会おう」

つづく

25 結果

25 結果

帰還後、夜。

「ドルデイ先生、翼竜と連戦したって本当なんですか？」

「ん？レインか。マント2着分くらいだったかな。それより誰から聞いたんだ？」

「リンスヴァーラから」

「会ったのか？詳しく話せ」

「はあ……。と言っても僕たちには恐れ多すぎて……。シート工先生が時空魔法のことを聞いたようですが、僕たちはとても話はできなかったですよ。あ、でも歴史の本は見せてもらいました。凄かったです」

「内容は覚えておるか？」

「いくつか写本させていただきました」

「提出は？」

「個人的にいただいたので出来ません。持って行かずに写本するようでしたらいいですけど」

「そうとりはかるう」

「そうですね」

「リンスヴァーラに会っただって?!冗談だろ?」

「いや、まじめな話」

「証拠はあるのか? いやワードを疑っているわけではないが」

「先輩たちの探索はどうだった?」

先輩だろうが口調が変わらないのは王家ゆえか性格ゆえか。相手も砕けた話し方をしているのだから性格なのかもしれないが。

「ああ、初日から弱点ばかり突かれたなあ。今日は最後に翼竜が出てきて手も足も出なかった。逆鱗を攻撃するのも怖いし、結局逃げてきちまったけどな」

「あれは確かに怖い。オレたちも7人でやっとだった」

「あと2日ある。それまでになんとかしてもやる。それよりもだ! リンスヴァーラに会ったって証拠はあるのか?」

「あれ見てみ?」

少し離れた所ではシートエ先生がフェアラ族の生徒に囲まれ、豎琴を鳴らしながら飛んでいるところが見えた。翼から光の粉を撒きながら。

「うおっ!」

「あれだけでも充分分かるだろ？」
「たしかに……」

「わあ！シート工先生！もう1回もう1回！」

「結構魔力使うのよ？これ。もう1回だけよ？」

「その豎琴使えばみんな飛べるようになるの？」

「どうかしら。たぶんとしか言えないわ。もしかしたら私は服飾の鍛冶科からフェアラ族の時空魔法科なんかが出来ちゃって異動になるかもしれないわね？」

「わっ、わたし行きます。そこ！」

「私が上達して豎琴が要らなくなればもしかしたらできるかもしれないわ」

「先生！豎琴貸してくれ！」

「今は駄目よ。ちなみに所有者固定魔法が掛けられてるから、他の人には触れないわ。ためしてごらんなさいな」

「お、ああ……。触れない……」

「ね」

「フィアナ君、いやフィアナ様、これは、この巻物は失われた刻印魔法ですか……？」

「ええ、オルフェール先生」

「またわれらエルフ族とダークエルフ族の結びつきが強くなりますね……」

「はい、エルフ、ダークエルフの垣根は徐々に消え、単にエルフ族と呼ばれる日がきつと来ると思います。周りのみんなもこのようにエルフとダークエルフが一緒にいてももう喧嘩も起きないんですから」

「楽しみですね」

「はい」

「ミリアル様、危険はございませんでしたか？」

「あら、わざわざここまで来たの？」

「予定の日を過ぎても帰らないことに旦那様が心配なられて。私が代表として参ったしだいでございます」

「そう、ごめんなさいね」

「私のような一執事に謝るなど、あつてはなりませぬ」

「そんなことはないですわ。わたくしはこの機会、とても勉強になりましたわ」

「リンズヴァーラ様にお会いになったとか」

「ええ。レインのおかげですわ。それに仲間も」

「お屋敷でのレイン様の評価も高くなったようです」

「それはいいことですわ！それならいつレイン様をお呼びできるかしら？」

「まずはパーティの皆様のご紹介を兼ねてがおよろしいかと」

「確かにそうね。あなたの力を借りられるかしら？」

「お任せください。私もお屋敷に仕える以前は魔術師であつた身。

そしてミリアル様の指導魔術師として出来うる限りお力にならせていただきます」

「ありがとうございます」

「明日は帰るのね……」

「そうだね、リリア。なかなか得がたい経験だったね」

「あんなに長く古竜とお話した人はいないと思うよ！」

「まあここに本人がいるんだけどね」

「にゃーにゃ」

「うふふ、リーンもこれからよろしくね！」

「にゃん！」

「そういえば念話のようなこと出来ないのかな？」

久しぶりに思えるが、つい先日と同じように、俺とリリア以外の周りの人の陰になるようにして文字が浮かぶ。

“特殊な魔法が必要だ。詳しく言えば時空魔法に分類される。特定の者と話ができるように契約するのだ。シートエがもう少し上達すれば出来るようになるう。われとダイスケ、フィアナ、リリア、シートエを結べば問題あるまい”

「聞かれたくないことかどうしたら？」

“呼びかけてつながったことを確認しなければ話はできぬよ”

「複数は？」

“造作も無い”

「じゃあシート工先生にその内お願いしようかな」
「そうねっ！ダイスケと繋がるのね！」
「別の意味に取れるような表現をしない」
「ごめんなさい」

「リムナ、どうだったの？」
「どう？……ですか？」
「ワード様よ！」
「ワードは、その、あのです……」
「キヤー！呼び捨てだわー！」
「え？そそそれはですね！」
「どこまで行っただの？どこまで！」
「まだまだこれからですよ」
「あゝん、これからですって？」
「ただだからですね……」
「もゝ、かわいいわ」

まあ色々騒がしかった。

つづく

26 帰路

26 帰路

「忘れ物はないか？」
「はいです」

「ミリアは自分のところの馬車で？」
「そんなわけありませんわ。レイン様と離れるわけがありませんわ」

「車どうするの？」

「うん。先生たちのものに引っ張っていつでもらうように見せかけて、他の生徒から見えなくなったところで乗り込むかなあ」

「では周りのことは出来る限り調べよう。どこから覗いているかわからんかな」

「ミリアの執事さんにもなにか言っておくべきかなあ？」

「ミリアにはわたしがそれとなく伝えてくる」

「ありがとう」

「気にするな」

「ミリア、ちょっといいか？」

「あ、フィアナさん。どうなされましたの？」

「ミリアの執事の件だが……」

「彼は口外しませんわ」

「そうか」

「休憩の時にでもちよつといいビールでも与えてくだされば、確実でしょうね」

「……だそうだ」
「了解」

「出発！」

「休憩！」

「えらい早いな？」

「車を切り離すよ」

「そうか、ちよつとダンジョン探索で体力が付いたのか結構歩きも平気だな」

「そりゃ、翼竜を2匹同時に相手にすることが出来るようになったからね。体力よりも体の使い方がうまくなったのかもね」

「そうか、確かに数日で力が上がったりはしないわな」

「今まで無駄に力が入っていたのかもしれないな」

「ようし、準備完了」

「先生たちはどうすんだ？ 答えによっちゃまた荷物移動させないといけないが」

「もちろんそつち！」

「やつぱり。と言うかシート工先生は練習がてら飛んで行ったら？」

「今はまだ譜を完全に覚えていないからまずそれを覚えるわ。ああ、揺れないって偉大よね！」

「快適ね。目的地に移動しつつお茶も飲めるし勉強も出来る。早くこの車が増えないかしら」

「量産できればいいですね。まずは馬車にばねをつけるのが手っ取り早く揺れないようにすることでしょうけど」

「……そんなものがあるのか？」

「ええ、タダッカ先生に明後日あたりに車と込みで試作品をお渡しますよ」

「……そうか」

「さて、昼にするぞ！で、ダイスケに頼んでいいか？」

「うん。どうしようかなあ。お昼で外で酒ありなら……。バーベキューか？」

「ばあべきゅう？」

「まあ楽しみにしてて。簡単な料理だし、時間はかからないよ。あ、鉄板作らなきゃ。まあみんなで飲みながら待ってて」

「いただきます！」

「……………いただきます……………」

「これ、本当にただ焼いただけなのか？」

「ええ、まあたれもいいですけどね？」

「ビールが進むな！お代わり！」

「はいはい」

「これはなんだ？肉ではないようだか？」

「イカ」

「イカとは海にいる白い10本足のものか？」

「うん。こっちはタコ。で、これがエビ」

「海のものすら出せるのか」

「みたいだね。フィアナがいるから魚介類も必要かなと思ってね」

「ありがとう」

「いえいえ」

「この野菜、身がしっかりしてる」

「ええ、おいしいですわね」

「こんな野菜もあるんだ……」

「何とか栽培できませんかしら？」

「ダイスケ、これって生のままで出せる？栽培できるか調べたいんだ」

「今度出してみる。種のあるものなら大丈夫だけど、それ以外は俺食べるだけで良く知らないから。ごめんね」

「研究していきばいいさ」

「そうですわ」

「分かったよ、出しておくね」

「よろしく」

「ダイスケさん！この黄色いのはもしかして？」

「とうもろこし」

「こんな大きいのは見たことないです！」

「そう？こんな風にたれをかけて少し焼いて。……食べてみて」

「においもいいです。ちみっ。わっ、おいしいですう！ちみちみちみ……」

「もう話も聞かなそうだね……」

「ダイスケっ！」

「なに？」

「お肉！もつと！」

「良く食べるね、はい」

「成長期だもん！」

「わかったわかった。いい女になってね」

「あつたりまえでしょ！」

「ダイスケ君、ついで！」

「もう酔ったんですか？シート工先生？」

「ビールなんてお酒じゃないと思っていたもの」

「ああ、これはいいな、私にももう1杯いただけるか？」

「オルフェール先生にも気に入ってもらって何よりです」

「ずっと差し出されるタダツカ先生のコップ。こちらも無言で注ぐ。」

「この間もらったものもいと思うたがこれもいいのう」

「また飲める機会があるといいですね、ドルディ先生」

「もう1杯！」

「はいはい。もうこの瓶にためときますよ。ぬるくなる前に飲んでくださいね」

「にゃん！」

「リーンはどれ食べる？生肉の方がいい？」

「にゃん」

にゃんは肯定、にゃにゃんは否定ととりあえず決めていた。

「はい」

「にゃん」

「どうですか、ハルさんとミリア……、いえ、ミリアルさんの執事さん」

「ああ、ダイスケ殿、これもワインとはまた違った味わいでいいですね。ダイスケさんの依頼は最優先でこなしてしまいそうですよ」

「あはは、ありがとうございます。執事さんはどうですか？」

「これが本物のビールなんです……」

「まあ俺の世界ではそうなっていました」

「しつかり味わわなければと思うのですが、どうも一気に飲んでしまいます」

「どうぞ。まだありますというくらいでも出せますし」

「ありがとうございます。私のようなものにこのようなことをしていただいて」

「ミリアルさんとレイン君の仲がうまくいくようであれば今後ともいくらでも」

「ミリアル様の幸せは私の幸せでございます。今後も楽しみに待ちましょう」

「口外しないように出来ればお願いしたいです」

「私はミリアル様のことに關して、旦那様より最優先にと承っております。そのミリアル様が悲しむような真似は命をかけていたしません」

「こつちもミリアルさんとレイン君をけしかけた手前、うまくいかないと後味悪いですし、よろしく願います」

「おまかせください」

「ぐがー！」

「すうすう……」

「うーん、ちょっと腹が立つねえ」

「酒を出したのはダイスケだろう？言われればいくらでも出したのも」

「それはそうなんだけど……」

「まあ子供らしい、と酒を飲んでおいて言っていいか分からないけど、こんなみんなの姿はあまり見られないだろうからいいか」

「まあな」

万屋のハルさんと執事さんは御者の仕事があるから当然として、車の中で起きているのはダイスケとフィアナだけだった。フィアナは突然の2人きりに少しうれしそうだ。車の中は、ワードとリムナ、

レインとミリア、リリアとシートエ先生、タダツカ先生とオルフェール先生とドルディ先生が寄り添って寝ていた。リリアとシートエ先生まではなんとなく幸せそうに寝ていたが、同じく幸せそうなドルディ先生とタダツカ先生にはさまれたオルフェール先生はなんだかうなされているようだ。お気の毒に。

特に危険もなくふわふわとした酩酊感に眠りを誘われながら車はガイゲルド城下ガイの町に向かっていった。

「みんな着くよ。起きて！」

「んがっ。……ふわああああ」

「おはようございますっ」

「しっかり寝てしまいましたわ、あ、あら……？ ああっレイン様、ごめんなさいっ！」

「ふわぁっ……。わっ、ミリアごめん！」

「もう朝……？」

「あふっ。……いえ、町に着くようね」

「ふむ、なかなかいい寝起きだわい！」

「私はなぜか最悪です……」

「……ふっ」

「みんな、飲みすぎなんだ、ちよっとはダイスケをいたわろうとか
思わないのか？」

「まあまあ。それなりに面白いものも見れたし、気にしないよ」

「ダイスケが気にしないならいいが……」

「とりあえず荷物の事もあるし、みんな学校へお願いします」

「はい」

「かしこまりました」

「自分の道具だけ下ろして。忘れても俺の研究室においておくから
問題はないけど、それから今回使った俺の武器はまだ試作だから返
しておいてね」

「わかった」

「はいです」

「目立つ状態で街中走りたくないからみんなのこと送れないけど」
「私が回りましょう」

「ではミリアル様とレイン様は私が」

「教師陣は学校の宿舎ですからね。ハルさんお願いしますね」

「ちょっといい酒をいただきすぎましたからな。これくらいは」

「そうだ、ダイスケ、明日はどうする？」

「とりあえず寝る」

「そ、そうか」

「寮の部屋が研究室にいたと思うから何かあつたら声を掛けて」
「わかった」

「おやすみ」

つづく

27 念話

27 念話

「ふう、よし、魔法力も満タんだ、今日はなにをしようかな。って
そうだ、車の改造とモノを出しておかないと。それからバネもか。
あとは万屋用に酒か」

「にゃん！」

「そうだ、朝ごはんにしないとね。ご飯に味噌汁、海苔とお漬物つ
と」

「それはなんだ？」

「ああ、リーン、俺の世界の定番の朝ごはんってヤツだね。食べる
？」

「ああ、お願いしよう」

「はい。ってそういえば猫って猫舌って言うけど、どうなの？」

「古竜にそんなものあるはずが無い」

「じゃあ、食べられないものもないと」

「無論」

「車はよし。オリハルコンとミスリルは床下収納に隠しておくか。後はバネか。板バネがいいかな、取り付けの観点で」

「にやにやにや！」

「誰か来た？」

「にゃん」

「……いるか？」

「タダツカ先生。おはようございます」

「うむ……車を」

「ええ、そこにあります。台車も持っていてください」

「む？形が……」

「多少、見やすいようにしてあります。それから作成には刻印魔法がきつと要ります。エルフの方たちとも相談してみてください。それからこつちが鎧です、それからバネ。バネは模型です。小さい馬車を作ってみました。ただ良質な鉄と均一な焼入れが必要かと思えます。こちらはノームの方たちと相談するといいかと思えます」

「……恩に着る」

「いいえ」

「では……」

「お茶でもどうですか？」

「一刻も早く作りたい……」

「そうですか。ではまた」
「……邪魔した……」

「にやにやにや！」

「今度は誰だろ？」

「よろしいでしょうか」

「ああ、ハルさん。そこに瓶があるよ」

「ああ、ありがとうございます」

「ちゃんと2本用意したから」

「言葉ありません」

「では依頼よろしくおねがいします」

「かしこまりました」

「うーん、杖、厳しいかも」

「なにがだ？」

「ワードにわかる分のミスリルがなくなりそう」

「そうか。しかし駆け出しの鍛冶学生に扱えるものでもなからう」

「それはそうだけど」

「ワードがミスリルを見せびらかしたら周りの反応がどうなるか」

「そうか。今回はオリハルコンのハンマーで我慢してもらおうかな」

「それがいい。あれならちょっと見ただけでは鉄と変わらぬからな」

「まあお昼あたりに来そうな予感がするし、そのときでいいや」

「来たぞっ！」

「やつぱり」

「なんだ？」

「いや、ワードなら昼に来るんじゃないかと。リリアとフィアナ、レインとミリアまでいるとは思わなかったけど。リムナは？」

「寝てた」

「そうなんだ」

「オーガ族は燃費が悪いようだからな。しっかり食ってしっかり寝ないといけないそうだ」

「それは知らなかった」

「それはそうと、メシだ！」

「……いい加減お金取るよ？」

「構わん。いやそれの方がこっちもかえって頼みやすい」

「なるほど……じゃあいくらか取ろうかな」

「あまり高くしてくれるなよ？」

「分かってるよ。その代わりと言うとなんだけど、ワード、ミスリルは分けるほどないみたい」

「……いや、いい」

「あれ？どうしたの？」

「鉄で満足に剣を打てないものがミスリルに手を出してもどうせ満足にいかないさ。次の機会を待つ」

「代わりと言ってはなんだけど、オリハルコンのハンマーは用意したから」

「それはありがたい！」

「もう1本はライラスさんに渡してほしい」

「父ちゃんに？！いいのっ？！」

「お世話になってるし」

「わかった、渡しとくね」

「おねがい」

「はあ、このしちゅーというもの、おいしいですわ！」

「うん。野菜もいい味出してる」

「肉は入っていないのか？」

「フィアナが同じものを食べる時はあまり肉を入れないようにしようかと思って。昨日のバーベキューのように材料だけ出して後は勝

手になら問題ないんだけど、料理の種類決めちゃうと、中身まではなかなか個人個人で変えられなくて。ごめんね」

「いや、上等だから気にするな」

「ありがと」

「でも何日も食べたが、だんだん普通の料理も恋しくなるから不思議だな」

「おいしいもの、味の濃いものばかり食べ続けるのは難しいってことじゃないのかな」

「なるほど」

「上等な料理を食べてても時々ジャンクフードが食べたくなるよ」

「じゃんくふうど？」

「うん、例えば……、そうだねこの世界で再現可能な感じだと……よし。食べてみて」

「パンの中にお肉が入ってる。それからトマトとチーズも。こんな初めて。はしたないけど手で持ってガブっといっちゃう」

「若い子には特に人気。安く上がるし」

「これ、ミリアンとここで商品化したらどうだ？たしか露天の系列も持っていただろ？」

「ジャガイモを細切りにして揚げて、塩をまぶしたものと合っよ？もしくは薄切り」

「そういつて某ハンバーガーチェーンのようなフライドポテトと、ポテトチップスを出す。」

「確かにいいですね。露天の一部、学校の近くのは勉強のためにとわたくしに裁量が任されておりますわ。さっそく試してみたいですわ」

「肉用のたれを提供するのもやぶさかではないよ」

「本当ですか？！」

「味覚と胃を握るのは大きいし。それに例えば、何か俺に対して不穏な動きがあります。でもそれがそのパンの肝の部分を作っていま

す。それを知る人は？」

「ディスクを守るでしょうね」

「仲間を増やすのが一番だけどね、反抗したくなくなるには娯楽が
快楽を握るのが効果的かな」

「まあ僕たちもあまり変わらないかも」

「パーティの仲間には俺は命を預けてるから同じじゃないよ」
「そう！」

「明日は？」

「もう3日は自由だな。結局ここに集まってしまいそうだが」

「フィアナ、エルフの集落って近い？ 刻印魔法が出来る人たち」

「ここから馬車で2時間という所だが？」

「明日杖を作るから。それから投擲武器の試作も。それに刻印魔法
をかけて欲しい」

「あたしも行くっ！」

「まあそれは構わんが……」

「あ、レインとミリアもお願いしたい。魔法を試してもらわないと」
「わかりましたわ」

「僕もいいよ」

「こんなもんかな……？」

折角の休み、ワードは早速ハンマーを試しに。レインとミリアはデート。残ったのはリリアとフィアナ。代わりにシート工先生が「お茶」と言いながら来たが。

「それはメイスではないのか？」

「魔法が尽きたらただの杖とかちよつともったいないかなって。折角ミスリルやオリハルコン使えるんだから」

「それはそうだが」

「そういえばダイスケ、投擲武器って？」

「ああ、これとこれ」

「こっちは投げナイフだと分かるんだけど、これってブーメラン？」
「うん」

「投げナイフはいいけど、ブーメランなんて何かに当たったら返って来ないじゃない」

「それも含めた試作なんだけど？」
「ふうん」

「そういえばシート工先生、念話の時空魔法は使えますか？」

「え？ 譜にそういう魔法があったのは覚えてますが」

「いえ、リーンとも相談したんですけど、この4人とリーンで念話
が出来るようにしたいなと」

「たしかにそれは便利ね」

「相手呼びかけないと繋がらないようですし、そんなに困ったこ
とも起きないかなと」

「このように4人だけならばわれが話をしてもいいと思うんだがな。
ワードたちがおると、われの話はリンスヴァーラだと思っだらうし
な」

「リーンちゃん……。そうねちょっと試してみましよう。どのくら
い効果があるか、どのくらい持つかも覚えておかなくてはいけませ
んし」

「そうですね。戦闘中にいきなり切れたりしても困るもんね」

「ではいきますね」

シート工の魔歌に呼応するように、4人と1匹を囲むようにして
3メートル程度の魔方陣が出来上がる。魔方陣から光の粉が巻き上

がり、4人と1匹をやわらかく包む。良く見るとそれぞれの額に小さな魔方阵が現れているようだ。たぶん俺の額にも同じように出ているんだろう。痛くもかゆくもないのはありがたい。

「終了です、これでいいはずよ」

（みんな、聞こえる？）

（聞こえるわ。成功ね）

（ふーん。便利ね）

（将来的にリーンのことが黙認されればパーティで使ってもいいな）
（悪くない。これなら猫のまま生きていけるな）

（たしかにリーンの子猫の姿で重厚な声が出るとちょっと差が面白いからね）

「リーンには今ので大体仕組みが分かったんじゃないの？」

「にゃん」

「特に急を要するならリンズヴァーラの名で警告とかしてもいいかもね」

「にゃん」

よし、明日の成果に期待しよう。

つづく

28 他族

28 他族

「『架け橋』、出発である！」
「はいです！」

「なんでワードたちがいるんだ？シート工先生も」
「何言ってるんだ？オレたちパーティだろ？」

「そうです」

「そうか……」

「今日は車はないからな」

「……え？」

「あんなもの日中走る訳にいかないよ」

「でも前は」

「人力車に偽装してたし、ダンジョン方向なんて人がいないからって聞いたから出ただけで、エルフ族集落方向なんて見てよ、学生も休みだし、結構人がいるじゃないか」

「そうか……」

「タダッカ先生と今日行くエルフ族の人たちをお願いするんだね。早く一般化してくれって」

「ああ……」

「けつが痛くなってきた」

「休憩したいです」

「確かにこれはきつい」

「でもミリアのところの結構いい馬車なんだよね？」

「そうですわ」

「借り賃幾ら位？」

「わたくしの家は情報分析に長けておりますの。杖をわがりラブレム家にいただけること、できれば時空魔法の所有者固定化魔法をかけていただけること。個人的にはレイン様にも。これを条件にこの馬車はわたくしたちパーティの専用になりますわ」

「御者さんは？」

「平時であれば執事、そういえば名前を紹介しておりませんでしたね、マイルが務めますわ」

「そうですか、マイルさん、よろしく願いいたします」

「こちらこそ」

「そういえばマイルさん、索敵は？」

「私、ダークエルフでしてね。得意ですよ」

「ダークエルフの魔術師とはまた珍しい」

「そうですね、フィアナ様。我々ダークエルフはなかなか町に出る者もいませんから。私、両親は人だったようでして。その頃まだダークエルフとエルフは仲が悪く、エルフの方々は人と友好に接していたようで、余計に町ではダークエルフというものの評判が良くな

かったのです。旦那様に拾われ、今こうして生きていることが出来ますが、そうでなくては今頃どうなっていたか」

「そうなんですか」

「ええ、それにフィアナ様はわれわれダークエルフにとっても希望。今では町を歩いていてもエルフの方も普通に接していただけですよ」
「そんなことはない。ただのきっかけだ」

顔を赤くしてそっぽを向くフィアナ。恥ずかしいのだろう。

「それでは休憩にしましょうか。このあたりは安全ですから」

「危険もあるんですか？」

「森が近いと多少は。ハイエルフのフィアナ様がおられますから大丈夫だと思いますが、熊や猪などの自然生物も一般人にとっては脅威ですし、エルフやダークエルフが掃除をしているとはいえ、ゴブリンなんかも出ますしね」

「へえ」

「ちょっと余分に鉄を持ってきてよかったな」

「何かするの？」

「馬車の乗り心地を良くしようかと」

「是非頼む！オレもうキツイ」

「車輪を独立させるのですか？」

「タダッカ先生にはこれを先にしたほうがいいとは伝えましたけど」
「この弓状の鉄は？」

「板バネとか言われてますよ」

「ダイスケ君は教師に向いているかもしれないですね」

「そうですか？その前に車が何かで世界一周したいんですが」

「先生も行きたいですね」

「シート工先生には先生の仕事があるでしょう？豎琴の量産と譜の写本が出来ればフェア族の時空魔法科が出来るかもしれませんし、当分先生は暇にはならないでしょ？今日も良かったんですか？」

「写本ばかりじゃ疲れるもの。あらかた写本は終わったし、譜の量産は他の人に任せたわ」

「へえ」

「豎琴のことも譜の写本も純血の人に届けるようにしたわ。彼らなら相当な熱意を持って当たってくれるでしょう。先祖が持ち出した古書の中に豎琴の記述もあったようですし」

「そうなんですか？」

「ええ、学校の古書にあるくらいですもの。豎琴の作り方なんて娯楽だとばかり。魔国との戦があるんですから、そのようなことをしている間はないと考えていたようですね」

「なるほど」

「これでいいかな。最初は様子を見ながらお願いします」

「かしこまりました。出発いたします」

「おお、楽だ楽だ！」

「ダイスケ様、材料と手間賃お出しますので、リラブレム家の馬車をみんなこうしていただけませんか？」

「俺はいいけど、馬車職人みたいな人は大丈夫？」

「貴族の馬車職人は装飾が主ですわ、機構にこだわることはあまりありませんわ」

「何台くらい持つてるの」

「10台程度でしょうか……」

「まずは数台だけにしてほしいな、出来たら……」

「伝えますわ！」

「色々やってみてそれなりに大丈夫と言えるようになってからじゃないとなにがあるか分からないし」

「そろそろ到着です」
「わかりました」

「おお、これは姫様、ごきげんうるわしゅう！」
「姫じゃない！」

満面の笑みでフィアナを迎えるエルフ族のおじいさん。急に表情を厳しいものに変え、こちらをじろりと睨む。

「おぬしらは？エルフ族ではなさそうだが？そこな者はダークエルフのようだし、ダークエルフがなんの用だ？」

正直、リンズヴァーラに会った今ならこの程度の恫喝、なんてことは無い。リンズヴァーラに会う前ならヘイコラと下手に出てしまっただろうけど。

「フィアナの仲間です」

淡々と事実を話す。

ふむ、となにか考えるそぶりを見せ、そのおじいさんはまた満面の笑みになる。

「ようこそおいでなされた、エルフの集落へ」

我慢できなかったのが1人。ワードではなかった。ワードもなんてこと無いという顔をしていた。王族としてそういった経験も多いんだろう。

「じじいっ！」

止める間もなく、短剣を抜いて切りかかったのはフィアナ。ほっほっほなどと笑いながら、ひらりとかわすおじいさん。

「まあまあ、フィアナ、やめときなよ」

「そうは言うがな、ダイスケ！わたしの気がおさまらない！」

まあまあとみんなでなだめ、何とかフィアナの機嫌もなおる。

「で、おじじ、さっきのはなんだ？わたしの仲間を試したのか？」
「ワシらの教えをよく守っておられるようすな。いい仲間ですぞ」

「当たり前だ！」

「まあ、お昼もまだでしょう。どうです？生家でお昼を取っては。その後ワシらも話を聞きましょう」

「そうだな……」

「私は馬車でお待ちしております」

「そのダークエルフの方も気にせず。このエルフの集落とダークエルフの集落。今ではお互いを気安く行き来する間柄。ここの者たちも気にはしますまい」

「しかし御者として今日は来ておりますので」

「ではワシと昼食でもどうですか？まあおいでなさい」

「ここがわたしの家だ。生まれたところは違うがな」

「そうなの？」

「ああ、父と母はダークエルフとエルフ。当時は駆け落ちさ。町のすみでひっそり暮らし、わたしが生まれたのさ。今は父も母も認められてエルフ、ダークエルフそれぞれの集落で交代で住んでいる」

「へえ、そうなんだ」

「ああ」

「ただいま」

扉を開けた瞬間、小さな影が飛び出してきた。

「おかえりなさいっ！」

「わっ！つとナルナか。元気にしていたか？」

「はいっ！お姉様も元気でしたか？」

「ああ。みんな、紹介しよう、妹のナルナだ」

「ナルナです！初めまして！」

「初めまして。お姉さんの仲間だよ。よろしくね」

「よろしくおねがいますっ！さあ、お姉様、はいつてはいつて！」

「ああ、みんなも入ってくれ」

「おじゃまします」

そこにいたのは少し色黒の熟年の男性と、年齢不詳に見える女性。耳が多少とがっている以外は普通の人とあまり変わらない。

一通り自己紹介し、お昼をいただいた。

「さて、では刻印魔法とのことでしたな、研究所の方に行きましょうか」

「おじじ、研究所などいつ作ったんだ？」

「少し前に完成しましてな。ダークエルフ、エルフ両方で使いやすいように昔戦場であった場所に作ったのです。いい具合に平地ですからな」

「そうか。ではこれも無駄にならなそうだな」

「それはなんですか？」

「リンスヴァーラからもらった原書の片割れだ」

「何ですとっ！では早く行きましょう、急ぎましょう」

「ここが研究所になっておりますな」

「結構な建物だね」

「刻印魔法を武器に入れることも多いですし、極まれに暴発しますでな。研究者を守るためにもそれなりのものが必要なですよ」
「なるほど」

「ワシら4人がここの責任者として管理しておる」

4人の長老。聞くとエルフとダークエルフが半々。その族長と副族長をかねているらしい。ちなみにこの中のエルフ側の副族長の別荘のような使い方の町の家にフィアナは今住んでいるらしい。

「では早速、これなんです、融合の刻印をお願いしたいんです」
「そんなもの初歩も初歩ではないか。ワシらがやるほどではないのではないか？フィアナ様でも出来ると思うが？」

「持ち手のここ、3センチの円の中で収めて、杖と言うかメイス全体を融合させてほしいんですが」

「なんだとっ！」

「できませんか？」

「できるわい！馬鹿にするでない！ただし、……1日かかる」

「それくらいなら。では2本、お願いします」

「うむ」

「それから……」

「まだあるのか？」

「ええ、このスターストーンと投げナイフ10本を同じ関連付けを。こつちのはこのブーメランと。それぞれ、リリアとフィアナの魔力に関連付けて欲しいんですが」

「どういう効果がある？」

「ある程度の距離までは投げても戻ってくる予定です」

「ふむ。面白そうだな。これはなにでできている？」

「金ですが？」

「失われた白化か……」

「知っているんですか？」

「どう作るかは知らぬがな」

「延々金に魔力を注ぎ続けるらしいですよ」

「そんなことか？」

「俺の魔力を全力で魔力を注いで1ヶ月でこぶし大と聞きました」

「そうか、それなら失われるのもわかるというものだな」

「ええ」

「今日はここへ泊まっていけ」

「いいんですか？」

「刻印担当は眠れないかもしれないが、困いのある修練場がある。

ダークエルフの者たちにも連絡は言っておろつ、宴会になるだろうよ」

「どうする、フィアナ」

「上座に1人座らされるのでなければいいだろう」

「集落でもすごいちゃほやされてたもんね!」

「ありゃあオレでも切れるかもしれん。子供じゃねえってな」

「わかる気がします」

「フィアナさんもすましておられればおしとやかそうに見えますのにね」

「ミリア、何気にひどい事言っね……」

「一応、何か寄って来ないように結界張った方がいいのかしら? 野外で宴会と言っていましたし」

「ふう、飲んだ飲んだ」

エルフの集落ではフィアナがもつとも注目的であるから、いくら『墮天者』と言ってもダイスケにそんなに目が集まらない。元々は閉鎖的な種族だったのもあるだろう。フィアナの(ダイスケ、助けにこないか!)などと言う念話も流し、リーンとぼおつとしていた。

「ダイスケさん。楽しんでおられます?」

「はい、えっと、タルカさんとフィーさん、それからナルナちゃんでしたよね」

「ええ、フィアナからの手紙は最近、いいことばかりで親としてもうれしいですわ」

「ナルナも来年から学校に行くの！」

「そうなんだ」

「ええ、幼年学校です。その後はもし本人が希望するならハイエルフとしての勉強が始まるでしょう。親としては複雑ですが」

「フィアナもハイエルフとして生きていくことは変えられないのだからできることをするとは言っていましたけどね」

「まあ、わたしたちにそんなことは一言も言っていないのに！」

「そうなんですか？」

「毎回の手紙でもダイスケさんのあれがこうだった、それがどうだったとばかり。最初、ダイスケさんが来た頃はどうしたら顔見知りになれるかなんて聞いてきたのに」

「へえ」

「おふくろ！あまり恥ずかしいことを言わないでくれ！」

「あらフィアナ、聞いていたの？」

「見る、ダイスケが助けに来ないから抜け出すまでにこんなにかかってしまったではないか」

「フィアナ、その言葉遣いは何とかならんのか？」

「ダイスケも別に何も言わんし、かまわん」

「ねえねえ、おにいちゃんはお姉様と結婚するの？」

「え……？な、何を言っている！ナルナ！」

「お姉様のドレス姿、きれいだとナルナ思うな」

「そうだねえ。きれいだろうねえ」

いい感じに酒が回ってきたのか、後でちょっと考えてしまった言い方をしてしまう。

「じゃあ、ナルナにもお兄様が出来るのね！ナルナ楽しみっ！」

「だめよ、ナルナちゃん。それはこのリリアお姉ちゃんの役目」

「え〜？」

「このシートエおねえさんも忘れちゃだめよ？」

「ええ〜？」

「お姉様とリリアおねえちゃん、シートエおねえさんも？う〜ん、う〜ん……」

騒ぎはあったが楽しい宴会だったと言っておく。妹のいないリリアとシートエ先生のお姉さんぶりもなかなかだった。それ以上にフイアナがもみくちやにされていたが。かわいがりという観点で。

結婚か……。一応重婚については元の世界では宗教上の理由が大きかったらしく、この世界は重婚禁止ではない。特に墮天者については血を残すという理由で重婚は逆に奨励されている。墮天者は種族や世界が違ふと言うことで子供が出来にくい場合があるためだそうだ。

最近は元の世界の夢もあまり見ない。どうしたものか。

つづく

29 刻印

29 刻印

「おはようございます、フィアナ様」

フィアナを起しにきたのだろう、エルフの人が扉越しに声をかける。俺はそれで目が覚めたが、なぜフィアナとリリア、シート工先生と同じところで寝ているのだろう？一応服の乱れもないし、体の感覚的に行為におよんではないのだろうと思った。どうせ飲みすぎたのだろうけど。

「おい、フィアナ、起きて」

「う、うん」

「リリアもシート工先生も」

「ふわ」

「ふう」

「起きましたよ」

外に向けて声をかける。扉が開き、エルフの若い女性が扉の外から姿を覗かせ言った。

「失礼します。朝食のご用意が出来ております。お着替え後、案内

いたします。お着替えが終わりましたらお声をかけて下さい」
扉が閉まる。

女性陣が布団の中でいまだにもぞもぞしている間に着替え、女性の着替えを見るのもまずいと思い外に出て待つことにする。しばし待つと扉が開いた。

「おはよう」

「おはよう」

「おはようダイスケ」

「おはようございます」

「ではご案内いたします」

「刻印魔法はどうですか？」

朝食をいただきながら、長老の1人に聞く。

「何とか昼ごろには出来そうですね」

「ありがとうございます。お代は？」

「原書を見つけていただきましたし、今後も墮天者としてダイスケ

殿からは色々な情報がいただけそうですからな。量産するのでなければお代はいたただかないことになりましたな」

「いいんですか？」

「われらにとつても得だと考えましたのでな」

「そうですか、ありがとうございます」

「いえいえ。まずはドワーフとの車が一番でしょうな。あれが完成すればどんなにかいいことでしょうな」

「昼間でダークエルフの集落に行つてこいと長老たちがうるさくてな。申し訳ないがみんなつきあつてくれ」

「あまり変わらない？」

「当然だ。外見が多少違うだけなのだから」

「それもそうか」

「エルフ族もダークエルフ族も野菜の育て方がうまいのかな？おいしいね」

「わたくしたちの町でも試したいと思ったことがありましたけど、
どうも水が違うようでして。なかなか同じようにはいかないと聞
きましたわ」

「なるほど、水か」

「完成だ。確認してくれ」

「いいですね。問題なさそうです。一応ミリアとレインは魔法の試
し打ちをしてみてもいい」

「分かった」

「わかりましたわ」

「あ、忘れてた。刻印隠さなきゃ」

「必要なですか？」

「削れたり消されたりしたら意味がないから」

シュイン！……ズドン！

最初の音は詠唱中の音、次のは風魔法がカカシにぶつかった音。

「この音はなんですか？」

「詠唱の補助が聞いているせいだと思うけど、気になる?」

「いえ、魔法の発動に必要な詠唱の言葉よりも微かですから構わないと思いますわ」

「そう。使用感は?」

「詠唱後の魔法発動までが一瞬でしたわ。詠唱をもっと早くすれば魔法の発動も早くなる。すばらしいですわ」

「うーん」

「どうしたのダイスケ? 僕も結構いいと思うけど?」

「心の中だけで詠唱してみてくれないかな?」

「思い描くだけでいいの?」

「いや、ために」

「では…「ズドンッ!」……は?」

「わたくしm「ドカツ!」……えっ?」

「おお」

「どうなってるのこれ?」

「オリハルコンの胴にミスリルと金とスターストーンで回路を組んであるよ。持ち手の所の金が魔力の色を瞬時に感じて回路で増幅、発動。金の効果が高かったからそんなに消費魔力が増えることもなかったし。一応打撃も試してみてね。打撃の瞬間に炎を出してもいいかもね」

打撃と同時に燃え上がる力カシや凍りついた直後に叩かれ砕ける力カシもある。

成功といえるだろう。

「オレ、あれを持たれたらミリアにすら勝てんかもしれねえ」
「レインさんはどうです？」
「レインはメイスの技だけでもオレとそんなには変わらんからな。打撃に炎なんか出されたら瞬殺かもしれん」
「は、すごいです」

「弱点もあるよ？」
「本当か？！」
「オリハルコンを切れる剣」
「ふざけるな！」
「いや、ふざけていないけど。もしくはメイスを歪めれば、回路が逝くかも」
「むりですう」
「そうなりにくいように融合の刻印を入れてもらったんだけどね。そうしないとメイスとして使うとすぐばらになるから」

「リムナ、オレたちもつと頑張らないと場所がなくなりそうだな……」
「はいです……」
「あ、リムナの武器もまた考えてあるよ」
「ほんとですっ？」
「オレのは？」

「ワードはどここの学生？」

「くっ」

「ちなみにオリハルコンのハンマーで込めることをもう少し変えればいいんだよ。本当に頑張らないといけないだろうけど、「鉄を切り裂く」とか、「弾く」とか」

「切り裂くは分かるが弾くとは？」

「体勢が乱れやすくなりそうじゃない。その隙に剣を打ち込めば」
「なるほど」

「人族の鍛冶はいろいろ応用が利きそうだから試してみたら？」
「そうする」

「じゃあ次。ファイナとリリア、これ」

「投げナイフか」

「こっちはブーメランだね」

「投げてみる前に、地面において、スターストーンに魔力を流してみて」

「うん。わっ。戻ってきた！」

「こっちもだ」

「一応効いてるみたいだけど。距離がどこまで効くか調べてみないと」

「おい、ダイスケ」

「なに？」

「投げナイフが刃の方から戻ってきたらどうするんだ？」

「えと、柄の金が体の表面に常に覆われてる本人の魔力に反応して」

刃をずらすよ？刃は付け替えることが出来るけど、それ以上長くすると刃が自分に刺さる可能性があるね」

フィアナが自らに刃を向けてみるが、一定以上近づくと刃がくるつと動く。

「ほう、一応安全のようだな」

「敵に取られて投げられても安心」

「10メートル程が限界のようだな……」

「そうみたいだね」

「微妙だな……。10メートルでは牽制にもならん。すでに前衛の攻撃範囲だ」

「うん、そうだね」

「一応どこにあるかは分かるようだが」

「そうなの」

「魔力のつながりが糸のように見える」

「へえ。じゃあ魔物に抜けないように刺して巣穴に帰したりしたら巣穴の場所が分かったりするかな？」

「どこまでなら見えるかが分かればな」

「それも試してみよう」

適当な部屋に1本置いたりして試す。200メートル程度なら分かるようだった。

「これ、面白いよ！」

リリアが適当にブーメランを投げる。魔力を通したままあちこち動く。結局ふらふらとブーメランはリリアの周りを回っている。

「こっちは完全におもちゃの域か。残念だ」

「そういうこともあるさ」

「仕方ない。間接系には例のヤジリを増産しよう」

「メイスはうまくいったからいいか。シート工先生、所有者固定魔法かけてもらえますか？」

「いいわよ。レイン君、ミリアルさん、こっち持ってへいらつしやい」

「はい」

「いいですわ」

「先生、見せてもらっても？」

「いいわ。ではまずはこの魔方阵をメイスに書くって、あら、そうね、竖琴や譜はナイフや筆で魔方阵が書けたけど、オリハルコンではどうしようもないわ。どうしましょう」

「俺がやりましょう。見せてください」

「はい、ここのこれよ」

「よつと。こんな感じでいいですか？」

「いいわ。ではここにあなたたちの血をつけて」

「はい」

「では魔方阵を起動するわ。あなたたちはそのままメイスに触れていてちょうだい」

「わかりましたわ」

魔歌が流れると魔方阵が淡く光りだす。次いでレイン、ミリアの

体とメイスもそれぞれ光りだす。色が多少違って見えるのは、魔力の質の違いか。徐々に光は収まり、魔歌も終わる。

「これでいいわ。一応試して欲しいけれど。私も初めてだしね」

「では。おお、すり抜ける！なんか気持ち悪い！」

「ワード！わたくしの武器にそういうことを言わないでくださいまし！」

「あ、悪い」

「本当に触れないです」

「不思議だねえ」

「不思議！」

「これが時空魔法か」

「僕もミリアの方には触れないや」

「成功のようですね」

「この効果時間は？」

「本人が生きている限り」

「本当ですか？」

「もしくは世界に自然魔力がなくなったとき。それからありえないけど、本人の血が完全に入れ替わってしまったとき」

「出来るんですか？そんなこと。この世界で」

「さあ、わからないわ。そう教えられただけだもの」

「まあ安心ってことですね」

「ええ」

「さようならー！おねーさまー！また来てねー！」

「また来るー！いい子にしてるんだぞ、ナルナ！」

「わかったー！おにーちゃんも、おねーちゃんたちもまたねー！」
「ナルナちゃん、またね！」

見えなくなるまでナルナたちに手を振り、集落を後にした。

つづく

30 休日

30 休日

「うん、あと1日か」

（休みのことか？）

「うん。リムナの装備を何とかしたいな」

（防具の方はどうするのだ？）

「タダッカ先生待ちかな。仲間の分は少しいじるけど」

（ほう。われも力を貸そうか？）

「どういう風に？」

（われの血を混ぜてみたらどうだ？魔物が寄ってこなくなるぞ？）

「考えてみる。それを理性で抑えられるほどの敵がいるなら普段戦闘で力をつけられないのはどうかとも思っし」

（そうか。ならば装飾具ならいいかもしれんな）

「そうだね。それなら普段は外せるだろうし。ライラスさんたちに着けてもらうのもいいかも」

（たしかにライラスの足は不安要素だな）

「うん」

「来たです！」

「オレも！」

「あたしも」

「わたしもだ」

「僕も」

「わたくしもですわ」

「私もね」

「結局全員か」

「で、リムナの武器は？」

「試作。刻印魔法も試してみた」

「そんなことが出来るようになったのか？」

「解析で本当に詳しく見ちゃうとなくな」

「反則だな」

「否定できない。俺以外に出来るとは思わないけど」

「なんでだ？解析魔法だって結構みんな上達してきたぞ？」

「物質の根源を理解しないと、刻印魔法の部分を同じ金属とかで覆われると分からないと思うよ？」

「そうなのか？」

「うん。だから刻印魔法は今後、特殊なヤツほど同じもので覆った方がいいかもね」

「長老たちには言っておこう」

「うん」

「根源とは何か、聞いていいか？」

「鉄も木も水も。人も突き詰めれば6種のもので出来ている。物質の根源3種、魔法の根源3種かな」

「全くわからん」

「だろうね。分かっちゃったら古竜の意味も変わるかもしれない程だから」

（ふむ。面白い意見であるな……）

「リーン……」

「リリア、リーンがどうかしたか？」

「ううん。ね、リーン」

「にゃ」

「で、これ」

「斧か？しかし反対側にハンマーもついているな……」

「ちよつと小ぶりです？軽いです」

「リムナ、持つてから魔力を通してみて、みんなは少しはなれてて」

「わっ！柄が伸びましたですっ」

「ポールアクスか！」

「もう一度魔力を通すと」

「短くなりましたです！」

「そしてこれ」

「盾……？」

「いや、このパーティ、盾持ちがいなかったし。ワードの戦いは速さだし、女の子にそういう役を受けてもらうのは気が引けるんだけど……」

「かまいませんです」

「基本俺の魔法障壁を当てにはしてほしいんだけど。もしものために」

「盾の内側のへこみはなんだ？」

「斧の収納。全力で盾を使うこともあるかもしれないし」

「なるほど」

「なぜこの盾は折れているんだ？」

「そのままでもそれなりなんだけど。盾に魔力を通すと……」

「広がりましたですっ！」

「正直、一体型の方がいいんだけど、それだとリムナが歩けないかと……その、ごめん」

「そんなことないです。オーガ族は小さい人の方が偉いです！」

「最後にこれ」

「籠手……か？」

「前衛だからね。それにこれをつけても武器を振り回せると思ってこれで殴ってもいいし、防御してもいい。それなりの剣でも傷つきにくいはず」

「すごいです〜！」

「ちなみになぜ斧にハンマーがついているんだい」

「レイン、良く聞いてくれたね。誰も気づいてくれなかったらどうしようかと。ハンマーにはアースストーンを組み込んであるよ。いつもの鎚と同じく、振り回すと重さが溜まって、衝撃で開放。盾の中に収納してあるときは盾で魔力を循環させて重さはたまらないようになっているから、使わないなら収納した方がいいよ。切れる敵は斧側で。重装備のヤツなんかは重さ開放で内側に衝撃を与える。前衛の中でも防御、切り崩しに特化させてみた。とどめはワード。普段は魔法で崩して前衛でとどめでいいと思うけど、防御や回復して間のことと考えてみたんだよ」

「わぁ！宝物です〜」

「一応シートエ先生に所有者固定してもらおうといいよ」

「はいです！先生、お願いします」
「わかったわ」

「問題は間接系なんだけどね……」

「あのヤジリだけでもだいぶいいと思うが？」

「できないこともないんだけど」

「そうなの？」

「うん、構想はある。ただ、2人の魔力が、量と言うより、戦闘中にどこまで冷静に細かく制御できるかが問題。気持ちが悪くなったり取り乱したりするとうなるか分からない」

「それほどか？」

「最低戦闘中に2系統の魔力制御がいる」

「賢者の域だな」

「別に2系統の魔法を打って誤じゃないんだ。練習方法としてはこの2つのリングを利き腕につけて、なにがあっても両方のスターストーンを光らせ続けること。そんな程度でいい」

「そんな程度って……かなり難しいよ？」

「たくさん作っておくよ。一度魔力を流し始めると、魔力が止まるか多すぎるかでリングが壊れるようになってる。訓練からでも使ってみて。ためしにやってみようか。4つあるし」

2つのリングをリアは右腕、フィアナは左腕につける。

「あれ？フィアナ左利き？」

「利き目の関係でな。食事などは右なんだが、武器はな。知らなか

ったか？」

「あんまり気にしてなかった」

「剣や投げナイフ程度ならどちらでもいけるのだが。繊細な武器ならばきちんとしようかと思ってな」

「……そうなんだ、そうしてくれると助かるね」

好きだと言ってくれる、こちらも気になりだしている女性の利き腕すら知らなかったダイスケはちよつと自分の不明を恥じた。

「集中！でもむずかしい！」

「うゝん……」

悪戦苦闘しているリリアとフィアナ。後で怒られるかなと思いつながら、でも必要だから仕方ないと、みんなが見守っている影から鉄のお盆を派手に落とす。ものすごい音の後、2人のリングが壊れた……。

「何てことするのダイスケ！」

「そうだ！壊れてしまったではないか！」

「先生もあまり感心しませんね」

「ちよつとびつくりしたです……」

「まあ怒るのは当然だとは思っただけど……」

と言つて2人のリングを見る。リリアのリングはリング自体の金属が、フィアナはスターストーン自体が壊れていた。

「リングの方が壊れるのは魔力が止まったせいで。石が割れるのは魔力を流しすぎたせい。そういう風に作ったよ。間違いないみたいだね」

「確かに止まつちやつたけどさ」

「もう少しやり方があったんではないか？止めるとか、多く流してみるとか」

「それはそうなんだけど、この程度の驚きで壊れるなら成功かなつて」

「まあいい、どんな状況でもこれが壊れなければいいんだな？」

「うん。そう」

「がんばるもん！」

「まあ、今日おいしいもの出すから」

お昼過ぎ。

リングを材料があるだけ作り、さらにスターストーンが切れそう
だということで万屋へ。

「ごめんくださーい」

「あら、ダイスケ様、今日は？」

「スターストーン追加で」

「はい、いつもありがとうございます！量はどついたします？」

「取れた分だけ買い上げるいつもの方式で」

「かしこまりました」

すると2階からハルさんが降りてきた。

「ちょうど良かった、ダイスケ殿。お伺いしようと思っていたところでした」

「なにか？」

「長がこれを」

「手紙ですか。開けても？」

「特に何も言っていないかったので構わないでしょう」

「じゃあ、『万屋の長nの地位をかけて』。ああ、例の件ですか」

「そのようですね。その印も本物ですし」

「分かりました、ありがとうございます」

「では、また待っております」

「ええ」

「万屋の長だつて？なんて？」

「ああ、例の件だよ。みんなが俺の事に色々かけてくれたあれ」

「ああ、ダンジョンの。そういやさっきの人、教師陣の御者だった人だったな」

「そう、まあこれで安心かな」

「そうだな」

「さて、夕飯はどうする？」

「俺が出してもいいんだけど」

「わたくしがご招待してもよろしいかしら？」

「ミリアルさんのところですか？私も？」

「ええ。先生もパーティなのですから当然ですわ」

「ミリアルさんのお父上って、リラブレム侯爵でしたわね？アールド様、お母上はルーミル様」

「ええ。そうですわ」

「……覚悟を決めなさいということですか……」

「どうかしたんですか？先生」

「私のパーティの最初の思い出がエガイド団と言ったのは覚えてますか？」

「ええ」

「その編成がですね……、エガイド王、ゲイン近衛団長、ライラスさん、ケイトさん。そしてアールド様とルーミル様でした」

「わあ、凄いパーティですう」

「各役割はどうだったんです？」

「私が罾の解除および索敵。後は一撃必殺の前衛と後衛。彼らが歩いた後は焼け野原とか言われていたわ」

「そんなに……」

「だから教えにエガイド団のことがたくさん載っているんですか？」

「あら、それは別よ？」

「そうなんですか」

「下手したら荒くれな格闘科の子供たちが大昔のパーティのことを聞いたって聞くわけないじゃない。どの時代もその前時代の偉大なパーティの経験を主に話しているわ」

「なるほど」

「では問題ないようでしたら早速向かいませんか？」

「心の準備が……」

「シート工先生、あきらめなよ」

「そうは言ってもワード君……。そう、そうよ！正装しなくちゃ！」

「何言ってるんだ、先生。魔国との戦争が終わっていない今、正装なんて武装じゃないか。誰が夕飯に武装して行くんだ？」

「うっ……。あきらめないとだめなのね……」

「ちゃきちゃき行こうぜ！」

360

31 団員

31 団員

招かれたミリアの家、リラブレム家の前に来た。

歴戦の戦士なのだろうが、学者と言ったほうがしっくり来る人物が出迎えなのだろうか、門の付近に立っていた。

ミリアの本好きに絶大な影響を与えたようなイメージがある。

「ようこそ！我が家へ！おやシート工君か？！……久しぶりだねえ」

「は、はい……。ご無沙汰しておりまして申し訳ありません」

「僕たちが君の事を忘れるなんてないのにね」

「そう……ですか、……ありがとうございます！」

終始笑顔を絶やさないこの紳士がミリアのお父さんなのだろうか。

シート工先生の混乱っぷりにはあきれたがどうも思い過ぎだったのだろう。

「先生の思い過ぎだったようですね」

「ええ、……ええ！」

シート工先生もとてもうれしそうでその横顔は、なぜか駆け出しのシート工先生を見ているような気がした。

「ではこちらでしばしお待ちください」

執事のマイルさんの案内で部屋へ通される。すでにこの部屋で宴会が出来そうなほどだが、これでもただ待つだけの部屋らしい。

ふかつ……。

「このソファ―体が沈むんだけど……」

「侯爵は商売が許可されている分、王家より金持ちかもしれない」

「羽振りが良く見え、ここに頼めば仕事は安心と思わせるように多少はお金をかけたと聞いていますわ」

「確かに貧乏っぽく見えたら、商売の話に来た人は任せづらいかもしれないね」

「ここに来れば仕事を良い値で買ってくれると思わせるのに一役買っているそうですわ」

「なるほど」

「このジュースもおいしっ」

「うん、濃いね」

「野菜もふんだんに入ってますわ。露天でも扱っているでしょう？」

「ジュースにあんなに高い金は出せないんだが」

「女性は子を産む存在ですわ。リブレム家では女性の健康を一番に考えておりますの」

「へえ、だから俺が出した野菜やエルフの野菜に食いついていたのか」

「ええ、いいものがたくさん取れるならそれだけ安く出来ますもの」

「食か。考えさせられるなあ」

コンコン。

「ご用意できました。こちらへ」

とても長い廊下を歩いている感じがする。視覚効果もあるのだろうが、どれだけ広いのだろう。

ミリアにここにはどのくらい人が勤めているかと聞きたかったがやめておいた。

聞いてどうなるものでもなかったし、聞いたら落ち込みそうだ。

ひとときわ豪華な扉を通される。

どこかの一流の結婚式場かと聞きたいくらいの広い部屋だった。ダンスをしようが、そのためにオケを入れようが。そのパーティが鍛冶科クラス全員だとしても余裕がありそうだった。

「広っ！ダイスケ、こんな広い部屋初めて見たよ！」

「王の謁見の間よりは狭いけど、あそこは食事を取る部屋じゃないからねえ」

場違いな感想しか出てこない。無骨な部屋ならば「どこの体育館だ？」と言ってしまっただろう。

何かいる場所が決められない、広すぎて。

それでも中央に料理が来るのであろうテーブルがあつたので、そこでぼうつと立っていた。

そういえばこの世界には上座や下座と言ったものがあるのだろうか？一応入り口に近いほうに立ってはいしたが。

また扉が開き、先ほど学者のようだと感じた紳士と、ミリアをそのまま大人にしたような女性が入ってきた。

芝居がかって見えるほどのお辞儀をして言う紳士。

「今日はよくぞいらっしやいました。ワード殿下もお呼びでき、感激の至り」

「アールド兄、背中がかゆいんだが？」

ぶち壊すワード。

育ちが違うとはこういうことかとこちらが赤面するほどの優雅さ、妖艶さで挨拶する女性。リリアとフィアナの目がきつくなったことは気づかないふりをしておく。

「ようこそ、うちに来てくれました。私がアールドの妻、ルーミル

でございます。どうぞ良しなに」

「ルーミル姉も気持ち悪い……」

ワードはまたもやぶち壊す。

「……。コホン。話の腰を折らないでくれるかな、ワード。台無しだよ」

「そうよ、ワード。あんなにオシメも代えてあげたのに……」
「がっかりだという表情のリラブレム夫妻。俺という墮天者へというよりは、ミリアの相手であるレインにカッコをつけたかったのか。なんとなくそんな感じがする。」

「そんなことは覚えてねえ！」

ワードがわめく。そんなことより隣でおろおろとしているリムナを何とかすればいいのに。

「なかなか気さくな人たち？」

ミリアに小声で問いかける。当たり前だといった表情で答えるミリア。

「ダイスケ様、元々戦士ですよ。礼儀の言葉遣いなんて付け焼刃ですわ。子供の頃から叩き込まれているわたくしの方がよっぽど上手ですわ」

「俺も言葉がきちんとできるかと言われれば出来ないから、ちょっとありがたい」

リリアも雲の上の存在が以外に気さくだったことで落ち着いたのか、普通に戻っていた。

「あの人たちが父ちゃん母ちゃんとパーティ組んだの？」

「らしいね」

「ほへへ」

唯一まだ居場所がつかめていないリムナ。レインが声をかける。

「どうしたのリムナ？」

「レインさん。あたしはオーガ族でガサツですから場違いですう」

「そんなことないよ？」

「でも」

「歴戦のパーティならオーガ族がどうだって知っているはずだし、なんとも思わないよ」

「そうでしょうか？」

「普通でいいんじゃないかな？それより僕の方がなにか言われそうで緊張だよ」

「……ああ、ミリアさんとの仲です？」

「うん」

「そっちの方が大丈夫です。前はミリアさんいつもおっかない顔してましたです。今はやさしいです」

「そう」

「レインさんのおかげです」

「……ありがとう」

「いったい誰と付き合っているのかと聞きたかったが、誰しも完璧ではないのだから仕方ないのか。」

逆にこの仲間でよかったと考えるべきなのだろう。

すこし落ち着いてきて、さあ、と思ったとき、どこかかと靴音が聞こえてきた。

「おーい！呼ばれてきたぞ！」

「私も一緒によかったんでしょうかね？」

「なぜワシらも？」

「ライラスまでなら分かるけど私までいいのかしら」

エガイド王にゲイン団長、ライラスさんにケイトさんだった。

すかさず紳士のように対応するアールドさん。

「ようこそ、陛下、ゲイン殿。ライラスにケイトさんも」

「かたつくるしいな、アールド」

そのエガイド王の言葉に噴出しそうな笑顔で答えるルーミルさん。

「ワードは確実にエガイドの子ね」

「？なにを言っている？当たり前だろう？」

「私がいてもいいのかな？」

「ああ、ゲイン。常識人は必要だからねえ。全盛期のエガイド団が集ったからにはねえ」

「たしかに私かルーミルしか止められないだろうな。……全盛期？はて？といった表情でいるゲイン団長に紹介するようなそぶりと言うアールドさん。」

「シートエが来ているよ」

ここにいたのは普段の颯爽とした教師のシートエではなく駆け出し冒険者のシートエだった。

「ご、ご無沙汰しています……」

2、3度目をしばたかせた後、びっくりした表情で答えるゲイン。

「シートエ？ああ、シートエ！久しいな」

「本当か？ああ、なつかしいですね」

「ワシらの所には先々月だったか、たしか来たな」

「ええ。架け橋のパーティに今はいるようですね」

「架け橋？」

ライラスさんとケイトさんの会話に首をかしげるエガイド王。

「なんだ、エガイドは知らんのか？この中ではみんな知っているぞ？」

ため息をつきながら答えるライラス。

「なんだ？ワシにも教えんか」

「ワードに教えてくれと言って聞いてみたらどうだ？」

「できるか、そんなこと」

「王、今日の報告書にチラツと入ってましたよ？」

ゲインはすこし複雑な表情で王に問う。

「うつ……。書類が重なっておったのだろ。つい見逃したようだな」

「王のサインは入っていましたが？」

「……」

「盲判ですね？」

「……」

カツ！と目を開き、額がマスクメロンになってしまう程の模様を浮かべ、ゲインは大声を上げた。

「シートエ！副団長承認後、さらに2名の承認で団長に拘束魔法！承認！」

本気で怒っているゲインに対抗できるものはいないのだろう。

アールドもライラスも苦笑いを浮かべながら声を発した。

「アールド承認」

「ライラス承認」

「拘束！シートエ！」

駆け出しの頃の記憶か、弾かれたように姿勢を正したシートエは魔歌を歌う。

「は、はいっ！魔方陣により拘束！……て、あああ！陛下！申し訳ありません、つい！すぐに解きます！」

われに返り、王への行為を反省したのか魔方陣を解こうとするシートエ。

それにゲインが待ったをかける。

「待ちなさいシートエ。これは団員権限で発動できるもの。これを

見てごらん。私たちは今まで仲間になったものは死ぬまで仲間なのだよ」

ゲインのパーティ登録の腕輪にはびっしりと文字が入っていた。中には死んだものも含まれる。

すました顔でそのままにしておけと指示し、言葉を続ける。

「では後は乾杯のあと、話を聞かせていただくことにしようか」

「ワシにも酒をよこせ！」

架け橋の仲間にもどうしようもなかった。

「ワードそっくりです」

「違うと言いたいところだが……」

ぼそりと言うリムナに、心底嫌そうなワード。

仕方ない。大抵子は親の嫌な所ばかり受け継いでしまうのだ……。

いまだに拘束されたままのエガイド王を放っておき、笑顔で説明するアールド。

「今日はただの夕食の集まりですから、立食にして上下は無しにしましたよ」

「じゃあシートエに乾杯してもらおうかしら。ね？」

いいことを思いついたという表情で提案するルーミルに無理だと懇願するシートエ。

「ルーミル様！私がそんな！」

「いいからいいから。あなたはエガイド団と架け橋のそう、本当に架け橋になっているのよ。あきらめなさい」

さすがに先輩の言は絶対か。

「……はい。分かりました。ルーミル様には逆らえませんものね」

「まあっ！昔を思い出して若くなっただみたいでうれしいわ！『様』がちよっと邪魔だけど」

「すぐには無理ですわ。では世代を超えたパーティに、乾杯！」

「」「」「乾杯！」「」

「ワシには……？」

教師が廊下に立たされた生徒に向ける表情で、ゲインが言う。

「もう少しそうしていたらどうですか。もしくは昔のように自力で脱出したらいいいじゃないですか」

「そうは言ってもゲイン、これ、前のように破れんぞ？」

「力が衰えたのでは？」

「そんなわけあるか！」

王が衰えていないことはゲインが一番良く知っている。するとこれはシートエの技と言う事になる。

「シートエ、あれは？」

「時空魔法系の拘束魔法です。今勉強中でして。基礎の魔法でしたら触媒がなくても、ちよっと弱いですが発動できるようになったんです」

「報告を見ましたが、まだ1日2日のことだと思いますが？」

「魔歌に魔力を乗せて譜の通りに歌うだけですから、基礎なら簡単に覚えられますわ」

「私にも出来るでしょうか。もう翼はないのですが」

「え？ゲイン様は人族では？」

「駆け出しの頃、背中に大怪我を負ってしまいましたね。翼はなくなっていました」

王と同じく勇猛で名を馳せるゲイン近衛団長が実はフェアラ族だったとは。

架け橋のパーティでも特に王室と近い者たちになればなるほど驚いていたようだ。

「そうだったんですか。初めて聞きました」

「フェアラ族は落ちぶれたとか軽いとか、男には特に風当たりが強いですからね。翼がなくなっただのでこれ幸いと人族として生きているんですよ。他の人には内緒ですよ？」

「は、はい。しかし翼が時空魔法の増幅器になっているんです。翼がないとできるかどうかはちょっとわかりません」

「そうですね、残念ですね。ちなみにあの魔方陣は放っておいたらいつまで持つんですか？」

「つい昔の癖で全力でかけてしまいました。1ヶ月くらいはそのままかと思っています」

「仕方ありません。王の魔法を解いてあげてください」「はいっ！」

体のそこらをさすりながら立ち上がるエガイド王。

「うーむ、きつかったぞ」

「申し訳ありません」

「別にシート工を責めておるわけではない」

「元はといえば、王が仕事をしないのがいけないのですから。シート工は気にしないでいいですよ」

「わかったわかった。ゲイン、明日からきちんとやるからワシにも酒をくれ」

「まあいいでしょう」

身分を越え、いつまでも友としてあるエガイド団に感動を覚える。
つい言葉が出てしまう。

「凄いな仲間、パーティって」

近くで聞いていたフィアナが聞いてきた。

「どうしたのダイスケ？」

「いや、身分とか、仲間には関係ないんだなと思って」

「そんな事言ったら、ワードは王族だし、ミリアは侯爵の娘だ。わたしはハイエルフなのだし、そんなに差はないと思うが？」

「そうか。そう言われればあまり変わらないのか」

自分たちも変わらなかったのだ。言われるまで気がつかなかった。そんなことを気にせず仲間として在る。これは素晴らしいことだ。

さらにエガイド団の方は盛り上がっていた。

「シートエ、服飾の職人として服を毎年贈ってくれるのはありがたいのだが、一度も顔を出さないものだから、袖を通すための体系維持が大変なのだぞ？」

「シートエ、王の服は来年はすこしお腹のサイズを縮めて送りなさい」

「ゲイン、ワシは腹など出ておらんぞ？」

「そうですか？」

「確かに私の方も苦勞するわぁ。ケイト、あなたはどうか」

「私は一般人だもの。それほど苦勞してないわ」

「むむむ、確かに私の腰より細い……。勝負よ！」

「何の勝負よ、何の。健康が一番でしょう？」

「それもそうね」

1杯目の食前酒とも言うべき軽い酒がほぼみんな空になり、2杯目はどうしようかと執事を呼ぼうとしたアールドにダイスケは声をかけた。先ほどエガイド団が盛り上がりつつある間に侍女から瓶を借りていくつか酒を出したのだ。それからさらには刺身と寿司。この世界の人はよほど裕福に一生を過ごすのでなければ、戦にしろなんにしろ食べられない時がある。好き嫌いをしていては生き残れないよって好き嫌いのある人はいなかった。おいしいと思うかは別として。

「……！」

寿司や刺身を口にして動きが止まる。ある意味これも見慣れた光景になりつつある。

一様に驚いた後、ものすごいスピードでお代わりしていく。それなりに出したんだけどな、などと思いつつ、とりあえずみんなが落ち着くまで色々出すことに専念する。刺身や寿司は1人前で量を決めておきお代わりはないと言っておいた。リラブルム家の料理も残すわけには行かないと思ったのだ。賢者の石2つの共鳴と、墮天者としての知識、経験が必要なのでこれは自分以外に出来るものがないので情報の拡散と、解析はしない方向でお願いしておいた。

味わいながら寿司や刺身を食べ、いろんな酒を試すエガイド団。寿司は架け橋の仲間にとっても初めてのものだろう、同じようにゆつくりと食べていた。

満足げな表情のエガイド王。

「うーん、魚を生で食べたのは久しぶりだな」

「ええ、南の孤島に立ち寄った時でしょうか？」

「立ち寄ったものか、あれは逃げて行き着いた先だろう」

エガイド団の思い出話は架け橋にとつてもとても興味深く勉強になることが多い。

架け橋の仲間は静かにそれを聴いていた。

「団長、南の孤島に行ったことがあるんですか？人が近づけないと聞きましたか」

「うむ、そう言われているな。シートエには話していなかったか？それがあつたから索敵にも力を入れようということになったのだ」

「あの時のことなんて恥ずかしくて他人に言えないわね」

「まあおかげで古竜に会えたのだがね」

「古竜がいたんですか？」

「土の古竜ズラメドだったな」

「ぽつかりと開いていた大地の裂け目に落ちてしまったよ。しかも古竜の背中に落ちるというおまけつきでねえ。おかげで命は助かったんだがね」

「あれから索敵と周辺の情報収集に力を入れたのでしたね」

ふと疑問に思った。学校の教師をするくらいの腕があるなら、なぜエガイド団を抜けたのだろう。

「そういえば、なぜ先生はエガイド団を抜けたんですか？」

すでに顔を赤くしたライラスさんに絡まれる。そういえば最近帰っていなかった。

「おお、ダイスケなぜ帰ってきたら報告に来ない？」

「すいません、ライラスさん。この能力のおかげで仲間にあたられまして」

「今度は皆連れてきていいから、うちでうまいもの出してくれ」とたんに割り込むエガイド王。目が本気だ。

「おいおい、ライラス、そういうものは城でやるべきだろう」

「ワシが城にほいほい行くと思ってるのか？」

「ふむ。ダイスケ、ライラスの隣に家を建てると聞いたが、それなりの広さにするんだぞ？」

どこでその話が漏れたのだろう。万屋の長とは別な情報網があるということか？

「陛下がお見えになると言うことですか？」

「ワードが入り浸るなら問題なからう？」

情報先はワードのようだ。あせって損をした。あまり気を緩めるわけにはいかないが。

一応条件をつけておくことにしよう。

「ゲイン近衛団長が同行なら」

「ワシ1人ではだめだと？」

「いえ、1人では危ないかと」

「そうか、ゲインも付き合うんだな」

「それはかえってありがたいのですが、いいのですか？」

「人は多いほうが楽しいですからね」

「それはありがたい。そうそう、シートエに限らず、生きてわが団を抜けるものはわれらと比べてしまふのだよ。役割が違うのだから、比べる必要はないというのに」

「申し訳ありません、団長、副団長」

「いやいや、子供たちを教え導くことも大切な仕事。それに時空魔法を修めたならばそれをフェアラ族に広める役目もでてこよう。2〜3年でどうかなるかは分からぬが期待しているぞ」

ピクリと反応するレイン。さすがに鋭い。

「2〜3年の間に何かあるのですか？」

「よく気がついたなレイン。おぬしもなかなか見所がありそうだな。どうだ？リラブレムで鍛えては？」

笑顔を絶やさず答えるアールド。

「私は構いませんが、ルーミルしだいだと思いますよ」

「は？アールドしだいでしょう？」

ルーミルも笑顔だ。

「ははは、レイン、よかったなあ」

「はあ、はい」

「なんだその覇気の無さは。ほとんど認められたようなものだろう？」

「え？」

やはり平静に見えてレインも上がっていたのだろう。

両親がお互いに自分は認めたから相手に任せるといふような発言をしている。

これはレインがミリアの両親に認められたと言つて間違いないのだろう。

「まあよいわ。今魔国に向けて道を作っている。それが開通すれば全面攻勢をかける。それまでは現状維持だろうがな」

「王、それはまだ正規兵にすら公開していない情報ですが」

ゲインが厳しい口調で言う。

本当に隠したい情報は記録に残さず誰にも言わないのが一番なのだから。

信頼できそうだとはいえ、学生に話す危険性を感じたのだろう。

「ふん、ゲイン、おぬしはダイスケが自分の秘密をワシらに教えてくれたのだ。ワシらがそれに応えるためにはそれなりのものが必要だろうよ」

「それはそうですが」

あきらめたようなゲインの表情。

「そういうわけで、学生の内、今の1年と2年には卒業後に1年もしくは2年の猶予でそれなりの戦士になってもらわねばならんだ。来年の1年生には厳しいかもしれんが、最悪は卒業後すぐに戦士と

して借り出される可能性もある。出来ればしたくはないのだが」

「そうなんですか。では鍛冶科としても頑張らないといけませんね」

「ああ。例の車も何とか2年以内には完成させたいのだから」

「ミリアに渡した例の杖は増産できないのですか？」

「そうですね、アールドさん、あれはミスリルにオリハルコン、白化した金、スターストーンが必要ですね。エルフの刻印魔法も必須です」

「ミスリルとオリハルコンは分かるが白化した金とは？」

「こぶし大の金に俺の魔力量で1ヶ月、魔力を注ぐと出来るものです」

「ミスリルとオリハルコンだけでも厳しいのにそのようなものは作っている暇がないな」

「ええ、リンズヴァーラももうくれないでしょうし。あれは墮天者としての賢者の石を使った俺の能力に興味を持ってもらったのでいただけたものですから。他の学生がリンズヴァーラに会えなかった所を見ると、仲間以外の人のためには簡単にもらえないでしょう。何かの拍子に材料が揃うのであれば作るのはやぶさかではないですが」

「たぶん無理でしょうね、ですが一応覚えておきましょう」

竜を倒せば手に入れることのできるミスリルと違い、オリハルコンは竜に認められて得られるものなのだ。そうそう手に入るものはなかった。

食べて飲み。楽しい宴であつたがいつか終わりが来る。

「ふう、楽しかったぞアールド、ルーミル」

「いえ。今日は急に及びだてしてしまい、申し訳ありません」

「仲間を呼ぶのに何の理由が要ろうか。前線に立つ部下のことを思うと毎日放蕩するわけには行かぬが、たまには良いであろう」

「ありがとうございます」

「ダイスケも。おぬしが特殊系の武器や防具を作っているのは聞いている。作ったものはその内量産され前線に送られるであろう。特にオーガ族の仲間の武器はただでさえ滞りがちでな」

「いえ、仲間のためにとしか考えておりませんでしたので」

「だが、おぬしの研究室の守衛のものの斧も調整したと聞いたぞ？ 上がってきた話ではなかなかの出来だと」

「元が結構なものでしたから」

「オーガ族用の斧などでかい代物は作るための炉も大きくなる。その分量の熱を持った鉄を持てる人族の鍛冶師などおらぬし、元々オーガ族は鍛冶には向いておらぬ。前線には大木を削ったものを使っている兵士もいると聞いた。ダイスケにはまたそういったものを頼むことになるう」

「剣や槍なども打ってみたかったです」

「それは鍛冶科の仲間に任せるんだな。適材適所というやつだ。もし剣や槍を作っているものが出来たらゲインあたりに試してもらおうといい」

「わかりました」

「ライラスも、今後正規兵の分だけでも鍛錬製の武器が欲しい。忙しくさせて済まぬが頼むぞ」

「任せておけ。と言ってもいつものことをするだけだ」

U
U
<U>

32 成長

32 成長

半年程たった。

定期的に城から来る、オーガ族用武器の製造依頼で、それなりにお金も貯まってきた。

家を建てる見積りを出してもらってもいいかもしれない。簡単な図面も引いてある。

それから来週から1週間、海方面への研修も決まっている。

半年前のリンズヴァーラのダンジョンの成果から1カ月後、学校の大変革があった。

最高機密であるが、2、3年の猶予しかない連合国には無駄に遊ばせておける人材は無い。

フェアラ族限定の時空魔法科の設立。

時空魔法科長のシート工先生を中心とし、在学生の1、2年生関係無しにフェアラ族を集め、1年生とし、時空魔法を教えていく。2年生はもう数ヶ月で卒業だったのであるが、それがよかったのか悪かったのかは本人しかわからないだろう。

全員、時空魔法が使えるなら卒業が伸びてもいいと言っていたの

で悪いことではないようだ。
目を輝かせ、新たな魔法の勉強をしている。少しの間ではあるが、飛べるものも出てきたようだ。

刻印魔法科。 エルフ限定。

学校に通わず、エルフの研究室に入門の形を取る。希望者のみ。戦中なので、なかなか有能は人材はまだそろえられていないが、若い者が入ることですぐ新しい考えやひらめきなど、エルフの長老たちもまんざらではないようだ。

特殊鍛冶科。 ドワーフ限定。これも希望者のみ。ドワーフ族の金属とスターストーンの回路作成及び、スターストーンを防具に使用するための鍛冶の授業を行う。

防具に価値を見出していた者がダイスケだけではなかったのだらう。

何かを傷つける武具よりも命を、体を守る防具に惹かれたドワーフ族の若者もそれなりにいたようだ。

総合作成科。 タダツカ先生門下の特殊鍛冶とエルフ長老門下の刻印魔法の融合でダイスケの作成した車の研究。

エルフとドワーフの種族の垣根を越え、色々と活発に意見を交換しかなり改良が進んでいるようだ。

時空魔法、刻印魔法、特殊鍛冶、融合作成。国が援助する形を取ったのだ。

時空魔法科以外は学生に年齢制限、及び、修業年数制限が無い。彼らが独り立ちできる、あるいはそれなりの成果が現れるまでは学生として援助される。

戦いが苦手な者たちや刻印魔法や特殊鍛冶に、より実力を発揮できる者たちは自分の剣や盾となり戦ってくれる者達のため、それぞれの技術に命をかける。

一朝一夕で能力が上がるわけではない格闘科や魔法科と違い、刻印魔法や作成は目覚ましい発展を遂げようとしていた。

そしてダイスケはというと、自身の唯一の魔法と言っている障壁の更なるアレンジを模索していた。

障壁は魔力を物質化させたようなものだ。その性質はイメージが全てと言ってもいいだろう。

この世界の普通の人は単純に硬い障壁を想像しているようだが、それはあまりにももろい。

厚い障壁を作り出せばいいのだろうが、他の魔法を削っても障壁を強くしなければならぬ場面はそうそうない。

そしてダイスケの手にあるのはゴム。厳密にはゴムではないが、伸縮性の高いものをうねうねともてあそんでいた。

小首をかしげ、何ごとかぼそぼそつぶやいているダイスケに、ワードが問いかける。

珍しいものを触っているようにとつぴなことをしているように、もはや「ダイスケだから」という理由で変なものを見るような目で見られることはなくなっていた。

ただいまだに幼年学校では「無用心に色々と触る人はどうなるか」

と笑い話のねたに、いや生徒の注意喚起に使われていた。ダイスケは知らなかったが。

「なんだ、ダイスケ？それ？」

「ああ、ワード。エルフ族近くの森で取れる樹液を固めたものらしいんだけどね」

エルフ族の集落の近くに生えている木の樹液。どうやらそこ近辺にしかないらしく、ワードは知らないようだ。代わりにフィアナが答える。

「ああ、固まる前に流し込んで壁の隙間をふさいだりするのに使うな。ただ一度固まってしまうともう液状には戻らないが」

エルフ族の中では家などの補修剤、シーリングに使っているらしい。

城下町まで液状を保ったまま持つて来る技術がない以上、エルフ族でしか使われていないのだろう。ワードが知らないことも頷ける。「良く知ってるねフィアナ。そうなんだ。これを色々使えないかな」と

「なにに使うんだ？」

フィアナはその樹脂が固まってしまうと、子供たちの遊び道具にしかないことを知っている。

シーリングにしか使っていない現状では他の使い道など思いもつかないのだろう。

「1つは、平べったく固めて樹脂、鎖、樹脂と挟んで鎧の間接部分に使うことで鎧の隙間を狙われても守りやすいようにするとか」

「おお、いいなそれ」

鎧の隙間を狙い敵を撃破することは基本と言っていい。したがって弱い間接部分が少しでも守れるのなら、それは画期的な技術と言っても過言ではない。弱点もあるが。

「重くなりそうんだけどね。俺なら細い鎖を樹脂の中に埋めちゃえるからいまいちな」

「オーガ族なら平気ではないか？」

「そうか、特殊鍛冶科に連絡しておこうかな」

ダイヤケは反則的に何でもできるのだから、これは特殊鍛冶科の領分だろう。

樹液の採取は子供でもできるのだから、これはエルフ族の新しい仕事になるのかもしれない。乱獲だけは気をつけなければいけないだろうが。

「2つ目は？」

「うん、俺の魔法障壁に使えないかなって」

「魔法障壁に？」

「結局魔法障壁って、その性質を決めるのって想像じゃない。薄くも出来るし、縦でも横でも作ることが出来る」

「まあな」

ここでは一般常識だ。

「じゃあ硬さとかいじれないかなと思って」

「やわらかくしたって簡単に剣とかで切られて終わりじゃないか？」

「硬いと強いけど、鎚なんかで簡単に割れるじゃないか。パリンとこの間の模擬戦じゃ大きな石を投げられてひびが入ったよ」

たまに格闘科や魔法科の人と手合わせする。武具の製作の合間にいつもどおり障壁で剣を防いでいたらでかい石を投げられて障壁にヒビが入りあわや負けるかといった状況に陥ったのだ。

多重展開で事なきを得たものの、あれが実戦であつたらと思うと冷や汗が出る。

どこかのバリアーではないのだから、石を投げられて割られて負けたなどとなればいい笑いものだ。

ワードは何とか想像しようとして苦戦している。想像力が少々乏しいのは鍛冶師にとってどうなのか。

ワードが剣以外はうまくできないのはこの辺に理由があるのではないだろうか。

「しかしなあ。やわらかくってどうも想像ができないな」
早々に考えるのをあきらめたようだ……。

「うん。この世界ってのこぎりのような武器ってある？」

「どうだろ。のこぎり自体作るのが難しいからな。武器でない鍛冶職人の最高峰とかいうな、のこぎりは」

粘性のある鉄でぎざぎざに削り出し、それを左右に倒して刃にする。やわらかすぎてもだめだし堅すぎても折れる。

大量生産のための装置もなく、武器を優先するこの世界では本当に質のいいのこぎりはなかなかお目にかかれない。

この町でも戦争嫌いで偏屈で通っているおじいさんの鍛冶師が少しいものを作っているくらいだ。

「武器としてもかなり強いと思うんだけどね」

「なんでだ？」

「剣でスパツと切られても、ある程度はすぐに回復魔法でくつつくじゃない？」

「ああ」

「のこぎりだと、たぶんだけど回復に時間がかかる」

「本当か？」

「えぐられて削れるから」

「ほう」

「剣も波打たせると切ればなおりにくくなるかも。切るのに力がいるかもしれないけど。ちなみにその手のもので手を切ったときの痛みはたぶん剣の比じゃないよ」

「剣を打って、うまく欠けさせて。そのまま埋めずに補修すれば……」

「バランスがどうなるかだね」

「やってみる価値はありそうだ」

「考えが安易過ぎる気がするが。それでうまくいくならみんなやっている。」

まあ、自分で失敗しないと理解できないだろうから放っておくこ

とにする。

「ワードも最近、剣の腕はうなぎのぼりなのに鍛冶の腕は頭打ちだったもんね」

「気にしてるんだ、言わないでくれ」

「俺の世界でも師の技は教えてもらうんじゃない、盗めって言われてる。ライラスさんのところに覗きに行くのもいいかもね」

「盗む……か」

つくづくワードは興味を持つ対象がずれていると感じる。

もし俺がもう少し早くここに来て、ワードの剣を作ったら……。

自分の剣を使ってくれる者が剣の霸道とも言うべき道を突き進んでいくのはどれほどの気持ちだろう。

昔会ったドワーフの鍛冶師のおじいさんのように「あいつは俺の剣を使っていたんだ」と我事のように喜べるのだろうか。

エガイド王がラクスおじいさんにもらった剣で命を永らえた時、エガイド王はなんと言ったのだろう。

物を作る者として、それは一番の賛美にならないだろうか。

別に剣でなくてもいい。釣り針だろうが鍬や鋤だろうが。

自分の作ったものを「凄く使いやすいよ！いいよこれ！」などと言ってくれることを想像し、変に顔がにやけそうになってしまふところだったが。

「話が逸れてるぞ、ダイスケ、魔法障壁のことだっただろう？」

「……そうそう、そうでした。ちよつとこれに油を塗るから短剣で切ってもらえない？」

ゴムは刃が立ってしまふと簡単に裂けてしまふが、油が塗ってあるだけで話が変わる。

すべるだけで切りにくいし、完全に伸ばしていないのならなおの

こと切りにくい。

「切りにくいな。油ですべるし、やわらかいのがな」

「ものすごく切れる剣ならまた違うんだけど。もしくはさっきも言ったのこぎり状の剣。ものすごく切れる剣でも油がつくと一回ずつ油を落とさないと切れないだろうね」

「なるほどな」

かみそりほどの切れ味のものが油に関係なく引つかかるのこぎり状か。

一般的な腕ならそれしかないだろう。

神速の剣なら話は別だが、そんな人はほとんど存在しない。

実際のもものを見てもそれを完全にイメージできる人はなかなかいない。

ダイスケは四苦八苦していた。たまにやけになって酒をかつくらうほどに。

「障壁に柔軟性を持たせるのって大変だな」

（当たり前だ。今まで誰もやっていないのだからな）

「リーンでも？」

（想像がつかぬな。意味がないように思えるしな）

「あとは障壁を薄く拡散させたい」

（なんだと？拡散？）

「範囲で張ることができるような。スプレーみたいに」

（すぷれー？意味が分からぬ）

「そうだ、そんな感じの魔法が時空魔法にあっただはず。あとでシート工先生に聞いてこよう」

頼まれる武器製造や修復をする傍ら、リーンの「なにがしたいのかわからぬ」と言うような視線にもめげず、障壁の練習は続いた。

あーでもない、こーでもないとぶつぶつ言いながら武具を作り、直し。

手が切れたことを気がつかなかったのは1度や2度ではない。リーンの食事はおるか、自分の食事すら忘れるようになってしまったとき、リーンは最大級の威圧を込め教育的指導を行った。

仲間のことすらおろそかにしていたので、その日は最大の感謝を込めた宴会を行い。

結局はそれがいい気分転換にもなったのだろう、なんとかきつかけをつかんだようだった。

一週間後、翌日が研修の出発日であったが、少しの間をもらい、学校の錬成場にパーティを呼んだ。

ダイスケが食事以外でパーティを誘うのは珍しい。というか初めてだろう。

なにを見せてくれるのだろうかとパーティも興味深々だった。

「で、ダイスケ、どうしたらいいんだ？」

「魔法障壁を破って欲しい」

ワードはいつそつまらないという表情を浮かべながらも。

「……なんだ、そんなことか。いいぞ」

「じゃあ」

数枚の障壁を出す。見た目は変わらない。構成するものが変わらないのだから当然なのだが。

ワードはあからさまに落胆する。どうせならもっと面白いものを見せろと言いたげだ。

しかし。

「なんだこりゃあああ！切れねえええ！」

つるり、するりと障壁が逃げる。

いや、逃げるように感じる。滑ってしまい刃が立たない。

何度やってもだめだとわかっていつつもやめようとしないうードから視線を外し、今度はリムナに頼む。

切ることの次は叩き切るか潰すという方向への確認だ。

「よし、次はリムナお願い」

みにょん。むにょん。点でない面での圧力にはさらに効果がありそうだ。

「ぼよんぼよんしますう！斧もハンマーもだめですう！」

くのっ！このっ！などと言いながらワードと並んで色々試していた。

「よし！1週間かかったけど、第一段階完了だね」

思わずガッツポーズが出る。リーンにまで怒られて、「だめでした」ではかつこ悪すぎる。

興奮もすこし収まった頃フィアナが声をかけてきた。

「次があるのか？」

「いや、対魔法対策も必要かと思って」

「……そうか」

ため息をついていたフィアナだった。

「この障壁、フィアナも切ってみる？」

軽い気持ちで聞いてみた。サンプルは多いに越したことはないのだが。

「……そうだな、ワードでも無理だったのだから厳しいだろうが試してみよう」

ワードやリムナを見ていたフィアナはたぶん無理だろうとも思っていたが、そこは観察眼の優れた彼女、ワードよりもさらに早い剣

速で切ることにしたようだ。

スパ……

「あ、切れた……」

真っ二つではないが、切り込みが入った。

ダイスケは切り込みを見ながら、結果を推測する。

何度も失敗していた所であつたので結果も分かつていたようなものだが。

「やっぱり……。弱めに当ててすばやく切ると切れちゃうなあ。障壁が完全に切れたわけではないけど」

「なんだ、どういうことだ！ダイスケ！」

「いや、斬撃の衝撃を殺す障壁だから、単純に凄く切れる刃物を当てて切ろうとすると切れちゃうんだよ」

「もう一度やらせろ！」

「いいけど……」

鼻息も荒くしてもう1度試すワード。

やはりこの男は格闘科の方がいいのではないのか？

軽い精神統一からもたらされた、彼が刃となつたと錯覚するほどの1撃は障壁を半分ほども切り裂いた。

ワードが一息ついて感想を言う。

「……切れるが最後まで切れないな。威力をなくす分途中で刃が止まる。っておい、剣が抜けんぞ！」

「いや、挟んでるから」

「そう言われたって分からんぞ！何とかしてくれ」

ゴム特有の反発力を持って挟み込んでいるのだ。

これも予想した結果の通りでうれしい。敵に武器を捨てさせることもできる。

ワードの懇願には。

「その内消えるから。しばらく待つて」

「しばらくつて……」

「弱めに張ったから5分くらい」

「意思で消せないのか？」

「時空魔法の応用。出したら意思とは関係なく出っ放し。切られても倒されても砕かれても」

「意味があるのか？」

「多重展開量が増える」

「信じられん……」

1週間以上もパーティをほったらかした罰はこの結果で何とかヤラしてもらえたようだった。リリアとフィアナにはキーキの約束をされたが、その程度で許してくれるのならばありがたい。

リーンの時のようなお説教よりも何倍もマシだろう。

障壁も消え、明日の用意のこまごまとしたものを買いに出る。

半年たち、町行く馬車は、ドワーフの技術と、エルフの刻印魔法で改良されたものが出回っていた。安い乗り合い馬車ですら、最低でもバネが付いている。底面に重力制御が施された馬車も何台か見える。それでもまだ魔力使用量が多いだけあって、よほどひどい路面やぬかるみでなければ重力制御を発動させてはいないようだ。街中で重力制御を発動している馬車はない。

「こんなもんか？特に忘れてるものはないか？」
「大丈夫だと思います」

屋台のようなもので学生らしく買い食いなんぞをし。
それでもまだ夕食は入るようで。

「今日は久しぶりにみんなで食事しようよ」
「何言ってるんだレイン、お前たちが一番2人で帰っちまうんじゃないか」

「お父様もお母様もレイン様をお気に入りになったので、よく呼ばれるんですわ」

ほんのりと頬を染め、言うミリア。まんざらではないようだ。
リリアも我事のように喜ぶ。

「よかったね！レイン！」

「リリア達はどうなの？」

リリアはすこし首をかしげ。

「良くもなく悪くもなく？いや、いいのかな？」

「そんな事言ってるけど？ダイスケ？」

苦笑いしか出てこない。

「なかなか若い子のような激しい恋はできなくてね」

「わたしたちはなかなかそういう雰囲気にならなくてな」

「たちってフィアナはそうだけど、あたしと一緒にしないで！いつつもいい雰囲気の人にフィアナかシート工先生が邪魔するんだから

……」

「リリアだって似たようなものじゃないか！」

「まあまあ。複数つても難しいのかな、ダイスケ？」

「まあね。真剣に考え出しているんだけどね」

「そうなんだ」

ぼそっ

「あたしたちもまだまだですう……」

ぼそぼそっ

「ワードがお子様だから」

「なにか言ったかそこっ?！」

「いいえ、なにも」

「ふんっ！」

すぐに喧嘩のようになり、そしてすぐになかったことになる。

本当にまぶしい青春なのだろう。

何かのブレーキがかかってしまう自分はどうしたらいいものかとすこし悩むのだった。

まあ、いつまでも悩んでいるわけにも行かず。

「まあ今日は万屋の長のところにお邪魔しようと思ってるよ」

万屋きつての上お得意様と化してしまったダイスケが長に会うのはそれほど珍しくない。

しかしそうでない仲間にとってはどうしようかと悩む問題でもあった。

「わたくしたちは？」

「ちょうどいいし、出来たら一緒に」

「かまいませんの？」

「どうせ、誰か聞いていて長に報告にいつてるよ。大丈夫大丈夫。それにパーティだし、万屋の長の受けも良くしたほうがいいかもね」

「そうですか。それでしたら一緒に一緒にしますわ」

「まいど！」

いつもどおりに扉を開け、いつもどおりの言葉を発する。

「あら、ダイスケ様、今日はこういった用件で？ スターストーンで
すか？」

ツーカーか。確かに鉄かスターストーンの依頼が多いんだけれど
も。

「いえ、長に」

「ああ、長がやけに張り切って食事の準備をと言っていた理由がわ
かりました。どうぞ2階へ」

「ありがとうございます」

ニコニコ顔で出迎えた長が扉の向こうにいた。

たまに顔を合わせるときの3割増しだ。理由があるのだろうか。

「いや、ご無沙汰でしたな」

「いえいえ、いつも万屋にはお世話になってますよ」

「それは結構」

「仲間とお邪魔してしまいましたが」

「私にもぎやかな方が楽しいですからな。それに同胞がいる。こん
なうれしいことはありませんよ」

「同胞？」

「私、オーガ族でしてね」

「あたしと一緒にですう。でもオーガ族には見えなですう」

「オーガ、フェアラの混血でしてね。力と身軽さ、いいところ取りで
す。親に感謝していますよ。高等な魔法も使ってみたかったです
が、それはないものねだりでしょうね」

ハイブリッドか。

「長にお名前はないのですか？」

いい所のご令嬢ともなれば相手の名前を知らないと言うことはあまりいいことではないのだろうか。

「ああ、リラブレム家のご令嬢ミリアル様、リラブレム家にはいつもお世話になってますよ。そして私の名ですか。長として命を狙われることもある身。名は誰にも言うわけにいけないのですよ。ただ「長」。それで結構です」

貴族としての、いや国としての根本にかかわる者として、暗部も知っているのだろう、ミリアはそれ以上何も言わなかった。

「……わかりましたわ」

長に促され席に着く。長のひとりからあからさまに緊張する者はいなかったが、それでもあまり碎けるわけにもいかない。

パーティの仲間はまだ口を開かなかった。

ダイスケはその内慣れるだろうと考え、とりあえず自分から話出した。

「間が空いてすみません。まずはこの1杯と、その瓶に補充しておきますね」

「いやいや、ありがとう。やはり酒と言うものは生活の潤いだよ。」

今日はそれなりに食事を用意させてもらった。お口に合うかどうか
「ありがとうございます」

だいぶ仲間も緊張がほぐれたようだ。長ともたわいのない話をしている。

特にリムナは同族と言うことで話が弾むようだ。

ワードが時折顔をしかめているのは料理が合わないのか、嫉妬か。

「そうそう、ダイスケ殿。明日から南の海の方へ研修らしいね？」

「ええ」

「私から1つ頼まれてくれないかな？」

「聞くだけ聞きましょう」

「海の近くに生える特殊な植物の採取」

「植物の効能を教えてください。毒を取ってくるわけにもいきません」

「これはミリアル様も知っているでしょう、過酷な環境でも成長し、苛酷な環境で育つが故、畑を肥やすのです」

「聞いたことがありますわ」

「調べで南の方の海沿いに生えることはわかっていますが、岸側には植生がありませんでした」

「南の……孤島だと、言うわけですか？」

「前にエガイド王から聞いた言葉がよみがえる。」

「よくお分かりです。その通りです」

「たしか古竜ズラメドの地だったと」

「ええ、出来たらで結構です」

「出来たらとしかこちらとも言えませんが、頭の片隅に入れておきます」

「よろしく願いますね」

こちらも折角長の所に来たのだから、仕事の依頼もしておく。

自分の作るものの性質上、あまりなところには頼みにくいのもあった。

今日のひそかな本題でもあったのだ。

長もそれを読んで植物採取など他の者でもできそうな頼みを出したのかもしれない。

「ええ、それでこちらからも見積りの依頼がしたいのですが」

「見積もり？」

「ええ、万屋なら腕のいい大工にもあてがあるでしょう。そろそろ我が家の見積りをするだけでしょうかと。それと土地の価格も」

「陛下に言った方が早いのでは？」

「一学生ですから」

それ以上にこちらを読んでくれたのか。

にやり、いや、にこりとして答えてくれた。

「またまた。わかりました、土地の価格、見積りを信頼できる所に出させましょう。誰の家を作るかは伏せて」

「おねがいします」

さすが万屋の長のもてなしだった。知らない料理すら出てきていた。

聞けばある一族でしか出さないようなレアなものもあつたらしい。

「いや、今日は楽しかった。またお願いしますよ」

「こちらこそ。長もあまり飲み過ぎないようにお願いします。あたらしい長と関係を結ぶのは面倒なので」

「いやいや、ダイスケ殿。手厳しい」

「ではまた」

「ええ」

う
う
く

33 孤島 前

33 孤島 前

町外れに学生が集まっている。

今日は南の海側への研修と言う名の旅行の日である。

鍛冶をやっている難しげな表情ではなく、年相応の顔を見せ大声を出すワード。リムナも続く。

「『架け橋』、出発である！」

「出発ですう！」

いつものパターンである。

車を引っ張ってきながらルーティンは大事だねなどと言ってみる。

「お、前の車か？少し大きいかな？」

「うん、特に改良の案がなくて。さあ荷物載せて載せて」

「助かるなあ」

どの程度の大きさが一番扱いが楽なのか。これもある意味重要なこともある。

魔力の消費量の観点から言っても。消費する魔力量が一番効率よく物を運べるように考えた結果、まあ重量も関係あるのだが、リンズヴァーラのダンジョンに行った時のものと比べ、縦横に30〜4

0センチほど大きくしたものを作っていた。

パーティ以外にも友人の荷物も載せる。全員が乗れるのでなければ、人が乗って移動するわけにはいかないし、重力制御をしながら引つ張っているように見せかける。

クラスのみんなが大丈夫かと聞いてきたが、実際には歩いているのと変わらない。それよりも、総合作成科の人のまわりつきが面倒だった。車をもう何台か納品するべきだろうか。

2年生も合同の研修に道中はそれほど危険はない。旅行などと言われるのもそういう理由もある。

それから魔物は北から攻めてくる事が多いので南は当然魔物がないか弱いものに限られてくる。

賊の類も南にはいない。魔国が囲っているせいもあるのかもしれないが。

加えてエルフの索敵も広範囲だし、剣や魔法を得意とするものも当然多い。数は力だと心底感じた。

ここ、海岸部での研修という名目の旅行は1週間であるが、夜、人目を忍んで孤島にいく必要のある架け橋のパーティは極力、力を温存する方向でいくことにした。

夕飯時。初日だけは多少保存の利きにくいものも許されており小さな宴のような様相を示す。

折角なので米と醤油を持ってきていた。

「ドルディ先生、米のことはごまかしてくださいね？」

「わかっておる」

「せんせー！生の魚ってこんなにうまいんですねー！」

「この白いものに合うわ！」
「おいしいっ！」

「このタレはどこで手に入るんすか？」

「リラブレム家で最近作られたものだ！」

「なんにでも合いそうですね〜！」

「この白いのは？」

「米じゃ！リラブレム家から同じようにいただいたのだ。感謝するのだぞ」

「リラブレム家ばんざーい！」

「頑張つてねミリア」

「レインもだよ」

「え？僕も？」

「なんと言つか、頑張つて米の種を出したからね、もみとか言つたと思うけど。それを撒くと米の原料が育つはずだから」

「ダイスケ様の言っていた水を張った畑ですわね」

「うん。そこで育てればあれが出来るはずだから」

「もみを見たと思うけど、あの皮をはいで少し表面を削るんだ。そして炊く。そうするとご飯になるよ」

「あのタレは？」

「ミリアの露天でも使われている醤油。大豆と小麦と塩で出来てるということ以外良く知らない」

「そうですか」

「早く平和にしてミリアとレインで安定供給できるようにしてね」

「任せてくださいですわ。あのパンで挟んだ肉の売り上げもかなりいいですわ。その露天のキモのタレをダイスケ様におさえられたままですもの」

「そんなに利益をよこせと言ったわけではないと思うけど……」

「だから余計に心苦しいのですわ」
「そういうものかな」

この地には水田と言う考えがあまりないようだ。昔に呼ばれた墮天者の中に日本人はいなかったのだろうか。そんなことはないと思う。言葉が通じることからしても。

ここに飛ばされた折りに自分の頭の中がかわってしまっているという可能性も否定できないが。魔力のことを考えても。

夜もふけて。

生徒たちはどうやら寝ているようだ。酒がなくても騒いで疲れて熟睡できると言つのは30を超えた自分からすると正直うらやましいが。

「どうだ？」

「全体の番の教師陣には長から報告がいつてる。万屋のハルさんがいるし、何かあっても言い含めてくれるはず」

「そうか」

「シート工先生は？」

「いるわよ？」

「うわっ！」

「大声出さないで」

「すまん」

突如そこに現れたかのように見えたシート工先生。実際はふわりと飛んできていたのだった。すでに飛行はすこしの距離ならば魔歌に頼らなくても発動できるらしい。

ワードは気を引き締めるように声を出した。

「よし行くぞ」

武具と必要最低限のもの以外を教師陣に預け、車を海岸に向かわせる。

今回は全員乗り込んでいる。

テストはそれなりに済ませている。車で海を突っ切るのだ。ワードがとても、とても心配そうに聞いてくる。

「……本当に大丈夫か？車は海に浮くようにしてあるんだろうな？」
「いや、俺が死んだら沈むけど？」

車は木の部分に対してスターストーンの割合が多い。特に前方が重いことから、魔力が途切れたとたん、車は沈むだろう。

「……帰ろう」

真っ青な顔で言うワード。

「すぐそこだよ？何かあったって泳げる距離じゃないか」

まわりも「ワードはなにを言っているんだ？」といった表情だ。

ただリムナだけは同じように青い顔になっていたが。

「オレは泳げねえ」

「ワードも泳げなかったんです？初耳です」
衝撃の告白。

どうも湖で急に深くなった所に落ち込んだ経験があるらしく、それ以来足のつかない水は彼にとって恐怖でしかないらしい。リムナ理由はオーガ族は泳げない人が多いというものだった。

あまり色々聞くのも悪いし、何とか仲間を安心させようと、おぼれた時に使おうかと思っていた浮き輪を出す。個々で膨らませてもらう。

「仕方ない、これつけてて。まあ一応みんなも」
「なんだこれ？」

「浮き輪。水に浮く」

「水に浮く?! そんなのがあんなら最初から出せよ!」

「泳げないなんて聞いてないし」

「くっ……」

青くなったり赤くなったり。ワードの顔色はまあ忙しかった。

波も運良く高くはなく、暗闇の中をフィアナの索敵の技を持って南の孤島に向かう。

魔物も襲来もなく孤島に着く。孤島が本当に古竜の住処なら、ここらにたむろする魔物などいないだろうが。魔物がいないということはその情報の信憑性が増すと言うものだ。

普段ギヤーギヤーと一番うるさいワードとそれに追従するリムナが全く口を開かないせいと、暗闇の中、孤島への道を探しているフィアナへの気遣いで一言の会話もない海の旅だった。

短い船旅。ワードとリムナにとってはどうだか知らないが。それも終わった。

地面に足がついたことでワードもリムナも大きなため息をついた。

「よし、浮き輪外していいよ」

「ふっ」

「ワードがおぼれても守りますっ」

「いや、陸に上がってから言われても」

「オーガ族も泳げない人多いよね?」

「水に浮かないですっ」

「筋肉は水に浮かないからね。無駄の無い筋肉の塊なら浮かないのもわかる。ワードは練習してないから」

「わあ、ダイスケさん、ありがとですっ」

「けっ」

後になって脂肪の話をしなくてよかったと、特に体の一部の話になっってしまうだろうから、1人胸をなでおろしていたのは内緒だ。

たいまつのようなものを持ち、ふらふら歩く。

この孤島は植物の宝庫だとミリアが興奮していた。

そして。

「これ、万屋の長に言われた植物じゃない？」

サンプルまでいただいた、万屋の長に頼まれたものはすぐに見つかった。

「たぶんね」

「取らないの？」

「古竜の許可があつた方がいいかなと」

「そう」

初対面から相手の心証を悪くするのはまずい。特に土の古竜ズラメドは気を許した相手以外にはなかなか気難しい面を見せるようだとリーンに聞いていたからだ。

しばらく歩くと地面の亀裂を発見した。

特に落ちそうになることもなく。そこだけぽっかりと植物がないのだから。

「どうやって降りるんだ？」

「エガイド団は落ちたって言ってましたね。運良く古竜の背中に落ちたと」

「そんな博打はできないね。それに帰りのことも考えたい」

「うーん」

「私が飛翔魔法で運んでもいいんですが」

「深さもわからないのにそんなこと頼めないよ」

運びました、何人かは魔力切れで運べません。ではあまり意味がないし、シート工先生が疲れるだけだ。

ふと近くで魔力の高まりを感じた。ミリアやレインはどこからか魔法を打たれるのかと身構えたほどだった。

「にゃおおおおん！」

リーンの雄たけびと共に「ゴゴゴゴ……」と地響きが聞こえ、階段状に地形が変化した。

シート工の時空魔法により車に防御結界を張り、地底に向かう。

「リーンがリンズヴァーラに首輪もらってたのを忘れてたね」

「そうでしたわね」

途中レインとミリアの話が聞こえた。

事实は違うのだが。今はそれでいい。

永遠に続きそうな階段を下る。どのくらいだったか、やっと最下層に着いた。

「わしのねぐらになんの用じゃ？リンズヴァーラゆかりの者たちよ」その巨体はリンズヴァーラをものくほどだった。

土の古竜と聞いていたので土竜、モグラではなく、そんなようなものを想像していたが、色合いが茶色というだけであまり姿はリンズヴァーラと変わらなかった。

どこかで「兄弟なのだから当然だろう」と声がした気がした。竜と言っても親兄弟は似るのだろうか。うーん。

いち早く心が復帰していたミリアが姿勢をただして言う。

実際は地上の植物が興味深すぎてひっくり返ってしまい冷静に見えるだけかもしれないが。

「騒がしくして申し訳ありません。外の植物をいただきたくて」

「1、2本なら構わぬ」

「ありがとうございます」

「それだけか？」

「他は特に」

「そうか」

と言いつつ、リーンと目が合うズラメド。

リンズヴァーラのダンジョン近くにいたときのように、ワードとリムナ、ミリアとレインがそれぞれ崩れ落ちる。眠らせたのだ。さすがというべきことに、各々ペアになって支えあいながらだったため、結果、肩を寄せ合いながら眠るような状況になっていた。

竜の笑い顔などリンズヴァーラ以外知らないが、明らかに笑っているかのような顔をしてリーンと話を始めるズラメド。

「リンズヴァーラ、久しいな」

「ズラメドもな」

「……くつく。……あっはっは、おぬしが子猫になっておったとははっはっは」

「似合わぬか？」

「ああ、似合わぬな、はっはっは……」

ズラメドの笑いの衝動が収まり、リーンと向かい合って何ごとかしている。念話だろう。

話の早さというか、何もしゃべっていないので、折角起きたままにしてもらったのにダイスケたち4人は何も言えないでいた。

「そうか、そんなことがな……。しかし、わしらの魂が宿った生き物にちょうど墮天者の血が入るなどあるまいな」

「たぶんな」

「狙ってできることでもあるまい。運が良かったな。風のおぬしにはちょうど良かったじゃろう」

「ああ」

「ふむ、面白いものも見せてもらったの。違う世界の酒も悪くない」

古竜ズラメドは無類の酒好きのようだ。酒だけにはわざと酔うようにしてあるのだという。どうせここに来る者もないのだしと。それで酒に関して研究を行っているらしく、色々な植物や果実などを地上で育て、日々酒を楽しんでいるようだ。

「そろそろ起そうかの」

「はっ！」

飛び起きる4人。

「おはよう」

「ダイスケっ無事か！」

「うん」

「すまん」

「気にしないで」

こつちが悪いとも言えない。結果気にするなとしか言えなかった。

ズラメドもすこしだけ悪いと思ったのか、それとも自身の作った物を評価する人が欲しかったのか。

「おぬしらも1杯どうだ？」

「酒……？」

「古竜ズラメドは酒好きだそうだよ。振舞ってくれるって」

「ありがとうございます」

1口飲み、感嘆の声を出す仲間たち。次の瞬間にはすでにお代わりをしたそうになっている有様だ。

ミリアは何かを感じたのか、最初の1口後は口をつけず何事か考えている様子だった。

そして聞いてきた。

「これはダイスケ様の出したお酒ではないのですね？」

「古竜ズラメドがこの孤島の植物や果実で作ったみたい」

「ではわがリラブレム家でも再現できると？」

「それはズラメドに聞いて欲しい」

意を決したように真剣な表情でズラメドに問うミリア。

「ズラメド様、この作り方を聞いてもいいですか？」

どんなことでも秘訣を教えろと言ったところで教える者がいるだろうか。

人にとっては常識に近い。だが古竜は違ったようだった。

「ズラメドで構わぬ。リンズヴァーラも言っていたであろう、名が畏怖をも表すと。まあいい、作り方を記したものがある。配下に連れさせるゆえ、存分に勉強していかれるのだな、フィン。こちらに来るのだ」

とても驚いた顔を見せるミリア。「いいのでしょうか？」と言った感じだろう。

近くの扉が開き、出てきたのは竜を人型にしたような人だった。もっとうまい表現があるのかもしれないがそうとしか言えなかった、竜の紳士と。

フィンと呼ばれた人のことについても知りたかったが、それ以上にミリアが興奮しており、それどころではなかった。

そのフィンとよばれた人についていき、やっぱり紙と筆を借りて色々書いているミリアとそれを助けるレイン。

恍惚とした表情で写したものを胸に抱いているミリア。

「はああ……リラブレム家もさらに発展しそうですね」

「へばい2世とかにならないようにしないとね」

「リラブレム家はエガイド団のおかげで侯爵までのぼりつめたようなものですもの。わたくしの代でつぶすわけにもいかないですわ」

「成金とかって言われた？」

「もちろんですわ！今に見返してやるんですわ」

「陛下は？」

「言うわけありませんわ」

「言ったのは他の貴族？」

「そうですね」

「さすが陛下。ワードも頑張らないとね」

「なんでだ？」

「成金とか言って初代を貶めるのは貴族だって王家だって自分の初代を貶めるのと一緒にだと思っけど？運もあるかもしれないけど、それを引き寄せるだけの実力があつたのも確かだと思う。自身の力だけ言えば、成金の方が、初代からの地位を守っている者よりは実力は上だよ。実際に上がった者と、平行線の者。どっちが上かなんて最初からわかる。成金とさげすむ者は、実際自分自身は初代よりも凄いことをしているのかと」

「なるほど」

「俺の考えが一般的に受け入れられるかは別だけどね。地位を守り、続かせていくことに価値を見出す人もいるから」

ふと何かを思い出したように地上を見上げ、ズラメドが声をかけてきた。

「わしからも1つ頼んでいいか？」

「古竜ズラメドからのお願いですか？」

「うむ。わしの地に少し前にさまよい入ったものがある。分体で対応してもよいのだが、あまり驚かせても悪いと思ってな。分体も体が大きいかから植物をつぶしそうで出せないと言うのが正直な所だが、それを保護し、しかるべき所に送って欲しい」

「しかるべき所とは？」

「リンズヴァーラのダンジョンだ」

ぴんと来た。

「ひよつとして」

「ああ、妖精だ」

「なぜ……？」

「逃げてきたようだ。時空魔法が少しとはいえ使えるようだな。結界を張られるとなかなか対処できん。下手に壊してはかの者の体にも影響するのではな」

「わかりました。全力を尽くします」

さらにズラメドが言うてくる。

「礼だが……」

「ミリアの写本だけでも相当なものだと思いますが……」

「まあ聞いていけ、おぬしらがスターストーンなどと呼んでいる鉱物なのじゃが、コモンと呼ばれる共通石にそれぞれ特徴のある物質が混入することできるものじゃ。原石を持っていくがいい。加工するもよし、勉強するもよし、じゃ」

「ありがとうございます」

「妖精のことを頼むぞ」

「はい」

リンとズラメドは目を合わせ……。

「にゃ」

「うむ」

つづく

34 孤島 後

34 孤島 後

研修の内容は野営の訓練のようなものだ。

経験のない者にできるだけ安全に経験を積ませるための。

野営を経験している者も、自分が不寝番を経験した者は少ないためだ。

ただし今年はリンズヴァーラのダンジョンのことがあったので、不寝番を経験していない者の方が少ない。

そのせいもあり、今年は生徒も教師もあまり緊張していなかった。

しかし、かなりの緊張の中にいる者たちもいた。

研修2日目の深夜。初日と同じように孤島に渡る。

昼間に浮き輪の効果も自分で試したので、おぼれることにそれほど怖くなくなりつつあるワード。

今日も無事上陸。ワードとリムナのため息がやけに暗闇に響く。

鳥などの小動物ではない大きなもの、と言うか妖精。そしてその魔力。

たいまつで見える範囲は限られてしまっているので、見つけるのはフィアナの索敵に頼るしかない。

あと少しという所までは何度も追い詰めた。言い方は悪いが。

そのたびに地の利というか、木々や地形を利用して逃れられてしまっていた。

「くっそ、どこだっ！」

「ワード、大声ださないで」

「……すまん」

「ああ、また見失った……」

がっかりとするフィアナ。

今日はもう夜が明けそうだ。帰るしかないだろう。

いつそ明るい方が見つけやすいのかもしれないが、どうしても昼間にここに来るわけにもいかない。

下手に妖精の情報が漏れてもまずい。

一番の理由は、他の生徒に説明するのが面倒だから、だった。

そして夜が明ける。

架け橋の仲間が眠そうになっているのは仕方ない。

それを分かっているながら茶化す生徒がいるのもまあ仕方ない。茶化される方はたまったものではないが。

「おい、ワードたち大丈夫か？」

「ああ、寝不足なだけだ」

「リムナちゃんと頑張ったのか？」

「はあ？」

「どうだった？どうだった？」

「うるっせえ！ぶん殴るぞ！」

「……それは殴ってからというセリフじゃないな、見る、完全に白目むいてるぞ……」

「リムナ、なにかあったのね？」

「なんにもないですう」

「その寝不足の顔はごまかせないわ！」

「なんにもないですう」

「きゃー！ごまかすのが怪しいわ！あゝん、私も先輩とっ」

「……本当になんにもないんですう……」

さすがにお嬢様のミリアや冷静沈着のレイン、ハイエルフのフィアナを茶化す者はいなかった。リリアはすでに夢の中。

妖精が1日でつかまらなかったので、自由時間や暇を見つけて寝ておかないと大変なことになるかもしれない。

そして案の定大変なことになった。

最終日前日になってしまったのだ。明日の朝は帰還する。そういうわけで今日の夜がラストチャンスになる。

古竜ズラメドも言っていたが、色々あつたらしくかなり臆病で、かろうじて見つけたと思ったら、端から隠れて消えうせてしまう。ハイエルフの索敵ですらうまく尻尾をつかませない。

シートエ先生抜きで数日頑張ってみたのだが、結局頼ってしまつた。「私たちパーティのはずよね？」とかなりな勢いで怒られたことを考えると、初日から頼むべきだった、と後悔した。

今日も海を渡る。この1週間、海岸付近での戦闘の訓練もあり、なんとワードは泳げるようになっていた。

この夜はワードがリムナを気遣う余裕まで出てきていたのかお互いがかけるやさしい言葉と波の音で溢れていた。

作戦を練ることにする。

明かりを持つ役はリリア。

フィアナはハイエルフとしての索敵で、敵ではないが、妖精の現在位置を割り出していく。

そしてワードとリムナで追いたて、特定の場所に誘導する。

道を逸れようとした時、ミリアとレインの魔法、傷をつけない程度の初級魔法がさらに追い立てることになる。

その魔法などから必要以上に植物を傷めないように保護するのが俺の役目だ。

そして要の時空魔法。

「これは時空魔法の初歩だけど異端。戦闘には使わないけど、同族だけを保護する結界。それ以外の者は入ることが出来ないものよ」

「フェアラ族と妖精が同族だと？」

「元をたどればでしょうね。羽根と翼。確かに見た目では違うけれど、時空魔法が妖精の力で発展したことを考えれば、大元は同族なんでしょうね」

「ほう。失敗したらどうすんだ？シート工先生」

「それはそのときよ。最悪、明日1日立てないほどの魔力と体力を消費して拘束する魔法があるわ」

「そうならないといいですね」

「あたりまえよ。私だって疲れるのは嫌なもの」

みんなで頷く。

「よし、作戦開始」

「いた……」

フィアナの言葉から行動が始まる。
分かりやすく煽るワードとリムナ。

「よしよし、そっちに逃げろ」

「妖精って結構足が速いですう！」

「飛んでるからじゃないのか？」

「あ、そうでしたです」

「あ、そちらはだめですわ！」

「風の魔法は効き難いし、土をおこすわけにもいかない。仕方ない、ダイスケ、木々をたのむよ！」

「はいよ！」

炎が行く手を阻む、障壁で囲った炎魔法は炎の壁のようにも見えた。コの字に囲い、妖精が向かってくる方向以外には炎が行かないようにした結果だった。

何とか木々に甚大な被害も出ず、最終段階へいけそうだ。

妖精がシート工先生の結界に同族と感じてくれるか、それが肝だった。

「なかま……」

その妖精の少女の呟きが聞こえた気がした。

捕らえられた妖精はこの世の者とは思えないほど曇り沈みきった目をしていた。

同族の魔方陣とっていたものが束縛のものだったことも大きな理由だったのだろうか。

「……」

ワードの緩めの恐喝、女性陣の言葉、墮天者の声かけ。何にも反応せず、ただぼおっと夜空を眺めている妖精。

しかし、自分と近いと思ったのか、同族かとだまされ捕縛された怒りか。

シートエの言葉にピクリと反応した。

「……あなたはフェアラ族？」

「はい。先祖がお世話になりました」

「では、この魔方阵を解くのです。私は妖精族最後の1人。妖精の生き様をここで絶えさせる訳にはいかぬのです」

「妖精族があなた1人ではないと言ったら？」

「そんな訳ないですよ、フェアラ族の者よ。私がどれだけ旅を続けてきたと思っているのですか？あなたのこれまでの人生の何倍もの旅を続けてきているのです」

シートエはダイスケにちらりと目線を向ける。フェアラ族としてもこれ以上の効果は得られないということだろう。

「強情だね。リーン頼む」

「にゃん」

その一声と共に幻影であろうが、リンズヴァーラ本体と同じ姿が浮かび上がる。

「リンズヴァーラ様……」

「初めて会つか、妖精の者よ」

「フェールと申します。リンズヴァーラ様、なぜあなた様が……」

「ふふふ、この者たちは、われが目にかけた者たちよ」

「リンズヴァーラ様といえど、妖精族の最後に残されたものとしての役目がございます。なにとぞお許しいただきたいと存じます」

「生き様を誰に伝えるのだ？」

「どこかで生きているであろう、同族にです」

「矛盾していると思わぬか？」

「矛盾などしておりませぬ。同族に会い、子を成し、わが半生を伝えるのです」

「先ほど同族がいるとこの者が伝えたはずだが？」

「本当なのですか？！」

「ふむ、おぬしらにとってフェアラ族というものはあまり重きをおく存在ではないのかな？」

リンズヴァーラの幻影に完全に萎縮してしまい、泣きそうにすら見える妖精がかわいそうにすら見える。

何とか慰めたかったが、レインとワードが追い討ちをかけてしまった。

「フェアリは結構シートエ先生にいい感じだったけどね」

「そうだよな、フェアラ族に心を残すみたいなこと言ってたもんな」瞬間、レインの足の甲をミリアが踏みつけ、ワードのわき腹をリムナがつねる。

ワードはともかく、レインは失言だと理解したようだった。

同族は存在する。さすがに古竜に言われては疑いようもなくなってしまった。

リンズヴァーラのところにいる妖精の名も知っていた。

「……申し訳ありません」

「われに謝ってもらっても困るのだ」

くるりとシートエの方を向き謝る妖精。

「申し訳ありません……」

「こちらすみません。あなたのためとはいえ、同族しか入れない魔方阵で拘束魔法を使ったこつちも悪いことに変わりないですものね」

何とか一件落着した。

これから帰れば3時間ほどは眠られる。特に仲間の他の生徒とも仲のよいリリアは疲労困ぱいだ。友達が多いので仮眠を取る間がなかったようだ。海の上でも寝てしまっていたようだし。

反則であるが、リーンに不寝番を頼んでみんなで寝よう。それしかない。

リーン用にミルクを出して一息ついた時にはすでに車に寄りかかって眠ってしまった。

翌朝。もう少し寝たかったが仕方ない。

折りたたみの屋根を車に展開し、さらに奥にもう一枚カーテンのようなもので隠す。

「この車から出ないようにお願いしますね」

放っておくとすぐに安全の確認をと顔を出してあたりを見渡そうとする妖精のフェールに釘を刺し、帰り道を進む。

あくびを噛み殺しながら進む帰り道。教師陣にお願いして架け橋パーティーはリンズヴァーラのダンジョンに寄り道することになる。文句も言われたが、ミリアの写したスラメド製各種酒の製法を盾にするとあっけなく許可を出した。

まわりに人もいないので、全員を乗せて走る車。リリアはまだ寝ていた。

かなりの速度が出ていたこともあり、夕方になる頃にはリンズヴァーラのダンジョンについていた。

「なつかしいですう」

「よし、じゃああまり時間もないからいくぞ」

転移。

目の前には見覚えのある、巨軀。リーンと目を合わせている。

「久しいな、『架け橋』の者たちよ」

「はい。お久しぶりです。つきましては」

「わかつておる。フェアリ、来るのだ」

また何かおいしいものがいたただけるのかしらといったニコニコ顔で入ってきたフェアリだったが、あるものも見つけ動きが止まった。

「はい、主様、ただいま……。……同族……。？」

連れてきた妖精のフェールも同様に。しかし激しい感情を見せた。

「え……。本当に……。？……。え、ふえ……。ふわ、あああああああああん！！」

結局泣き止ませるために、フェアリにも好評だったお菓子を出す。泣きながらお菓子をほおばる様子にどこかで見たなとミリアの顔を見る。ワードも同じ感想を持ったようで、ミリアからにらまれてしまった。

「落ち着いたか？」

「申し訳ございません、リンズヴァーラ様。ここに来るまで正直、半信半疑でございました」

「古竜が外の世界の世話を焼くことなどほとんどないからな。仕方あるまい」

「ですが、リンズヴァーラ様の顔に泥を塗ったことも事実。いかようにも……。？」

「くくつ……。苦戦したのはこの者たちであり、われではないのだから。ふむ、『架け橋』のリーダー、ワード、おぬしはどう考える？」

リンズヴァーラはリーンとの念話から、リーンが力を出せば簡単であったことを理解した。

しかしなんとか知恵を絞り、最良の結果を導いたのはこのパーティの力だ。

リーンの不寝番も重要ではあったのだが。
リンズヴァーラはパーティの者たちの意見を聞いてみようと考えたらしい。

「力一辺倒だどうにもならないこと、前衛としてかえって勉強になりました」

「つくづくおぬしは鍛冶科に向いておらぬな」

「あたしもワードと同じですう」

「リムナもか。レインは？」

「僕は魔法を打ち込むための目標点をきちんと定めないと威力が半減することが分かったことが。言い方は悪いですが、今回の収穫です。特に言うことはありません」

「わたくしもですわ」

「リリアは？」

「索敵、というものを考えさせられました」

「わたしも、ハイエルフとはいえ、魔法だけに頼るべきではないと」

「シートエは？」

「フェアラ族として、妖精の仲間を増やして仲良く生きていつていただければこれほどうれしいことはありませんわ」

「ダイスケは？」

「このようにかつて虐げられた種族の保護を何らかの形で出来たらいいなと」

「妖精族以外は人に迫害されておらぬよ。他の者達はそれなりの力を持つておるからな」

「では今回のように他の妖精が見つかった場合に誤解の無いように連れてこられるような物がほしいですね」

「考えておこう。と、そういうことで誰もおぬしを責めておらぬようだな」

折角お菓子で泣き止んだのに、今度はうれし涙で大泣きすること

になってしまった。

泣きやんでもらうようにお菓子をまた出すくらいならいつそ再会を喜んで宴会にしまおうと考え、さまざまな料理を、酒や飲み物を出した。

その日は結局リンスヴァーラのところで一夜を明かすこととなった。会話を一部抜粋する。

「あの果实には魔力を回復させる効果があるわ」

「あの実はおいしくはないけど、生きていく上で重要なものがたくさん含まれているわ」

「この葉をすりつぶしたものは毒に効くわ。根は傷に。でも実は逆にお腹を壊すからね」

完全に妖精フェールの植物講座になっていた。

35 恋人

35 恋人

「コモンストーンか」

（自然界には存在しないものだな）

「そうなの？」

（存在する場所により、簡単に特性付けがされてしまうからな）

「火山にあつたらファイアストーンとか、雪山にあつたらアイスストーンとか？」

（ああ、地面に落ちていてただでアースストーンなってしまうくらいだからな）

「じゃあ出来るだけいろいろなものに近づけないように保存した方がいいかな」

（何かの箱に入れてできるだけ他のものに触れさせない方がいいだろう。と言ってもディスプレイならばどうとでも出来そうだが）

「たしかに。1つ残してしまっておこう」

（風には反応しないようだがな）

「そうなんだ。これ、特色が付く前に魔力通したらどうなるんだろ？ うーん、変わらないか」

今日は研修の終わった日の翌々日だ。1週間半徹夜状態だったが、リンズヴァーラのダンジョンでもゆっくり休めた。やはり古竜の力なのか、ダンジョンに初めて行ったときのように、1晩ですっきり

だった。

今日も快適に目覚め、朝からズラメドからいただいた石をいじくり回していた。

元世界なら10時のお茶の時間が近づいていた頃。

リリアが元気に訪問してきた。

「おはよ、おはよっ！」

「ああ、リリア、おはよう」

「なにそれ？」

「コモンストーン。ズラメドからもらったやつ」

「ちよつと見せて」

「いいよ」

「ありがと。って重っ！大きさじゃ信じられない位重い」

「そう？」

「あれ？ダイスケは重くないの？」

「うん」

「前に見せてもらったワードの長剣くらいの重さがあったと思ったけどな？」

「うゝん、どうしてなんだろう？」

（ダイスケの魔力の色が付いたのではないか？）

「そんなことがあるのっ？リーン！」

「うゝん、試してみようか。これにリリアの魔力を通してみて？」

「あ、軽い。っていうか普通かな。よしっ。いいよ」

「貸して。っと、本当に重い！」

「あたしには普通だけど……」

「なるほど、なるほど。そういう性質があるんだ。中はっと」

何もしない物とそれぞれの魔力を通した物を解析魔法で見比べてみる。

「魔力構造の螺旋が変わってる」

「あたしには同じに見えるけど……」

「並び順が違うと言うか。石の構造ではなくてもっと深いところ」

「ええ？ わかんないよ？」

「戻せるかな？ こうかな？」

「あ、3つとも重くない」

「戻せると。スターストーンとかからこれだけ取り出せないかな？」

「鉄と違って複雑ね？」

「うん。お、出来そう」

手近にあったスターストーンを手に取り、コモンストーンと同じ構造にしようと不要な所をより分ける。すると、スターストーンからパラパラと何かが落ち、床に着く前にきらきらと消えた。

「出来たけど、今はがれた物はなんだったんだろう？」

（魔力障壁に良く似たものだったな）

「じゃあ、これを魔力障壁の上に置いてみると？」

「あ、スターストーンね！」

「なるほど。ファイアストーンなどと比べて量が多いのも分かる気がする」

「どうして？」

「霊峰や御神木、聖域って呼ばれるようなところは自然魔力が多いから、かな。この世界、そうでなくても人のあまりいないところでは自然魔力がそれなりにあるし。人が多くて自然魔力が少ないような所じゃないとアースストーンは出来にくいんじゃないかな？」

「ふうん」

「でもそうするとどうやってコモンストーンが出来るのかがわからないんだけどね。それとも、長い間違う場所にあると性質が変わるのかな？ しばらくファイアストーンを水につけてみるか。それとも

……」

うんうんと考えながら自分の世界に入ってしまうダイスケ。

それを悔しさと諦めが混ざったような表情で眺めるリリア。

「んもっ、せつかくの2人きりなのに……。早くダイスケの気を引くようなものが無くならないかな……。……」

（それは難しいのではないか？）

「だよ……。どうしよっか。折角ちよっという服着てきたのになあ……。……」

「……。そうだ、リリア」

その思いに気づいたのか。

「！なにになにつ？」

飛び跳ねるように答えるリリア。

「お昼にしようか」

「がつくり……。……」

いい服でなかったらその場に崩れ落ちそうなほどの落胆ぶりだった。

「どうかした？」

「……。なんでもない」

「で、ここ？」

「うん。報告も兼ねて」

今日は本当にがっかりなことばかりだといわんばかりのリリアの表情。

年頃の男女2人ならもっと他に行くとところがあるんじゃないの？
と言わんばかりだ。

「ただいま」

「ただいま」

「おお、ダイスケ。メシはまだか？」

「ええ」

「では一緒に食おう。おいケイト、メシだ」

「俺が出しますよ」

「それはありがたい。ケイト、皿だけでいいぞ」

「はい！」

「これは？」

「パスタ」

「ぱすた？ 麺のようだが、こんなに汁が少なくていいのか？ 具もないし」

「ああ、前に食べました。ラーメンのようなものですね？」

「らめん？ まあいい、それもまた食わせてくれ」

「はい。サラダなんかも出しますね」

ペペロンチーノ。それなりにちゃんと言うと「アーリオ・オーリオ・エ・ペペロンチーノ」、直訳はニンニク、油と鷹の爪。麺と作り方がもつともごまかせずに現れるパスタの一種。おいしいものは素直においしいと思える一品である。

みんな箸やフォークでそれぞれに麺を口にする。作法などは元の世界の話だ。

こつちでは色々言うこともないだろう。

「うまいな！」

「ええ、ピリツとしていいですわね」

「ちよつと辛いかも。あ、ダイスケ、そのくるくるってやるの教えて！」

「いいよ」

大人には好評のようだった。リリアはまだすこし子供舌か。

そんなことを思いながらリリアにフォークの使い方を教えてあげていた。

「うーん、酒が飲みたくなるな！」

「まだお昼ですからね！」

「わかっているわい」

「平和になつて余裕ができたらいくらでも」

「……、そうだな！今は剣を打たねばな」

「はい」

なぜかとても強くリリアが自分の部屋に来いと言つのでリリアの部屋に入る。

仲間との宴会や会合など、ほとんどダイスケの部屋か地下研究室を使っていたため、この世界で異性の部屋に入るのはこれが初めてだった。

ちなみにリーンはケイトさんに捕まっていた。

「へえ、ここがリリアの部屋かあ」

「恥ずかしいからあんまり見ないでね」

「女の子らしくていいね」

「そ、そう……？ありがとう」

元の世界にありがちなポスターなどは当然無い。

質素だが片付いた部屋。布団やクッションの色や柄が唯一女性らしさを出している。

棚を見ると鍛冶に関する本や短剣、鉱石の類があるので布団やクッション以外を見ると女性の部屋と見るのは難しいのかもしれないが、この部屋の雰囲気や香りは確かに女性の部屋だった。

たわいのない話。

学校のこと、授業のこと。

市場の露天の料理のことやお菓子のこと。

この町のことではあまりに会話の種が少ない。

自然と会話が途切れる。

「
……」

お互い見つめ合う。

苦しい沈黙ではなかった。

本人たちにはとても長いと感じるあたたかな沈黙の後。

自然とお互いの距離がゼロになる……。

触れるようなキス。

体のふれあいは一瞬だが心は大きく満たされる。

そしてその行為は徐々にお互いを強く求めるものになっていった。

「んっ……はあ……」
「……」

「ダイスケ、ありがと」
「こっちこそ」

リリアはとろけるような笑みを浮かべた後、すこしだけ申し訳なさそうな表情をした。

「続きはもう少ししてからね。あたしもまだちょっと怖いから……」
「ん」

夕飯だと呼ばれるまでリリアの部屋は暖かな、幸せな空間だった。

夜、リリアはそれは幸せそうな笑顔を浮かべていた。

自室の寝室でダイスケは考える。

この世界に来てどのくらい経っただろう。帰る術はない。

家を建てようなどと思うくらいこの地に根をはってしまった。

後悔はないといえば嘘になるだろう。時々元の世界でやり残した仕事などがどうなったかなどと考えることがある。

くだらないことならそれ以上に。あの小説やマンガの続きはどうなったのか？など。

それ以上にこの世界でかわった人を、愛おしいと思うようになった。

もう半分以上、いやほとんど自分はこちらの人間なのだろう。色々な物や刺激は元の世界よりも断然少ない。

しかしその分、この世界は人とのふれあいが美しく、楽しく、愛
おしい。

改めて考えなくても自分はこの世界が好きなのだろう。

みんなを守りたい。

そんなことを考えながら眠りに落ちる。

この日はある意味、ダイスケがこの世界に生まれた日になるだろ
う。

翌日。

常にスキップしているような雰囲気のリリアにフィアナが声をか
けた。

「リリア」

「フィアナ！」

さすがに大声で話す類のものではない。自然と小声になる。

フィアナのまわりにはミリアとリムナもいる。

「どうだった？ってその顔を見れば分かるか」

「うん！」

「よかったですわね、リリアさん」

「うらやましいですう」

「で、最後まで？」

「ううん。あたしまだ怖いもん」

「そうか、ならわたしも待った方がいいか？」

「ダイスケは初めてじゃないって言ってたから、そうなくてもいい

よ

「そうか。でもシート工先生はどうするかからんな」

「うん。でもあたし、シート工先生も好きだし」

「そうだな」

うらやましいといった表情にリムナにフィアナが問いかける。

正直、ワードとの仲は進んでいてもいいはずなのだが？

「リムナはまだなのか？」

「昨日もお酒を飲みに行って終わりですう」

「そ、そうか、がんばれ」

リムナ、ガツカリ。

「ミリアはもう？」

「まだですわ。結婚までするなと両親に釘を刺されてますわ」

「どうして？」

「レイン様と結婚できるならいいのですが、最悪レイン様が命を落としてわたくしが他の男性のところ、侯爵令嬢としての結婚などをしなければならぬ場合、処女でないという事は少し問題になるそうですの」

「大変ね」

「ええ」

ミリアは死ぬつもりも死なせるつもりもございませんわと胸をはっていた。

そして架け橋の男性陣。

「ダイスケ、女性陣がなにか変なのだが？」

「はあ？」

心底「なにを言っている？」といった表情のレイン。

「何だレイン、その顔は？」

「なんでもない。これはリムナは苦労しそうだね」

「そうだね」

ダイスケとレイン、「リムナがかわいそうに」と肩を落とす。

「どうしてそこでリムナの話が出てくる?!」

顔を赤くし怒鳴るワード。

「それも分からないようじゃね……」

「処置なしか」

ワードがどうもお子様過ぎるようだった。

女性陣にも聞こえたのか、今日はリムナのための作戦会議という名の夕食会が開かれるようだ。

ワードは帰らせておいて、他のメンバーでダイスケの地下研究室で。

レイン共々給仕の役に強制的に任命された。

女性陣の裏での打ち合わせで出来たこのイベント。同じようなイベントがこの後2回あったのは言うまでも無い。

シート工先生はともかく、フィアナは特にそうだったことに疎いようで、キスするだけだというのに、あがり方が半端ではなかった。面白かったが、記そうとすると殴られそうなのでやめておくことにする。

う
う
う
う

36 我家

36 我家

進級。2年生になる。進級にあたり、テストの類はない。卒業するためにはあるが。それも明らかな半人前以下の者を戦闘部隊や鍛冶見習いとして送り出さないための評価によるものであって、実際にテストがあるわけではない。

2年生は特に授業が存在しない。基礎と知識は1年のうちに叩き込まれる。特に格闘科と魔法科は実戦が主になる。万屋の依頼や昨年発見されたリンスヴァーラのダンジョンなどに力をつけさせる。

そしてダイスケたちが昨年結成したように、2年生ではパーティでの行動となる。鍛冶科は特にパーティ用の武器を作ることになる。自分の作りたい武器を使ってくれる者、もしくはだれそれの作った武器を使いたいからとパーティを組むのだ。もちろん鍛冶科とはいえ学生なのだから満足のいくものを作るはずもなく、2年になると師弟契約を結ぶ。そしてその鍛冶屋で学生の作る武器及びその師が作る時は材料費を国が持つのだ。卒業者にはそういったものがないので弟子入りはそれなりの腕がいるが、学生の場合はそういった恩恵があるので、鍛冶屋の方にしても断ることは少ない。師弟契約の破棄は正当な理由がある時のみだ。「師匠がおつかないから」程度では無理である。そして鍛冶科の2年生での評価はその師匠が行

うことになる。格闘科と魔法科の生徒の評価は万屋がその任を請け負っている。

「よろしく願います！」

「うむ。ワシは厳しいが頑張ってくれ」

ラクス武具店に師弟契約を結びに来たのはワードとリリア。普通親子で師弟関係を結ぶことはあまりないが、ライラスはこと鍛冶に關しては一切の妥協をしないため、ものすごく厳しい。今までも何人かの契約者が来たが、怒声の嵐でノイローゼになってしまったらしい。だが、それぞれの鍛冶屋の腕を残すためにも、契約者をあまりまとめては意味が無い。リリアには逆に実家にて契約して欲しいと学校側から言われたほどだった。

そして仲間以外のものにとって想定外だったのがワード。彼は国で最も大きく、多くの人を使い多種多様な武器を作る鍛冶屋と契約すると思っていたのだ。

ワードに言わせると、

「武器に興味を持ったきつかけをくれて、それを作った本人がいる以上、そこ以外ないだろう？」

ということらしい。

なにはともあれ、その日を境に日中はラクス武具店から怒声が止むことはなかった。

「ばかやろう！教えてくれじゃねえ！盗むんだよ！」

「ちゃんと均一に火を通せって言っただろうが！」

「作業中に話しかけんじゃねえ！パーになっちまったじゃねえか！」

それを隣の土地で聞きながら。

「ワードって基礎が出来てなかったのか？ひよつとして。人の話を聞かないものなあ」

リーンもダイスケの頭の上で、

「われの話は良く聞いていたようだったが、授業中はそうでもなかったな」

「そうだったんだ」

「授業そっちのけで自分はどう剣を打つかと終始考えているような状態だったな」

「それ、どうなんだろう」

なぜ、隣の土地かと言えば。

ダイスケの家が建てていたのだ。

ただし結構特殊な構造で、万屋の長からの紹介の大工とも何度も話し合いを行った。普通鍛冶屋は1階に店の部分と工房。2階から上に住居スペースを置く。別に4階も5階も建てるのではない。

実際宿屋などは大きいところで5階建てがあるのだから不可能ではないのだが。ダイスケの家に時間がかかっていたのには理由がある。

地下室を作ったのだ。

あまり知られたくないものを作るかもしれないと言う理由で。事

実、万屋のハルさんや守衛のオーガ族の姉弟にも何回か探るような者が来たと言われた。

見たこと無い顔だったらしいので、最悪は魔国に目をつけられたのかもしれないと。

高強度の鉄の板の表面に純鉄の被膜をかぶせ、防錆し壁と床にする。それから鉄製の柱にも。

地下室にはさらに5メートル四方の出っ張りを持たせ、凸形になった。

そこに特殊な柱を数本立て刻印魔法を施す。伸縮する柱だ。順番に小さくなる筒のような柱を作り、刻印魔法で強度を上げ一体化し、魔力で駆動するようにする。

その上に同じく防錆した天井と床を兼ねる鉄板。上側にはカモフラージュの意味も込め、木の床板を貼り付ける。

結果、1階部分の5メートル四方の床が浮き沈みする。

大きいものなどは入り口ドアから持つていけない場合があるので、そのための処置だ。地下室があることを知らなければ、1階部分に屋根つきのテラスがあるようにしか見えないだろう。

2階へ上がる階段部の隣、普通ならば下りる階段の場所にもその装置を設置。

これでダイスケ以外のものが地下室に入ることとは出来ない。リールならばできるだろうが。

その他1階には一応鍛冶屋に見えるように小さな鍛冶スペースを設置。簡単な修復ならばここだけで充分。そして台所とトイレ。残った大きな広間はそれなりの人数で食事しても大丈夫だろう。

2階、3階にはそれぞれ風呂や小さな台所、トイレを設置。大工に言わせると、階毎にそれぞれ台所やトイレなど必要ないだろうと

言われたが、そうしてもらおうように頼んだ。トイレ用の水は屋上ベランダのタンクで雨水をため、使うことになる。解析魔法でパイプ作成もお手の物。水洗トイレを作った。飲料水はそのつど汲まなくてはならないだろうが。

柱は所々鉄製にしてあるが、2階3階に行くに従い部屋数が少なくなる。木造メインの周りの建物がそうであつたので、総3階建ての建物など作るわけに行かない。ベランダにしておいた。

出来上がるのはもう少し先になるだろうが、楽しみでしょうがなかった。ダイスケは鍛冶が特殊なので特に師弟契約を結ぶこともせず、最近はおーガ族の武器もそれなりに行き渡つたようで、結構暇をもてあましていた。

コモンスターンとは言えば、武器に組み込み最初に使用者に魔力を流してもらうことで、武器の専用化に成功した。と言っても柄部分のコモンスターンが他人に作用すると、武器の重量バランスが崩れて使いにくいと言う程度だが。仲間の武器や防具には所有者固定の魔法をかけてもらうが、それは時空魔法の使い手がパーティにいるからであり、かつ、能力などを見て専用に作つたからだ。自分が生き延びるためにも当然のことだと思う。

原料がスターストーンで、利用価値を上げて他の鍛冶屋に卸すことでこれだけの家を建てるだけの費用が集まつたと言える。

すでに万屋に入るだけでスターストーンと書かれた依頼書、名前だけ書けばいいようになるほどの常連と化していた。

コモンスターの販売や卸も完全に万屋に依頼していた。多少利益は食われるが、わずらわしいことは万屋が引き受けてくれていた。

スターストーンを万屋から引き取り、コモンストーンにして納品。準備や消費する道具がそれほどあるわけでもなく、ある意味うはうはだった。

唯一の消費物は密閉するための箱だったが、コモンストーンを必要とするところは鍛冶屋か学校が主であつたので、通い箱で対応した。

万屋が卸をさせてくれるなら箱を作ると言つて来たので任せたところもあつた。

しばらくたつて。休日ごとのワードの愚痴に飽きだしていた頃、家は完成した。

「いらつしやい」

特にまだ家具は入れていないし、寮と研究室からの引越しも済んでいないが、とりあえず家が出来たのでみんなを呼んだ。

みんなとは……。

リリア、フィアナ、シートエ先生は当然として、ワード、リムナ、ミリア、レインもちろん。

それからライラスさんとケイトさん。ここまではまあ呼んだ範囲だったが。

「なぜ陛下やゲイン近衛団長、リラブレム侯爵ご夫妻まで？」

「なぜ？なにを言っているのだ。こつちこそなぜダイスケの出すものを食べる機会をわざわざ逃すのだ？しかも学生寮などには行けぬが、ここならばうるさい部下も黙らすことが出来るではないか」

「……」

ゲイン団長は黙ってこめかみを押さえている。色々あつたのだろう。そしてリラブレム夫妻はというと。

「ミリアとレインの新しい住居を見に来たんだよ？」

「はあ？」

レインとミリアを見ると、バツの悪そうな顔をしている。

「……ここに住むとか言うの？もしかして」

「ダイスケ様、お願いします！こうでもしないと家から出られないのですわ！わたくしも家を出て暮らしてみたいのです！」

必死な顔で言うミリア。

ぼそりとレインも言う。

「……ミサネラ国では2年生からは住居への補助が無くなるんだよ。ミリアとの食事代も馬鹿にならないし、侯爵家には毎回それなりの土産が必要なんだよ……」

「……聞こえてますわよ」

「ごめん……」

「掃除をきちんとしてくれるなら。当然ミリアも。家賃も取るからね」

「レインは掃除が得意ですわ！大丈夫ですわ！」

「ミリアもするの！」

「えっ？わたくしも？」

レインは掃除が得意だろうとも胸を張っていいことなのだろうか？

いや、ミリアの驚きからすると全てレインに任せるつもりだったのだろうか。

「今まで掃除したことないとか？」

「……いえ、そのようなことは」

「したことないんだね？」

「……ハイ」

「覚えてもらおうよ」

「ハイ……」

別に脅すつもりもなく。

掃除などこまめにやればそれほど苦労はないと伝えておく。

アールドさんは面白いものを見ているかのように笑っていた。

「あつはつは、ダイスケ殿になら任せても平気のようだね！」

「アールドさん、楽しんでいませんか？」

「いやだなあ、娘を過酷な所に置く。親として心苦しいばかりだよ！」

「どうだか……」

つい貴族に向かってあるまじきセリフを吐いてしまったが、特に何も言われなかった。ありがたい。しかしミリアを住まわせるというのは別問題だ。ルーミルさんにも視線と会話を向けてみようとするが、すでにその話は終わったとばかりに話すらさせてもらえなかった。ケイトさんと2人、リーンをおもちやにしていた。

それなりの酒や料理を消費した。

飛び込みのエグイド王もいい顔をしていた。

「今日もいい酒だったぞ、ダイスケ！」

「ありがとうございます。締めはラーメンですか？アイスですか？」
「締め？」

「俺のいたところでは飲み会を締めるにはラーメンかアイスかと言われているよ。まあ人数分両方出しませうか」

アイス派は。

「アイスおいし〜!」

「冷たくておいしいですう」

「クリームのようなものを冷やして固めてあるのか?」

「そんな感じ」

「戦争が終わっても魔術師の働きがが期待できるかもしれないわね」

「そうですね。平和になったらこれも商売になりそうですね」

「ルーミルとミリアは完全に商人の顔ね」

こちらはラーメン派。

「ラーメンというのもいいな」

「ええ、いいですね」

「僕もこれはいいと思うよ」

「やっぱり男性陣はラーメンですか」

「そうなのか?」

「ええ。酒の強い人はラーメンと言う人が多いですね」

「うむ。この中でもこの白っぽいスープのものがいいな」

「とんこつですね」

「とんこつ?」

「豚の骨を煮込んでだしを取ったものですね」

「骨からだしを」

「アールドさん、なにか?」

「いえ、露天の食べ物に少しくを出したいものがありましたね。骨の中も食材として利用したりしていますが、だしを取るのに使うとは」

「詳しくは知りませんが」

「いえいえ、いい手がかりになりそうです」

「そうですか」

貴族とはいえ、商売人には色々思うところがあつたらしい。

アイスもラーメンもきれいに平らげた所で。

やはりおいしい食べ物、心は潤してくれるものだ。

娯楽の少ないこの世界では特に。

みんな満足げだった。

「うむ、馳走になった。また頼むぞ？」

「平和になつたら毎日どうぞ」

「それは楽しみだ。ワシも頑張らねばなるまいて」

「微力ですが、力になるつもりです」

「期待しておるぞ」

エガイド王とゲイン団長、リラブレム夫妻を見送つた後。

「早速レインとミリアには片づけを頼もつかないかな」

「明日ではだめですか？」

「お皿の汚れが落ちにくくなつちゃうからね」

「僕がするよ、ミリア。だから座つてていいよ」

「まあ、ありがとうございます、レイン様！」

「はい、だめー！」

「どうしてだい？ダイスケ？」

「洗い物も出来ないとか。レインの嫁としてそれはどうなの？将来子供に『お母さんは洗い物も出来ないのね。いつもお父さんにしてもらっているのね』とか言われるんだよ、きつと」

とたんに顔つきが変わるミリア。

はつきりと想像したようだ。

「やりますわ！」

「あたしもやるわ！」

「わたしも」

「私も手伝うわ」

予想以上に女性陣にクリティカルヒットしたようだ。まあ作業がはかどったのでよしとする。

皿洗い程度、それほど苦勞することはない。別に割れたりしても惜しくない皿ばかりであつたし。

ミリアも自分のできることがひとつずつ増えていくことがうれし
いようだ。

「レイン様、わたくしいい妻になりますわ！」

などと2人でいい色の空間を作ったりしていた。

翌日が引越しの日だ。地下研究室の守衛さん、オーガ族の姉弟も今日でお役ごめんになる。

前にリンズヴァーラのダンジョンに行くとき、この姉弟の武器を参考にしてもらったのはとても助かった。

それに毎日、パーティの仲間や学友並みに顔を合わせていたのだ、仲良くもなつたし、感謝の念でいっぱいだった。

しかし、色々言おうとしてもうまく言葉にならない。

結局出てきたのは簡単な言葉だった。

「ありがとうございます。大変お世話になりました」

「とんでもないわ。わたしの斧も調整してもらつたし、こっちの方が世話になっているわね」

とんでもない、逆だといった表情の姉弟。

「そうでしょうか、たいした事してないと思つんですが」
「オーガの斧の調整なんていくらかかるか分かつているのかしら？」

「さあ」

「きちんと金銭感覚持ったほうがいいわよ？」

「いや、斧だからとかいう理由だけで高額にすることはできませんよ」

「あなたはオーガ族の希望ね」

「そこまでのことですか？」

「もちろんだよ。自分の杖もかなり使いやすくなった。つい力でぶん殴ってしまうこともあるからこの調整はありがたい」

そうなのだ、オーガ族の魔力の強いものというか力の弱いものは巨体で生まれる。それでも巨体であることには変わりないので、オーガ族の魔術師は魔法にと肉体にと重宝されることもある。殴れる魔法杖など、オーガ族にはもってこいだろう。ミリアとレインのメイスの応用をしたのだが、好評のようだ。といっても杖を鉄で覆い、超硬材のとげを施しただけなのだが。

「いつでも持ってきてください。調整しますんで」

「オーガ族の仲間も今まで前線に送った武器を高く評価しているわ。これからもよろしくね」

「はい」

「また会いましょう」

「はい！」

少し離れてしまいかもしれないが、生きている限りまた会える。次に会うときを心待ちにして、精一杯の謝辞を伝えた。

自分の荷物を多少整理し、やっぱり自分の家はいいなと外からニヤニヤと眺めていた時。

夜逃げでもするかのようにたくさんの荷物を抱えた人影が見えた。「あれ、リリアとフィアナ、どうしたの？荷物なんか持って」

「シート工先生がここに住むって言うんだもん！」

「はあ？」

「そうだ、抜け駆け防止だ！」

「はあ……」

うん、3階を作ってよかった。広い寝室用に1部屋と着替え用などに4部屋。ひよっとしてワードとリムナも来るかもと思った瞬間、ワードとリムナが飛び込んできた。

2人とも必死な形相だった。大声でまくし立てる。

「部屋は空いているか?!」

「なぜ？」

「お部屋を貸してくださいですう！」

「だからなぜ？」

少し落ち着かせ、話を聞いた。

リラブレム家もゲイン団長も、陛下にはワードとリムナの関係は隠していたようだ。しかしどこから漏れたのか、陛下はひどくリムナのことを問い、城に呼べと言ったそうだ。陛下は別に怒っているわけではないのだが、その好奇心旺盛な所が玉に瑕らしいのだ。エガイド団の頃もそんなうわさを聞くと口をはさみ、うまくいきそうなものも壊してしまうと評判だったらしい。

この国に王妃がいないのも、そのせいだと言われている。王子はいるのに。

陛下もゲインとライラスには弱みを握られているのか、なかなか大きな行動に出られないらしく、ワードはライラスとつながりがあり、ラクス武具店とも近いダイスケを頼ってきたらしい。

「まあ2階には8部屋ばかりあるからいいけど。掃除と家賃、お願

いね」

「わかった」

「わかりましたですう」

「ちなみにワードは掃除できる？」

「ふん、作業場の掃除は駆け出しの当然の仕事だ。掃除など朝飯前だ」

「ならいいよ」

「恩に着る！」

「ありがとうございますう」

楽しくもにぎやかな我が家になりそうだ。

つづく

37 錬成

37 錬成

月の半分ほどを修練や鍛冶の勉強に使う。もう半分をパーティとしての錬成に使う。師弟契約をしたライラスさんにもそれを認めてもらっていた。

今日はパーティの錬成に割り当てられた日だった。

どのような訓練を行うかなど話が出る前にこちらから提案した。

「今日は試しに全員で俺を攻撃して欲しい」

「は？どうして？」

「魔法障壁のテスト。ただ、怪我だけは怖いから、リーンにこちらについてもらう。古竜の祝福をかけてもらうつもり」

「なら怪我の心配はないな」

「うん。ただし、拠点防衛という俺の特性上、まずは錬成場からみんな出て、5分だけ時間をちょうだい。それ以降はいつ来ようがお任せするから」

「まあ、ダイスケはおぬしらの武器では傷1つつかぬよ。われの祝福があるからな。そのつもりで出来うる最上の武器や魔法を用いるのだな」

すでに仲間内やそこそ仲のいい人たちにはリーンの存在は特別

だと教えてある。特に仲間にはリーンはリンズヴァーラの意思体だとばらした。そして念話も契約してある。会話なく連携し戦闘を行えるという駆け出しには到底できない技で、パーティ『架け橋』は一目置かれる存在になってきていた。そんな連中相手に1人で戦うと言っのだ。安全はリーンが守ってくれると言ったが、不安は隠せない。

「じゃあ、ここに旗を立てるから。これを取ったらそっちの勝ちで。価値のあるものだと思って」

「それならまあいいか」

「じゃ、よろしく」

つい最近、完成した魔力障壁を使用した完全防御。数ヶ月かけたものだ。

魔法障壁を地面に設置する。すこしでも分かりにくいように土に埋まる感じで。

自分の周りにもいくつかの障壁。それから自分中心に霧のように障壁を展開する。

数分後。

色々考えたのだろう、錬成場の壁を一瞬で乗り越え、挟み込むようにワードとリムナが飛び込んでくる。同時に矢と魔法も。考える最大の攻撃をぶつけようという事だろう。正体のつかめない相手に間違っではない。

「はれっ?!」

前衛の突撃の後、牽制にと矢を放つと同時に飛び込んできたリリアが地面の魔法障壁を踏む。

柔らかな障壁がすべり、ずれたので足を取られすつころぶ。

すぐさま障壁は形状変化しリリアを包み込む。そして無力化。1人アウト。

「ちっ」

舌打ち後、ワードが立ててあつた障壁を割りながら突っ込んでくる。リムナも同様だ。しかし、内側に設置した特殊障壁が「ぼよん」というような音が聞こえそうな感じでリムナの斧の衝撃を無効化。その衝撃がスイッチでやはりやわらかい障壁に包まれて動けなくなるリムナ。2人目アウト。

霧のような障壁を毒か何かだと思ったのか、口を覆いながら突っ込んでくるワード。切られるダイスケ。息を呑むような神速の攻撃であつたが、それは残像のように掻き消えた。ならばと旗の方に向かうワードだったが、やはり障壁に足を取られくるまれる。3人目アウト。

残りは魔術師2人とハイエルフ。じりじりと進んでくるフィアナ。連射とも言うべき速度で矢を放つ。しかしやはり虚像らしく、ダイスケに当たった感じはない。平然と立っている。

フィアナの「全力魔法！」との合図でレインの氷のつぶて、ミリアの焰が飛んでくる。しかし、霧の外周に触れたとたん、魔法は時

間が止まったようにそこから動かなくなってしまった。

「連射！」

その合図での魔法連射も同じように霧の外周で止まる。矢は相変わらずすり抜ける。

次はどうするかと考えた一瞬の隙を突いて、ダイスケが飛び出す。新たな霧の障壁を纏って。

結局フィアナは一時隠れようと木の陰に近づいた瞬間、地面の障壁にとらえられた。4人目アウト。

魔法が通じず、ミリアはまだメイスでの直接戦闘にそれほどなれていない。ならば、旗を取るしかない。レインを囷とし、ミリアを旗に向かわせる作戦を取る。が、やっぱりミリアも旗付近の地面の障壁に足を取られる。5人目アウト。

対峙するダイスケとレイン。レインはメイスでも魔法でも戦闘能力は半端ではない。レインと旗の中間地点に立つようにするダイスケ。レインに向けて障壁を飛ばす。メイスで砕く。にやりとしてダイスケが言う。

「いいのかな、レイン？障壁を砕いたりして」

「なんだって？」

見れば砕いた障壁はその破片のまま引き寄せられるように捕らえられた仲間の方へと飛んでいった。

「へぶっ」

見事にワードの顔面にヒットする。

「ミリアでなくてよかったね」

「オレならいいのかっ?!」

ワードの文句をスルーしつつ、レインに言う。

「どうだい？障壁壊してみる？」

「くっ……」

いくつかの障壁に囲まれ、じわりじわりと後退するレイン。

「王手」

知らずのうちに誘導されていたようで障壁に足を取られるレイン。
全員アウト。

障壁も消えて。

最初に何も説明しなかったのだから当然ではあるのだが、質問攻めというか文句があめあられのようだ。

「なんだあれ！卑怯だぞ？」

「いやだから拠点防御にしか使えないから」

「なんで包まれて動けなくなるの？」

「伸びる樹脂から手がかりを得たんだよ。動かすと反動で包むように動くんだ。やわらかくて切れないから暴れてもだめってわけ」

1つ障壁を作り、そこへ石を投げると、そのきっかけを受け、くると障壁が丸くなる。

「あの霧は？魔法が止まったけど？」

「障壁を細かく展開してるだけ。相殺に時間がかかるから止まってる見える。それから光を反射するから、見えるところにはいないと言う寸法」

逃げ水と言えば分かりやすいのか。

「光を？……まあいいや。障壁を壊したらワードの所に飛んでいったのは？」

「特殊な障壁の弊害で、意思が離れるとお互いが引き合うんだ、なぜか。時空魔法の応用で意思に関係なくそこにあり続けるんだ。時間が来るまで。だから最後のレインへの障壁3枚と、霧状の障壁以外は、意思外の障壁だよ。多重展開にあたらないんだ。ちなみに錬成場の地面全部あれにも出来ただけど、お互いがくっつかない重さと言うか大きさがちよつとすぐには出来なくて」

「何でもありだな」

「たしかに。ま、地面とかに置くしかないから飛んでこられるとアウトなんだけどね」

「なるほど」

「今後は対空防御を考えるつもり」

「安全ならいいことにしよう。いいようにやられたからあまり納得いかないが」

「実験台にしてごめんね」

「にゃん」

リーンの1鳴きでこの模擬戦も終了した。

今日はいいところ無しの仲間たちだったが、個々の能力をそれなりに伸ばしていた。

ワード。

剣の鍛冶の腕がライラスさんのレベルに追いつこうとしていた。鍛冶に感情を込める事は、意志が強いというか、それ以外の一切の事を考えないという事が必要だと分かってきていた。

ワードの性格にすっかりとはまっていたと言うことだろう。

画期的だったことは対魔法の剣。「魔力を拡散する」と言う意思のこもった剣はレインとの模擬戦や山賊の魔術師などに絶対の威力を見せた。

ただし弱点も。

ワードは自身の専用武器しか作れないのだ。

よって体格や筋力が似ている者しか扱いにくい。少しでも長くしたり短くしたり、そのほか槍などの出来は、目も当てられないへっぽこさだった。

リムナ。

ダイスケが以前作成した専用武器がはまり、守備に攻撃にと三面六臂の活躍を見せた。小柄で子供っぽい仕草から、正規兵ではない万屋の依頼で生計を立てる傭兵のような連中に半ば脅迫に近いパティの勧誘が絶えない。現在は1人で街中を歩くことを極力しないようにと釘を刺されている。

しかしフル装備で町を歩く時は誰からも声をかけられないらしい。それを考えても声をかけてくる連中を相手にしてもただ時間の無駄だと分かるというものだ。

フィアナ。

弓矢、剣ももともとかかなりの腕の持っていたため、最近は能力の

上昇が頭打ち。ワードの剣がうまくはまった1人だった。戦闘能力の上昇はあまり望めないと感じているのか、最近は索敵に力を入れているようだ。ハイエルフとしての植物や動物との交信能力を存分に使い、魔法による索敵のさらに遠くからの索敵の能力を手に入れた。例のスターストーンの腕輪はここ何ヶ月も壊していないようだ。

リリア。

フィアナとの弓の訓練をいまだに続けているため、弓の腕もかなりのものになった。

最近は短剣の製作ではなく、ヤジリの研究をしていることが多い。多少の命中補正をつけることが出来た矢は、ラクス武具店の新たな目玉になっている。

フィアナと同じく、腕輪はここ何ヶ月も壊していない。人族であるが、索敵の技もエルフ族に迫るものを見せるようになってきた。

レイン。

特に回復、防御魔法の使い手として名が売れ始めている。ダイスケ作のメイスは、パーティで行動する時以外は使っていないようだ。周りの目がなにか怖いと言っているらしい。突き抜けた性能と言ったのはかえって使いどころが難しいのか。

ミリアル・リラブレム。

回復はレインに任せ、攻撃魔法を磨いている。レインに言われ、やはり例のメイスは使っていない。万屋の依頼や他人との一時パ―

テイでも必ずレインと同行している、報酬が半分になるうとも。

レインとの連携は熟練の兵に勝るとも劣らないものであり、この2人の名声によって架け橋の名声もうなぎのぼりと言っていいほどだった。

シートエ。

時空魔法科科长。だが、最近では使える者も増え、教師としての仕事も徐々に楽になってきているそうだ。パーティ『架け橋』として一緒に行動することも増えてきた。

レプリカではない妖精姫の豎琴のおかげもあるが、本人の魔力量もあり、他のフェアラ族の時空魔法とは一線を画すような時空魔法を使う。

基礎の時空魔法、所有者固定の魔法も、本人が死ぬまで効果が出るほどのものは、まだシートエ以外に使えない。

パーティ『架け橋』

簡単な依頼はリムナ、ファイアナ、レイン、ミリアでこなしている。現在はリムナ1人が他の人と一時パーティを組むことをさせていないので、一時パーティとして他パーティと連携するのはリムナ、ファイアナの2人組かレイン、ミリアの2人組。それが4人ではなっている。

今までの墮天者が全て強大な魔力と戦闘能力を持つ者だったので、ダイスケのことを色々言う者とは話を聞くことすらしないようだ。

「戦えないのは事実だし」とダイスケは笑って流しているが、『架け橋』は実際ダイスケで持っているようなものだ。

ワードとリムナ、レインとミリアの関係のきっかけしかり、ファイ

アナとの関係しかり。武器や防具は言わずもがな。

そして1つの依頼が万屋に張り出された……。

「辺境の村に竜が発生。至急対応お願いする」

つづく

38 反則

38 反則

「で、ワードはその竜退治に行きたいと？」

ダイスケの家、1階のリビングでパーティの仲間と夕飯を取っている時にワードが依頼を受けたいと話し出したのだ。今日の食事当番はミリアとフィアナ。ミリアも最初の頃、卵すら満足に割れなかったのは遠い昔のことだ。

「ああ、師匠にもすでに許可はもらっている。素材は倒した者で分け合うらしくてな」

「怪我しないようにね」

「任せておけ！魔力拡散の剣と行動祝福の剣。防御力上昇の剣これだけあれば大丈夫だろう」

「3刀流かよ……」

「同時に使うわけではないけどな。で、出来たらパーティのみんなにも一緒にについてもらいたい」

悩むような架け橋の面々。

「素材は魅力的だけど、俺ちょうど斧と鎧の修復がたくさん来た。前線の兵士の武器交換らしくて出来るだけ急ぎたい。だから厳しい」

「僕はついていくよ。ワード1人じゃ心配だしね。竜相手なら回復役は何人いてもいいだろうから」

「わたくしも同行しますわ」

「あたしもいくですう。ワードの背中を守ですう」

「あたしもダイスケと同じで矢の発注が大量に入ってるからだめかも。行ってみたかったんだけど」

「わたしは長老から刻印魔法のことについて早急に話し合いが必要だと言われたからやはり行けないな。もう少し早くその情報が入れば良かったんだが」

「私も授業が入っているわね」

1つ気になり聞いてみる。

「その団体の総団長は？」

「ゲイン近衛団長だ」

「近衛が動くのかい？」

「全員ではないがな。魔国への全面攻勢の訓練も兼ねて何人か連れて行くそうだ」

「ゲインさんならそれほど心配しなくて大丈夫かな」

「ああ、さすがにオレでは翼竜以上の竜の逆鱗を正確に突けるとは思わないからな。ゲイン団長の技を盗んでこようと思ってる。それから結構な傭兵が同行するようだな。リムナやレインたちのメイスのことを考えても、オレたちのパーティはあまり離れないようにだけはしないといけないと思ってる」

「メイスを持つていった方がいいの？」

「ああ、なにがあるか分からないからな。ほら、リンズヴァーラのダンジョンでも少しやりあっただろう。まだ全く刃がたたない。ゲイン団長ならどういう指揮をするのかもとても勉強になると思うんだが、もしもの備えは必要だ」

「わかりましたわ」

「ワード、出発はいつ？」

「明日の昼だ」

「早いね」

「ああ、しかしむざむざ村を破壊されるのを黙って見ているわけにもいかない」

「それもそうだね。じゃあ防具は用意しておくから」

「頼む」

「いや、俺はそれしか出来ないから」

「正直、ダイスケの特殊魔法障壁でくるんでいくらかでも行動を制限できればと思ったんだがな」

「悪いね」

「いや、いつまでも頼りきりでは前衛の名が泣くからな」

「怪我だけはしないようにね。リムナ、お願いね」

「まかせてくださいですう！」

「リムナに子守をしろって言うているみたいでなんか釈然としないな」

「それはワードがなにか後ろめたいことがあるからじゃないかい？」
「……」

「全員ではないが、『架け橋』出発である！」

「出発ですう！」

ワードは毎回同じことを言っている。

さすがに一度は理由を聞いてみたくなった。

「それって毎回言ってるじゃない？」

「いや、1度言わなくて出たときに少し怪我してな。それ以来言わないと怪我しそうで」

「そう。とにかく頑張っ。傭兵の人たちに腹が立ったからって喧

嘩しないように」

「わかつている」

「ならいいよ。いってらっしゃい」

「行ってくる」

「いってきますですう」

「いってきます」

「いってきますわ」

「気をつけてね」

「ああ、気をつけるのだ」

相手は竜。準備は万全としても心配の種は尽きない。怪我だけはないで欲しいと切に願う。

数日後。

「ダイスケ！これどうすんの？」

「隅において！それが何なのか分かる人が見たら分かるから！」
「りょーかい！」

ラクス武具店。

店主が怪我を負い、武具製作が思い通りにいかなかったのはだいぶ昔のことだ。嫁や娘が懸命に働いていたようだが生きていくだけで精一杯。そんな折、どこからかふらっと現れた青年を引き入れたこの店はガイゲルド国の、ひいては連合の最先端の武器屋になっ

てしまった。

にこにことした女性が店の中で立っている。手の中にある帳面にはどの武器や防具がどんな性能を持っているかが書き記されている。そしてその武器の性能を看破できないものには販売しない。身の丈に合った物を売るためだ。防具に関してはそれはない。命を守るものだからだ。ただし、防具の性能を理解できているかは確認する。高価な、もしくは高性能な防具は最悪仲間からも狙われるためだ。

「店主、これをいただきたい」

「この店のルールとしてその武器の性能を理解しているかが問われますが」

「なあ、ケイトさん。おりゃあだいぶここに通っているはずだが……」

「存じております。ですがどんなに見知った人にもきちんとしてと工房責任者が言っております……」

「……。この剣、スターストーンのありきたりな魔法剣に見えるが、ファイアストーンだろう。炎の系統の魔法に特化していると見える。確かにこれ一本では不安だが、雪の山に行くのには予備としてもちようどいいと思うてな」

「……。ありがとうございます。金1000になります」

「じゃあ1000で」

「確かに。ではこちらでコモンスターへの魔力の色づけをお願いしますね」

「分かった。……よし。ではまたな」

「はい。またのご来店をお待ちしております」

「ふう、今日で頼まれたものは終わったかな。どうだい、そっちは」

「あたしもほとんど終わり」

「万屋から素材は？」

「鉄が結構入ったよ。 スターストーンも」

「うーん。新しく鎧を作ろうか。樹脂は？」

「うーん、人を囲うとして4着分くらいあるよ」

「わかった。明日は鎧を作ろう」

風呂上り、冷えたビールで一杯やりながら明日のことを考える、もうもとの世界のことを考えるのはやめて久しい。帰る方法も無い世界のことを考えるのは意味が無いからだ。一応帰る方法があるのだが、この世界に実体化してしまうともう戻れない。実体化するための自身というものをきちんと持たない人、幼子などが帰ることが出来たらしい。それにしがない一般人だった自分がこの世界ではある意味特殊な能力を持てたのだ。そしてその技を駆使しての日々生きていける程度の仕事と食べていける程度のお金。確かにゲームやパソコンが無くなったのは多少痛い魔法の本を見るのは楽しい。食事にしても元の世界のように複雑な調理器具が必要な料理も魔法のおかげで比較的簡単に出来てしまう。日々の充実感がある今は、結構幸せなのかもしれない。

翌日、ダイスケの墮天者としての唯一と言っていい特殊魔法を用いて鉄鉱石から鉄をより分ける。鉄は鉄分子だけのものは純鉄などと呼ばれ武具には向かない。適度な炭素、少量のレアメタルが必要だ。

そして面白いことに地球には存在しない石や鉱物がある。ファイアストーン、アイスストーン、スターストーンなどと呼ばれているもの。今までは大きく加工が出来るものがあまりいなかったため、一応金属ではあるのだが、ストーンと言われている。

早速、鉄は魔法で適度に炭素を絡ませ店の職人でもあるライラスさんへ。職人であるという誇りが強いのか店主は妻のケイトさんが務めている。ケイトさん自身もかなりの実力を持つ特殊アクセサリ職人である。生粋の鍛冶師であるライラスさんは毎日鉄を打ち剣を作る。怪我により、片足がなくなってしまったため、体のバランスという観点でなかなか昔のようにには行かないらしいが、それでもファンがいるようでたいしたものだと思う。

俺はといえば防具に重点をおいている。どんな時でも命あつてのものだねだと思っからだ。後は供給の少ない魔法剣や特殊武器の類を少々。今日は特殊な木材から出るゴムのような樹脂の中に鎖を埋め込み関節部に施した鎧を作る。鉄部分は限りなく薄くする。そして形になった鎧にスターストーンの板を内側から貼り付ける。この技術はここラクス武具店の売り物だ。スターストーンは魔力に反応し、魔法障壁を展開できる金属だ。スターストーンのみで鎧を作ること出来るが、スターストーンはもろすぎるのだ。よって外側には鉄を施す。そしていくら金属鎧で刃を防げても、外側から炎であぶられれば鎧の金属も加熱しやけどを負ってしまう。それを守る手段だ。行く場所や、戦う相手によって、無意識でも反応するが特化型のファイアストーンやアイスストーンに変更する場合もある。そして鉄で外側を覆っているとはいえ、魔力の通っていない状態ではこの鎧はヒビが入りやすい。いくら安価にした所でメンテ代がかかるのだ。防具の大切さをわかってくれる人はそれを惜しまないし、わからないものは命を落とす。ここに来たばかりの頃は葛藤ばかりの毎日だったが、気の置ける友人やライラスさんやリリアの助言のおかげでそれなりに立ち直ることが出来た。

今日もいい仕事だ。自画自賛だが。今日のビールもうまそうだ。

そこへワードが帰ってきた。

ワードたちは竜退治に行っていた。数日ぶりだった。

「ダイスケ！これみる！」

「お帰り。無事で何より。……ってこれ、ミスリルじゃないか！どこで？」

「戦利品さ」

「何とかなったのかい？」

「そこは知恵さ。とりたいが、老衰だ。竜とて寄る歳には勝てないということだろう」

「死ぬ間際に暴れたってことなのかな？」

「ああ。で、ここからが俺の話だ。ドラゴンの鱗。所謂ミスリルだが、なんと2枚ある」

「それはすごい。で？」

「オレの作るものと勝負してほしい」

「……どうしてまた？」

「傭兵連中にも話を聞き、武器の構想を練った。オレたちのパーティの欠点をあえて探すとすれば間接攻撃の武器に金がかかることと、その攻撃力だ」

「たしかに。それに傭兵にも話を聞いたんだ。人の話を聞けるのはいいことだね」

「オレより強いやつばかりだったからな」

「分かったよ。俺も渾身のものを作るよ」

「ああ」

ワードはそう言うとミスリルを一枚置いていった。今日のノルマは終えたし、しばし長考に入る。ワードが周りの人の声に耳を傾けられるようになったのは素晴らしいことだ。直情的であるから。これは期待できるのかもしれない。そうだ、ちょうどよくハイエルフ

の女性がいる。刻印魔法を施してもらおう。手を貸してもらうことにする。今日の仕入れの品を万屋に取りに行くついでに会いに行く。

「やあ。元気？」

「ダイスケの方から私の部屋に来るとは、明日は雪か？」

「年中温暖なこの国は雪は降らないよ」

「からかったただけだ」

「わかってたよ」

「ちえつ。で、用事はなんだ。わたしに愛をささやきに来てくれたのか？」

「ああ、君の笑顔は俺だけに向けられるものだよ。詳しくは食事をして、いい宿で2人きりになってからね」

「……ぷっ！やめろっ。くすぐりたい！」

「なんだよ、乗ってあげたのに。相変わらずそっぴい雰囲気にはならないな」

「自分でも分かってる。で？」

「ミスリルが手に入った。やっとフィアナたちの専用武器を作ることが出来る」

「！……すごいな……わたしに？いいのか？」

「ワードが間接武器の勝負を挑んできた。彼もパーティのことを考えているね。それに君にあった武器も作りたい所だったし。この所、魔力の制御もかなり良くなったし冷静に戦闘できるようになった。たぶん君になら扱えるだろうね」

「そうか、わたしも成長できたということか……。分かった、世話になる」

「それにこの所、パーティの足を引っ張っていると感じていないかい？」

「よくわかったな。間接武器、弓や投げナイフは回収が難しいからな。金もかかる。いい矢をたくさん持つことも難しいんだ」

「だから余計に受け取って欲しい所だね。ま、俺だけじゃ作れない

んだよ。刻印魔法を刻んで欲しい」

「わたしがか？まだあまり得意じゃないんだが……」

「分かってる。でも最高の刻印魔法が必要だ。エルフの長老に頼んでほしい。刻印魔法は君への武器のキモになる。持ち主はマスターエルフ。なんとか許可いただきたいんだよ」

「聞いてみよう。しかし1つ訂正しておく、あたしはマスターエルフになんかならないよ」

「そうなの？まあ勝負はともかく、どうせ作るならいいもの作りた
いから、頼むよ」

「しかしダイスケは30過ぎには見えないな。歳をごまかしてない
か？」

「うるさいよ。どうせ童顔ですよ」

「褒めているのに」

フィアナは上機嫌だった。

俺のミスリルで作った間接武器は見た目のみ単純に言えば銃だ、リボルバー式のような。ミスリルで銃自体を。白化した金とストーン
の回路を中に施す。全て魔力と相性のいい金属だ。銃のグリップ部に魔力を通すと銃が起動し、本人はおるか自然の魔力も取り込んでシリンドーマガジンに順次魔力を貯める。一杯になると自動的にシリンドーが動き、次の弾の部分に魔力が込められる仕組みだ。それには金とストーン
の回路が使われている。

そして引き金を引けば、ミスリル製の銃身のライフリングがミスリルの特性で貯めた魔力を増幅させ固定化させて打ち出す。ちょうど銃弾のように。それは本人の魔力に呼応し、最初に使用者によって定められた地点へと確実に叩き込まれる。

実際に自分と戦ったのなら、障壁を何枚も重ねても守れる気がし

ない。とある極小の一点に叩き込まれる無属性の魔力弾はかなりの威力をたたき出す。ライフリングにより回転運動も加えられた弾はその小さな一点だけに留まらず、周りにも少なくない威力を示す。この世界だからこそ出来るマグナムだろう。

リリアとファイアナに2系統の魔力制御の練習をさせていたのはこのためだ。実際にグリップ部に魔力を貯めてしまえば、6発分は撃てる。目標を定めるための魔力もいつも要るわけではない。でもできて損はない。レベルを上げることが難しいが、下げることは簡単なのだ。

数日後。できた武器をワードが持ってきた。
「勝負！」

ワードの出した武器はやはりと言うかそれ以外できないのだから剣だ。錬成場で使ってみることにする。

リリアには少し大きいかと思ったが、重さはそれほどではないようだ。ミスリルは事実、鉄より軽い。鉄以外の材料を使うことで、自分とは体格の違う相手にでも扱える武器を作る。ワードも成長しているようだ。

そしてそこに込められたモノは「自分の存在を消す」。索敵、牽制役の者にとつては最上だろう。完全に消えるかは別だが、ミスリル製だけあつてかなりの効果はありそうだ。

「オレは剣しか打てないからな。索敵役の仲間の安全を考えてみた」「凄いな。いいよ、これ。それにワードがそんな考えを持つとは」「まあな、傭兵の人たちから、索敵は自身の存在を消すことだと言われてな」

「なるほど。どう、フィアナ、リリア」

「うむ、索敵に効果が出そうだ」

「うん、いい感じ」

「だろ？で、ダイスケは？」

「これ」

「なんだ、この形？」

「俺の世界で銃と呼ばれているものを作ってみた。魔力を使うんだけど」

「どうやって使うの？」

「腕輪はこのため。もう腕輪は外していいよ。で1系統はこの手持ちの部分に魔力を通す。もう1系統は目標をきちんと定めるのに使って」

「うん」

「そしたら引き金を引いて」

キュイツ……ドン！

錬成場に置いてある、カカシの上半身が砕け散る。

「……は？」

「フィアナはカカシに目標を付けたら合図して」

「……よし」

「そのまま、待ってて」

カカシを木の陰に移す。

「魔力の線が見える？木を迂回するような」

「ああ」

「じゃあ撃って」

キュイツ…キキュツ…ドン！

「……はあ？」

「まあそんな訳」

「どんな訳だ！」

「こっちは攻撃力重視。しかも持ち手部分に魔力をこめることができるうちはそれなりに連射可能。6発一杯まで溜まった状態で魔力が切れても6発は撃てる」

「このために目標を固定する系統と魔力を込める2系統の魔力制御が必要だったのか」

「実際安全な所で6発分溜めて撃つなら、同時に2系統は必要ないんだけど、なにがあるかわからないし」

「ふう。すごいですわ」

「うん。常識を疑うね。今まで墮天者と付き合ってきた人はみんなこうだったのかな」

「かもしれないわ」

「あたしたちも楽になるかもです！」

「楽になるって程度ではないわね。確実に攻撃の幅が広がるわ。2人以上並べないダンジョンでも攻撃に参加できるってことだし」
「ってことでシート工先生には所有者固定魔法をお願いします」
「いいわ」

「ついでに俺の障壁を何枚まで打ち抜けるかやってみようか」

結果通常の障壁は11枚。柔軟性を持たせた障壁は5枚。強く作りすぎたか？

「シート工先生、パーティ内の同士討ちを防げるように武器に魔法かけられないんですか？」

「出来ないことはないけど？」

「是非お願いします。そういった毒とか受けても困りますし」

実際はもしリリアやフィアナと喧嘩して銃を持ち出されたら、障壁10枚では確実に死にそうだと思ったからだ。シート工先生の含み笑いが視界に入った……。

『架け橋』間接攻撃役、ついにレベルアップです。

……マックスレベルまで……。

つづく

38 反則（後書き）

やっぱり00話と01話はいらなかったのでしょうか。

自分は面白いと思ってても他の方はそうではないという見本になってしまいそうです。

39 妖精

39 妖精

「ほう、わが体に傷をつけられたのは久しぶりだ」

風の古竜リンズヴァーラのダンジョン。来週からはまた研修で海沿いに行く。土の古竜ブラメドに伝言はあるか、と昔保護した妖精のフェールに聞きに來たのだ。リーンがいるのだから、特にリンズヴァーラのダンジョンに來る必要もなかったのであるが、リーンが折角のレベルアップを感じてみないかと言ったのでここに来た。

ワードは「弱点を突く」と言った感情を込めた武器を使っている。実際に使用者が弱点を知らなければ全く効果はないが、翼竜の逆鱗など弱点を知っていれば、効果はてきめんだった。それに鎧なら隙間、古竜でも鱗の隙間が出來た時に狙うことが出来る。これはある意味、戦士の腕を底上げする凄い技術だった。戦士や傭兵はワードの武器に体を合わせるかと真剣に悩んだらしい。

リムナは籠手部分に銃を作ったときにあまったミスリルで魔力のドリルを作り出すようにしてみた。もとの臂力に加え、魔力のドリルの破壊力は半端ではなかった。中程度の盾なら粉碎するほどに。

魔法は本人の魔力と質に左右される。あれから特にいい武器を渡してはいないが、レインとミリアは着実に成長していた。

リリアとフィアナは確実に銃を使いこなし。

シート工先生の時空魔法は範囲で敵の行動や魔法を阻害し、範囲で味方の傷を癒した。

俺？

障壁の多重展開で拠点防御に変わりありません。

なにを思ったのかリンスヴァーラは自身と戦闘しようと言った。と言ってもこちらからは攻撃しないと。普通の者に言われれば舐められているとは思えないが、そこは古竜だ。単に興味だけなのだろう。

古竜に魔法は効かない。

レインとミリアは協力し、単純に魔力の塊をリンスヴァーラに向けて放つ。炎や氷はその大元の魔法の構成を乱すことで簡単にかき消されるが、純粋な魔力の塊は魔力障壁と同じく物理の魔法だ。ダイスケが唯一得意とする魔法であるが、ただの基本と言っただけだ。

ほんの少しだけ仰け反ったリンスヴァーラの首めがけ、リムナが追撃する。さらに仰け反るリンスヴァーラ。かすかに出来た鱗の隙間にリリアとフィアナが6発ずつ、銃を撃つ。そこへワードが剣を突き刺す。込めてある感情は貫通。考えうる最大の攻撃を放った。リンスヴァーラの言葉は冒頭の通り。

「効くわけ無いとも思ったけど、案外古竜にも傷つけられるんだな」

瞬時に治ってしまったが、古竜に傷をつけたのは事実だ。

「相殺できない純粹な魔力をあて、さらに同方向から衝撃。出来た隙間に攻撃するとは。なかなかであったな」

「前に竜とやった時に、その時の団長が同じ作戦立てたんだ。さすがに火竜の逆鱗は狙えなくて」

「火竜の逆鱗を外したらガイゲルドの城程度は吹き飛ばすだろうか。まあいい判断であるな」

「はい、頑張ります」

満足げなりんズヴァーラだった。戦闘が終わったことを隣の部屋にでもいるのだろう、妖精に告げる。

「フェアリ、フェール、終わったから入っていいぞ」

「はい」

「「「「はあゝい！」「」「」」

「？」

妖精は2人ではなかったか？

仲間全員で顔を合わせ、首を傾げてしまう。

フェアリとフェールはまあ、顔見知りだ。しかし彼女たちよりも2回りほど小さな妖精は？

それも4人。

人見知りしないようで、キャツキャツと戯れる。

フェアリとフェールの方を向く。

「えっと？」

「はい、子供です」

「なるほど」

それだけで一応納得する。

シート工先生がそれぞれに名を聞こうとしていた。

「お名前は？」

「リームです！」

「フイーア」

「リーアだよ」

「アールですわ」

「何かものすごい既視感が……」

名は体をあらわす。真理だと理解した。

「恩人の名をなぞってみたんですが…… いけませんでしたか？」

首を振る。……横に。

「とんでもない」

「古竜ズラメドに何か言っておきますか？」

「いえ、お庭を汚して申し訳なかったこと。それから気にかけていただいてありがたかったこと。今は元気ですと伝えてください」

「わかりました」

「安全にお伺いできるようになればいつか直接お礼に伺いますとも伝えてください。一年以上もご無沙汰なので申し訳ないのですが」

「必ず」

「またいつでも歓迎しよう」

「ありがとうございます」

「リーン、興味深い者たち、頼むぞ」

「わかっている」

興味深い者たち？よく意味がわからずリーンに聞く。

「リーン、どういうこと？」

「たまにここに来て、念話で報告しろと言っことらしい」

「あれ、同体じゃないの？」

「徐々に離れているようだ。われもリンスヴァーラも将来は別個体として生きるのかもしれない」

「いいの？」

「どちらもわれだからな」

「そう」

「この身軽な体もなかなかいいものよ」

数日が過ぎる。今日は2度目の南の海岸への研修だ。

「『架け橋』、出発である！」

「行くですう！」

テンプレート。

今日は昨年と同様、海への学生研修に出発する。今年は2年生であるので、率先して危険を排除する必要がある。車はドワーフとエルフの共同研究の成果でそれなりのものが出来てきていた。車体を浮かせる者、前方へ制御する者の2名体制であるが。

それにそれを何人かでローテーションする。1年生には一定の魔力を供給する練習も兼ねている。

ダイスケ1人で運んでいることが元々おかしいのだ。

「今年は去年より楽？」

「いやパーティが強化されているからではないのか？」

「フィアナは？索敵」

「昨年よりも少ない気がするな」

「北に集まってるのか？」

「……魔国か？」

「わかんないけど」

「魚うめー！」

「ドルディ先生、このタレはリラブレム侯爵家の？」

「そうだ」

「米もですか？」

「そうだ」

そう、米も醤油もそれなりのものができるようになったのだ。米はともかく、醤油は解析魔法様様だと言われた。回りの食べ物がいしくなるならそれに越したことはない。ダイスケの能力も乱発することはあまり良くないだろうし。

いまさらだが。

初日の夜に古竜スラメドのねぐらにお邪魔する。

「よく来たの」

「はい。酒を出しましょうか？」

「ああ、酒は良いのう」

リンスヴァーラのダンジョンのことを説明する。

「そうか、去年の妖精がそんなことをのう。昨年、上を逃げ回っておりながらわしは何もしてやれなんだからの。謝罪は不要だと伝えてくれい。子供たちを見るのも楽しみにしておるとな」

「わかりました。彼女も喜ぶでしょう。それからこちらも去年のコモンストーンのこと、ありがとうございます。とても役に立ちます」

「おぬしらはきちんと約束どおり妖精を保護してくれた。その礼として教えたのじゃ。気にするでない」

「ありがとうございます」

「ま、また遊びに来るのじゃな、竜人のフィンもなかなか楽しめたようじゃしな」

「はい。またきます」

「次は勝ちますよ！」

「そうですう！」

人型に退化か進化か。人型になった所謂竜人と呼ばれる者たちは純粹に戦闘能力が高い。竜の鱗も健在だし。人型になったことで器用にもなっている。

古竜ズラメドの前で演舞のような戦闘をしたのだ。その演舞の主役はもちろん竜人フィン。今まで高度に知的に戦闘を行う存在はいなかったのでパーティ『架け橋』は振り回されっぱなしだった。ワードとリムナが互いに正面衝突をするほどだと言えば、どれほど遊ばれたか分かると言うものだ。

これからは武器の錬成度も重要だが、肉体そのものの技と言うか体捌きもしっかりと勉強しなければならぬようだ。

研修自体での収穫はないかもしれないが、ここに来た意味は大きいそうだ。

去年は妖精の探索で出られなかったのだが、最終日にはかがり火を所々に焚く。1年生はパーティを組む仲間を探すため、2年生はパーティの親睦を深めるためと自由時間が与えられる。酒を持ち込んだり、男女の深い親睦の為の行動を起すものが当然いるが、将来軍律を守らせるためにも厳罰が処される。それを知っていても行ってしまう者は軍人として使えないかもしれないと考えられ、将来の昇進は望み薄になったりする。

「本当に旅行のようなんだね」

「オレたちだって知らねえよ。去年は同じようにてんてこ舞いだったんだから」

「あ、そうか」

「いや、そこは腕で弾くんじゃねえか？」

「しかし、それでは次の攻撃が遅れてしまうぞ？」

「いやだから、腕で前方向にだな」

「そんな方向に腕はまがらないよ」

「そこは剣で円を描くようにしたらどうです？」

「ああ、なるほど」

パーティの親睦は親睦でも竜人に勝つための相談だった。

う
う
う
う

40 卒業

40 卒業

卒業式。意思によらずこの世界に落とされ、意思によらず入れられた学校ではあるが、卒業すると思うと感慨深い。年下であろうがなんだろうが、学友というものは生涯を通じて仲間として接することも多く、歳をとってもその時期に戻ることもできる、思い出の鍵でもある。

1ヶ月ほど前、内定が来た。と言うより、引き抜きだ。実力、協調性がある者は王の近衛騎士団に入団できる。もちろん、断ることもできるが、大抵の者は断らないようだ。

実力はあるが、パーティの仲間以外との協調性のない者などはフリーの傭兵になったりする。「自由がいい」とかいう人も大概そうだ。

実力はそこそこでも協調性が高く、金や一時の誘惑に惹かれにくいと判断されるものは城の兵に。学校に入る者で箸にも棒にもかからないような人は元々いないので格闘科と魔法科は大概これらに分けられる。特殊な事情で一個人に忠誠を誓い、そのボディガードのようなことをするものも極少数いることはいる。世話になった所などの主人本人やその子供に個人的に忠誠を誓う者たちだ。ま、結婚という将来的な結果が付いてくるが。

ゲイン近衛団長を伴い、ダイスケの家にエガイド王が来た。

「ワード、おぬしたちのパーティ『架け橋』は王家近衛団に所属してもらうつもりだ」

「おや、いや陛下、私たちのパーティは8人中、4人は格闘科と魔法科ですが、残りのうち3人は鍛冶科、1人は時空魔法科長なのですが」

「今日は正式な謁見ではないのだし、ここはダイスケの家だ、普段どおりの話し方で構わん」

「……。おやじ、鍛冶科の連中を近衛団とか貴族の反発はないのか？」

「今まで話の種にすら上らなかった連中のなにが怖いものか。リラブレム家以外の侯爵、他の3家など全盛の力の残滓を借りて細々と生きておるだけだ。リラブレムのように新しいものに手を出すでなし、地位を維持し発言力を伸ばそうと努力しているわけでもない。古の権力のみを頼ってワシに偉そうに意見するだけだ。『それなら自分でやれ』と言われるものなら途端に口をつむぎよる。そのような者ども、最近はいるだけでも損だと思っておる。まあ無事に魔国を滅ぼすか従えるかできた暁には力を蓄えてこなかった不明を恥じるであろうよ。……色々と遅いかな」

「そうか」

「陛下、いいですか？」

「おお、ダイスケ！いつもいい酒をすまん！」

「ああ、些細な能力なのでお気になさらず。今日はこれをつまみにしてください」

「これは？」

「てんぷらというものですね」

「ほう！うまいな！」

「ゲインさんはどうですか？」

「魚や野菜にこういった食べ方があることは知っていたが。これは油を多量に使うだろう？　なかなか王城に勤めるものでも食せないものだと思っていたが。これはいいな」

「ありがとうございます。ところで」

「ああ、何か言いかけておったな、なんだ？」

「俺なんかは戦闘に参加しても足手まといたと思うんですが？」

「ま、鍛冶科は１年後の作戦、対魔国との戦での名目上のものもあるな」

「そうなんですか」

「ああ、こちらの通路が開き次第、全面攻勢に入る。こちら側は完全に攻撃側なのでワシが陣頭に立つことになる。ミサネラ側は完全に守備に徹し、ワシらの攻勢を見守る側になる。しかしこの所、ミサネラ国神殿議会の反応が鈍い。さすがに魔国に寝返るものはいないだろうが、ガイゲルド側に筆頭に立つものがおらんのもその原因だと思っておる。そこで学校卒業後、おぬしらパーティはミサネラ国に入って人心掌握につとめてもらうことになる。そのためにはダイスケの技や能力も必要になると思うがな」

「俺はえさってわけですか」

「ミサネラ側の兵の武器の消耗も想像以上に大きい。ダイスケが行ってくれば前線に数多くいるオーガ族の兵士も安心できると思うがな」

「他に行く人は？」

「おらん」

「向こうでの武器修復の仕事は多そうですね」

「うむ。否定できぬ。しかしこちらから割ける人員はおらん。諸々の問題は起きそうだが、そこは王家近衛団として処理してよい」

「いいんですか？」

「ああ、ワードになるか弟たちになるかわからんが、次期王、皇太子近衛団の第１期団員としての位置づけとなる」

「確かにオレは王にならんしな」

「威張って言うでない。しかし王太子として向こうの兵をまとめるという重要な職があるのだ。弟たちもまだ幼年学校だ。今の時勢を見ればワードがその役をこなしてもらえないのだ」

「そうか、しかたねえな」

「ああ、しかたないのだ。それから卒業式に来年の全面攻勢について話をするつもりだ」

「作戦がばれませんか？」

「それならそれでミサネラ側の兵を突撃させるだけだ。どちらにしてもミサネラ側にも指揮官が必要なのだ」

「現指揮官はだれなんです？」

「トップはミサネラ神殿議会となっている。実働部隊はゲインの部下がまとめているな。ワシらの弟子パーティのような者たちだ」

「エガイド団のお弟子さんたちならば話はできそうですね」

「ああ、最近は議会に苦労しているとの愚痴ばかりだがな」

「大変そうですね。頼むよ、ワード」

「ああ、王になる気はないが、できること、しなくてはいけないことはわかっていくつもりだ」

現在。卒業式の最後、エガイド王の言葉。

「卒業おめでとう！正規兵になるもの、傭兵になるもの。剣を打つもの。それぞれ道があるう。守りたいもの、欲しいものもあるだろう。今後は己自身、己のパーティでそれを得られるように頑張つてほしい。そして、うわさ程度は聞いたことがあるであろう、来年にはガイゲルドと魔国との通路が開く。それを基点とし、魔国に全面攻勢をかける。さすがに現役の学生を動員しようとは思わぬが、おぬしら今期卒業の者たちは戦線に出てもらうこともあるかもしれぬ。今年1年、さらに腕を磨いて欲しい。……無事に生き残り、停戦、終戦の暁には盛大に宴を開き、皆で楽しもうではないか」

全面戦争のくだりで会場はざわつく。しかし、学生。宴のことを

聞いたとき、会場は爆発したような歓声と、人数以上の熱気に包まれた。

「うるせえなあ……」

「1年、がんばるですう」

やれやれといった表情のワード。

リムナは同族が多い地方への派遣と聞いてからやる気満々だった。

「宴につられようがなんだろうが、やる気のあることはいいことだ
と思うよ」

卒業式も終わってダイスケの家で。

「1年間どうするんだ？」

「半年くらいはこっちの兵士の装備を整えることになると思うよ。
特に近衛団。普通の正規兵はドワーフのものでそろえるみたいだけ
ど。俺のはドワーフの鎧より高性能だけど壊れやすいから、それな
りに稼いでないと修復代きついからね。ワードやリリアだって注文
きてるでしょ？」

「あゝ、たしかに」

「あたしの方もヤジリいっぱい注文入ってたな」

「レインたちはどうする？」

「万屋の依頼が長期的なものが今減ってきてるからね。今は1ヶ月
位の依頼が多少あるけど、年単位の依頼はもう下げられてるよ。
だから短期の依頼をこなしながら、4人の連携を上げるようにしよ
うと思ってるよ」

「わたくしはレイン様についていきますわ」

「町近くの採取依頼でもこなせばいいか」

「みんなについていくですう」

「何とか注文を半年くらいで形にして、残りの半年はパーティとしての錬成をしたいね」

「半年か……。オレの方の剣は何かなるかな」

「あたしはいっぱいっばい」

「こっちが終わったら手伝うよ」

「ありがと、ダイスケ！」

「ま、卒業おめでとうありがとう。今日はたくさん食べてね。外でも思っただけど、どこも予約いっぱいだね」

「ダイスケの出したものはハズレがないからな、こっちの方がありがたいかもしれん。ま、片付けという仕事はあるが」

仲間内の楽しく騒がしい宴会だった。

ここでダイスケのきっかけで発展し、一般化した技術と道具を説明しよう。

車。

スターストーンを板状にする技術はさすがに真似できなかったのか、薄く切ったスターストーンを並べ、樹脂で覆い、刻印魔法で一体化させている。

一枚板にしているダイスケの技術はヒビが入ると途端に出力が落ちることを考えると、いくつもの板を刻印魔法で連結し樹脂で保護しているこの方が安全と言えば安全である。ダイスケの車と能力は遜色ない。

ただ消費魔力は一枚板の方が優れているようだ。しかし大きさはあまり関係ないらしく、大人数を乗せ、魔術師の交代や休憩で安全に物資や人員を運ぶことができる車が開発されている。

昔は迂回路に、平気で1日2日かけていたことを考えると、直線

で運ぶことができるこの車は魔術師の魔力消費を補ってあまりある成果が上がっている。

鎧。

前述のスターストーンの細切れを樹脂で繋げ、鎧の内部に張っている。一枚ものでないので少々魔力障壁の効果は落ちるが、それでも一般兵には上等な鎧の部類に入る。さらに上等な鎧は刻印魔法で一体化されており、効果はダイスケの鎧並みになる。欠点として重さか。どうしてもスターストーンの強度の問題でそれなりの厚みが必要なのだ。最上級だがメンテ代のかかるダイスケの鎧とどちらを取るかは人それぞれだろうだ。

ヤジリ

前に対翼竜戦で用いた目標補正、爆発効果のあるヤジリは特級品に指定された。少々重量は増えるが、ドワーフの鍛冶師も製品化に成功している。リリアの作ったヤジリは細い先端にいくつかのかえりがあるもの。抜くだけでも激痛を伴う。貫通してしまえば、抜くと言うより押し込んで反対側に押し出すのが一番被害が少ない。それを魔物が理解しているかは別だ。人族の感情を込める鍛冶により、多少の目標補正があるのも目玉になっている。

剣。

翼竜戦にワードが使用した、魔力で刃を出す剣。ドワーフの技術で作成成功。しかし、剣自体の強度が不足しているためあまりこの

剣を求めるものはいない。それよりもそれを少し劣化させ各特化ストーンを埋め込んだ剣の方が需要が高い。柄部分と刃の内部にストーンを埋め込む技術により、鞘から出した瞬間から、炎の剣、氷の剣になるものだ。この剣の内部にストーンを埋め込む技術はドワーフがノームたちと協力して製品化させた。ただ魔力消費の観点から、ダイスケのものの方が性能が高い。

鎚、斧。

巨大鎚や斧を作るための炉や人手がある鍛冶屋は少ないうえに積極的に鎚や斧は作らないのではダイスケの1人舞台。このおかげでオーガ族からのダイスケへの謝意や好意はうなぎのぼりだ。重力制御を施した鎚は土地を切り開いたり、トンネルを作るのにも役に立つらしく、振り回せばある程度軽くなることも含め、土木工事にも使われたりしている。頑丈なおかげもある。

魔力反応型盾。

魔力に反応して巨大化とというか広がる盾。広がる機構と強度は当然反比例であるから、この盾もダイスケの専門と化している。一部オーガの正規兵の間で、ダイスケはオーガ族のために堕ちてきたと言われるほどであった。オーガ族は力の強いものほど小柄であるから、大きな盾を持つても普段は担いでも移動できない者もいる。その点、魔力で広がるこの盾を本当に余す所なく使ってくれるのもオーガ族だけだ。オーガ族の中の何人かはダイスケに王以上の忠誠を誓ったものもいるなどとうわさされている。

もちろんそんなことを公表できるわけもないが。

個人的に護衛するというオーガ族が後に出てきたことを見てもあながち間違っていないのかもしれない。

魔法メイス、銃。

完全に専用武器。ディスクは広めるつもりも閉ざすつもりもない。材料を集めてもらえば作ると言っている。竜を倒してミスリルは手に入るかもしれないが、オリハルコンや白化した金はもつとハードルが高い。金を白化させることができるのが早いのか、ディスクの寿命が早いのか。微妙な所だろう。

つづく

41 出陣

41 出陣

半年たった。と言ってしまえば一瞬だが、ダイスケ、ワード、リアの鍛冶職の者はこの半年、てんてこ舞いだった。リアなど、「もつやだあああ！」と何度叫んだことか。そのつどお菓子でなだめすかし、何とか注文のものを作り終えた。頼まれたものは全面攻勢における必要最低限の装備だ。多い分に問題はないが、足りませんでしたでは済まされない。

とある日の夕方。

エガイド王が予告無しで訪ねてきた。ゲイン団長とともに。

「ダイスケ、いるか？」

「いますよ。あ、陛下」

「ああ、そのままで良い。頼んだもの、全て揃ったと報告に来たのだ」

「それはわざわざすみません。酒でいいですか？」

「お、いいのか？それはありがたい。ゲインはどうする？」

「私は夕食過ぎまで仕事を残しておくほど無能ではないですから。もちろんいただきます」

「無料の代わりに自分の皿とコップは自分で洗うようお願いしていいですか？」

「あつはつは。王に皿を洗わせる者など聞いたことがないぞ」

エガイド王は一瞬呆けた顔をした後、大笑いしていた。

「それはそうなんですけど、皿の量も半端でないんですよ。俺が他の皿を使って料理の味が混ざるのがいやだと思うところもあるんですが」

「確かに味が混ざるのも多少興が冷めることもあるうな。よしよし、ワシだってそこらを冒険していた頃は料理も片付けもやっておる。自分の分くらいは自分でやろう」

「ありがとうございます。いつか陛下の料理というものも1度味わってみたいです」

即座にきつめの声でゲイン団長がつつこんだ。

「口にしない方がいいですよ」

「ゲイン……」

エガイド王のあつけに取られた様子を無視してたたみかける。

「何か間違ってますか？ ケイトやルーミルにも聞いてみましょうか？」

「いやいい……」

「そんなになんですか？」

好奇心で聞いてみたくなる。

「いや、味はなかなかなんだ。ただね、イモリやカエルやヘビがそのままの姿で鍋に入っていたりするとね」

「あ……、俺もきついかもしれません。俺の世界にもカエルを食べる人たちがいましたけど、そのままの姿でないので食べやすい所もあるようです」

「ふんつ。ワシの料理のうまさをなぜ理解できん」

「いえ、見た目の問題なのです」

「味はそれをしのぐだろう」

「だから、見た目が悪いとまず食べようとする気が起きないんですよ」

「……ふむ。一考に値することだな」

「一般的にはかなり気をつけねばならないところなんですがね」

ともあれ、頼まれたものは何とか揃ったようだ。
その日はみんな浴びるほど酒を飲み、動けなるほど料理を平らげた。

落ち着いた数日後。シート工先生は教師の仕事もあるだろうからと、鍛冶科の仲間も含めた、7人で連携を鍛えることを主としてそのような依頼がないか調べていた。

「何かいいものないかな？」

「長期のものではなくってるからね。みんな短期で依頼をこなしているから依頼自体が今は減っているよ」

「そつか……。じゃアリンズヴァーラの所の方がまだ得るものがあるかなあ」

「あんまり邪魔しちや悪いんじゃないの？」

（何千年も生きる古竜にとって数ヶ月や数年のことはたいしたことではないな）

「なるほど」

「おお、ちょうど良かった」

「あれ、ハルさん？」

「いつもお世話になりますね、ダイスケ殿。ちょっといいですか？」

「ええ。仲間は？」

「是非一緒に。では2階で」

これから伺うところだったんですよと、手間が省けたことがうれしいように見えた。

「あれ？長も？お久しぶりです」

「ああ、いつも酒をありがとう」

「いえいえ、今日も酒を補充しておきますね」

「うむ、すまないな」

「で、お話とは？」

酒を補充している間に見せたうれしそうな笑顔はすぐに無くなり、真剣な表情に変わる。

「ミサネラ国が不穏だ」

「なんですって！」

「落ち着けレイン！」

「うん、ごめん……」

「いいさ」

これから総力戦が始まろうというこの時期に？

いくらなんでもおかしい。ミサネラ国の人にはレインを除くと神殿団の人とリンズヴァーラのダンジョンで会ったくらいしかない。

かの国の人々の詳しい人なりは分からないものの、やっぱりおかしい。

「長、詳しくおねがいしていいですか？」

「ああ、ミサネラ国で女性ばかりを狙った人攫いが最近出てきた。

昔の人攫いは魔国からみの盗賊の類で、金を持つ者を狙ったことがほとんどだったことを考えると、今回は異常だと思っている」

「そうなんですか」

「陛下にも話は行っている。レイン殿がパーティにいること、ミサネラ側の総司令になるワード殿がいること。ミサネラ側の対応が最近鈍いことを考えても、これは逆にチャンスと思われるのだよ」

「チャンスですか……」

「ああ、ワード殿、王太子の発言力を上げるチャンスだとね」

「まあ、チャンス云々は別として、レインの祖国ですからね。できる限りのことはしますよ」

「そう言ってくれるとありがたい。じきに勅命も下るだろう」

その後仲間内で話し合いをしたが、たまに里帰りするレインの話を聞いても得られる情報は少ない。

エガイド王からの呼び出しが来るのを待つしかなかった。

翌日謁見の間にて。

「『架け橋』参じました」

「よい、ワード、楽にせよ」

「は。……で、おやじ、万屋の長の言つてたミサネラ国のことか？」

「そうだ、ミサネラ側の組織が瓦解してしまうとこのたびの作戦は破綻する。平時であればガイゲルドの民の安全さえ守られれば他国の事情に口を挟むこともないが、今は平時ではない。ミサネラ国の城壁を守る手はガイゲルドの兵士だ。ガイゲルドの兵士が女性の拉致の手引きをしたと言つことをいう者もいるらしい」

「なんだつて？」

「このままでは最悪連合が分離する。それだけは避けない」

「わかりました。できる限り早く出発します。陛下、総攻撃の折には連絡はいただけるのですか？」

「ああ、手はずを整えておく」

「わかりました」

旅慣れてきたせいもあり、出発の準備は1日で終わらせた。翌日には出発する。

「出発準備！」

「準備ですつ」

城門前広場はかなりの熱気だったが、さすがにエガイド王はいないが、ゲイン近衛団長はいた。

ゲイン団長が感嘆の声を漏らす。

「いやいや、すごい人気ですね、『架け橋』は。私たち『エガイド団』の出発の時の倍くらいいいそうですね」

城に勤めるパーティの初仕事の時には友人、家族はもちろん、手の空いた者ですらその出発を祝う。みんなの手には少量のワインが掛け声と共に、無事とこれからの成長を願って飲み干すのだ。血を分け合い、運命を分け合うように。喜びも、悲しみも。仲間と分け合うのだ……。

「『架け橋』出発！」

わあああああああああ……。

旅は順調……のはずだった。

「……で、どうしてこうなったんだろう？」

こんな状況になった原因を思い出そうとする。

近くのやかましい子供の声にも断念してしまったが。

「この車は凄いな！ボクが買ってやるぞ。お前たちのその薄い鎧を見れば金がないのだろう。金1000でいいだろう」

「……その話はミサネラ国に着いてからと言ったはずですがっ?!」

「1500ならいいのか？」

「そういうお話ではなくてですね……」（1500程度でこの車が買えるかよっ！）

（ワード、良く我慢してるですっ）

（僕の国の者がご迷惑をかけてすみません）

（レイン様は何も悪くはございませんわ）

（そうよ、気にしないで）

（しかし、本当に神殿の者の子か？）

（確か神殿3位のサルネル氏にお子がいいたと思いますよ。1位のライア氏と2位のエルス氏にお子はいなかったはずですよ）

（たしかに母の波動に近いところにいる感じは受けるが）

「しかし獣臭いのう。ボクは猫は嫌いだ。つまみ出すがよい」

（ダイスケ……消し炭にしていいるだろう？）

（待て待て、リーン！）

数時間前。

リンズヴァーラのダンジョンで1夜を明かし、ミサネラ国への道を進んでいるところだった。

フィアナが何かを見つけたようで、説明してもらった。

「ダイスケ、どうもミサネラの馬車が襲われているようだ」

「状況は、フィアナ？」

「ああ。兵たちはそれなりだが、どうもそれをトップが台無しにしているようだな」

隠れながら、話が聞こえるところまで近づいてみる。魔国の範囲下でない魔物はそれほどの脅威ではない。高性能な武器にリンズヴァーラのダンジョンで養った戦闘能力をもつ架け橋パーティならば敵にもならない。

そのミサネラ側の者たちを観察してみると。

遊んでいるようにしか見えなかった。
それほど力のある魔物ではなかった。

2人がかりで押さえ、子供がとどめを刺そうとして失敗、それで自分たちの首を絞めていた。

「アイク様！今です！」

「よしっ！」

スカッ

「なんだなんだ！だめじゃないか、今は美しくない！こんなの連携じゃない！」

「アイク様！反撃がきます！よけてくだ……ぐわっ！」

「こつちをどうぞ！アイク様！」

「遠すぎる。ここまで連れてくるんだ！美しくないぞ！」

「わかりまし……ぐはっ！」

「兵士を使って自分が一番いい所を持ってこうってことか？あれ……」

「自分が一番美しくもなく連携をしていないのですう」

ひょっとしてあれがミサネラ国の戦闘での連携だったらどうしよう。

「レイン、ミサネラの人ってみんなあんな感じじゃないだろうね？」

「もしかしたら神殿系の子息かもしれません。孤児院からの手紙に最近神殿の人間の横暴が目につくと言われていました」

「そういえば、レインは孤児院の出だったね。あとで挨拶に行こう」

「ありがとう」

「レイン様の親とも言える人にはきちんと挨拶しないといけません

わね」

「ミリアもありがとう」

しかし弱い魔物とはいえ、疲労もたまるし、傷も増えていく。

「ダイスケ、なんだかんだで兵士の消費が激しいよ！」

「このままでは微妙だな。どうもあの子供専用の馬車もやられたようだしな」

些細な傷がきっかけで動きが鈍り、致命傷を受けでもしたら、こちらも寝覚めが悪くなりそうだ。

リリアはそれを利用しようとも考えているようだったが。

「後々恩を着せられるかなあ？」

「無理だろうな」

「だよね、あの性格だとむずかしいね」

「でもダイスケ君、あとで見ていて助けなかったと言われなからし
ら？」

「あたしも誰か大怪我する前に助けた方がいいと思うな」

「そうか。じゃ、助けようか。あ、専用武器は今は隠しておこう。

見せてもいい相手かもわからないし」

「わかった。行くぞ！」

基本に忠実に。

フィアナの矢が魔物の動きを抑え、ワードが切りかかる。

横から突進してきた他の魔物はリムナがきつちりと防御する。

リリアの矢も敵を封じ込め、魔物が前衛と牽制役により1つにまとめられた後、レインとミリアの炎の魔法が焼き尽くした。

「おお、美しき連携……」

そんな言葉が聞こえるが、基本だと思うよ？

そんなことよりも。

「みんな無事か？」

「兵士のみなさんは？レイン、回復頼む」

「わかった」

ミサネラの兵士にレインが回復魔法をかけ、状態を調べている。

「1人ちよつと深手だね。歩くよりは揺れても馬車に寝かせた方が安全だね」

「そうか。兵士さん、1人寝られるようにしたほうがいいですよ」

「ああ、すまない。ただ、アイク様の乗る馬車が……」

「仕方ありません。こっちに寄せましょう。ミサネラ国までですが、こっちはまだ行く場所がありますので」

「それはありがたい！」

「ただ……」

わずかな望みをかける。

あんな戦闘をしていたのだ、性格もうかがい知れる。

「なんでしょうか？」

「あの子供を黙らせられる人はこの中には？」

「……おりません」

「じゃあだめか。仕方ないですね……」

「……もうしわけありません……」

それでも子供だということで、言っておかなくてはいけない事もあるだろう。

「アイク君と言ったかい？守ってくれた兵士さんをねぎらっておきなよ？」

「『様』を付けよ、下郎！やつらはボクの手足。手足をねぎらつものなどいる訳なからう」

「……そうですか」

ああ、どうしようもない。

こんなのに付き合わされる大人たちも大変だと思う。

聞こえても面倒なので念話で話す。

（手足が無事で生きられることになんとも思わないのかな？）

（ダイスケ！腹が立たんのか？！）

（そうだよ！もう置いていこうよ！）

（まあまあ、フィアナ、リリア、どうせ子供なんだし）

（子供だからって甘やかしてはいけないだろう？！）

（そうだそうだ！）

（怒って諫めて。その後まできちんと責任が取れるわけではないからね、あまり色々言わないつもりだよ。まあ、それなりに情報を得てからでも遅くはないよ、きっと）

親の顔も知らないのに色々言っても面倒なことになりそうだ。

こういう子供の親に限って「きちんと教育している」などと言いつつだ。

正直余計な荷物はしよいたくなかった。

（ダイスケがそう言うなら……）

（いつかぶん殴ってやらねば。ダイスケを馬鹿にされて黙っていられるほどやさしくはないぞ……）

フィアナがひそかに炎を燃やしていた。

42 他国

42 他国

ミサネラまで、あと少し、あと少しと念じつつひょんなことから同行したバカ様の相手をしている。

レインと俺が一応相手をしていた。

「へえ、アイク様はサルネル様のご子息であるんですか」

「うむ。パパは今は3位に甘んじているだけだ。じきに1位になり、議會を手に見せようぞ」

「どうして今日はこんなところに？」

「将来議會のトップに立つものとして、配下の使い方を覚えるためだ。ボクの連携を覚えてもらわなくては魔物に勝つのは難しいんだ」

「それはそれは。頑張ってください」

もうどうでもいいか。この先かわらなければいい。ワードは王族だからどうか知らないが。

「それよりも、先ほどのお前たちの連携は見事だった。あれならばボクの目指す連携をすぐにでも覚えられるだろう。そうだ！1人金100でボクの配下になれ！いい案だろう？」

見えない所で青筋を立てながら、ワードとミリアとリムナが話している。

リリア、フィアナ、シートエは話をする方に気力を持っていけないほど、ある感情に覆われているほどだった。

（金100でなにが買えるんだ？）

（一般人の1カ月分くらいの金額ではありませんけれど。リラブプレム

家の者に言うことではありませんわね)

(金100で生涯給金だったら悲しいですう)

全会一致、「腹の立つガキだ!」

それでもレインは情報を収集しようと試みていた。

「ミサネラ国で仕事を終えたらまたみんなと考えます。ところで今ミサネラ国で起こっている女性拉致のことはご存知ですか?」

「ああ、ガイゲルド国の者の手引きで外の魔国守備隊のために女をさらっているというものだろう?」

「は?それは事実なんですか?」

「そうだ」

「確認したんですね?」

「なにを言っているんだ?パパがそう言っているんだから事実に関まっているだろう」

「そうですね。このパーティも一応ガイゲルドの者たちでしてね。

その事件の解決に來たのですよ」

「うむ。さつさと解決して、神聖なミサネラ国から野蛮なガイゲルドの兵を退けて欲しいぞ」

「わかりました」

リーンと念話。

(黒幕はサルネル氏確定かな?)

(自身の子から情報が漏れるとは考えてもいまいよ)

この情報のおかげでワードは手が出なくてすんだと言ってよかった。

ミサネラ国の町と前線への分かれ道でガキの一団と別れる。

車が高性能だったのでごねたのだが、それ以上にガイゲルドの兵士の所に行くのは嫌だったようだ。

「では、アイク様、ここで」

「うむ、いい返事を期待しているぞ！」

「ええ、書状を書いていただいてありがとうございます」

「待っているぞ」

「では」

姿が見えなくなったところでみんなが特大のため息をつく。

「いやあ。むかつくガキだった。親の地位や財産を自分のもの思っている子供は一番面倒だね」

「途中で代わってくれて助かったぜ、ダイスケ」

「ワードは向いてなさそうだよね」

「レインは人のこと言えるのか？」

「いやあ、何度魔法を叩き込もうと思ったか。ダイスケが平然としてくれて助かったよ」

「レイン様よく我慢なされましたわ。ダイスケ様も」

「いや、念話さままだね。おかげでだいぶ助かったよ。1人だったらわからなかった。リーンですら消し炭にするって言ってたからね」

「古竜でも怒ることがあるんだな」

「あたしもびつくりしちゃった」

（自由な体を手に入れてから思想も自由になってきたな。竜のころであれば腹など立てることもなかっただろうが）

「子猫は怒っても子猫なのはかわいらしくていいですね」

ぎゅっ

「シート工先生……」

そして前線。兵士の駐屯場にて。

ミサネラ国の町入り口まではそれほど距離がない。歩きでも2、3時間ほどだ。

ここが一番守りやすいからということらしい。

しかし距離がないということは、ここを突破されると後は城壁でしか守れないと言う事になる。

今までそれでも守ってきたということは、ここの兵士の錬度は相当に高いという事になる。

「ようこそいらっしやいました、ワード殿下」

「久しぶりです、デイン隊長。早速ですが、話を聞きたいのです」
オーガ族にしては珍しい長身の男。線は細いが、オーガ族特有の力のありそうな雰囲気がある。

さすが最前線で戦う兵士をまとめる人だ、歴戦の勇者と言っている風格だった。

「そうですね、前線は膠着状態です。作戦決行までこちらは問題ないでしょう。ただ……」

「ミサネラですか」

「ええ。最近の不審な女性拉致の原因が我々だという話が膨らんでいます。彼らは前線と城壁を守るわけらがいないとどうなるかという簡単な想像も出来ないようです。われらは陛下の指示によってこの地を守っています。この地に思い入れなどないのです。ガイゲルドに帰っていいと言われれば何の思いもなく帰るでしょう。それに困るのはミサネラの民なのですが」

「それはこちらで何とかする予定です」

「そうですね、殿下、私はここを離れるわけにはいきません。よろしく願います」

挨拶も終わったようで、聞いてみることにする。

「非番の人たちはどうしてるんですか？」

「あなたはダイスケ殿ですか？」

「はい」

「いつもいい武具をありがとうございます。特に我々オーガ族の者にとつては感謝の言葉もないほどです」

「いえ。使い勝手はどうですか？」

「力の強いものが多いですからね。雑に扱っているつもりはないのですが、少し補修が必要なものも出て来ました。それから非番の者は大抵ミサネラ国で羽根を伸ばすようですね。最近は肩身が狭いと感じるのであまり行かないようですが」

「そうですか。件が決着したら貸家にでもいるようにしますので、修復の武具を持ち込んでください」

「わかりました。2人ほど、人をつけてもいいでしょうか？」

「戦力ではないのですか？」

「あなた方が来ると聞いて、一番に護衛をと志願されました。正直私の人心掌握の術に疑問を感じる所ですね。まあパーティを組んでいる訳でもないですし、実力はそれなりです。何かのお役には立つでしょう。おい、2人とも来てくれ」

そういつてきたのは2人のオーガ族。そう、リムナの姉兄だった。姉はラーナ、兄はガラム。

寮にいた時分の衛兵をしていてくれた人たちだ。

「久しぶりね、ダイスケさん、リムナも」

「ご無沙汰だ。元気か？」

「はい、おかげさまで」

「おねえちゃん、おにいちゃん……」

この人たち結構な実力者だったのに、いいのだろうか？

ついディーン隊長に聞いてしまった。

「いいんですか？実力がそれなりって程度ではないでしょうか？」

「正直な所、オーガ族にとってダイスケ殿は軍を離れてでも付いていきたい人という位置づけだ。ただの野蛮な蛮族を戦士にしたのだから」

「そんなものなんでしょうか？」

「使える武器がなく、木の根を棍棒にして構えるような者、はたから見たら魔物とかわらんだろうね」

「そうですか」

「では早期解決頼む。われらガイゲルドの兵士のためにも」

「わかりました。行ってきます」

来た道を戻る。夕方近くになってしまっていた。

城壁ではオーガ族ではない、ミサネラ神殿団と思われる人たちが警護を行っていた。

入国したい旨を伝えると、隊長とまわりから言われていた人がやってきた。

あからさまな嫌悪感を見せながら言う。

「ガイゲルドの者は現在通すわけにはいかない」

「あれ？城壁守備はガイゲルドの人じゃなかったんですか？」

「オーガ族などという、魔物と変わらない者たちなど使っているから、拉致など起きるのだ」

「……」

「おいっ！言っていていいことと悪いことがあるだろ?!」

「なんだと？」

リムナのなんとも言えない沈黙と表情を見て、ワードが食って掛

かる。

しかし証拠などが何もないうちに喧嘩するわけにもいかない。慌ててワードを止めた。

「ちょっと待って。すみません。今まで城壁守備をしていた人たちは？」

「議会で尋問している」

「どうしてです？」

「決まっている！拉致に手を貸したものがいるためだ！」

「……くっ」

「まあ、ワード落ち着いて」

「しかし……。リムナ……」

「……」

すでにリムナは泣きそうだ。

何とかならないものか、無理だと思うが一応例の小僧、アイクに書いてもらった書状を見せてみる。

「これで入れませんか？」

「これはアイク様の書状か？」

「ええ」

「本物かどうか、疑わしい。許可できん」

「ではこちらの書状は議会に渡してもらえませんか？半紙ですが」

「半紙？」

「ええ、渡した、受け取ったとサインをお願いします。町に入れなくてもいいですから」

「よかるう」

畏に近いのだが、正直、最初に会った権力者、その息子ではあったが、あんな教育をしているなら親の程度も知れてしまう。

レインには悪いが、少し痛い目を見た方がいいのではないだろうか。

後はレインを何とか入れてもらって情報を集めてもらうしかない。「それから、ガイゲルドの者でなかったらいいのですか？」

「無論」

「レイン、頼む」

「うん。リーン、よろしく」

「にゃん」

「なにを言っている？」

「僕はミサネラ国の者です。腕輪見てください」

「ふむ。確かにミサネラのものようだ。よし、お前だけは入ってよい」

「ありがとうございます」

「では俺たちは出直します」

「そうするがいい」

ワードの罵詈雑言は留まる所を知らなかった。

しかしそれで鬱憤を晴らしているワードはまだいい。

黙りこくったままの女性陣のかもしれない出ず雰囲気はとても近寄りがなかった。

夜になり。

「ざつとまわってみただけ、城壁の門以外はしっかりしてるね。抜け道とかもないっぽい」

「門も非常時で無ければ閉めないようだな。これなら闇に紛れつつワードのくれた剣で気配を隠せば問題なく入れそうだな」

色々調べ、無断入国、密入国の類ではあったが、事件の早期解決、オーガ族の解放を考えればおとなしくしていてもだめだということ、闇に紛れ、剣の能力を使って潜入することにした。

「リーンを道案内にしてレインと中を調べてほしい。地下室とか隠し部屋とか。出来れば議会の人しか入れない場所」

「わかった、行ってくる」

「行ってくるね」

「フィアナ、リリア、自分の体を第一にして」

「わかってる」

「大丈夫よ、ダイスケ」

「にゃん」

「いつてらっしゃい」

何とか場が動いたことで、少しは気がまぎれたのか。

リムナの顔色も多少は良くなって落ち着いたようだ。

「リムナ、大丈夫？」

「は、はい、大丈夫ですう……」

「あいつら、きつとぎゃふんと言わせてやる！」

「レイン様に任せておけば大丈夫ですわ」

「フィアナさんやリリアさん、リーンもいるしね」

「生まれを非難されるとね……。悪いことしてないのにね」

「ミサネラじゃ、結構あることよ、慣れなさいとは言えないけれど」

「ラーナ姉さんやリムナはたぶんそれほどでもないさ、武器さえ携帯していなければ。自分たちのような大きな体躯を持つ者を恐れる傾向があるから」

「見た目で判断とか。ミネラ神はそんなことしなかっただろうに。」

これを見ていたらどう思っかなあ？もしその3位以外もみんなそんな考えなら1度なくなったほうがいまいじゃないのかな？」

「か、過激だな、ダイスケ」

「神の名の下に人を虐げるのは簡単なんだよ、案外」

「そうなのか？」

「うん。きつとね、弱い人はなにかにすがりたいんだよ」

「そうか」

リーンが戻ってきた。

「今日はレインの所にフィアナとリリアはお邪魔するようだ。中に入ってしまったば、国の者など簡単に区別はつかぬ。数日でなにか痕跡を探れるだろう。われもまた中に入る。連絡はわれがすることになる。念話はあまり距離があると使えないからな」

「わかった。リーンも気をつけて」

「われを誰だと思っておるのだ？」

「いまだに外見に惑わされがちだがリーンはリンスヴァーラでもあるのだ。」

「うん。期待してます。よろしく」

「任せておけ」

翌日も守備兵と問答する。

「またお前か。入れられないと言ったであろう」

「聞きたいことがありますね。ガイゲルドの兵士に拷問まがいのことはしていないでしょうね？するとあとが怖いと思いますよ？」

「これは重要だ、最悪会戦は延期、連合が崩れる可能性まで出てきてしまう。」

「この隊長をはじめ、ミサネラ神殿団の人たちが理解しているかどうかは疑わしいが。」

「それが言葉にも表れている。」

「ふん。知ったことか」

「ガイゲルドの兵士と前線の守備兵が一気に帰ったら、あなた方で魔国の魔物と賊からこの国守れるのですか？神殿団だって回復専門職が主でしょう？」

「！……われらの力見せ付けてやるまで」

「オーガ族の助力をして前線維持がやっとなというのに？」

「ふん！神殿兵にはミネラ神のご加護がある。ただ力だけの者にな
にがきよう！」

遠くからのかすかな足音。

魔物との戦闘に多少でもなれていれば、第1級のアラームに等し
い。

謀ったかの様なタイミングだった。

「そうですか……。来ましたよ。我々は自分の命を守るので精一杯
ですからね、では」

「なにが……」

言いかけた隊長の元、伝令が飛んでくる。

「隊長！コボルドとオークの集団です！」

「なんだとう！前線守備はどうなっている！」

「この間のアイク様の書状と一緒に『ガイゲルドの兵を信用すると
いう証を見せてもらうまで、前線守備は縮小する』との書状を持っ
てきたはずですが？」

罨が発動した。

「聞いておらん！」

「しかしあなたのサインもいただいています」

「昨日のか？」

「ええ。もしかして捨ててないですよ？一応王印の付いた議会宛
ですからね」

「お、王印だと？」

「もう話している暇はありませんね。それでは」

「ま、待て、待ってくれ！」

「知りませんね」

すでにレインとレインの関係者が無事なら、あとはどうでもいい
とすら思えてきている。

時空魔法の安全地帯から城壁を眺める。まあレインは迎撃に出る
だろう。フィアナとリリアはこの機に色々調べられるといいな。チ

ヤンスだし。

しかしレインは出てこなかった。

「あれ、レイン出てくるかと思ったのに」

「ある程度守備兵の無能が広まらなくてはガイゲルドの兵の力がわからぬではありませんか」

「ミリア、それはそうだけど」

「レイン様なら孤児院の入り口に陣取って孤児院を守るでしょうね」
「なるほど」

「でも城壁守備兵の動きが悪いわね。あれでは学校にも入れないではありませんか」

「やっぱりシートエ先生でもそう思います？」

リンズヴァーラのダンジョンで見た神殿兵はもっとレベルが高く感じた。

今守備をしている者たちも神殿兵なのだろうが、いまいち実力に欠けているようにしか見えない。

直接戦闘することがあまりない神殿兵は態度ばかりでかくなるのだろうか。

使えない。

「ええ。あの錬度ではオーク指揮のコボルドで精一杯でしょうね」

「お、なんか兵が出てきたぞ？」

「あれはオーガ族ですう！」

「ガイゲルドの兵を出すことが出来たのか」

「じゃあ安心だね」

拮抗どころか壊滅しそうな勢いだった神殿兵に代わって入ったガイゲルド兵士は瞬く間にオークとコボルドを掃討した。

いい機会だからと城門近くに近寄ってみると。

「あれ、ラーナにガラムじゃないか。こんなところでどうしたんだ？」

「そんなことはいいの！拷問とか受けてない？！」

飄々とそんなことをたずねてくる兵をさえぎり、何かされていないかと聞くラーナ。

兵の表情から見ても安全ではあったのだろうが、やはり本人の口から聞かないと安心できないと言ったところか。

「ああ、今のところは軟禁程度で済んでいるよ」

「……よかった……」

「そちらの人たちは？」

「もうっ！顔くらい知っておきなさいよ、ワード殿下よ！」

「いや、それはなんとなく昔の面影があるからわかるんだけど。ああ、すみません、殿下。いつもお世話になっております」

「皮肉か……？」

「いえいえ。とんでもない」

ガイゲルドではなくミサネラで兵として戦い、ガイゲルドではなく、ミサネラの民を守る。

指示を出したのはもちろんワードではなくエガイド王だが、王族としてちよつと皮肉に聞こえてしまったようだ。

「まあいい。オレには普通に接してくれていい。王になるつもりもないしな」

「そうですか。で、この魔力、そちらの方はひょっとして……？」

「ダイスケです」

「おお、われらオーガ族の希望！」

まわりからさらに歓声が上がりそうになるほどだった。

「大げさですよ」

何とか落ち着いてもらったが、その喜びようは魔物を撃退したところの話ではないようだった。

「オーガ族の武器を作ってくれるだけで私たちオーガ族の希望と言ってもなんの語弊ありませんよ！」

「それほどですか？」

「それほんです！さあ、今のうちにまぎれて入ってください」

「いいんですか？」

「別に構いませんよ。どうせ神殿兵は半数程度が戦線復帰に時間がかかるでしょう。城壁守備はまたわれらガイゲルド兵に任せられますよ」

「ではありがたく」

「ええ。どうぞ」

「さあ、入ったはいいが、どこに行けばいいんだろうね？」
と、遠くからレインが走ってくるのが見えた。

「ミリア！」

「レイン様！」

「無事だったかいミリア」

「レイン様も……」

抱き合いそんな雰囲気で見つめあう2人。

「ひゅゝひゅゝ」

「ひゃあゝ見てられないですう」

オーガ族が開放されたことで調子を取り戻した2人。

「なっ………！」

「まあっ！」

喧嘩になってもまずいし、いずれはばれるだろうが、あまりこ
で時間を潰しているわけにもいかない。

そう説明し、レインにお願いする。

「レイン、こつちでの工房も決まってるみたいだし、とりあえずレインの所へお邪魔していい？車も隠したいんだよ」

「は、はい！こつちです」

隠し切れない古い建物。まわりから見ても浮いているほど言え
ば程度が分かるだろうか。

何とか建物として存在しているというレベルにしか見えない。

恐る恐る挨拶を試みた。

「こんにちわ……」

わらわらわら……。

決して成長がいいとは言えない子供たちが集まってくる。

それでも瞳の輝きが、多少飢えていても、いい教育を受けている
と感じさせてくれた。

1人の子供がワードの顔を見て声をかけた。

「お兄ちゃん？大丈夫？痛い？」

「痛そうに見えるのか？」

「子供はするどいですう」

多少は落ち着いたといえ、オーガ族、ガイゲルド兵への仕打ちを
忘れることはできない。

「おいちゃん誰？レイン兄ちゃんのお友達？」

「おいちゃん……」

ダイスケはおいちゃんと言われてしょんぼりしていた。

「お姉ちゃんたちは？」

「そのおいちゃん……、じゃなくてお兄ちゃんの恋人なのよ」

「わたしもだ」

「私もね」

「えゝ3人もゝ？」

「そうよ」

「おねえちゃんは？」

「わたくしはちがいますわ」

「このおねえちゃんはレイン兄ちゃんの恋人だから、よろしくね？」

「シ、シート工先生！」

「わあ、レイン兄ちゃんと結婚するの？」

「そ、それは……」

「せんせゝ！レイン兄ちゃんが恋人連れてきたよゝ」

「ま、待つて！」

ドタバタドタバタ。

建物はともかく、レインの表情を見れば、ここがいい所だと分かる。

「お騒がせしてすみません」

壮年の夫婦が来た。

「いえ、先生、急でこちらこそすみません」

「ここは私と妻しか大人がおりませんので。レインが学校に入ったおかげでガイゲルド国より援助が付くようになり、レインには頭が上がないのですよ」

「ここの子供たちは戦争で？」

「それもあります、人族の両親から生まれた他種族の子を捨てることも多いようですね……」

「子を愛していないのでしょうか？」

「それは本人に聞かない限りわからないでしょうね……」

「さみしいですね……」

「ええ。しかしそれより、今日は素晴らしいお客様が来られた。ガイゲルド国王太子に墮天者。生きて会えるとは思いませんでしたよ。食事は奮発しましょうか」

食事時。小さな子供でも皿を並べたりしている。危なっかしいが年長者がうまくサポートしている。血は繋がらないがいい家族と言つてよかった。

雰囲気は。

出されたもの。食べられることは食べられるし、まずいと言つ訳ではない。

しかし、まず栄養価が心配だ。肉物はほとんどなく、スープにも具が申し訳なさそうに浮いているだけだ。

パンもぼろぼろとして出来損ないと言つてもいいくらいだった。

「……レイン、これがこの国での奮発した食事なの？」

「そうだけど？」

「レインがダイスケの出すものに怖いと言つたのがわかる気がする。たぶん一般の奮発はもつとだし、むかつくサルネル氏の食事の1/100にも行かないぞ」

「フィアナ？ そうなの？」

「ああ、この町を少しまわってみて思った。この孤児院はレインを学校に入れて援助が出る前はどんな生き方をしていたんだろくな。いくつかまわった普通の家の方が普段からこれ以上の食事をしているよ」

「ガイゲルド国は富んでいるからミサネラはこれが普通だと思つていたんだけど……」

「子をここに預けた者からは仕送りがあるの？」

「どうだろう？」

「ねえよ！あるわけねえ！」

「あたしもそう思いますう」

ワードは猛々しく、リムナは静かに怒りを表していた。

言葉にはしなかったが、他の仲間も同じことを考えていただろう。

さすがにこのままではここの子供たちがかわいそうだ。提案することにする。

「……。先生。ここの土地の一部と、俺たちの泊まれる部屋を借りていいですか？そうですね、宿泊費としてこれだけと、食事を融通しますよ」

「しかし、ダイスケ殿！これはもらいすぎです！」

「金なんてすぐ稼げますから」

受け取るうとしない孤児院の先生だった。

正直すぎるのか。

「先生！ダイスケの案に乗ってください！僕には何も出来ませんがお手伝いはします！」

「……ありがとう……」

さすがにレインのこの言葉で受け取らないという選択肢をあきらめたようだ。

よかった。

食事が終わり、子供たちが寝た後、調べたことを話してもらった。

「さて、フィアナとリリアはどう？」

「手がかりなしだ……」

「ごめん」

いくら索敵に長けた者と言っても、土地勘のないところでものを探すのは難しいのだろう。

1日しかたっていないのだし。

あまり気長にするわけにはいかないが、あせっても仕方ないと考えた。

一応リーンにも聞いてみる。

「そうか。リーンは？」

「人の営みと言うものは知識でしか知らぬが、一箇所、地下だが、独特の生々しい匂いが絶えない場所があった」

本当か？ 凄いな、古竜の力なのか。

その古竜の力をくだらないことに使わせて申し訳ないとも思ってしまう。

だが、リーンへのお礼も全て解決してからにしよう。

「どこ？」

「神殿順位者管理の建物内のような。昨日見ていた限りではそのサルネルという者だろうか、あの小僧と良く似た魂のものが入って行っただけだな」

外れようの無い調べだ。そこしかない。

「当たり前だね。兵の減っている今日行こう」

つづく

43 決着

43 決着

神殿の裏手に議会上位者の住居が並ぶ。

その中には迎賓館もあり、そのうちの一軒をサルネル氏は無断借用しているようだ。

どうやって鍵を手に入れたのか。もしかしたら議会3位という地位に付随してきたのかもしれないが。

「暗いな……」

「うん、レインかミリア、魔法頼む」

「気づかれませんか？」

「その前に女性を保護してしまえばいいだろう」

「そうね、フィアナの言うとおりだと思う」

「わかりましたわ、明かり、点けますわ」

「なにがあるかわからない、ダイスケ最後尾で」

「わかった、ワード、頼む」

「任せとけ。フィアナ、リリア、索敵。ここは敵の中だからな」

「よし」

「わかった」

「リムナ、行くぞ！」

「はいです！」

迎賓館には地下シエルターのようなものが存在する。もしものために客を守るためだ。

巧妙に隠してあるようで、とても分かりにくい。

賊程度には。

「通路が行き止まりだな。リーン、地下室入り口はわかるか？」

「そこまではわからぬ。すまぬ」

「シート工先生は？」

「ちよつと待ってね。あ、ここね。比較的簡単だったわ。リンズヴ

アーラのダンジョンに比べると」

「あそこと比べてはだめだろう」

「そうかしら？」

「古竜を小汚い人と比べてはリンズヴアーラが可愛いそうだ」

「そうね」

「そうだにゃん！」

「にゃん？」

「混ぜってしまった……」

「あっはっは」

「笑うでない、ダイスケ！」

「ご、ごめん、くっ」

「笑うでないとっておろう！」

その笑い声と叫び声が聞こえたのだろうか。奥の方から声が聞こえた。

女性のものだ。

か細く、聞いているこっちが胸を締め付けられるかのようにつらい声だ。

「……だれ……」

「……もう許してください……い……」

「いやあ……」

「……」

笑っている場合ではなかった。

「ちっ、レイン即時回復！」

「わかった！」

「ミリア、風の魔法で強制換気できないか？ちょっと臭うぞ、ここ」

「わかりましたわ」

「リムナ、枷を外すのを手伝ってくれ」

「はいです！」

回復魔法と換気をする。

あまり長期にわたって地下室を利用することはあまり考えなかったのだから、空気がよどんでいた。

「ふう、命に別状はないみたいだ」

元気のあった、と言っても他の人と比べてだが、その人は何とか普通に話ができそうだ。

「ありがとうございます……」

「申し訳ないけど、ここに連れてこられた顛末を聞いても？」

「知らぬ間に連れてこられたとしか……。しかし、ここにいる者、いずれもサルネルに目をつけられた者と聞いています……」

「やっぱりか」

「ここから出られるのですか？」

「そのつもりですが」

「しかし、出た後はどうなりましょう？人妻はいませんが、身を汚された、そういった話が広まった時点で私たちの将来はもう明るくありません……」

それは確かに考えなくてはいけないことだろう。

未婚で穢されたとなれば、うわさだって流れてしまうかもしれないな

い。

しかしどうしたものか。

ふとワードが口を開く。

「ガイゲルドで保護しよう」

「ワード？」

何か考えがあるのだろうか。とても楽しそうにしている。

「ゲイン団長にも妻が必要だろうし。くつくつく。フェアラ族の男は軽いと教えられたのはあの人だしな。どういう扱いを受けたかは聞かない。でもガイゲルド国で受け入れさせる」

その女性はとても言いづらそうにしていたが、話をした。

「……目隠しをされていたのでわかりませんが、相手はサルネル1人きりだと思います。若い方の前ですみませんが、その、あれの感じがいつも一緒でしたので」

「そう、まああいつは相応の罪を償ってもらおうね。子が出来てしまつ可能性もあるからすぐにガイゲルドに行けるかはちょっとわからないけど」

「あ、あの……」

「どうかした？」

「いえ、あの人、その、とても早くて……。たぶんこの中での人で最後までシタ者はいないかと……意識のある間だけのことですが……」
「そうなんだ。中にそういう感じを受けた人はいないってことでいい？」

「ええ、翌日痛いと言うものもいませんでした」

「まあ安心かな。ただしばらくは俺たちのいる孤児院で一緒に働いてもらうよ。安全のためにも」

「ありがとうございます……。それから……」

「それから？」

「いえ、私たちの正気を保つためにサルネルが呼んだのか、迷い込んだのか、子犬がいまして。一緒に保護してもらえませんか……？」
「なんだ、そんなことなら」

「ミラ、おいで……」

「わふっ！」

世話をしている人がきつといると思わせるほど小奇麗な犬。

正直野良には見えない。なぜここにいるのだろう。

もちろんサルネル氏が連れてきた可能性は全く無いと考えている。

「おお、かわいいなあ。猫もいいし犬もいいなあ。よしよし、おいで……いたっ！」

「どうした？！」

「……噛まれた。血が出ちゃったよ」

（血が……？もしや、いやまさか……）

ぼわっ……。その子犬が発光する……。

「あー、どこかで見た光景」

（ああ、懐かしいな。……と驚いているだけではすまないと思うんだが……）

（古竜かな？）

（かもしれぬ）

シュインツ……。前にリンスヴァーラのダンジョンで受けたような感覚が襲う。ちなみに眠らされたのは捕らえられていた女性だけのようだ。

「…………ふうつ。落ち着いたわ」

「フィアナ！犬がしゃべったよ！しゃべった！」

「リリア！2度目だろ。落ち着け！」

「あ、そうね」

リーンが変な顔をしている。猫だから表情が読めない。
出てきた言葉は。

「母？」

「リンズヴァーラ？」

「今はリーンだ。やっぱり母か」

「ええ」

古竜以上の大物が、ひよつとして……？

「…………おい、今のリーンの会話からして、あの子犬はミネラ神ということに……？」

「そういうことですわね」

「ミネラ神が今日の前に！ああつ！」

「レイン君、落ち着きなさい。私たち以外にはわからないことなんだから」

「神様ですう！」

「リムナさんも！」

「あ、はい」

「はいですう」

そうなると疑問がわいてくる。

「えっと、分かっていて噛んだんですか？」

「もちろんよお！リンズヴァーラのことは聞いていたもの。ミネラ、この機を逃すわけにはいかなかったわ。魂の力をちよびつと

使っちゃったわ」

神様が自分を名前呼び。そして語尾延ばし。どこの子供だろう。

「ちよつと、いえ、かなりびっくりしたんですが」

「死ぬわけじゃないのに気にしない気にしない」。その優男君、ちよろつと治してあげてねえ？」

「は、はあ……」

「……よし！ リンズヴァーラ、うーんと、リーンに同調したからこれからは念話で話してねえ」

「え、え？」

勝手に話し、勝手にまとめてしまふ。何か言う前に眠りの魔法は解けた。

シュインツ……。

申し訳なさそうな顔で女性が言う。

「……この子犬も一緒にお願いしたいのです」

お願いも何も、連れて行く以外の選択肢は消えてしまった。

「あゝ、はいはい。大丈夫です」

「よかった！」

回復魔法でそれなりに回復したようだ。

何とか歩けることを確認した。

「よし、とつとと行こうぜ」

「本当はここでサル of 現行犯でいきたかったんだけど」

「サル？」

「ああ、サルネル氏」

「はっはっは、猿か！ はっは！」

「風が……」

「気持ちいい……」

「ああ、助かったのね……」

「ふう……」

とらわれていた女性たちが安堵している傍らから少しだけ離れ、ことの成り行きをサルネル氏より早く明るみに出すにはどうしたらいいかと考え、シート工先生を頼ってみる。

「シート工先生、ここで時空魔法でこの国の人たちに声を飛ばすとか出来ないですか？横槍が入る前に色々明らかにした方がいいと思うんですが」

「そういう時空魔法はあるけど、私では圧倒的に魔力が足りないわ」「そうですか」

そういう魔法もあるという所が凄い。時空魔法は何でもありなのか？

そういえばフェアラ族が全盛の頃、金の白化を発見、量産しようと考えて専用の魔法陣を考え出していたというのだから、本当に何でもありなのかもしれない。

今は失われてしまっているが。

自分の考えが脱線しかけた所で子犬、ミネラ神が話しかけてきた。「そこはミネラにおまかせよ。この地下には私の本体がいるもの。この辺りに魔力を張り巡らせることは造作もないわ。」

「是非お願いします」

「ミネラもこれから連れて行ってくれるかしら？そうでなければだめよ？」

「こちらからお願いしたいくらいです」

「ミネラうれしい。じゃあ行くわよお！」

「ダイスケ君、発声を」

後で思い出したのだが、助けた女性たちにミネラ神の声が聞こえてないことを確認してとても安堵した。

少し距離を置いていてよかった。

犬が話すなど、この世界でもほとんど無いからだ。

後で言うておかなくてはと思っていたと、喉に魔力が集まるのが分かった。

これが声を広範囲に拡散する魔法なのだろう。

軽く咳払いをし、声を発した。

「えー、ミネラ国のみなさん、女性拉致の問題は解決しました。ご家族の方、ご友人の皆さんは孤児院庭にお集まりください。それからこれを解決いたしましたのはガイゲルド国王太子ワード殿下であることをここに表明いたします」

「オレかよ！」

とたんにワードが叫ぶ。ほんの数瞬までは「ダイスケも大変だな」などと言っていたのに。

俺が全て受け持つわけもなく。

「一番面倒がなさそうだと思うんだけど」

「墮天者のダイスケの方がいいんじゃないか」

「ああ、思いつかなかったよ」

「嘘だろ、それ！」

「面倒はいやだねえ」

「それが本音かよ！」

それでも投げ出さなかったワードは偉いと思う。

隠れて出した料理は孤児院の子供に好評だった。当たり前だが。それからワードがこの孤児院に滞在すると聞き、拉致された人の家族や友人が料理や酒を運び込み、お祭のような状態になっていた。普段あまり接する機会がなく、単に城壁守備兵として個人の情報が見えないオーガ族であったが、リムナやラーナ、ガラムの体や力は大きいがやさしい人となりを見ることにより、人と変わることがないと感じだすことになる。

神殿議会の者は来なかった。

祭りと言っているいい宴会の翌朝。

ミネラ神が犬の姿で人声を出す。

「神殿に乗り込むわよ!」

「ちょ、ちよっと!……いや、ミネラ神様、念話でお願いしたいんですが」

「いや〜ね、ダイちゃん、シャレよシャレ〜」

「本当ですか?」

「当たり前よお!」

「お願いしますよ」

「でも、ミネラのこととはミラって呼んでくれないと困るわよ?」

「ミネラ神様が念話をきちんと使ってくれるなら」

「任せて〜!もしくはミネラって呼んでくれてもいいわ〜」

「さすがにそれは無理でしょう。ミネラがこの地の神の名前である限り」

「それもそうかな?」

「そうですよ。ってリーン、なに優雅にそこで毛繕いしているの?」「われに関係ある話だったのか?」

「いや、あなたの母君でしょ？」

「リンズヴァーラの母はミネラ神竜であるし、リーンとしても犬から猫は生まれんな」

「……丸投げされても困るんだけど」

「要所で引き締めればよからう」

「……頼むよ、本当」

どこの漫才だろう、朝からだいぶ疲れてしまった。

本当はこちらから乗り込むのすら癪だったのだが、向こうが誰も反応しないとなればそうも言っていられない。

神殿を訪ねることにした。

神殿前を警護していたのは例の城門でやり取りした隊長だった。

ワードは積年の鬱憤を晴らすかのように偉そうに声を出す。

「議会のトップと話がしたいのだが」

「これはワード殿下。ご機嫌麗しく……」

「やかましい！お前、この前城壁前で散々言いたいこと言ってくれたな」

「ひえっ！」

「後ろ盾がないと何も出来ないのか？」

「……」

「何とか言ったらどうだ？」

「……」

「とっとと行け！1位に話をつけて来い」

「……ただいまっ！」

すっ飛んでいく隊長。

ワードは少しだけすっきりしたなどと言っていた。

それから現れたのは問題の男、サルネル。

隊長はなにをしているのか、ここには来なかった。

サルネルは手に何かの皮袋を持ち、卑屈な態度を取っていた。

「これはワード殿下におかれましてはこのようなところに……」

「御託はいい。お前がサルネルか？ 1位と2位はどうした？」

「はい。サルネルと申します。これから……」

「余計な話はいいい！ 1位と2位は？」

「は、はい……。現在1位ライア様と2位エルス様は病を患っておりまして」

「死んだのか？」

「そこまでは」

「では会わせろ」

「しかし、今は面会謝絶でして……」

「こちらには墮天者がいる。そのような病もたちどころだろう。案内せよ」

「しかし……」

なおも理由をつけ断ろうとしている。

ワードの堪忍袋が切れるのも時間の問題だろう。

怒鳴りからかすかとも思ったのだが、人は怒りが強すぎるとかえって冷静になってしまふことがあるのだろう、恐ろしいほどの静けさでワードが言った。

「……分かった。お前が拉致の問題に噛んでいることは知っている。とりあえず、まるで信用に値しない」

「なっ……」

「ダイスケ！」

「最大障壁出すよ」

最後は逃げ出すと思っていたので、ゴム状の捕縛障壁をすでに準備していた。

瞬時に展開する。

むによん。ぐいつぎゆるっ！

「ダイスケ、継続時間は？」

「およそ10時間」

「よし、行くか」

「もがつむがつ！」

「黙ってる！ぶん殴るぞ！」

ババキッ！

顔を蹴ったのはフィアナだったのかリリアだったのか。

サルネルが気を失ったのは事実だったが。

ちなみにサルネルの皮袋には結構な額の金が入っていたようだ。

まわりに他の神殿兵がいなかったことも含め、サルネルがなにをしようとしていたかなど、簡単に想像がついた。

さて、1位と2位の人を探さなくてはならない。

このサルネルのやりたい放題も1位と2位がいなくなったからだ
と分かれれば説明がつく。

「リリア、フィアナ、1位と2位の場所は分かるか？」

「本人に会ったことがないからな……」

「ちょっときついかも……」

やはり犬が人声を出す。今回も他に

「はいはい、ミラにおまかせえ！」

「だから念話で言ったでしょう！」

瞬時に怒鳴ってしまう。このひとは本当に神なのだろうか。

いや、神だからこそ天真万欄なのかもしれないが。

（ごめんなさい）

（分かっていただければ。どこか分かりますか？）

「わおんっ！」（こっちょっ！）

やっと理解してくれたようだ。

「おーお、ひでえ所だな」

女性を監禁していた場所は自分も行くことがあるという理由のためか、空気以外はそれほど汚れていなかった。

しかしここは違う。もう一ヶ所の迎賓館、地下室がさらに巧妙に隠されていた一軒に1位のライアさん、2位のエルスさんがいた。

実際に病気にしようとするでもしていたのか、残された食事などから見る限り、すでに人として許された一線は越えているかのように思われた。

それでも議会1位は伊達ではないようで、1位のライアという初老の女性は瞳の輝きをまだ失っていないようだった。

「……だれです？」

「あなたはライアさん？」

「……ええ」

「そちらはエルスさんかな？衰弱してるっぽいけど」
「……」

生きていてよかった。

「レイン、ミリア、回復！」

「はい！」

「分かりましたわ」

「俺は粥でも出すよ」

枷を外し、地下室から出る。あのままあそこにいたら本当に病気になるってしまう。

「ふう……助かりました……」

「……礼を言う……」

「いつからここに？」

「数ヶ月前でしょうか……詳しくは分かりません」

「我輩もですな」

「サルネル氏ですか？」

「多分としか。たまに生きているか確認に来ていましたから。他の方は見ていません」

「あんな若造にしてやられるとは！」

少し元気が出てきたのか、怒りの表情を表すエルスさん。

聞けば食料もかなりライアさんに渡していたようだ。それならばあの衰弱の理由も分かる。

逆にワードは完全に疲れきっていた、ように見えた。

「なあ、ダイスケ、もうヤツを殺ろう。いいだろう？ オレ疲れた……」

……

「まあ待てワード、ここまで我慢したならもう少し我慢できるだろう？」

「……それはそうだが」

「まあ、ここから出ましょうか」

回復魔法が原因か、粥が原因か。
いや、自分の職への責任感と義務感か。

2人が神殿の正面に来る頃には、見た目では健康そのものに見えるほどしゃつきりとしていた。

近くの神殿兵に声をかける。

「議会召集！」

「ライア様！エルス様！お病は？」

「治ったわ！」

「とつとと議会を召集せよ！」

「は、はい！」

神殿の前の広場に他の一般議員も集まってきた。

ライアさんとエルスさんを心配していた一般の人も。

なぜサルネルが寝ところがって気絶しているのかと首を傾げている者もいた。

淡々と事実を話すライアさん。

「そういうわけで、策略とはいえ、わたくしたち1位、2位が長らく議会を留守にしまったことについて、わたくしたちは責任を負わねばならないと思っています……」

「そんな、ライア様……」

（シートエちゃん、時空魔法準備してちょうだい。この国にミネラの声を届けるようにね）

（ミネラ様？は、はい！）

ミネラ神、いやミラが何か思ったのか、シートエ先生に魔法の準備を頼んでいた。

とたんに頭の中、いや、心の中に声が響く。

ミサネラ国の者たちよ……

「はっ？」

「神の声か！？」

議会の人も、外を見れば兵士も一般の人も聞こえているようだ。

ミサネラ国の者たちよ。わが名はミネラ。

この国、いやこの大地の、この世界の創生の者として、みなは名を知っている。

われは告げる。

われの名を取ったこのミサネラ国は腐りかけている。

われはこの大地を愛しているが故、特にわが名を取ったミサネラ国の腐敗を許すことはできぬ。

神殿を塵と化す。

その意味を良く考えよ。ただ1つ言うておく。

われはこの地を。

この世界を。

この国を見捨てたりはせぬ。

良く考えるのだ。多種族が生きるこの世界、そして魔と生きるこの世界を

「いづくよお！犬だけどドラゴンブレスー！」

さっきのシリ阿斯はどこへやら。

声が聞こえた人もいただろう。

しかしその後起こった事は犬がしゃべったことよりもミサネラ

国にとってとても重要だった。
そのショックで誰も気にしていないようだった。

ずっ……ガラリ。

どかああああん！

大きな音をたてて神殿が崩れ落ちた……。

声が続く。

神殿は崩壊させた。

きっかけは些細なことであつたかもしれんが、その結果をみなで
受け止めよ。

神の名を使えるほど、民の心は高い所にあるのか？

神であるわれは種族の考えの違いには関与していない。
この地に住まうもの、全ての者の創生者であるからだ。
それは種族の仲たがいを促すものであるうか。

良く考えよ。

良く考えよ

「議会の者がみな外に出ていて助かったな」

「しかし、ライア様！」

「青空教室も悪くあるまいよ」

人が怪我をしなかったことに心から安心したようにしていたライ
アさんだったが、すぐに真剣な表情になった。

「サルネルは起きたか！？」

障壁は解かれ、地面に力なく座ったままのサルネルにライアさんとエルスさんが問う。

「で、サルネル、言いたいことはあるか？」

「ライア様……」

「聞いておるのだサルネル！」

「エルス様……」

がつくりと頭を垂れたまま微動だにしないサルネル。
ミサネラの問題がほとんど解決した瞬間だった。

なぜ『ほとんど』かと言えば。

「アイク、どうだ？」

「様をつけると言っただはずだ！」

「だれに？」

「ボクに決まっている！ボクは将来議会のトップに立つ人間なんだぞ！」

「今は？」

「ボクのパパは3位だぞ！」

「だから、今のお前自身の力は？と聞いているんだ」

「……」

「人に誇れる知性や技術、魔法力などを持っていて、正しく使っているのか？」

「……」

「人のために何かしているのか？前に金、金と言ったがそれはお前自身が稼いだものなのか？」

「……」

「サルネルの地位は地に落ちた。議会から除名、当然だ。1位と2

位を監禁し、女性を拉致した。議會を個人的に掌握しようとした。これからサルネルの名は単に犯罪者として広まるだけだ。したがってお前自身が築き上げた人間関係以外はもう機能しない。お前は自身の友人を作る努力をしたか？」

「ゆ、友人？」

「そうだ。友人だ。身分にとらわれず、接してくれる人のことだ」

「そ、それは……」

「いないだろう？」

「い、いるさ！」

「そうか、オレはガイゲルド国王族としての地位を関係なく付き合いしてくれる友がいるぜ。いるなら分かるだろう、これからの生き方も。金や地位で買えない人間関係なんかも勉強するんだ。じゃあな」
「……」

「よく殴らなかったですう」

「ふん。オレも成長しているんだ」

一所懸命背伸びしてワードの頭をなでているリムナ。ワードもまんざらではなさそうだった。

アイク、彼が将来何かを真摯に聞いてきたならば助言はしたい、と個人的には思う。

仲間が何と云うか分からないが。

いくら腹が立ったとはいえ、子供。

将来はまだいくらでもやりようがあるだろう。

その頃の神殿議會はというと。

日の光が差し込む、というより太陽の真下で。

「神殿1位と2位はガイゲルド国との完全連合をこれまで以上に守ることを支持し、種族の壁を越えてミネラ神の教えを守ることを尊守する」

「議会の承認を」

「よし、一件落着かな」

少したつて。

前線のオーガ族も気安く町に来ることができるようになっていた。孤児院に間借りしているラクス武具店出張所、リリア命名だが、そこは大忙しだった。

なぜかオーガ族の人が武器を修理に持ってくる間隔が異様に短かった。

文句の1つも言いたくなくなろうというものだ。

「これ、なにを叩いたの？」

「え？」

「造りのそれなりの斧といっても、岩を叩いたりするとそれなりにゆがむ訳ですよ」

「いや、魔物を」

それはありえない。

「嘘言わないでください!」

「……ばれました?」

「当然です」

「いや、武器がうれしくて岩を……」

「やつぱり……ただでさえオーガ族の武器を整える人がいないんですからね!」

「わ、わかりました!すみません!」

「はあ……」

新しい武器を試したいからと言っても、全てが堅い岩など何回も叩いていたらゆがんでしまうのも当然だ。

あんたらは新しいおもちゃをもらった幼稚園児かと叫ぶのを我慢したのも1度や2度ではなかった。

ラーナから聞いた話では、何回も俺に直してもらうことで顔を覚えてもらおうと言うオーガ族の人がいるらしい。

それは逆効果だと伝えてくれと頼んでおいた。

そんな忙しい中で、唯一の癒しはいい子供たちと接する時間だろう。

「ダイスケ兄ちゃん、お茶だよ」

「ありがとう」

「今日はまだ遊んでくれない?」

「もう少し。みんなも平和な方がいいでしょ?」

「へいわ?」

「いっぱいご飯が食べられるよ!」

「うん!じゃあそっちの方がいい!」

その日の整備も終えて。

「先生、今日の稼ぎ」

「ダイスケ殿、最近いつも思ってますが、これではダイスケ殿のお

金がなくなりませんか？材料費もただではないでしょう？」

「補修ですからたいしたことありませんよ」

「そうですか……？」

「ええ。気にしないでください。それよりも例の女性を受け入れて
いただいて」

「あんなことがあれば、そうそうご実家にも戻りづらいでしょう。

というより、あの御仁はそういった身寄りの少ないものを選んでい
たようです。ここにいてもそれほど問題ないようです。それに子
供を見ていただいているだけでもうちとしてはうれしいですよ」

「それはよかった。じゃあみんな、遊ぼうか！」

「わあーい！」

どのくらいいたったか。

その連絡は来た。

「こちらにワード殿下！おられますか？！」

「なんだ！」

「作戦決行の日時が決まりました！」

「！……そうか」

つづく

4 4 戦争

4 4 戦争

ミサネラ国、北側城門内広場にて。

「架け橋、行くぞ！」

「いくです！」

わああああああああ………！

ガイゲルド国の出立ほどの歓声を浴び、出発する。ワードかダイスケかは微妙な所だが、民衆はワード殿下を。オーガ族の守備兵はダイスケを。平和をもたらすきっかけとして、その偶像として。

前線駐屯地まで特に危険はなかった。

しかし、近づくにつれ、緊張の度合いも高くなっている気がする。

「デイン隊長、お久しぶりです」

「おお、殿下。問題は解決したようで何よりです」

「作戦開始は？」

「ちょうど1週間後です。幕舎へ」

「わかった」

ガイゲルド側が全軍攻撃であることは分かりきっているのだが、ではこちらミサネラ側はどうしたものか。

うまくすれば敵の側面をつけるだろうが、ガイゲルド本隊との連絡が難しいので連携も困難だ。

では攻撃を本隊に任せこちらは守備に徹するか。

さまざまな案が出され、認められたり却下されたり。

最終的には。

「というわけで、みなの方にはここを死守する役を与える」

「しかし殿下！」

「オレはみなに死んで欲しくないし、オレも死ぬつもりはない」

「ですが！」

「したがってここをいままで守ってきた者の能力を信じ、ここミサネラを守ってもらう。そしてわがパーティの力を信じてオレは突っ込む！」

「……分かりました」

「オレたちの帰る場所を守って欲しい」

「はい！」

「最終調整だ！武具に不安のあるもの、みんな持って来い！」

ここに設備があるわけでもないが、そこは解析魔法、最高位の技だ。

どうとでもなる。

時間いっぱいまで味方の装備を調整した。

「決戦！行くぞ！」

「架け橋、出る！」

「出ますう！」

「よし行くぞ！」

ガイゲルド王城でも。

「準備は整った！これから魔国に向け、進撃する！守備に残した者も決して実力が劣っているわけではない！わが国を頼むぞ！」

「「「オオオオオオオオオオオオオオ！」」「」」

ミサネラ側からでも、はるか遠くの山の隙間から戦の雲が立ち上がるのが見える。

それは魔国との全面戦争が始まった証拠でもある。

ミサネラ側は散発的に魔物が出る程度でそれほどの危険を感じてはいなかった。

「こっちはそれほどでもないのか？」

「あまり強い敵はいませんですう」

「畏かもね。気をつけて進もう」

旧エズワールド国に入った。

昔は広大な農地だったのだろうか、荒地が広がり、小山に囲まれた部分が見える。

その中に城があるのだろうか。

「天然の要塞都市か。唯一の入り口は都から出る大河のみ。1つ向こうの山かな、道を開けたのは」

「ああ、そうだろう。あそこで戦が始まってる。それにしても川の源流に毒を流したらどうなるんだ？」

「飲用の水は城から湧き出ると昔の書物にありましたわ」

「うん、山々からの水は山際に作られた棚畑に使われているらしいね」

「守りが高く、攻めるも容易くないが1度懐に入られると逃げ道がないな」

「どこに逃げるんだろうね？」

「周りの山々に壕を張り巡らしているようだよ」

「その形状も直線に見えて徐々に曲がっていたりと、中を知るものでないと厳しいそうですわ」

「レイン君もミリアさんも良く知っているわね」

「リンズヴァーラ様のところで写本させていただいた本に載っておりましたの」

「リーンは内部構造知ってる？」

「昔のままならば。手を加えてあった場合はわからぬ」

「ミラは？匂いとか」

「元の匂いが分からないから無理だわ。ミラが思うに魔王の魔力を感じればいいと思うわ」

「そうか。魔王も墮天者でしたね」

エズワルド城、現魔王城内、王の間。

妙齢の女性に見える者とそこで片膝をついている者。

「魔王様、連合のヤツらが攻めてまいりました」

「委細任せます」

「は！」

片膝をついていた者はすばやく立ち上がると、見向きもせずその場から立ち去る。

「ちつ。いつまで子に固執してんだ？早く俺様に魔王の位を渡せばいいんだ。ここまでエズワルド国を広くしたのは俺様だろうが。……ん？もしこれで魔王が死んだら……チャンスか……」

「將軍……。あなたはいつからそのようなってしまったのでしょうか。やさしかったあなたはどこへ……」

ガイゲルド兵、魔国の者たちと開戦。

「連合来たぞ！叩き潰せ！」

「おぬしら下っ端な賊では相手にもならんわ！」

「タタケ！ウヨクゼンシン！」

「魔物が言葉を話すだと？しかし！魔物には負けん！魔法部隊、放て！」

「ウフフ、ソウハイカナイワ……」

「女性型？……美しき戦士……」

「呆けるな！魔法防御！左翼前衛は突撃！」

「こいつら、魔物の癖にいっぱしに武器なんか持ちやがって！皆気を緩めるな！」

「はっ！」

ミサネラ側からの方が魔国には近いし、特に大きな戦闘もなかった。でそれなりに近づくことができ、魔国からガイゲルド側に出て行く魔物の兵士たちを良く観察できた。

「ほぼ出ていってようかな？」

「突っ込むか？」

「もうちょい」

馬とも猪ともつかぬ魔物にまたがりさらに出撃してくる一団。こちらの魔物や盗賊とは一線を画している。数も多い。人でない者もいるようだ。魔物と言わないのは明らかに顔は人なのに体がそうでない者が多数いるためだった。

「待って良かったね」

「何だ、あいつら？」

「魔物の血や体を植えたのかもしれない。われも見たことのない形をした者たちがいる」

「ちよつとこれは命の冒涇にしか見えないわ。ミラ、こんなことはあまり許したくないわ……」

「陛下たち大丈夫かな？」

「魔力の供給源を絶てばよいだろう。われには魔力のつながりが見える」

「装置か人かは分からないけど、まずはそれを壊そうか」
「うむ」

「じゃあ装備確認して行くよ」

「ダイスケは車もっていくのか？」

「一応。きつちり扉を閉めてしまえばパーティ以外には触れないと思うし」

「そうか、確かシート工先生に魔法かけてもらったんだっただな」

「よし、架け橋、出撃！」

川沿いの道を用意しながら抜けると町の広場に出た。

所々に魔物をかたちどった石造があるくらいで、實際他の町との差はそのくらいしか見当たらない。

「っておい、守備兵も置いていないのか？石像ばかりじゃないか」瞬間、石像だと思っていたものが動き出す。

「ワード、危ないですう！キャツ！」

「リムナ！大丈夫かつ？」

「は、はいです」

なんとかワードをかばったリムナ。怪我はなさそうだ。

「石像が動いた！？」

「魔力で動いているのか……？」

「魔物のような感じもするな」

「ミラには胸の位置に核があるのが分かるわ」

気の抜けそうなミラの声だったが、弱点が分かるならそれほど怖くはないだろう。

「魔法援護！ワード、リムナ、胸を狙え！フィアナとリリアは周辺索敵！」

「行動祝福！」

「防御祝福！」

「よし！そりゃ！……まず片方！」

「そんなに正確に狙えないですう！えい！……ああ、ばらばらになっちゃったです」

「所々に石像があるよ！」

「それからもう少し進むと家があるようだ」

「もういいや、フィアナ、リリア、石像が動く前にみんな壊して」
「分かった！ここんこ、頭にくることばっかだったもんね！ていつ！」

「そうだな！よしっ！」

あらかた石像を破壊し、一息つく。

石像を破壊している間に兵が出てくることも無く、説明はできないが、とてもアンバランスに感じた。
人がいる感じはするのだが。

「本当に家があるな。魔国で暮らしている人もいるって事か……？」
「ワード、どうしたんです？」

「いや、ただ単に敵としてみてきた魔国だが、そこで暮らしている人がいると思うとな……」

「家の中に人がいるようだ。魔物と人の混血のように見える者もいるな」

「フィアナ？」

「ああ、魔力の感じがな。悪ではないのかもしれないが、人とは質が違う」

「そう。襲ってきそう？」

「いや、家に立てこもっているようだ。出てくる気配はない」

「じゃあこのまま進むぞ。出てきて襲ってきたら容赦なくやる。こっちが怪我するわけにはいかない。索敵に重点をおく隊列を」
家々から矢が飛んでくることが無かった。

「さっきの家々では誰も出てきませんでしたわね」

「うん、やっぱり国としての形は一応あるみたいだね」

「形？」

「命をばぐくむ者が必要だよ。不老不死でないなら」

「そうですね」

道々の石像を破壊しながら進む。城壁がある大きな建物が城だろう。

そこを目指す。

「これが城か……」

と、門に大きな顔が浮かんだ。
なかなか凶悪な顔をしていた。

「ヨウ！オメーラ、ナンダ？」

「門が……」

「しゃべった？」

「魔物か？」

「オレサマハコノシロヲマモツテイルノサア！ココハトオサネエゼ
！メイドノミヤゲニオレサマノナヲオシエテヤロウ！オレサマハ
ギ」

ぱかーん！ざくっ！ドドンッ！

リムナの斧が顔にも見える門の鼻っ柱をぶったたき、ワードは口
に剣をつきたて、フィアナとリリアの銃が正確に目を狙った。

「うるさいですう！ただでさえ聞き取り難いのに長くしゃべるなで
すう！」

「同感だ。最近我慢ばかりだったからな、さっきの置物程度で済む
と思うなよ！レイン、ミリア、燃やしてくれ！」

「分かった」

「ワードはともかくリムナさんも結構溜まってましたのね」

跡形も無くなった城門をくぐり。

「じゃあ行くぞ、シート工先生、扉とかの罨を頼む！」

「やっと出番のようね！まかせて」

いくつかの部屋を調べる。特に使われていない部屋も多いようで、
埃だらけだった。

1階最奥にまわりとは違う扉を見つけた。

「ここは……」

「鉄の扉だな……」

「罨よりもこういった単純に開けにくい扉の方がやり難いわね……」

むむむ、とリムナが力を入れている。

「ちよつとだけ開いたですう」

「凄いなリムナ」

「力仕事は任せてですう!」

「先生、畏は?」

「なさそうね」

「むむむむ!」

「うゝん!」

ワードとリムナでさらに扉を開けようとするが。

「だめだ……」

「これ以上は無理ですう!」

最初にわずかに開いた後は微動だにしなかった。

「見てらんないわゝ」

「ふむ……」

ミラとリーンが前に進み出て、少し離れるように言った。
なにをするのかと見ていたら。

「犬ブレス!」「猫ブレス!」

とんでもないな。ブレスを吐く犬と猫を見ることになるとは。
しかしそれ以上にネーミングに笑ってしまふ。

「あつはつはつは!」

「ちよ、今は笑うところじゃないでしょ?」

「そうだぞ、ダイスケ……」

「ごめんごめん。さて、中にはなにが……これは!」

申し訳ないと言いながら中を覗くとそこには見慣れたものがあつた。

少し形は違ったが、より使いやすそうに進化していると言ったらしいのか。

「何だ！どうしたダイスケ！」

「いや、なんか懐かしい装置が……PC？」

「ぴーしー？」

「いや、こつちの話。動くかな？」

カチャカチャ……。

「あまり触らないほうがいいのではないか？」

「そうだよ、ダイスケ、危ないよ！」

「まだ大丈夫。よし、映った」

「なにそれっ！」

「あ、リリアにファイナ、一応索敵していて。誰か来ても困るし」

「うん」

「分かった」

特にパスワードもかかっていなかった。

よくわからないプログラムはとりあえず放っておいて、いくつかのテキストを開いてみる。

「レポート……日本語……西暦2015……イツキミカゲ……出身地と両親……」

「魔王の名か？」

「このレポートは……魔族の製造……コードネームサキュバス……戦闘に特化した者もいる……男性を籠絡することにより、金銭でない人の取り込み……人との受胎が可能……」

「さっきの家にいた人たちでしょうか？」

「こつちは……人体の修復方法……クローンで体の欠損を補う……」

それから魔物と人の融合実験機制御……人と魔物は魔力の質の違いから常に魔力供給が必要……アンテナ……」

「これですう！これがなくなればさっきのおっかない人たちも止まるですう！これを壊していいです？！」

「ちよつと待って！」

「でも……」

正直これを壊すのは惜しい気がしてきた。

いくつかのプログラムを調べ、アンテナ停止のコマンドを出す。と言うか、素人でもとても分かりやすいアプリやプログラムだった。

親切すぎてPCに少しでも慣れてしまえば簡単に操作できるほどに。

「……アンテナ停止……どうだ？……現個体管理ページ……稼動個体ゼロに変化……よし」

これでたぶん先ほどの融合魔物は稼動しなくなるだろう。

「どうするの、ダイスケ？」

「先生、この部屋、認められない者には入れないように結界張れませんか？」

「ちよつと広いわね……」

「じゃー、前のようにミラとリーンの魔力を使ってね」

「それなら。いきますよ！」

「そして上がってくれば」

「またか」

「鉄の扉ですう」

「やっていいかしら？」

「はい」

「では」

「！」「！」

「あれ？掛け声は？」

「笑われたのでな。もうやらぬ」

「そう、残念。さて」

つづく

45 魔国

45 魔国

扉を開けた先には、数百年生きているとはとても思えない、30代くらいの女性がいた。

何かを探るように言葉を出した。

「よくぞここまで来ましたね、人の者よ。石像や將軍では無理でしたか……？」

將軍とは誰であろう。扉の魔物だったら興ざめすぎる。

「あなたが魔王か？」

「まわりからはそう呼ばれていますね……」

「そうか。石像は壊したけど、將軍なんていなかったぞ」

「では將軍は……」

「さあ？でも人との複合魔物は止めちゃったよ」

「あれを使えたのですか。いえ破壊でしょうか……。しかしその魔力、あなたも墮天者ですね？」

「ええ、3年ほど前に来ましたよ」

「そうですね。あたくしはもうどのくらい前でしょう……。……あたくしには戦闘能力はございません。不老ですが、不死ではありません。この首でしたら存分に。しかしお願いしたいこともございます。死んだ後では確認のしようもないのでしょうかけれど」

「聞くだけ聞きますが」

「まずは戦闘特化サキュバスや賊として生きてきた者たちは仕方ないとして、この付近に住まう戦えないものたちをどうか……」

「それは王太子として俺が責任を持とう。ただし親を殺されたからと言ってあだ討ちをするように教育していなければの話だ」

「元々生命特化サキュバスには家事をこなす程度の力しかありません。そしてここにいる子供の親ははっきり言って誰かも分からぬでしょう。それからここに来る賊は快樂のためにのみサキュバスを抱きます。そこに愛など、ましてや出来た子などにかからも愛情を持たないでしょう。この地で成長した子は農業で生きています。ここ何十年も戦がなかったのですから、戦がどんなものかは書物でしか知らないものたちです」

「分かった。まず、と言ったな他に何かあるのか？」

「こちらを……」

玉座裏の幕が開く。何かの液体で満たされた透明な円筒形の入れ物の中に、子供がいた。台座部には何か機械。モニターやコード、チューブ類が見える。

「これは……」

「子供……？」

「ええ。あたくしの子です……。今でも忘れません、この世界に来た日。あたくしは身ごもっておりまして。あたくしの世界では喧嘩すらほとんど起きませんから、当然あたくしにも戦闘の能力などございませぬ。魔法の勉強もしませんでしたから今でも障壁を張るの

が精一杯です。そんなあたくしですから、いきなり戦うのだと言われても無理だとは言えませんでした。お腹の子もいましたし。それをあのエズワルド王と側近があたくしを従えようとお腹を……蹴り上げたのです……」

「ひどい……」

「激昂したあたくしは……あとは記録の通りでしょう。ただその激昂のおかげで魔力の使い方が分かりました。しかし、子の生命力が次第に小さくなって行くことも分かってしまいました。すぐにあたくしは子を魔力で守りつつ、結果的に命を維持するだけで精一杯ですがこの機械と、命を研究する機械を作り上げたのです。あたくしは魔力で物を精製、製造する能力があるのです」

「それってダイスケと同じ……」

「え？その墮天者はダイスケというのですか……。あたくしの叔父にもダイスケと言う者がいました。あたくしが母より生まれる前に失踪したと聞きましたが、もしかや……」

「ああ、うん……、『イツキ』ダイスケ。レポート見たよ。出身と両親、祖父母。電話番号も俺の記憶と変わらない。両親の名前からして兄の子だろうね。俺がいた時にはまだお腹にもいなかったようだから名前までは知らなかったけどね」

うつむいていた魔王はかなりの勢いで顔を上げ、懇願した。

「ああ……、どうか、どうかお願いです！体細胞を分けてください……そうすれば坊やが！」

「助かると？」

「多分としか。しかし今よりもきつと良くなるはずです」

姪の子は一般的になんと行ったかな。

それでも血縁者が助かるのなら、そのくらいは造作も無い。

「いいよ」

「本当ですか!？」

注射器で血液を抜き、装置に入れる。

魔王はともうれしそうにしていた。

「これで、これで坊やが……」

力のある古竜はこれをどう見ていたのか。

「リーン、どう思う？」

「微妙だな、母も分かっているだろう。魂が死を感じてしまっている」

「ええ。そうなのよね……」

「どうかするのか？」

「うゝん、手はあるし、同じ母として共感できるし……」

「問題が？」

「犬の体だとちょっと出力が足りないのよ。と言うか竜体でもどうかしら？」

「われの力は」

「ミラがこの世界を人の生きられる世界にしようとした時にリーンたちに力を分けたでしょう？」

「もしか全員呼ぶのか?!？」

「大地の神竜だけは呼ぶわけにいかないから、他のみんなで全力を出さない」と

「それほどか?!」

「魂というものは神聖なのよ?覚えておくのよ?」

「うむ……」

装置が作動する。

ピクリと装置の中の子供が動いたように見えた。

「ああ！坊や！おいで！」

さらに装置が音を立てる。

ピッピッピッピッ……フィィィィィィィ……。

「さあ坊や……」

中の子供の目が開こうかとしたとき。
ビーー！ビーー！

「アラート！？どうしたのっ？ああっ！……坊やあああああ！」

止まらないアラート。

装置を操作しながら、魔王の顔色は土色にまで悪くなっている。

装置を操作しているからこそ、中の子の状態もよくわかってしま
うのだろう。

「ああ……あ……坊や……坊や……」

「ミカゲさん……」

「うつっ……分かっていたのです、本当は。いくらダイスケさんの
体細胞をいただこうが、坊やの魂自体が死にかけているのだと……。
それでもあたくしは……。体を癒して魂が返ってくるという賭けに出
るしかありませんでした。それでも向こうでは科学者でしたもの……」

……
「そんな……」

泣き崩れる魔王、いや今はミカゲか。もぞりと動き、苦しそうな

顔になる赤子。徐々に赤子の体が薄くなる。液体に溶けていくようにも見える。何とか出来そうな案も、知識もなくただ呆然と眺めることしか出来ない架け橋。

うつすらと発光するリーンとミラに気づくものはいなかった。

おおおおおおおん！

ゴオオオオアアアアア！

世界中に響くかと思われるほどの咆哮となにか巨大なものが空気を切り裂く音が響く。

そしてそれは近づいてくる。

ガイゲルド国対魔国の最前線で。

「なんじゃ！」

「陛下、あれを！」

「竜！？」

「でかい……」

「もしや古竜……」

「ちっ、やばそうだ！ずらかるぜ！」

「へい、頭！」

「稼げてねえがしかたねえ！エズワルドのねぐらも捨てる！」

「わかりやした！」

「マオウサマ……」

「シロヘモドリマス！」

「ミカゲサマのモトへ！」

「イソゲ！」

少し気を取られてしまった隙に、装置に異常が出た。

ピシッビシビシっ！

円筒にヒビが入る。

想定外のことらしく、とても慌てる魔王。

科学者だからこそ、ありえない場面に遭遇すると何もできなくなってしまうのだろうか。

ただただ叫んでいるだけだった。

「なぜっ？どうして？坊や！」

そこに割り込むミラ。すでに声は隠そうともししていない。緊急だからということもあるが。

「下がっていなさい、魔王、いやミカゲ！」

「犬……。そんなことより坊やが！」

「ダイスケ！障壁で包んで邪魔させるでない！」

「リーン？わかった！」

「いやっいやああ！」

パリーン！ガシャーン！！

耐え切れなくなった装置の円筒が割れる。

「ああ……坊……や……?」
魔王の痛々しい声。

だが。

赤子の体はふわりと浮き上がり、ミラとリーンの後をついていくかのようにベランダらしき所に出る。

エズワルドの国がほぼ見渡せるほど広く、高い所にあった。

ついで行く架け橋の仲間。ミカゲはダイスケの障壁に囲われたまますいっと引つ張られるように動いていった。

ベランダに出てみると、完全に光をさえぎってしまいそうなほどの巨躯が6つ。

さすがにこれには驚いた。

「うおっ!」

「わぁ!」

「古竜かしら?」

「勢ぞろいかひよっとして?」

「6体だからそうだろうね」

「壮観ですわ……」

古竜がなにをしに来たのか。知らない古竜もいて緊張が高まる中、のんきな声が響いた。

「よく来たわ」

「母君？なぜ犬に？まあいいでしょう、それよりその話し方は何とかなりませんか？」

「その前に言うことがないのかしら？」

「ご無沙汰ですわ、お母様。しかしわらわたちも暇ではないのですよ？」

「ああ、水の女王だったかしら？あまり遊んでいてはだめよ？」

「な、なぜそれをお母様が……」

「で、母上、呼んだ理由はその赤子ですか？」

「そうよ？」

「しかしその赤子、魂が死にかけております。われら古竜とはいえ、人の生き死にに手は出さないと決めたのではないですか」

「ミラは今は架け橋の一員だもの。仲間のためには命をかけるわよ！」

「ミラ？」

「ミラの名前よ？こっちはリーンね。リンズヴァーラの意識体よ」

「話は後にしよう。今はこの子を頼む」

「おもしろいな、リンズヴァーラからの頼みごとは」

「リーンだ」

「わかったわかった」

「ふん、ワシは力を貸してやる」

「ズラメド？」

「この者たちには借りがあるのでな」

「いいだろう、どっちにしろ、母君の頼みは断れぬ」

「そうですわね」

助けてくれるらしい。圧倒されていて声も出せなかったが。

「じゃあいつくよおー！」

古竜たち、それからリーンにミラが天に向かってブレスを放つ。
7色8本のブレスはやがて天に向かう虹となった。

「きれい……」

ため息の主は誰だったのか。それすら分からなくなるほど幻想的で美しい光景だった。

やがて虹はさらに凝縮され、小さなひとしずくになってゆっくりと落ちてくる。虹のしずくとも言うべきそれは、ゆっくりと赤子の胸に吸い込まれていった……。

……トクン……、トク、トクントクン。

「……ほ、ほぎやあああああああ！ああああん！」

存在を精一杯アピールするかのような、大きな泣き声だ。

彼は今、数百年経って、やっとこの世界に生れ出たのだった。

「坊や！」

しばらく経って。

「すうすう」

男性を締め出し、赤子に乳を与えた後、城前の広場で古竜たちと話をする。

家々の者たちは恐る恐る覗いている。中心には子を助けてもらった魔王ミカゲ。

古竜に対し、何度も頭を下げている。

「それ以上頭を下げずともよい。ただし……」

「ただし？」

「ミラとリーンがミネラ神、及び古竜であり、人と会話できることだけは誰にも言わぬように」

「にゃん！」

「わふっ！」

「誓います！」

「うむ、ではな」

「あれ、もう行くの？」

「古竜は元々母たるミネラ神だ。われらは力さえ使えば離れていても会話ができるのだ。ほとんどしないがな。ミラとリーンは竜ではないゆえ、近くにいないと心を通わせることは出来ないが、近くであれば瞬間的に多くのことをやり取りできるのだ。ミラとリーンの生き方と、それに付き合っているおぬしら架け橋のパーティには興味を持った。これから好きに生きるがいい」

「そうですか」

「たまにリンズヴァーラのダンジョンに来るのですよ。そうすればわらわたちもどうしているか分かるのですから。それからいつか水の都にいらっしゃい。帰ることが出来ないほどの面白さを約束するわ」

「ええ、いつか」

（みんなも体に気をつけてね）

「母上も健勝で」

下手をしたら経つてもいられないくらいの風を起こしながら古竜たちが舞い上がり飛んでいく。

あっという間に見えなくなってしまった。

古竜には借りたりもらうものばかりだ。いつか少しでも返すことができるのだろうか。

そんなことを考えていたら町の入り口方面からかなりの人が走ってくるのが見えた。

「マオウサマ！」

「ミカゲサマ！」

とても美しい女性たちは先ほど聞いた戦闘特化の魔物、サキユバスだろうか。

それからエガイド王、ゲイン団長をはじめ、ガイゲルドの兵士たちも来た。

「ダイスケ！」

「ワード殿！」

「お前たち……」

「陛下？」

「ゲイン団長！」

「ワード、ダイスケ！今助ける！」

魔物を倒せ！などと言っていた。

サキユバスも魔王を守るように展開していた。

「ちょっと待った！」

「待ちなさい！」

止めた。かなり頑張った。

納得しているかどうかはわからないが、現状は魔王と戦うメリツトはない。

何とか旧エズワールド国に起きた事件などを話し、魔王の心証を良くしようとしていた。

「ほう、エズワールド王がそんなことを……」

「今では考えられませんか……」

エガイド王もゲイン団長もそんなことを言いながら考え込んでいた。

戦わない方向に何とか持っていきたかった。

魔王側といえば、魔王はサキュバスに囲まれていた。

「マオウサマ、ソノコハ？」

「あたくしの子よ」

「デハ！」

「ええ、助かったわ。あなたたちのおかげでもあるわ」

「アタイタチノ……？」

「ええ、みんなの、よ」

まだ城前の広場だったが、魔王が子を抱いたまま、片膝をつく。

魔国の者たちにも魔王が敗れたことが分かっただろう。

ちよつと魔王がかわいそうにもなったが、これからを考えれば必要なことなのだった。

「降伏すること、間違いないのだな？」

「はい。坊やも助かりました。あたくしの命だけでなにとぞ……」

「ふむ、すこし聞いてもいいか？」

「はい」

「魔物を連合にけしかけていたのは？」

「エズワルド国からさらに北に魔物の沸く所があるようです。あたくしたちは外からの自然魔物からここを守ることで手一杯です」

「なんだと！」

初めて聞くことだった。それでは魔国の立ち位置がだいぶ変わってしまう。

「……では賊は？」

「元々こちらが抱え込んでいたわけではないのです。坊やを治す手段を探している間にサキュバスができ、人の怪我などによる体の欠損部を修復するものもできました。そしてある時、大怪我をした女が来ました。欠損部を修復して直した折に魔物の血か何かが混ざったのでしょうか、それかあたくしの血が混ざったのでしょうか。特殊な魔法を使う者が出来てしまったのです。その者が將軍です」

「ちよつと待て、あれが女だと？」

「ええ、彼女の特種魔法は、魔物の血や体液を元に、魔物を作り上げること。出来た魔物に生殖機能は無いようでしたが、知能はありました。彼女がいる限り魔物は増え続けたでしょう」

「なぜ、放置したのだ？」

「あたくしとサキュバスの住む所。まだまだ戦闘特化の者はおらず、たまに連合から逃げてくる者たちにより蹂躪されたり、自然魔物により荒らされる有様でした。賊にサキュバスをあてがい、金の代わりに快楽を与える。同じように魔物の殺戮衝動をサキュバスにより満たす。そんなここをしなければここを守れないあたくしを助けてくれたのは紛れもなく彼女でした」

「ふむ、いつからかわわってしまった訳か」

「戦闘特化のサキュバスが生まれました。その戦闘技能の元は彼女です。子を成し育てる、そんなサキュバスを提案したのも。より高い快楽を与えることのできるサキュバスもです。そしてそれを利用して、逆に賊にこの地を魔物より守らせる」

「ふむ、連合に賊の類が少ないのはかえって魔国のおかげなのかな……」

「しかし、魔物も進化するのでしょうか、彼女の生み出す魔物でも手に負えない魔物が出てくるようになりました。それを受けて彼女は魔物と人、魔法を使える魔物を研究しろと言いました。もしかしたらあれが彼女が狂いだしたきっかけかもしれません。姿形はともかく、自分の子を簡単に殺される。母として正気が保てるとは思えません……。そしてあたくしはその禁断の技術を造りました。完全にはいかず、下の設備からの魔力供給がないと生きていくことができませんでした」

「さつき止めたやつだな」

「ふむ、ではそのためにあの軍団は急に苦しがつて死んだのか……。そうだ、今思い出したが、その將軍、死ぬ間際にだれかに謝ってやったな。『友』と……」

「そう、ですか。止めていただいてありがとうございます……」

「しかし、魔物が沸く所か……。ふさげないのか？」

人の会話を聞きながら、リーンはふと疑問を感じ、ミラに聞いた。

（母よ、そんな場所があるのか？）

（聞いたことないわね、と言うか、食べること、生きること以外の感情を持つて生まれる者たちにはそれなりの知能を持つようにしたような気がするのよね）

（さきほどの古竜の会合でもそんなことを言っていたな）

（だから破壊衝動のみを持つ魔物って存在しないはずなのよ）

（うゝむ）

（この大陸だけなのよね）

（どこかこの世界がゆがんでいるのではないのか？）

（ミラがそんなへまするわけじゃないじゃない）

（ふむ）

（もしかして……？）

（なにかわかったのか？）

何か感じたのか、ミラがささやくように諫める言葉を発した。

遠く遠くに。しかし近く近くに。

（シンちゃん？暇だからってあまりおいたしちゃだめよ？）

リーンは意味がつかめなかった。

（しんちゃん？だれだそれは？）

ミラの言葉に反応したかのように地震が起きる。
グラグラグラ……。

「大地が揺れている！？」

「怖いですう！」

必死にワードの腕をつかんでいるリムナ。ワードは周辺の警戒を怠らない。

「きゃあ！レイン様〜！」

「大丈夫だミリア！」

こっちは抱き合っている。

ワードたちの対応が正しいのか、レインたちが正しいのか。

「ダイスケ〜！」

「ダイスケっ！」

「ダイスケ君！」

「はいはいこの位の地震怖くないから」

同じように抱き合おうとするが、ダイスケは慣れているのか全く動じていなかった。

誰かの舌打ちの音が聞こえた気がした。

「陛下！」

「大丈夫じゃ！」

「マオウサマッ！」

「震度4位かしら？」

「ヘイゼントシスギデスッ！」

「ふぎや……ほぎやああああん！」

「あらあら、坊や大丈夫よ。よしよし」

まわりの喧騒のおかげで起きてしまった子をあやす魔王。
こちら地震に動じてはいないようだ。

やはり平気な顔で結論を言うミラ。

（やっぱ、シンちゃんのいたずらのようね？）

（シンちゃん、シン、神。神竜の事か！）

（さっきからそう言ってるじゃない）

（なんと……）

（シンちゃん、今から体を作ってあげるから意識だけ、魂だけ移しなさいな）

（……）

ミラとリーンはどこかで誰かが頷くような感じを受けた。

とても近くとても遠い所で。

簡単に言えば、大地を守る神竜はとても近く遠い存在だったためだ。

（ダイちゃん？ちょっとちょっとちきて）

いつの間に言い方がそうになっていたのだろうか。でもあまり考えないことにする。

（なんです？）

ガブリッ

「いてっ」

（レイちゃん、治してあげて〜）

「ダイスケ、手を」

「ああ、ありがと」

「なんだ？飼い犬に噛まれたのか？」

「あ、その、ご飯が欲しいようですね」

「ふむ……」

部下のサキュバスをなだめていた魔王が提案した。

食事を出すので詳しい話をしよう。

魔王にしてみれば、部下の安全が確保できるまでは首を取らせるわけにはいかないと考えていたのだろう。

「では城へ」

「うむ、そうだ、先に言っておく。今後、魔国は……」
「……はい……」

食事にて落ち着いて話をしようとした矢先に。

魔王の表情に影が落ちる。

「北からの魔物の襲来を防ぎ、連合を守る盾となる兵士たちの休息地として機能させよ」

「え？」

「必要なものは運ばせる」

最高の扱いに近い。

「は、はい」

「その指揮はミカゲ女王に一存する」

「はいっ！」

「書状にワシとミサネラ議會、ミカゲ女王の印が入った暁には魔国も連合の参加国となるう！」

「ありがとうございます……」

「国の名はどうするのだ？エズワルドという名にいい思い出はないだろう？」

「魔国のままで」

「よろしいのか？」

「はい、数百年前のあたくしの罪もあります。そしてサキュバスたちやその子らと生きていくこの国にはふさわしいかと」
「うむ」

それを見ていたゲイン団長に、近くにいたサキュバスの1人が声をかける。

「マオウサマ、シナナイ？」

「話をきちんと聞いて理解しましたから」

「オウモアナタモイイヒト！」

「そうですか？」

「ジョウズナサキュバストアトデアソブトイヨ！」

「ははは、ありがとうございます」

上手なサキュバス？上手？なにが。いやナニがだろう。思いがばれたのか、架け橋の女性陣が声を荒げた。

「ダイスケはだめよ！」

「レイン様ですわよ」

「ワードもですう」

「「「……」」」

「その沈黙はなにかなっ!？」

「「「いえ、なにも!」」」

魔王、いやミカゲの腕の中で眠る子供。

「すやすや……」

「たくさん寝れば大きくなるわ」

我が子が生きていると言っただけでうれしい。

こんな思いはいつ以来だろうか。

子ができたと思ったとき以来かもしれない。

ミカゲは実に数百年ぶりの心からの笑顔を浮かべた。

つづく

46 決着

46 決着

魔王城。架け橋にあてがわれた一室にて。

「みんな。ちよつといいかしら？」

「はい？」

「紹介するわ。シンちゃんよ」

ハムスターだった。

「シンです！初めまして！よろしくお願いします！それから、ごめんなさい！」

「はい、初めまして、よろしく。……って古竜の誰か？！それから謝られるのはちよつと分からないんだけど」

「シンちゃんは神竜よ？」

「神竜っ？」

「そうよ。大地を形作っているミラの子よ」

「まあミネラ神がいるんだからいまさら神竜と言っても驚かな」
「たしかに。ところでどうして謝るの？」

「神竜のため息が北の地に魔物を生み出していたのだ」
「ため息？」

「うむ、魂と体のありようは常に大地を守っている。しかし、意識はそうもいかないのだよ。動けない体と募る感情。ただただ死んでいくために自分はここにいいのか？大地を守ることの重要性は知っておっても、心は納得いかない場合もある。そんな負の感情が北の地に魔物を作り出しておったのだ。母の奔放を感じておって、恋焦がれた可能性も否定できぬが……」

「なるほど……」

「ごめんなさい！」

「いや、いいよ。で聞きたいんだけど、まだ魔物は出続けるの？」

「はい……当然。ごめんなさい……」

「うーん、強さは？」

「すでに残り香のような残滓だけだからな。弱くなっても強くなることはなかるうよ」

「リーンがそう言うなら、大丈夫かな」

架け橋のメンバーももう驚きもしなかった。

「ねずみ……」

「毛玉みたいですよー！」

「かわいいね」

「3匹丸まっていると余計にな」

「孤児院で食べられないようにしないと……」

「レイン様、そのようなものまで……？ いったいどんな幼少期を？」

「んもー！ かわいいわ！」

「く、苦しいですシートエさん！」

「あーシンちゃん……」

「処置無しだな……」

扉をノックする音が聞こえた。

「すみません、お食事の用意が出来ましたわ」

「あれ、ミカゲさんみずから？……そうだ」

（北の魔物のことを言うならやめておけ。友のこともある）

言いかけたが、リーンの言うとおりだと思ってやめることにした。

「なにか？」

「あ、いえ、行きましようか」

「？……はい、こちらですわ」

広い食堂。今はあまり大事に使われていないようだったが、造りを見れば旧エズワルド国がそれなりに栄えていたのだと思わせた。

かなり豪華な食事が並んでいる。

見かけだけでもないようで、とてもおいしい。

「うむ、うまいな！酒もいい」

「賊のために質を上げざるをえなかったただけなのです。今日、陛下を始め、皆様に振舞われたことでやっと魔国の料理が日の目を見たのです」

「ここに赴任するのに問題はなさそうですね」

「ゲインニモオシャクスルヨ！」

「ありがとう」

食事をしながら、ワードが何かを考え、思いついたように話す。

「なあおやし」

「なんだ？」

「どこかの書物で見たんだが、ここには旧エズワルド国の闘技場があつたよな？」

「ワシは覚えておらんが？」

「あつ、リンズヴァーラ様の書物ですわ！」

「ミリアは良く覚えてるな、その闘技場なんだが、使えないか？」

「しかし、闘技場はいいが、賊などのものが入りやすいか？」

「国や万屋に従いたくないって連中は自分の力で稼げる闘技場を拒んだりしないだろう。賭けもすれば面白い。それにここには少ない兵士が配備されるはずだろう？特に優秀な者たちが」

「まずはここに來た兵士の半数でこの国とガイゲルドへの道を守らせますよ。私がその指揮を執ります」

「ゲイン？」

「賊が戻ってくる可能性もありますし、魔物がまた来るかもしれま
せんから」

「ふむ」

「戦えない者は建物か地区で少し離して守らせればいい」

「うゝむ」

「守備には石像を使いましょうか？」

「ミカゲ殿？石像とは？」

「ああ、ダイスケさんたちが壊してしまった後でしたね。国の入り口などに石のかけらが散らばっていませんでしたか？」

「ああ、台座のようなものの周辺に少なくない石が転がっていたな」

「あれ、結構きつかったぞ？動いていれば、体力が有り余ってて1対1、石に通用する武器があるなら何とかなるけど、数が多いと大変だと思う」

「そんなものがあるのか……。しかし、敵をきちんと識別できるのか？」

「この国の者には特殊なものを体に打ち込んであります。石像の識別のために」

「それは危険はないのか？」

「全く。一生でも数ヶ月でも1日でも、自由に決めることが出来ます」

「賊はどうしておったのだ？」

「指輪を持たせておりました。今後作る石像にはその指輪は敵対反応するように調整すればすむことです」

「そうか……今後の守備のことも含め、1度ミサネラ国に行かねばなるまいな」

それならちようどいいと提案した。

「陛下、俺たちと一緒にいきますか？」

「……ふむ、そうしようか」

「あ、あの！あたくしも連れて行ってくださいませんか！？」

「ミカゲさん？……うーん」

「あたくしはここに居続けなくても坊やと共に生きることができるようになりました。少し他の世界も回ってみたいです。それに、下の装置は今がガラクタでしょう？あの部屋に入ることができませんでしたし」

（それに先ほどの話が聞こえてしまったのです。悲しくはありましたが、でもこれからの魔国の未来は明るいでしょう？）

（念話……）

（ダイスケに近かったからか？）

（そうね、それが一番の理由かも）

「あの部屋の装置は無傷なはずです。地震でやられていなければ。今はシート工先生の時空魔法で閉鎖してあります」

「えっ？」

「後で行きますか？」

「あ、はい」

「ワシにも見せてくれんか？」

「わかりました」

久しぶりに食事に満足した気がした。
心が休まっていたからかもしれない。

「ご馳走様でした」

1階、システムのあった部屋に行く。

無くなった鉄の扉の代わりに魔法をかけてあるので、入り口から中は見えない。

「シート工先生、陛下とゲイン団長とミカゲさんに条件付けしてもらえますか？」

「わかったわ」

「さっきまで本当に入れなかったのに……」

「フェアラ族の时空魔法というものですよ」

「フェアラ族……时空魔法……この世界にもまだ見ぬものがたくさんあるんですね……」

エガイド王は何でも興味を持つ性格のようで、そこらに触れている。

「これはなんだ!？」

「あ、陛下、あまり触らないでください」

ビー!ビー!

「っと……すまん」

「地震の影響は？」

「大丈夫なようです。作るときにも震度8までは問題ないように設計してあります」

「すごいね」

「ここに来て数百年、地震は初めてでした。でも案外平然とできるものですね」

「地震大国で生まれたからね」

「そうですね」

「ではここから石像を復元します。条件は……ワクチンからの情報のみ……と」

「あれ、ここが壊れていたらどうする予定だったんです？」

「台座に非常用のものがありますから」

「なるほど。ちなみに電源は？」

「地熱発電ですわ」

「へえ」

そんなやり取りを見ていたエガイド王。

「おい、ワード、ミカゲ殿とダイスケ、偉く仲がよさそうじゃないか？これは嫁問題に発展しそうなのか？」

「おやじ……。そうやって他人をかき回すのも程々にしておいてくれ。ダイスケとミカゲさんは、叔父と姪の関係だそうだ」

「なんだと？」

「ではワード、時間をも越えてきたと言うのですか？彼らの歴史では、ダイスケが墮天し、その後の墮天で姪のミカゲ殿が。しかしこの世界ではミカゲ殿が先に数百年前に現れたと？」

「そういうことらしいよ、ゲイン団長」

「興味深いな……」

（確かに“地球”なんてとつくの昔に自然を壊しすぎて滅亡した星だったわ）

（今後の墮天者はより過去から来るというのか？）

（そうとも言い切れないわ。過去から来た人もいるんだし。時間軸が近くなってきたというべきじゃないかしら？でもブレが減ってきたってことはこの世界も安定に向かうのかもね？）

（ふむ……）

（ボクを守る地に立つ墮天者も徐々に魔力が減ってきているよ）

（シンもそういうなら、そうかもしれん。はやく墮天者に頼らなくてもよいようになればいい）

（リーンちゃんもそう思うんだ？）

（もしわれが突然この母や兄弟から離れて飛ばされると考えると考えるとわかれは風として自由だが、この世界から離れるとは考えもつかぬ）

（たまたま自分の言葉や文字が使えるからいいものの、全く通じなかったりすると面倒よね）

（お母さんは軽いね？）

（経験者だもの）

（確かにな）

「非常時用の石像も含め、255体、出しておきましたわ。では…

…」

「なにをするの？」

「アンテナも無事でしたから。おかげで国内に言葉が飛ばせますよ」

「ラジオ？」

「似たようなものですね」

スイッチを入れ、マイクのようなものに向かって話し始めた。

「魔国の民に告げます。緊急です。石像、1時間で復帰します。

至急国内の全ての兵士さん方にワクチンの投与を。

きちんと後でワクチンの数をそろえる予定ですから、今は期間を気にせず、確実に投与を行いなさい。

なお、賊は今後あたくしたちの敵になります。

まぎれている場合は兵士さんと協力の上、捕らえなさい。以上です」

まぎれていた賊はいなかったようだ。

「ではみなさまもこれを」

「どうするのだ？」

「蓋を外し、腕に当ててください。少しちくりとすると思いますが」

「……こんなことでいいのか」

「ええ。全く問題ありません」

早速サキユバスと遊んでいた数人の兵士がワクチンの投与を忘れ、石像に追い立てられていた。

しかし怪我がなかったこともあり、笑い話で済んだ。

ミカゲはたいそう低頭していたが、自業自得だとかえって兵士に帰国の罰、罰と言えるかは別として、エガイド王によりそんな罰が与えられていた。

兵士がひどく落胆していた所を見ると、充分罰になるのだろう。

数日後。

ミカゲさんが、急遽用意された鍛冶用作業場に来た。

「ダイスケさん！出発準備はまだですか！？」

「ふやっふやうあ〜っ！」

もう出かけたくて仕方ないと言った所だろうか。

「おうおう、坊も元気だねえ。でもミカゲさん。ダイちゃんにはまだ仕事があるのだよ」

「あたくしの兄があなたのことをダイちゃんと呼んでいたのは知っています！でもあたくしはもう子供ではありません！」

「しかし……。姪だと思ってしまつとねえ……。とにかく、ここに来た兵士の武具の調整がもう少しかかるんだ。それでも食べててね？」

「これはっ！？おばあちゃんのおにぎり！」

「うん、ここ、水田がなさそうだったから、米はなつかしいかと思つて」

「おいしい……これはどうやって？」

「話せば長いんだけど……」

お互いの話、ここに来る前、来た後。

墮天者としても血縁者としても共通点が多く、たくさん話をした。

すでに話がたわいのないものになって来ていた時、ワードとリリアが顔を出した。

「つつかれた」

「ふつつ」

「ああ、ワードにリリア、お疲れ。食べる？」

「あれ、これ今まで見たことないね？」

「うまけりやなんでもいい。うんうまい。これは米か？この黒いのは？」

「食べ物自体の名前はおにぎり。黒いのは海苔。海で取れる海藻を乾燥させてできるものだよ」

「へえ、いや、うまい。もう一つ……」

「あ、何か入ってる？」

「中身はたらこ。海の魚の卵」

「おいしい」

なぜ2人なのだろうか。

「そういえば他のみんなは？」

「鍛冶を手伝うとか言っておいて、早々に飽きて今はその辺を散歩してるだろ？」

「そうなんだ。じゃあ午後は少し俺たちも散歩でもしようか、あ、ワードはいいから」

「さんせー！」

「ふん、そんなことこつちから願い下げだ」

リリアとフィアナ、シートエと魔国を歩く。

「畑もあるし、山ではそれなりに獣が取れる。いい土地だね、ここ」
「そうね」

「あら、あれは何かしら？」
「危険は感じないな」

山の付近にぼっかりと穴が開いている。
聞いていた壕なのだろうか。

「壕は閉鎖されたっけ？」

「民の避難所としてある所と、色街代わりに使われている所以外は
閉鎖していると聞いたが」

「でもダイスケ、あれって、よく父ちゃんが行ってたノームの鉱山
の入り口と似てるよ？」

「昔のエズワルド国の鉱山かしら？」

「鉱山と聞けばちよつと見ずにはいられないだろうね。鍛冶の者と
して」

「そうね！」

「ちよつと待て！危険は感じないと言っても、わたしがきちんと索
敵してからだ！」

慌てて止めに入ってまわりを調べるフィアナ。
もうちよつと危機感を持ってだな、などとぶつぶつ言っていた。

フィアナが大丈夫だと言ったので中に入ってみる。
光はシートエ先生に頼んだ。

「これは……」

美しく輝く金属の塊があった。

「わかった？あたしにはよくわかんない」

「金属？いや宝石か？」

「ダイスケ君どう？」

解析の結果もあまり芳しくない。

「なぜかこの地にあるあらゆる金属と鉱石が融合しているかのように混ざり合ってる……」

「そんなものが存在するのかつ！？」

「ねえねえ！武具になりそうかな？！」

「虹石かしら？エズワールドでしか取れないという。あらゆる金属や鉱石の性質を持っているけれど難があつて、加工さえ出来ればとても高価な芸術品となると言われているわ」

「芸術品なの～？」

「難とは？」

「1方向以外からの力にとても弱いそうね。正直これを丸くできるだけでかなりの値がつくわ。記録によれば、この鉱石で作った人物像の値段は金1000万」

「いっせんまん！」

「でも芸術品ではな……」

「爪弾く時の音色は、弾いた者の心が現れると言われるほどに多彩な音を出すそうよ。魔歌を使うフェア族が興味を示して記録に残したことを考えても、凄いものじゃないかしら？」

「加工できれば。でしょうけどね。まあ持つて行かせてもらいましょうか」

塊を1つ拝借し、作業場に戻ってくる。

まだミカゲさんが残っていた。

同じ解析魔法の使い手。でも方向性が違う。

使い方が少々違うだけでもこれほど作る物が違う。

俺がミカゲさんの作ったPCなどを見るのが楽しいように、ミカゲさんも俺の作った車や武具を見ているのが楽しいのだろう。

「あら、それは……」

「ミカゲさんは知ってる？」

「他の国で虹石と言われている物でしょう。お金になるからと昔、賊に掘らせて持って行かせたことがありますわ。連合が出来てあまりお金にならなくなってからにはあたくしが回路用にレアメタルを取る以外には使用していませんでしたけど」

音、金属、……鐘。安易だったが。

「ふむ、これをこうしてみると……」

「鐘？」

「うん」

「どうして？」

「面白そうだったから」

「そんなんでいいの……？」

「戦い用の物よりもいいじゃないか」

「うん」

早速叩いてみることにする。

「ごおおおおおん！」

「なんかありきたりな音でつまらないね……」

「小さい鐘なのに音が低いし、結構大きな音がするんだな」

ありきたりでガツカリしているディスクと、鋭い指摘をするフィアナ。

たしかに実際直径30センチほどの鐘ではもっと高い音がするはずだ。

「それもそうね」

「あ、あたしも！」

今度はリリアが叩く。

きーーーーん！

とても甲高い音だ。なぜだろう。

「あれ？もいつかい！」

こーーーーん！

今度は少し落ち着いた音。

しかし木の板を叩いたような。

「あはは、楽しい！」

ぽいーーーーん！

……鐘とはなんだろう？

「あっはっは！」

「すでに金属の音じゃないな……」

「鐘なのに、ぽーんだって！あはははは！」

「どうもリリアのツボにはまったようね……」

笑い転げているリリアとそれをため息交じりで見つめるシートエ先生だった。

少し調べる。

「うーん。叩く位置によって音色が変わるみたいだ。それから叩く時に使う物の材質も。言われていた心つてことはなさそうだけど、確かに気分によって叩く場所が違ったり叩くものが違うなら音色が変わるのかもね」

「これ、どうするんだ？」

「大きいの作って設置してみようか。時報と警報がわりに」

「時報とは朝と昼と夜の鐘のことだな？」

「うん」

「警報とは？」

「あれ？魔物が攻めてきたりした時に一般の人の避難の合図とか出さない？」

「狼煙やよほど緊急であるなら魔術師が炎魔法を空に放ったりしているな」

「夜は？」

「ガイゲルドの守備兵は強いからそういうのはあまり機能してないよ？知らない間に終わってる感じ」

「やっぱりあったほうがいいよ。もしものために」

「そう言われれば……」

塊をもつ2、3個いただいて作ってみた。

「まあ後はどういったときにどこを叩くかを3国共通で決めればいいでしょう。時間、警報、結婚、葬儀などでも使えるかもしれませんね」

「結婚は分かるが葬儀もか？」

「いや、葬式やっている近くで笑いながら酒盛りされても遺族にとつてはあまり気持ちよくないと思ったんだけど」

「なるほど」

「あとはいくつかを共鳴させればガイの町でも全体に音色が行き渡るだろうね」

「それはいいな」

戦いで消耗した武具、ガイゲルド側も魔国側も。
あらかた修復を終えたある日。

「ミカゲさん、明日の朝出るけど」

「急すぎます！」

「え？いつもいつ出るかって言ってたような？」

「でもっ！」

「服をたくさんとかやめてね？」

「……」

「食料も必要最小限。途中で狩りをするからね」

「……」

「で、用意はどのくらいかかるかな？」

「それなら明日の朝に間に合ってます……」

「でしょ？」

翌日の朝。

架け橋と魔王ミカゲ、それからエガイド王を入れたパーティが出来上がった。

王の護衛はミサネラの駐屯地までは付けないことに。
架け橋や王自身の実力もあるし、魔国で魔物を抑えればそれより

南はあまり危険ではないと判断された。

魔国側での守備の兵をあまり使いたくないという考えだ。

「ゲイン、後を頼む」

「かしこまりました」

「ミカゲサマ、オキヲツケテ」

「ええ。何かあれば連絡するわ」

「ミカゲサマヲタノミマス」

「わかりました。姪ですからね」

「ボウヤモ……」

「任せてください」

「架け橋、出発じゃあ！」

「おやじ、オレのセリフを……」

「出発ですわ！」

「ミカゲさん、あたしのセリフですう……」

予定通り特に危険もなく、駐屯地に着いた。
王の姿を見て喜んでる隊員たち。

「陛下！よくご無事で！」

「デイン、そなたも」

「殿下も！」

「ああ」

魔国の事情も詳しく説明する。

「ではこれまでミサネラ国に来ていた魔族は魔国からのものたちではなかったと……？」

「うむ。北に魔物の発生地点があるようだ。賊は魔国を根城にしていた者もおろう。今後は魔物よりも賊がここに来る回数が多くなるかもしれない」

「それは確実なこののでしょうか？魔国が騙っているとも言い切れません」

「おぬしには巨大な竜が空を飛んでいたのは見えたか？」

「はい」

「古竜だ。ついでにミネラ神もおみえになったらしい。古竜の言を疑うことも出来まい」

「分かりました、兵にはそう伝えます」

「ちなみに魔国には魔物がいるが、魔国の魔物は言葉を話す。覚えておくといい」

「分かりました」

「魔物は少なくなるだろうが、賊がミサネラに入ろうとすることが増えよう。自然な魔物よりも頭を使ってくる可能性もある。もうしばらく気を引き締めてほしい」

「はい、そう手配します」

「そうそう、こちら、魔王のミカゲ殿」

「は……？」

驚いていたディーンだが、ここで王が自分をからかうとは思えない。

それに本当に魔王本人であるなら、王の言葉は確実に正しいということになる。

最初は王がだまされているのではないかという懸念も感じていたのだが、魔王本人がいるとなれば話は別だ。

「ミカゲでございます」

「うむ、危険はない。今後は2国の連合が3国になるだけだ」

「……そうですね」

「魔国を兵の休息地として定めた。今後の休息日には行ってみるんだな」

「は、はあ……」

「メシも酒もかなりのものだし、今まで戦った魔物とは明らかに違う、魔国の魔物に触れることも出来よう」

「そうですね」

「まあ魔物とは思えんよ」

「もったいないお言葉です」

「……」

王にここまで言わせるとは。

しかし魔国と戦っていた者達が納得するだろうか。

魔国を自分の目で確かめる必要があるそうだとディーンは思った。

「とにかく平和が成りそうだ。賊だけには気をつけて欲しい」
「はい」

つづく

47 連合

47 連合

ミサネラ国到着。

坊への2時間おきの授乳が旅の一番の難敵だっただろうか。道すがら、この間のミサネラ国の問題を話す。

議会と言っても結局順位があり、上位者が退くか死ななければ下ものは上がれない。

そこへの不満ということなのだろう。

城壁前にはオーガ族の兵士が立っていた。神殿兵もいるがどうなっているのだろう。

「陛下！殿下！」

「うむ、話は聞いた。迷惑をかけたことをわびねばならん」

「いえ、私達兵士がもう少しこの町の信用を得るように活動していればよかったです！陛下の氣に病むことではございません！」

「そうです！この町をガイゲルド国の守備のように考え、活動していればこんなことにはならなかったのだと思います。殿下の活躍を持ちまして事なきを得ましたが、これは我々の失態だと思っております。罰を受けるならまだしも、陛下のそのようなお言葉をいただくわけにはいきません」

「ワシはいい部下たちを持った……」

「その後悔が無駄にならないようにお願いしたい」

「殿下。もちろんでございます」

「よろしく頼む」

「頑張ります！」

その後の会話で、神殿兵の内、魔法を不得手な者や体力があり、直接戦闘を得意とする者をガイゲルド兵との協力で鍛えるために神殿兵も城壁の守備に入っているらしい。

手の空いたガイゲルド兵は神殿兵の鍛錬のために時間を使うということだ。

町の人々も以前に比べ、格段に明るく見える。

問題が解決したというこちら側の見方なのかもしれないが、いいことなのだろう。

市場も以前よりも活気がある気がする。

今回も当然のように孤児院に向かう。

孤児院は建物の所々に幕が張られ、立ち入り禁止などと書かれていた。

許可を取り中を覗けば、壁の補修をしているようだ。

これはうれしいことだった。

レインも我事のように喜んでいた。

孤児院に着けば、前のようにわらわらと子供たちが集まってくる。2週間ほど離れただけであつたが子供たちの血色もかなり良くなっている。

オーガ族とのふれあいで、人から他族が生まれることが悪ではなく、むしろ誇らしいことだと広まってからは、名乗りもしない人からの差し入れもあるそうだ。

親なのだろう。いまさら引き取れない事情があるのだろうか。

引き取ってあげればいいのと思うが、ミサネラの人たちの思いもあるのだろう、口を出さないでおいた。

「兄ちゃんたち、おかえり〜!」

「お姉ちゃんたちも、おかえりなさ〜い!」

ある子供がミカゲさんが抱いている赤子を見つけた。

数年に1人くらいの割合で孤児院に入る子供がいるそうだが、ほんの赤子はおらず、大抵は各族の特徴が出る年頃だ。3歳くらいだというが。

今後はそれも無くなるだろう。

彼ら子供にとって赤子は、年の離れた人よりも興味深いものらしい。

「あ!赤ちゃんだ〜!」

「ね〜?だっこさせて〜?」

「え?ええ……」

「ふやつ……ふびゃああああ」

「ああ、泣いちゃった……」

ミカゲの腕を離れた途端に泣き出す赤子。

子供たちは申し訳なさそうにミカゲに赤子を返した。

ミカゲの腕に戻る。

「ああ、よしよし」

「ああああ……すつ。ふやつあ〜」

さすが母親、すぐに泣き止んで笑顔を見せた。

「やっぱりお母さんがいいのかな?」

「う〜ん……。まだだっこさせてねっ!じゃつ、お姉ちゃんたちあそばすよ!」

「切り替え早いな……」

心底感心したように言うワード。

確かにこの切り替えの速さは凄い。

逆に言えば、この切り替えの早さが無くては生きてこれなかったのかもしれない。

今までの孤児院の生活も厳しそうだったし。

「子供だからね。そのうち坊もこの子達に慣れるよきつと。ちっちゃい子もいるし」

「……坊やは人見知りするんでしょうか……」

「いやいや、ミカゲさん。こんな小さくて人見知りもないでしょ。

抱き心地や匂いが違ったからってただだよ。しばらくここには滞在することになるから、子供にも慣れるよ」

「そうでしょうか……」

「たぶんとしか言えないけど……」

きちんとした迎賓館に行ってもらいたい。と神殿議会の方でも言われたが。

エガイド王は孤児院に滞在すると言いきった。

恐縮してしまったのは孤児院の先生夫妻だった。

気持ち分かる。

しかしエガイド王も元冒険者でもあるし、寝られればよいなどと言って意に介さずにいた。

小さな子供ともよく遊んでいたようだ。

1度、子供好きなのかと聞いてみたら、将来のあるものたちはみな好きだと答えていた。

いや、王らしい答えだと思ったが、なんとなく答えがずれている感じもした。

そしてミカゲの子はといえば。

「キャツキャツ！あぶあぶ」

「あつ、あたしをみてわらったよお！」

「ぼくのほうだよ！」

「あたしだってばあ！」

「心配して損しました……」

「そんなもんだよ、きつと……」

「今帰った」

エガイド王が帰ってきた。

「あ、おーさまー！」

「おーさま！おかえりなさい！」

途端にまわりを囲む子供たち。

孤児院で仕事をしていて、仕事中は構ってもらえない架け橋の鍛冶メンバーよりも、孤児院にいる時間はいつでもかまってくれるエガイド王は大変子供の評価が高かった。

笑顔で子供を構っているエガイド王に声をかけるワード。

ワードも今日の仕事を終えたらしい。ワードのことが好きで傍に来る子もいて、その子に「ちょっと待ってな」などと言っているのがほえましい。

リムナなど何を考えているのか頬を染めていた。

いや、考えなど丸分かりだったのだが。

「おやじ、どうだった？」

「問題あるはずなかるう。こっちが悪く感じるくらいすんなり行っ
たわ」

「陛下お茶です」

「ワシは酒の方が」

「それは子供が寝てからにしましょう」

「そうか、うむ。しかしここはワードたちが幼い頃を思い出すな」

「そうですか？」

「ああ、幼子にてんてこ舞いだ。どこも変わらぬのだな。そうだが、先生、ここへは十分な援助があるのか？レインの活躍で多少色を付けたはずだが」

「陛下には何度お礼を言っても足りないくらいでございます」

「ならばいいが、子供を育てるのは未来を育てることと同義だ。近々建物も補修だけではなく、改築すると議会の者も言っておった。今後もよろしく頼むぞ」

「はい、この身を賭けまして」

「うむ」

「おはなしおわった？」

「おーさまー、いつしよにあそぼーよ！」

「よしよし、分かった」

「これ、お前たち！」

先生が声を上げるがそれを気にするようでもなく。

「よいよい。で、なにをして遊ぶのだ？」

「おーさまはおーさまのやくー！。ぼくたちをしろのきしににんめいするのー！」

「……議会の役になって神殿団になるのではないのか？」

「でも、しんでんこわれちゃったもん」

こんな子供にまで神殿の威光はなくなっているのか。

だが、それでは困る。

「神殿はこれからまた大きくなる。無くなったと言ってもまた必ず大きくなる。そのときに神殿団でなかったら後悔するぞ？」

当然だと胸を張るエガイド王。

レインの表情も喜びを表している。

「陛下……」

「だろう?」

「おっしゃるとおりです」

ああ、この他国の王は。この人の器は。

ガイゲルドだけでは収まらないのかもしれない。

「……じゃあおーさまはぎちょーやく!ぼくたちしんでんだんのせんしになるから!」

「よしよし、おぬしらの国はおぬしらで守れるようになるんだぞ」

「はあゝい!」

子供たちも寝静まり、軽いつまみで酒を楽しむ。

ミカゲさんもいける口らしく、懐かしい味に喜んでいた。

「で、おやじ、本当に大丈夫なんだろうな?」

「無論。ただ明日はワシとミカゲ殿で議会に行かねばならんが」

「俺たちも行こう」

「それの方が話が早いかもしれんな」

翌日、架け橋のパーティとミカゲさんを伴い議会に行く。

と言っても神殿跡近くの簡易な建物だ。プレハブと言ってもいい。

「陛下、ご足労ありがとうございます」

「ライア殿、エルス殿。連日申し訳ない」

「いえ、こちらがお願いしたこと。陛下にはかえって申し訳ありません」

「で、そちらが……」

「ミカゲと申します」

「数百年生きているという魔王本人なんでしょうか」

「はい」

魔力の量で墮天者クラスだと分かるようだが、魔王というイメージとミカゲさんがなかなか結びつかないらしい。

何度も確認していた。

「本当ですか？」

「ええ」

「陛下？」

「本当だ」

「ダイスケ殿？」

「本当です」

「殿下？」

「本当だ」

「フィアナなど……」

「いい加減分かれ！……あ、いや、申し訳ありません……」

爆発したのはワードだった。正直面白かった。

さらに爆弾を投下してみる。

「あ、ちなみに俺の姪になります」

「え……？ダイスケ殿のですか？本当ですか？」

「誰に聞いても本当だと言いますよ。保障します」

2度目はあまり面白くなさそうだったので釘を刺しておく。

ちなみに少しだけ心が落ち着く情報も。

「ちなみにここを襲った魔物は魔国の守備を抜けた自然魔物ですの
で」

「そうなのですか？」

また「本当か」と言われても面倒なので、前にミサネラ国の人も感じた、ミネラ神の情報だと言っておいた。

さすがにこれを疑うことはしなかった。

「魔国の北に魔物の発生場所があります。組織だって魔物が攻めてきたのも、魔国の守備を超える程の魔物が出てきたせいもあります。」

魔物に関しては魔国が絡んでいたことはありません」

「賊は？」

「賊に関してはたしかに魔国にも原因はあるでしょうが、ガイゲルド、ミサネラ各国が賊を生み出さなければ今後は発生しないでしょうね」

「魔国で生まれた賊はいないと？」

「魔国で生まれた子は全て農業で生きています。数も多くありませんし、よくも悪くも完全に人の動きを管理しておりますので……」

例の石像管理のために、子供はおるか、魔国の一般人は完全に把握されている。

「ふむ、それならばわたくしたちの自業自得とも言うことができるという事ですね。わかりました、3国連合に合意しましょう」

「肩の荷が下りました……」

「魔国も再出発だね」

「はい！」

ミカゲさんは、かつての兄夫婦や両親と確実に血の繋がっている、懐かしいと感じるとてもいい笑顔だった。

48 結末

48 結末

3 国連合も合意を得ることができた。

正式な発表は、再来月のガイゲルド合同結婚式の時に行われる。
いまさらだが、なぜ合同結婚式かと言われれば。

かつてガイゲルドの貴族が結婚式においてミサネラ議会の者を呼び、ミネラ神の名のもとで夫婦となったのがきっかけらしい。

当然一般人が簡単に議会の者を呼べるわけもなく、色々な協議の末、ミサネラ議会の休暇も兼ねたガイゲルド国訪問の折に結婚式を挙げ、ミネラ神の祝福をいただくと言うことになったらしい。

戦争中であつたため、収穫祭などのおおっぴらな祭りを開けないでいたガイゲルド国はその案を採用したのだ。

結婚。子を成すためには当然の道。人、国の未来のことを考えても、軽く見てはいけないのではないかという声もあつたようだ。

当然認められていない、駆け落ちしようかと考えている者たちもいるかもしれないし、あまり目立ちたくない者たちもいるだろう。

広場での神殿議長の祝福の一声を持って全ての結婚は承認、以後夫婦として生きていくことになる。

最近では彼女、彼氏との将来を誓い、婚約という形を取る者もいると聞いた。一種のファッションとも言える。

その合同結婚式は数日を持ってお祭り騒ぎになる。

なぜはつきりとした期間が決められていないかと言えば、戦争があるからとしか言えなかった。

エガイド王とミカゲさんを伴いガイゲルド国に入る。先に連絡が行っていたのか、城壁前から人が鈴なりになっていた。

いまや車に全員乗せて馬も無く動く車に驚く者もおらず。

架け橋及びエガイド王、ミカゲさんに乗せた車が城壁の門をくぐった時には大きな歓声に包まれていた。

もしこの歓声が、「魔国を討伐せり」などといった連絡からであったのなら、今後は大きな問題があるであろう。

魔国の民は仲間であるということを、国民にどこまで理解させられるか。

まだまだ問題は山積みに見えたが、ひとまず終着点は想像できているのだ。

時間をかけても理解してもらっていいこう。

人がお互いを憎み、争う理由がなくなったのだから。

結婚式前日までは粛々と準備を進めていた。

まわりの人も特に浮ついた雰囲気を持つでもなく。

鍛冶科の仲間が服を用意してくれると言っことでお言葉に甘えることにした。

ここに来て2回ほどは結婚式を見たが、仕様が元世界とあまり変わらなかったで、変なものを着せられることも無いだろう。

当日は午前中に王からの御触れと言いか報告、今後の方針などの説明があった。

魔国の現状とあり方。

人同士の戦争は無くなりそうだが、まだ魔物には気をつけること。賊を出さない、作らない国を目指すこと。

細かな話をすればとても長くなってしまふし、まずはこの平和になるだろう世界でのお祭り騒ぎがすんでからでもいい。

エガイド王がいる壇上にライア1位、ミカゲ女王も立ち、握手をし、お互いに微笑む姿は、とても美しく見えた。

急遽呼んだサキュバスもとても友好的に見られている。

一番は言葉が通じ、意志が疎通できるからと言っことらしい。

後はライア1位が壇上に残り、結婚をする者たちに祝福を与えるのが普通だと聞いた。

ただ今回は墮天者、すなわち自分がその中の1人であると言っことで、各ペアに1人ずつ議会の者が付き、ミネラ神の祝福を与えるということらしい。

特にと中央の一番目立つ所に呼ばれてしまふ。

なぜかとても恥ずかしい感じがする。

少しだけ現実逃避してしまふ。

遠くで鐘の音が聞こえる。

確かあれは前に何かの拍子で手に入れた金属で作った鐘だったな。

一般名称でレインボーベルとか言われていたっけ。

ふと手を見れば、小ささまざまな傷だらけだ。じっと手を見る。

でも生きていて、多少なりとも生活を楽しむための稼ぎはある。

今日は人生の、第2章と言っべき出発の日だ。これからどうなっ
ていくか分からない。けれど幸せだって言い切ることが出来るほど
幸せだ……

そしてなぜかとても大きな合同結婚式になってしまった。
人だかりも多い。エガイド王やミカゲ女王も傍にいた。

エガイド王とリリア。

「うむ、良かったなあ。長年の願いが実って！」

「陛下……ありがとうございます」

「ライラスの娘のおぬしはワシにとっても娘とかわらぬ。幸せになるのだぞ」

「はいっ！」

フィアナとエルフ長老。

「これからは妻になるんだから少しは落ち着かないとなりませんぞ
！」

「長老はうるさいな……」

「しかし、その性格を変えねばダイスケ殿に煙たがれるかもしれま
せんぞ！」

「むう……」

「ダイスケ殿はわれらエルフ族にとっても架け橋。期待しておりま
すぞ！」

「なにをだ！？」

シートエとケイト。

「若い娘に負けないようにするのよ！逃がしちゃだめよ？」

「ケイトさん……はい！」

そして、ダイスケとワード。

「ダイスケも年貢の納め時か。お前の困った顔なんていつ以来だ？」
「ほっ」として」

「英雄はつらいですなあ!」

「……お前の時は覚悟してね……」

「おーこわ」

レインとミリアも。

「そういえばレインとミリアは?」

「僕たちはその……」

「もう少し勉強したいこともあるのですわ!」

「そう」

ふとまぶしすぎる花嫁たちに目をやる。

『花嫁』とは最初に誰が言い出したんだろう。事実それ以外の表現方法が浮かばない。元鍛冶科の友人たちから贈られた渾身の作のドレス。鍛冶科らしく色々な宝石、鉱石を使った、ちょっと重そうではあったが。ヴェールをかぶり静々と歩く姿はいつもの彼女たちを思わせず、初めて会う人と結婚するような感じを受け、苦笑しうになってやめておく。

ドレス姿よりも鎧姿の彼女たちを見慣れている。

薄い紫のドレスのリリア。

ピンクのドレスのフィアナ。

ほんのり黄色のドレスがシートエ。

純白は喧嘩になるからということであつた。この配色になった。後のお色直しで全員1度ずつ純白のドレスを着る予定だ。

ミネラ神にも特に祝福されたと言われたこの結婚式。

ライア1位がダイスケたちの結婚を祝福する言葉をかけるようだ。

「ミネラ神の名のもと、これより夫婦となり末永く、死が別つまでより幸せになる努力をすることをこの場にいる者たちに誓いなさい」
「ライアさん……強制ですか……」

「わふっ」

子犬のミラが一声鳴く。

「……誓います」

「誓いましゅ」

「誓おう……」

「誓います……」

すでにうれし泣きで語尾が声にならなかったリリア。
こんなときでも彼女らしいフィアナ。
大人の貫禄をみせるシートエ。

リンゴーン！リンゴーン！

「おめでとう！」

式やお色直しも終わり、お色直しにはそのつど歓声上がるほどだった、町はお祭り騒ぎになる。

「お疲れ！どこかへ旅行に行くのか？」

「2、3日湖のあたりでゆっくりするつもりだよ」

「何度も行っただろ、そこ。何でまた？」

「いやあ、世話になってるノーム族にも紹介したいし、つい昨日マリンストーンから魚が寄ってくる効果のある釣り針が出来ちゃってね。試してみたいんだよ」

「やっぱりお前は戦向きの道具よりそういったものを作っている方が似合うな」

「誰かが傷ついたり死んだりしない道具の方が作っていて楽しいよ？」

「そうか。ま、楽しんで来い」

「ありがとう」

何度か旅を経験したが、これだけゆったりと楽しかった旅は無かった。

と言ってもノーム族へ紹介も兼ねての新婚旅行となれば当然なのかもしれないが。

それなりの宿に泊まる。

そして……。

「今日は初夜ね！」

「どこからそんな知識を……？」

「いつまであたしを子ども扱いするのかな……？」

「ははは、ごめん……。と言ってもリリアとは実際結構歳が離れているからねえ」

「そんなの気にするのはダイスケだけなのね」

「そう、か……。そうだね。これからよろしく頼むね」

「言われなくても！」

「フィアナ、シートエもよろしく」

「うむ、その、なんだか言葉にならないな」

「本当ね。うれしくてなにを言っても陳腐な言葉になってしまいそう……」

「じゃあ、みんな、こっちへおいで」

「う、うん……末永くかわいがってね……」
「もちろん」

「ああ、愛している……」
「俺もだよ」

「翼に触れて。あなただけに……」
「ああ、……ありがとう」

こちらに来なくてもこのような幸せがあつたかは分からない。時には苦しいこともあったが、ここはひどくやさしく、広く、幸せな世界だった。隣にある暖かさがより幸せな気持ちにさせてくれる。

「俺は今、幸せだ」

終

48 結末（後書き）

あとがき

お付き合いくださり、誠にありがとうございます。

話は随時手を入れていきます。

特に最終話はあまり納得していない部分が多いので。

ですが、ありがたいことにやっと仕事が増えてきました。

これからはあまり時間が割けず、すぐには直せないかもしれません。

それにもっと勉強して、今の会話文だけに近いこの話自体をプロットとして全て書き直したいという思いもあります。

次回作、もしくは書き直しかは分かりませんが、その時はまたよろしく願っています。

みなさま、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336u/>

魔と生きる製作者

2011年9月21日14時23分発行